黑川眞道編

國史叢書

朝鮮征伐記 二
蒲生軍記 全

國史研究會藏版

解題

蒲生軍記　六卷

本書は蒲生氏鄕・秀行・忠鄕の三代の事蹟を記したるものなり。

國書解題に云　【蒲生軍記　六卷】　蒲生氏の盛衰事歷を記したるもの、最初蒲生の由來より氏鄕、織田信長に仕へ、後豐臣秀吉に仕へて榮進し、文祿四年、石田三成の讒により、遂に卒去に及ぶこと、其の子秀行封を襲へること、又其の子龜千代封を繼いで下野守忠鄕と稱し、寬永四年會津にて卒去せること等までを略記す、元祿八年乙亥(二三五五)岡西惟中自序して同年版行す、

岡西惟中は大日本人名辭書に云　岡西惟中は醫師にして俳人なり、始め一有と號す、後、一時軒と更む、元と因州鳥取の人大阪に出でて醫を業とす、傍ら俳

諧を能くす、醫を杉田望一に、又俳諧を西山宗因に學ぶ、又書を能くして其の名高し、元祿五年八月十日歿す、年五十四。

と見えたり、猶國文學についての著書許多あり、世の知るところなり。

本書は元祿八年版を採收す。

大正五年十二月

黑川眞道識

蒲生軍記

目次終

目次

朝鮮征伐記 二

例言

一、本編には、朝鮮征伐記十巻以後と蒲生軍記六巻とを採收す。
一、通讀の便を計るため、假名を漢字に改め、語尾を補ひ、文字の一定を計り、句讀を正す等、編輯上につきての努力は、既刊書と異なることなし。

朝鮮征伐記第十

大明兩使日本に渡海

司馬石星が奏聞、既に天子の上聞に達し、皇帝之を準信し給ひて、遂に封王の儀を定め、工に命じて、日本國王の金印一顆を鑄さしめ、並に冠冕・朝服を調へて、日本關白秀吉に贈らんと欲す。其費數萬金なり。臨淮侯李言恭が嫡子李宗城に詔して正使とし、都指揮楊方亨を副使とし、策命印章を齎しめ、秀吉を封じて日本國王とし給ふ。兩使に仰付けられけるは、汝等先づ三浪江に行きて、爰に逗留し、釜山浦城々に日本の兵一人も殘し止めず、皆本國に歸帆するの旨、朝鮮王より告げ來らば、日本國に渡海し、秀吉を封ずべしとぞ仰せ遣されける。石司馬衙も心許なく思ひ、楊鎬を遣し、沈惟敬がする處を見せしむ。惟敬先きに日本にて給はる金銀を以て、中

國の寶物を買取りて、商賣する體なり、今度定宗城冊使に成りて、爰を晴と出立つ由聞きて、京師の諸官盡く集りて之を見るに、傍も耀く計りなり。惟敬心に羨しく思ひ、此和議、初石司馬が爲めに渡海して調ひぬ、其功を以て、今度は吾身冊使たるべしと思ふ所に、副使にさへ成らず、案内者迄にて渡海する事、面目なく思ふに、李宗城は貴人の子にて、惟敬を直に下に會釋し、何事も無禮なり。然れども宗城若輩にて、専ら對に習はず、斯樣の使不案内なるを見て、惟敬も又彼を侮り輕んぜり。

沈惟敬李宗城を嫉む

初め乾伏山にて、小西行長と和議七箇條を定め、六箇條は叶はずして、封號一つ漸く調ふ上は、關白遂に合點仕給ふべからず。其のみならず、日本へ討取る朝鮮四箇道をも朝鮮王へ返し與へ、釜山浦の和戸を毀除け、又日本人一人も殘さず歸帆仕るべしと、大明よりいひ遣され、日本より所望の七箇條は、一つならでは叶はず。却て大明より、三箇條の好有り。内日本勢一人も殘さず引取る事と有り。是又成難きと思ひ架へぬ體に持成しけり。

沈惟敬石司馬を欺く

楊鎬、實否を質さんとすれども、日本勢も引取らず、朝鮮王よりも一時の奏報なし。扨止むべきにしも非ざれば、李宗城・楊方亨は釜山浦に行き

李宗城明に逃る

て、相待つ事半年計りなり。石司馬之に驚きて、急に渡海し、策命を與ふ可しと責めけれども、惟敬樣々に辭を飾り、渡海の成らざる由を申す、大明の官人も之を聞きて、石司馬が惟敬に賣られたりと沙汰しければ、司馬之を愁ひて、竊に常鶴を單騎にて、釜山に遣して聞かしむ。常鶴還り來りて、日本人の情、變幻謀り難く、使者往々に行くべからざる由を申す。司馬猶も不審に思ひ、家人の王副子を渡海させ、直に旨を問ふ。惟敬が方より、通事要國安をして返答し、封の事決定なる由、申すを聞きて還れば、司馬少しく心を安んずと雖も、冊使兩人は日本へ渡海せず、今年は（文祿四年未の歳）釜山浦にて暮らしけり。其年十二月に、惟敬は遼東寬奠の官馬及び京營の選馬［をイ］に百七十七頭買ひて、潛に船に載せ、日本近き島々へやりて、喂養ふ。之は大明兩使の郎等を乘せん爲めなりと陳ぶれども、實は日本に良馬を好むを以て、太閤に獻じ、媚を成さんが爲めなり。兩使は惟敬が伴に依りて、爰に一年留められし事を迷惑し、如何あらんと怪しむ。殊に正使の宗城は、斯樣の憂事に馴れぬ者なれば、夜晝泣き悲しみて、歸鄕の念忘るゝ隙もなし。惟敬之を窺ひ見て、すはや究竟の

能き威し者なれど獨笑して、潛に宗城が親しき知音の謝隆を呼びて、封の事破れたり。冊使日本に渡らば、誅らるべしといふ。謝隆眞と思ひ、宗城にいひ聞かせて泣き悲しみ、宗城を動かす。案の如く宗城大に恐惶して、密に一人の僕と謀りて、印信詔勅の御書を捨置きて、衣裳を改め、金銀數百兩腰に付け、夜に紛れて釜山の營を出で、傍道より大明へ逃げ還りける處を、加藤清正内三宅角左衞門が鐵炮の者五人、夜中にひたと行會ひたり。宗城が鬧氣に落行くを見て、盜人なりと心得追懸けたり。宗城は大名の子にて、旅は之が始めなり、清正が足輕共に追詰められ、深田へ辷り落ち、手を合せて拜み、泣き悲しむ。清正が足輕共、宗城を踏倒し、散々に打擲し、腰の金銀殘りなく奪ひ、衣裳迄剝取り、赤裸にて追放す。宗城は裸に成りて、日を經て、乞食しながら大明へ歸りて、父がもとに隱れ居たり。宗城が召仕の者共二百餘人　主の行衞は知らず、こは如何にと迷ひ歩く。次の日に副使の楊方亨、此旨を擧げて遼陽に報ず。經略の孫鑛、以聞して禁中に奏す。此時大明の萬曆廿四年、日本の慶長（文祿四年の改正）元年丙申二月十五日の事なり。正使の李宗城逃去れば、沈

惟敬はすはや仕澄したり。思ふ圖に落入りぬと、獨り手敲して踊り悦び、副使の楊方亭は吾一人に成りては、如何有らんと安からず思ひ、惟敬を見てかこち泣く。惟敬大言して曰く、大臣は國の難に當りては、嘗て身を損ひし、徒に泣く事何ぞやと辱しめける。方亭訴へて曰く、母老い子幼きを思ふ故に、自ら心を取定め難しとて、いとど涙もせきあへず。惟敬眼を見出し、方亭をはつたと睨み、汝實に本國に歸らんと思はゞ、之も亦安かるべしと、心安すげに申しけり。方亭は惟敬が、常に日本と昵ぶを知りて、惟敬が心に逆らはじと懇誠を盡しけり。惟敬笑ひて曰く、直に還らんと思はゞ、敬ひて兩語を記せよ。方亭何の語を記すべきやと問ふ。惟敬が曰く、我大明國を關白に與へ、日本に畢承させんのみといふ。方亭きやつめが日本と肌を合せたる事を知りて、如何と思ひながら、若し惟敬が心に逆ひなば、殺さるゝ事も有るべくと案じて、進退盡く貴邊に任せ置きぬといひて約諾しけり。其上宗城が殘し置きし錢糧・銀兩竝に酒器金帛を皆惟敬が取用に任せて、石司馬に報じて、極めて倭情變りなき由を申し、却て宗城を誹排け、惟敬能き事に任せたりと薦む。司馬悅びて疏

石司馬朝廷を欺く

を作りて、禁中に奏請し、楊方亭を以て正使と擬し、沈惟敬を神機三營添註遊擊將軍に充て、副使に擬して封を行はしむ。惟敬既に命を拜して、望の如く副使となれども、未だ日本へ渡海せず。金・財寶を求む。石司馬心を枉げて惟敬が求むる所に隨ひて、項汝變といふ者を遣し、冊使東行の公用の爲め、銀二萬兩を惟敬に與へ、又剳付三張を與へ、銀五百兩を約し、冊使私の仕用とす。大明にては、惟敬が家の賂して月々に銀子を給はり、司馬が夫人時々に惟敬が妻に（陳濟女が事）飲食を饋り持成し、其心を悦ばしむ。司馬猶も心許無く思ひつゝ、陳雲鴻を釜山浦へ遣し、倭衆に宣諭す。其年六月に又、王胡子を遣し、釜山を窺見せしむ。冊使既に釜山を出船する時に、釜山に猶ほ日本の軍勢殘る。惟敬がいふ、之れ降參する倭人なり。朝鮮に居る事苦しからずといひしかば、王胡子、還りて此旨を告げ、石司馬遂に奏聞していふ、釜山の城盡く焚拂ひ、餘和猶ほあるは冊使を守護するなりといひて、朝廷を欺聞ます。今年、日本の改元慶長元年丙申六月十五日に、楊方亭・沈惟敬竝に從者四百餘人、釜山浦より船に乗り、日本へ渡る。清正・行長も後先きに兵を撤して、同じく日本に歸

る。朝鮮人は元來和議調ひ難き事を知りて、使者を遣す事を合點せず。去れども遊擊惟敬に責促されて、止む事を得ずして、全羅道の觀察使黃愼と、同じく將官朴弘長を使者として、大明兩使に隨ひて、同じく日本へ渡海せり。

石田治部少輔三成加藤清正を讒す

兩雄は必ず爭ふ習なれば、加藤主計頭、朝鮮在陣にて種々の私曲をなし、將軍の御爲を存せず、一方の大將に仰付けられたる小西攝津守を、日本堺の津の商人と惡口し、吾身は御免もなきに、豐臣清正と大明の報書に書送り、剩へ大明、日本和議の爲めに著越さるゝの冊使後軍都督府僉事署李宗城といふ正使の上官を、清正が鐵炮大將鴫平次・三宅角左衞門、追剝に仕り赤裸になし候旨、小西行長一書を石田治部少輔迄致し、潛に差越しゝかば、治部の少輔も清正と中惡しければ、卽時に上聞に達す。將軍大に怒り給ふ事甚だ淺からず。御朱印を以て、加藤主計を召されければ、清正は漸く此頃朝鮮より返陣し、休息もせざりける處に、京都より召狀到來

石田三成清正を殺さんと謀る

し、何事とも知らず、肥後を出でゝ上洛に赴きけり。治部少輔は主計が上洛するを聞き、天の與ふ所と悦び、道にて打殺さんとぞ工みける。抑ゝ長門國上の關といふ處は、九國の地と相對して、其貌吭に似たり。爰にて遠矢に射殺せとて、屈強の手垂・鐵炮の上手を選び、上の關の定番毛利中納言輝元が内粟屋平右衛門を頼み、山々島島に隱し置き、清正が船を待懸けたり。關守の粟屋平右衛門は、日來清正京都上下の折節、金銀・小袖を毎度にくれ、懇に仕置きければ、此旨を聞くと均しく、早船にて告げたりける。清正大に悦び、一世の大慶、此上有るべからずと返事して、大船に乘りたらば、彼必ず見知る可し、所詮謀を成さんとて、清正は飛脚船に乘り、朝鮮より大坂へ通る飛脚の眞似をなし、潛に上の關を漕通る。人之を知らざりけり。日夜怠る間なく急ぎければ、七月廿八日に大坂に著き、直に伏見に至り、密に己が屋形に隱れ居て、行長・三成讒言一々聞屆け、御返辭の品々、申分の理非、次第を逐うて談合しつゝ、閏七月三日に清正が本船をば、主計乘りたるふりに持成し、五日後れて大坂に著き、直に川船を支度し、伏見に著くと均しく、清正は其時

私宅より罷り出で、只今上洛せる體にて、股引脚絆しながら、日來の取次、又入魂深間なれば、増田右衛門尉許へ參り、今度召上らせらるゝ御用を承る可しといひ入れける折節、増田家には兌長老など參られ、其外客數多にて、四方山の雜談しける處へ、奏者罷り出で、高麗より歸朝の由にて、主計頭殿御出で候といふ。増田聞きて、此方へと請むれば、清正直に座敷に付、吾等只今上洛仕り、直に貴殿へ參る事餘の儀に非らず。内々御存知の如く、清正と治部少輔奴と中悪しきにより、色々様々吾等を讒言仕るに付、將軍實儀に思召し、切腹仰付けらるべしとの沙汰を承るに依つて、貴殿に申披の爲め、相談に參り候ぞや。治部と清正不和の段、上にも御存じと承り及ぶ所に、五年以來の大功を無に成され、三成奴が口舌を御信用候て、斯くの如き段、是非に及ばずとて、大の眼より涙をはら／＼と流しければ、長盛も道理至極にて候へども、去り乍ら退きて思案を運らし候に、上への御斷りの儀は、治部と御和睦之無くば、必ず事濟み候まじ。先づ案じて見られよ。今の世に於いて、誰人か三成を治部少輔奴なんどと悪口する者は、日本國中に有るべからず。右申候

清正の憤怒

通り、上への御斷りの爲め、三成と御和談有り度くば、明日にも長盛、其段を申達し、早速和睦させ申さん。さなく候に於いては、申譯の相談には、長盛能成り間敷く。と申しける處に、清正大に氣色を損じ、增田をはつたと睨み、御身は日來の人魂にも似ず、途方も無き事申さるゝ者かな。軍神八幡も御照覽候へ、治部少輔奴とは一生の中和睦仕るまじきぞ。其仔細は、朝鮮國にて數箇度の合戰に一度も手に合せずして、人の影事のみ申廻り、口先にて人を倒さんと工を致す臆病者、算用算勘を本望に存ずる蓬奴原と和談して何かはせん、譬ひ御不審を蒙りつゝ、此儘切腹仰付けらるゝとも、治部奴と中は直るまじ。貴方も只今の仕方申分、近頃奇怪に存ずるぞや。實に五年異國へ渡り居て、晝夜苦勞したる清正が、直に貴宅へ參りたれば、日頃の好なきとても、せめて遠侍迄も出向ひ、久敷して逢ひたる一言の禮儀は有るべきに、次の座敷へも出合はず、頭計り捻出して分別貌なる挨拶は、嬉しくも候はず。所詮御身の樣なる禮儀を知らざる人とは、いひ睨みても何かせん。向後申通まじと、大兼光の刀戾廻し、詈り／＼立歸る。右衞門尉追付きて、其儀にてはなし。先づ歸ら

れ候へと、種々に宥め留めけれども、返事もせず歸り、直に御城へ出仕し、此旨申上げければ、中々御對面の事は扨置き、德善院玄以・山中山城守を以て、其方事、朝鮮表にて在陣中、惡逆を翔らす由、分明に上聞に達す。此故に急度御穿鑿仰付けなさるべく、召上げらるゝ者なり。暫く御膝下に罷り有り、御糺明を相待つべしと、したたかに仰出されければ、淸正承り、五年以來異國に在陣し、兀良哈・朝鮮表の數度の戰に粉骨を盡し、萬死一生を出づる事、其數を知らざりしに、其忠節を賞し給はざるさへ有り、無實の讒言にかゝり、浸潤の誹遂に晴れず、御對面は扨置き、御糺明有るべきとは無念なる事かなと、聲を上げて泣きつゝ、御城を出でければ、一座の人々主計を憐みて、袖を濡さぬはなかりける。

京伏見大地震

斯かりける所に、閏七月十二日の夜半に大地震して、伏見・京都はいふに及ばず、五畿內・近國一度にゆり立ち、伏見御城を始め、人民の屋宇に至る迄倒破し、老若貴賤、

清正伏見城に馳付く

男女僧俗はいふに及ばず、牛馬雞犬の死傷する事、幾千萬といふ數を知らず。家々の崩るゝ音、喚叫ぶ聲、雷の鳴るが如く、貴賤東西に馳せ違ひ、男女巷に逃斷り、諸大名も面々に忘却して、御城へ馳著く者なかりける所に、加藤清正は御勘當の身なれども、主君の大事は見捨て難しとて、鎧を取りて肩に抛懸け、上に小袖を打ち羽織り、屈強の兵百餘人、鐵手子持ちたる足輕二百人召連れ、一番に御城へ馳入る。將軍は御殿崩れしかば、早や御庭へ立出で給ひ、疊廿帖計り敷かせ、御幕・屏風にてかこひ、大挑灯を燃させつゝ、女郎達の中へ交り、御身も女房の出立に成り給ひ、北の政所御同道にて、松の丸殿其外の女﨟・女房召連られ御座しける所に、御聲を聞き知り、清正之れ迄參り候。恙無く御出でなされ、目出度こそ存候へ。幸藏主は御座らぬかと、大音にて叫り〳〵出來る。尼幸藏主は、聞くよりも誰ぞ早や參られ候といふ時、加藤主計にて候ぞや。大地震夥しく候間、上を始め奉り、壓に打たれ御座有るべしと存じ、剣脱けん其爲め、二百人の足輕に手子を持たせ參り候間、將軍御臺北政所へ、御申上候へといふ其聲を聞召し、太閤並に政所、扨も早く參り候者か

太閤政所清正の登城を感悦す

清正幸藏主に傳奏を頼む

な、氣のついたる仕方、比類無き事かなと御感悦淺からず。北政所は、清正を他に異に思召候ゆゑ、樣々の御取成しにて、將軍一入御感なり。清正土の上に畏り、兩手をつき、幸藏主に向ひて、御身能く聞きて、御披露候へ、清正此五年朝鮮國に罷り有り、數箇度の合戰に大利を得、朝鮮兩王子・諸官人を生捕り、兀良哈迄で攻入り、彼國の王城に放火し、吉州表にて手を碎き、開城府川にて南兵十萬餘騎を夜駈に打散し、麻貴將軍を清正自身打取り、總軍を川へ追浸し候ひき。其外傳奏館にては、自ら先登し、晉州城一番に乘崩し、安康にては大明の劉綎と一戰し、霜に打たれ雨に濕され、日夜山野に身を任せ、苦勞せし忠功をば思召捨られ、あの小西攝津守が如くなる臆病至極の者は、御不便を加へられ、平壤にて李如松に攻められ、竹内吉兵衞といふ家人を敵の餌に養ひ、夜逃にしたる越度をば、曾て御咎にもましまさず、剩へ彼方此方へ詐を申し、和議の扱を御用ひ、治部少輔と御相談有りて、清正に切腹仰付けらるべしと、朝鮮より召登せられ候へ共、身に過なき所、天の照覽に任せ置き、急ぎて歸朝仕りしなり。あの治部少輔に支へられ、腹を切らんと仕る事、只今

石田三成怒る

まで三度なり。今度の次第も天心曇りましまさねば、定めて虚名は遁れ申すべしと、高聲に申しければ、太閤具に聞召し、清正五年以來、朝鮮にて炎天・寒天とも言はず、晝夜辛勞仕り、日にやけ色黑く、瘦せ衰へたる不便さよと、御淚をはら〳〵と流し給ひければ、北の政所・松の丸殿を始め、御前の上臈・女房達、皆袂をぞ濡されける。清正幸藏主へ申されけるは、夜中無用心に覺え候間、中門には吾等侍共附置き申すべきやと問ふ、幸藏主、此旨伺ひ參らせけるに、太閤は未だ物は宣はず、少し御相圖成されしかば、清正が家老加藤與左衞門・加藤傳藏・和田備中守・大木土佐守・小代下總守・出田宮內など御門に附置き、清正に斷り申さずして、誰をも入れ申間敷と、堅く法度し、主計は白手巾にて鉢卷し、大長刀を搔込んで床几に尻を懸け、兎せよ角せよと、御城中の事ども下知しつゝ、肱を張りて居ける所へ、治部少輔を始め、五奉行打連れ登城仕る。加藤與左衞門以下、中門を打ちて通さず。其時三成は、治部少輔なり苦からず候間、通し候へといふ。清正が兵共、何と治部少輔と申すか、治部などといふ者が、今迄遲參仕る者か、通す間敷くといふ。三成大に腹を立て、何者なれ

ば斯樣の惡口申すぞ。當時天下に於て、三成を治部少とは、何者ぞなんどと、知らず顔するは安からざる徒者なり。御門の當番は何奴ぞと怒りける。加藤が兵聞き敢ず、主計頭清正なり。何奴とは聞えぬ申分哉と、口々に罵る。治部少聞くよりも、御勘當の清正が、いつ御免にて斯樣に振舞ふぞ。仔細を云へと散々に怒り、御門口騷動す。將軍聞召され、松の丸殿を御使にて、治部少輔通り候へと仰付けらる。時に清正大音揚げ、御門に罷有る加藤主計が者共、治部少輔御用有る間、入れ候へと上意なり。夜中狼藉者も紛入るべき間、能く見分けて通し候へ。治部少輔は背の少き瘦男の、臆病げに見ゆる奴にて紛れはなきぞ。通し候へと罵しるに付、御門を開きつゝ、五奉行何れも内へ入り、治部少輔が通るを、加藤與左衞門・出田宮內等立挾みて有りければ、三成も刀に手を懸け通りける。暫く有りて、家康・景勝・隆景・輝元・秀家を始め參らせ、大名小名雲霞の如く登城有りしかば、廣庭も狹く成る。其時將軍竝に北政所・松の丸殿以下の上臈・女房達、皆々石垣の背、築地犬走へ挑灯を上げて、御坪み成されつゝ仰せられけるは、未だ御前をも御免なき者が、萬事取持ち候間、石

垣より上には無用なりと、御叱り成されけれども、清正少しも痿まず、石垣の傍に立居ける。去れども御詞も懸給はず、如何思召しけん、女郎達に挑灯を燃上させ、清正を頻りに御覽じ成され、御落涙せきあへねば、政所よりも松の丸殿よりも、女郎達を御使に下され、御前は大方濟より候ぞ。心に氣遣ひ仕るべからず。御前をば吾々に任せ候へと、仰せられければ、清正手を合せてぞ悦びける。去る程に、夜も明方に成りしかば、諸大名何れも退出仕るべきにて罷出でければ、清正も退出せり。清正が今宵の働、傳へ聞く輩迄も擧めぬ者はなかりける。

加藤清正將軍御勘氣御赦免

北政所の内意

夜明けぬれば、北政所並に松の丸、京極御局より御使を主計頭に下され、清正御勘氣の義、早や相濟み候なり。去りながら、清正程の者の勘當を、女の取成しにて召直さるゝ事、後難遁れ難し、表向にて、家康・景勝・利家取成しにて、召直され候はんとの義にて、只今將軍御廣間へ御出で成され候間、定めて頓て召出さるべく候

條、左樣に心得候て、進物など何にても上げ候はんと存候はゞ、書立を以て御城御臺所へ主計者を著上ぐべしとの御使有りけるに、案の如く家康より、榊原式部大輔康政を使にて、只今將軍御廣間へ御出で成され、主計頭事仰せ出さるにより、景勝・利家・吾等三人取合ひ申候へば、夜前早速能出候段神妙に思召され、御勘氣御赦免成され候。委細は德善院・治部少輔・右衛門尉より、申來るべしとの義なり。然る所へ、德善院玄以より大池淸左衛門、治部少輔より柏原彥左衛門、增田より谷市之助使とし、主計頭事、數箇度不屆仕り候へども、夜前早速登城致し、神妙に思召し、御勘氣御免成され候間、早々登城仕るべしと申越し、三使濟に申けるは、三奉行內意にて申候は、將軍未だ筑前守殿にて御座候時、淸正は虎之助と申し、御腰元にて召仕はれ候時分の如くに、何事を仰せられ候とも、御口答仕られ間敷候。今は天下の主とし、攝政關白迄に御昇進ましく候間、古の如くに存ぜず、何樣の義を仰せられ候とも、謹みて承るべき由申越し、三人の使は歸りけり。淸正は榊原式部が歸りし後より、加藤傳藏を使にて、唯今三奉行使者を差越し候に付、頓て登城仕るなり。何事も口答

秀吉清正に詰問

仕る間敷と申越し候が、左様に上意之れ有り候やと申越しければ、家康御返事に、景勝・利家・吾等三人、御傍を少しも去らず罷有り候が、左様の義は仰せ出されず候間、何事にても申分候はゞ、御前へ罷出で、次でに何事をも眞直に申上げられ候へ、其儀計りに又御勘當候はゞ、景勝・利家・吾等三人、申分け仕るべしとの返事成りしかば、清正斜ならず悦び、長袴にて登城仕る。進物には虎の皮五枚、三間續きの猩々緋折に包み、御廣間の縁迄持出づる。石田治部少輔奏者にて、披露申上げければ、將軍御覽有りて、此進物は、朝鮮にての亂妨物にて有るべしと仰せられ、主計頭御前へ近く參り候へと御意成されければ、清正は柿の帷子に緋の大筋の長袴にて、膝に障る大鬚を作澄し、御前近く畏りければ、將軍は國綱の御太刀に御手を懸けさせ給ひ、偖々己は古へ虎之助とて、小性にて召仕ひし時の分別も、亦只今一國の主となし、異國退治の大將を仕る時の分別も替へず、傍輩競を仕り、小西攝津守を堺の町人と惡口し、日本に人も無き様に大明へ申越し、又大明への勅答にも豐臣朝臣と書きたるとな。汝よく承り候へ、豐臣を免す事は秀家・秀保・秀俊三人の外は、天下に赦免な

し。己には誰が免して斯くの如くには書きたるぞ。是非に及ばざる次第なり。仔細を申上げよと、したゝかに御尋ね有り。清正謹みて、家康・利家の方へ向ひてし申けるは、斯様に申上げ候へば、返答に似て候へども、能く開召され下され候へ。勅答を調へ申候事は、清正蝗乘といふ所に在陣仕り候時、大明天子より勅使參り申候は、往古足利公方鹿苑院義滿が時より、吾が大明へ內屬し、日本國王の封號を請けしより以來、貢物代々納め來り候處に、萬松院義晴が時、細川右馬頭高國が使者、宋素卿が寧岐府にて亂を起せしより以來、市舶を罷め貢物を絕し、剩へ只今關白秀吉、小國の臣下を顧ず、干戈を動し、朝鮮を攻め伏せ、大明境まで兵を押詰め候に依り、李如松を大將にて、四十萬の人數を出す所に、其勢に恐れ、日本勢武具を捨て、小西行長逃散に付きて、朝鮮王城まで追詰め、碧蹄館にて合戰し、太閤名代の者を先きとし、一人も殘さず逃去り、それより釜山浦まで、傳々の城に居候者迄、殘さず討取り、朝鮮の內に日本人といふ者一人もなし。清正一人計りなり。清正は萬事淳直に申付、慈悲第一と叡聞に達し候間、汝が手へ生捕る朝鮮王子並に國中第一の美女を此方へ

返進らせ候へ。左候はゞ、一命を助け、北京より數千艘の船を仰せ付けられ、日本へ送り屆くべし。此勅諚を用ひずば、蝗秉へも四十萬騎を差越し、一人も殘さず討果すべしとの宣旨なりと申渡すに付、淸正承り、彼美人は鍋島生捕り候由承り候に付呼寄せ、王子兄弟竝に美女を勅使に見せ候へば、紛れ無き事なりといふに付、天子への勅答を書認め、王子は太閤へ伺はずして返す儀成難し。美女は勅使の前に置き、大明筋へ働き候小西行長は、日本堺の町人なれば、本の大將にてなし。宗對馬守緣者たるにより、案內者に差遣せば逃げたるも道理なり。又豐臣と書き申す事は、淸正三歲にて父彈正に離れ、苗字を漸く存じたる計りにて、氏も系圖も存せざる故、豐臣とは書き申候なり。扨又右の勅答に、小西は案內者、本の大將は淸正なり。之れへ四十萬の御勢を下され候はゞ、盡く切崩し、其勢に追詰め、大明國迄攻入り、北京を燒拂ひ、天子をも朝鮮王子の如く生捕り、日本へ引渡し、支那四百餘州を屠殲・灰燼と成すべしと、日本を飾り小西を惡しく申つるなり。扨美女をば門外に磔に上げ、淸正自身等長の鑓にて、芋刺に突通し見せ候へば、大明人恐怖れ、舌を

秀吉清正の返答に感ず

震はし逃散す。それよりして、清正をば鬼神上官と申して、大明・朝鮮にて、清正を恐れざるは候はずと、辯舌は達したり、立板に水を流す樣に、一々に申しければ、將軍御涙を流され、扨々秀吉に能く似たる者哉。彼が後紐の時より、秀吉が膝の上にて生立ち、謀の段々を能く見置き、其儘似せたる者なり。秀吉が爲めには近き一族たれども、餘りに腹惡しき曲者にて、喧嘩ずきを少時より仕るに付きて、筋なく死を仕るべき奴と思ひ、今迄は隱せしなり。彼れが母と大政所殿とは從弟なり。いかにも近き間なり。されば豎子の時よりも、座敷の上の立翔は不骨なれども、武者事に見落す事なし。されば今日豐臣朝臣の姓を御免成され候間、向後心立を嗜み、神妙に覺悟を爲すべしと仰せ下され、御盃下されければ、清正涙に咽びつゝ、兎角の事に及ばず、久々にて御盃を頂戴し、三度傾ける時、將軍それ〳〵と仰せられければ、御緣通りに居竝びたる四座の大夫共、目出度き謠を謳ひ出し、御盃度々廻りしかば、家康・景勝・清正に向ひて、家人共も心許なく存ずべし、罷り歸り五年以來骨折りたる家の子郎等に申聞かせ、安堵させよと申さければ、清正畏りて、御禮申上げ、御前を

罷立ちにけり。扨も清正罪科の條數の内、大明の册使李宗城を家人鷗平次・三宅角左衛門追剝ぎしたる事は、御尋ね有るとも申分け成すまじきと、清正案じ居たるに、鷗・三宅進み出で、之は清正曾て御存じなき事、吾々も存せず候へども、足輕共追剝ぎ仕るは、兎角の申分成され難く、只鷗・三宅仕たりと仰せ上げられ候はゞ、定めて御用捨あるべからず。さ候はゞ、平次・角左衛門罷出で、切腹仕るべしと、頻りに申切つて待ちけれども、申分成るまじきとや思召けん、又清正が運や强かりけん、其御沙汰も無かしりかば、主計頭家人、悅び勇む事限りなし。されば行長・三成心を合せ、清正を惡み、讒言度重ねしかば、五年過ぎ、關ヶ原一亂の砌、清正別して粉骨し、小西が宇土城を攻落したりとぞ聞えし。

將軍秀吉公大佛を鑄給ふ

去る閏七月十二日の大地震にて、京・伏見は扨置き、畿内近國の堂塔・伽藍・神社を始め、人民の屋々の損じたる事、夥しとも中々なり。就中、將軍御建立なされたる東山

秀吉大佛像を射る

の大佛殿大破に及び、佛像裂け破れしにより、將軍大に御腹立有りて、大佛殿へ御越し有りて、佛に向ひ、夫れ佛像を安置するは、國家の太平を守護せしめん爲めなりき。然るに世尊として、衆生の艱苦を拒ぐ事遂げず、剩へ吾身をさへ保つ事能はずして、斯くの如く摧け破る。何の益か有るべきとて、持たせ給ひたる弓に鴈股つがうて、ゆら〳〵と引張り、弦音高く切つて放ち、大佛の胸板に箆中せめて立ちたりける。御供の人々は扨置き、傳へ聞く貴賤上下、興を覺さぬは無かりける。扨御使を下され、佛像を求めらるゝに、信州善光寺の無量壽佛を迎へ奉り、大佛殿に安置し參らする。其以後、又數萬人の人夫を集め、百工に命じ、大佛を鑄直しつゝ、善光寺の佛像をば本寺へ返遣されけり。大佛殿のみならず、方々にて大厦・高墻の崩懸るに打れ、壓殺さるゝ男女老若、幾十萬といふ數を知らず。中にも伏見御城大破して、將軍の召仕はるゝ上臈・女房達、壓に打たれ大方死傷せしかば、召仕はる者共、俄に集め難ければ、其間の御用として、洛中・伏見・大坂・堺の傾城・遊女、容顏美麗なるを百十三人選出し、御籠中にぞ召仕はれける。將軍、元來大度の量飽迄なりしかば、尋常

に越過したる事共多かりしかども、素姓才智四海に溢れしかば、少しづつの誤は、人の誹も無りしとかや。今度破損せし大坂・伏見兩城の修理仰付けられしかば、大明の冊使も長崎に逗められ、御一左右次第京著致すべきの旨仰せ出されけり。

大明兩使伏見著岸并兩使登城

大明朝鮮の兩使堺に著く

大明の正使都指揮楊方亭・副使遊擊沈惟敬、並に朝鮮使黃愼・朴弘等、小西攝津守行長と同船にて、八月十八日、泉州堺に著岸す。此旨申上げければ、將軍大に御感成され、增田右衞門尉長盛に仰付けられ、大坂・堺を點検し、牛・豕・雞を數百匹相調へ、大明・朝鮮の四使に下されけり。扨又加藤主計頭清正を御使とし、遠路渡海を祝著に思召され候。先づ堺に五六日逗留致し、休息仕り候て、伏見へ上著然るべしと、仰せ遣されければ、大明・朝鮮の四使、清正が來ると聞き、此五年以來、武勇の程を知りてんげれば、恐れ悲みし處へ、主計頭參られ、穩に上意を演べければ、四人の使者愼みて、畏き旨御請け申上げけり。去る程に同月廿九日、大明の冊使楊方亭・沈遊擊等、

堺を出でて上洛に赴きけり。路次の警固・辻固、鑓・長刀を立並べ威儀嚴重なる次第、言語道斷の形勢なり。天下の貴賤・老若・男女・僧俗ともに、大明より太閤を封ずる勅使を見物せんとて上集り、堺の北の端より伏見迄の道、十二里が間は沓の子を打ちたる如く、充滿ちたり。人は顧る事を得ず、踵を爪立てゝ押合ひたり。大明より本朝へ勅使立つ事、近代未聞の事共なり。誠に斯樣の珍事を見ん事は、末代の物語なりとて、巷に滿ち道に擁して、秀吉公の威德を感ずる聲々、洋々として耳に盈てり。冊使も爰を晴と威儀を調へ鸞輿に乘り、蓋を差懸けさせ、笙・篳篥を鳴らし、笛・太鼓にて管絃を奏し、幢をさゝせて、已に伏見の旅館に著く。卽ち正使楊方亨は、宇喜多中納言秀家の館に入り、副使沈惟敬は蜂須賀阿岐守家政宿所に入り、御馳走大方ならず。時に將軍は、柳川豐前守調信を以て、朝鮮の使者黃愼・朴弘張に仰付けられけるは、今度、大明冊使を渡す砌、朝鮮の王子、自ら來り謝せずして、兩使を以て申す事、寔無禮の至りなり。其罰甚だ輕からず。然る間、明使には御對面有るべく、其方には御對面成されざる旨、申出されければ、朝鮮使の黃愼・朴弘張等猜懼れ、悲

秀吉朝鮮の無禮を詰る

伏見城中の模様

み愁ひて、小西攝津守行長を賴み、頻りに御對面下され候へと、樣々歎き申しけれども、將軍遂に免し給はず。之に依りて、朝鮮使の泣き悲しむ事斜ならず。さる程に九月二日、大明使に御對面有る可き由、仰せ出されければ、正使・副使同道して、伏見城に登りける。下馬より御白砂迄、警固の侍充滿ち、威行傍を拂ひて巍然たる粧ひ、言語に及ばざる事共なり。大老中には、德川內大臣家康卿・加賀大納言利家・上杉中納言景勝・小早川中納言隆景・毛利中納言輝元・宇喜多中納言秀家・大和中納言秀保、小年寄には堀尾帶刀先生吉晴・生駒讚岐守正俊・中村式部少輔一氏、五奉行には淺野彈正少弼長吉・德善院玄以・石田治部少輔三成・增田右衞門尉長盛・大谷刑部少輔吉隆等を始め、武將には加藤主計頭淸正・小西攝津守行長・黑田甲斐守長政・立花左近將監宗茂等を始め、天下の大名小名、一人も殘らず出仕の體を刷ひ、殿中より庭上迄、膝を屈して並居たり。緣の通りには、黃母衣の衆・御使番・御馬廻・大身・小身、雲霞の如く充滿ち、威儀嚴重なり。大明の冊使兩人、已に御殿に著座す。正使の楊方亨は、誥命を持ちて前に立ち、副使の沈惟敬は、金印を捧げて、階下に立つ。良〻久し

く有りて、殿上の黄幄を卷上げ、侍從二人に太刀を持たせ、兩方に隨ひて將軍秀吉公出で給ひ、御座に著き給ふ時、出仕の百官・大名・小名、殿中・庭上一同に頭を地に付けて拜禮せり。沈惟敬、此威光の甚しきを見て、大に恐れ震ひて、金印を持ちながら、地に匍匐して平伏したり。正使の楊方亭は、惟敬がする眞似をして、震ひ戰ぎ。伏倒る。其體の笑(をか)しき言語を絶する計りなり。秀吉公著座有りて、冊使渡海苦勞の旨仰せ出されければ、楊方亭も沈惟敬も、我を叱責し給ふと心得て、趦趄として足進まず、嗚嚅として口戻れり。其時小西行長進出でて、之れ天朝禮を遂ぐる時なり。謹みて禮を行はるべしといへば、正使は誥命を渡し、副使は金印を奉り、封王の冠冕・衣服竝に日本諸臣の冕服五十餘具調進し、位階に依りて著服せらるべしと申上げけり。進物は生きたる孔雀・麝香・白象・黑象・馬・唐犬、次に金襴百卷・緞子百卷・皁綾二百端・綾百端・錦五十卷・繻子二百卷・虎皮三十枚・豹皮三十枚・唐皮・靑皮・猩々緋、何れも三十枚宛なり。大明より用意し來る冠服は三十具計りなり。日本に斯樣に大名多かる可しとは知らず、俄に調進する事も叶はず、冊使の著ける衣服迄、其數に

沈惟敬秀吉の威に懼る

明國よりの進物

秀吉の大量

明使饗宴の模樣

入れ奉り、石田治部少輔之を見て、將軍に申上げけるは、勅使の舊著迄奉るは如何、請取り候はんやとぞ伺ひける。太閤聞召し。打笑ひ給ひ、日本に大名多くして、彼が衣服の用意不足して、舊著を奉る事、猶ほ以て吾國の威德なり。見分けぬ體にて、それぞれに著服すべしとぞ仰せける。彼程の大禮に少事を咎め給はゞ遲滯すべきを、元來大度の量有るに依り、一言の下にて道行しける豪氣の程こそ由々しけれ。冊使拜答の禮畢りて、旅館へ歸へれば、其後より石田治部少輔・長束大藏大輔御使にて、饗膳美麗を盡し持成しけり。翌三日に冊使等を宴すべしと仰付けられ、兼日より定め給ひし饗宴なれば、善盡し美盡せり。御殿の上壇中央を御座と定め、次の間右の方に大明兩使の座を設け、左の方御相伴の爲め、內大臣家康・大納言利家・中納言景勝を先きとして、中納言以上の大名七人の座を設け、秀吉公威儀を明人に耀さんと思召し、紅葉衣に緋の大口、大明の冠を著し給ひ、中央の曲彔に坐し給へば、御相伴七人の衆も、皆大明の冕服を著し、何れも曲彔に坐せらるゝ。殘る諸大名も大明の冕服にて、南の緣に坐せられける。廊下・庭上には、諸大夫以下の侍、濟々として

並居たり。膳部は大明の禮法に隨ふべしと沙汰ありて、高さ三尺に五尺四方の膳、牛・羊・雞・豕・魚鳥を盡して調味し、金銀の鏤飾の作花、丹青を粧ひ、傍も耀く計なり。安藝宰相秀元・結城宰相秀家を始とし、宰相以下侍從以上、歷々の若大名十餘人、色々の裝束に出立ち、綾羅・錦繡を飾りたり。三獻の御酒・種々の御肴・樣々の折敷重ね、山海の珍物を極められ、秀吉公御盃を明の册使に下され、獻盃の禮終りければ、歌舞・管絃は唐朝より來れば珍しからず。日本に弄ぶ亂舞・拍子を仰付けられ、即ち觀世・金春、御舞臺に伺候し、既に御能始まり、謠の聲に殿中も澄渡れり。嘹喨の笛の聲、嗟嗃の鼓の響に、勅使耳を驚かし、こはそも何事ぞと見居たるに、大鼓打つ指より血を流し叫びける懸聲に色を變じ、何程の罪人なれば、斯程の糺明に及ぶぞと、楊方亨も沈惟敬も色を失ひ恐れければ、通辭の者之は大鼓役者にて、罪人には有らずと委細に言聞かせければ、其時色を直しける。咲敷(をかし)き次第言ふ計なし。實に九韶三夏の音は、折楊皇花の耳に入らざる例有れば、聞き馴ぬ事に驚くも理なり。秀吉公も大明の册使來るを悅び、册使も旅館に歸りて、今日の享宴を忝しと、喜悅の眉を開きける。

大明封號の儀相違に依り秀吉公再び朝鮮征伐を催す

明王の書翰其一

將軍は花畠の御茶屋へ入り給ひ、御膳を上り常に伺候ひし兌長老・三長老・折長老を召し、大明の誥命璽書を讀ませ聞き給ふに、小西攝津守は、吾僞りて申せし事、一々顯れん儀を恐れ、三人の長老達に囁きけるは、將軍若し書翰の趣を聞き給はゞ、御腹立有りて、和議破るべき事疑ひ無く候間、日本國王に封ずると有る文章を讀みかへ、大明の大王に封じ奉ると、讀み給へと頼みければ、長老達領掌せず。流石異國・本朝の大義を僞りにて晤まさん事、本朝末代の爲すべき瑕瑾とて、將軍の御前にて、有りの儘にぞ讀上げたる。其辭に云、

聖神廣運、凡天覆地載莫不尊親。帝命溥將、暨海隅日出罔不率。俾昔我皇祖誕育多方。龜紐龍章遠錫扶桑之域、貞珉大篆榮施鎮國之山。〔本无〕嗣（永樂中年）以海波之揚、偶致風占之隅。當茲盛際、宜續彝章。咨爾豐臣平秀吉崛起海邦、知尊中國。西馳一介之

使、欣慕來同、北方叩萬里之關、懇求內附。情既堅於恭順、恩可靳於柔懷、茲特封爾爲日本國王、錫之誥命。於戲寵賁芝蒸、襲冠裳於海表。風行卉服、固藩衞於天朝。爾其念臣職之當修、恪循要策、感皇恩之已渥、無替擬誠。祇服綸言、長遵聲敎。欽哉。

萬曆廿三年乙未正月廿一日

又頒日本國王詔諭一道、至廿三日復頒勅諭一道、其文云、

皇帝勅諭日本國王秀吉。

朕恭承天命、君臨萬邦。豈獨乂安中華、將使薄海內外日月照臨之地、罔不樂生而後心始慊也。爾日本平秀吉、比稱兵于朝鮮。夫朝鮮我天朝二百年、恪守職貢之國也。告急於朕、人々是以赫然震怒、出偏師以救之。殺伐用張、原非朕意。廼爾將豐臣行長、遣使藤原如安、來具陳稱兵之由、本爲乞封天朝、求朝鮮轉達、而朝鮮隔越聲敎、不肯爲通、輒爾觸冒以煩天兵。既悔過矣。今退還朝鮮王京、送回朝鮮二王子・陪臣。恭具表文、仍申前請、經略諸臣、前後爲爾轉奏。而爾衆復犯朝鮮之晉州、情屬反覆、朕遂報罷。爾者朝鮮國王李昖、爲爾代請。又奏釜山倭衆、經年無譁、專

俟封使。具見恭誠、朕故特取藤原如安、來京令文武群臣會集闕庭、譯審始末、幷訂原約三事。自今釜山倭衆、盡數退回、不留住一人。旣封之後、不敢別求貢市、以啓事端。不敢再犯朝鮮、以失隣好。披露情實、果爾恭誠。朕是以推心不疑、喜與爲善。因勅原差遊擊沈惟敬、前去釜山、宣諭爾衆、盡數歸國、特遣後軍都督府僉書署都僉事李宗城爲正使、五軍營右副將左軍都督府署都督僉事楊方亨爲副使、持節賚誥、封爾平秀吉爲日本國王、賜以金印、加以冠服。陪臣以下、又各量授官職、用誧恩賚。仍詔告爾國人、俾奉爾號令、毋得違越、世々居爾土、世々統爾民。蓋自我成祖文皇帝、賜封爾國、迄今再封、可謂曠世之盛典矣。自封以後、爾其恪奉三約、永肩一心、以忠誠報天朝、以信義睦諸國、附近夷衆、務加禁戢、毋令生事於沿海。六十六島之民、久事徵調離棄本業、當加意撫綏、使其父母・妻子得相完聚。是爾之所以仰體朕意而答天心也。至於貢獻、固爾恭誠。但我邊海將吏、惟知戰守、風濤出沒、玉石難分。効順旣堅、朕豈責報。一切免行、俾爾後嗣遵守朕命、勿得有違。天鑒孔嚴。　王章有赫欽哉。　故諭二月初三日、又頒二使勅諭及沈惟敬勅諭各一道、皆

中勅三事、各要遵行」

とぞ讀みたりける。將軍秀吉公聞召して、大に色を變じ、眼を瞋し、憤怒甚しく、大音揚げて宣ひけるは、文章の趣、大明の皇帝吾を封じて日本の國王とす、言語道斷の曲事なり。吾武略の名譽長ぜるに依り、既に日本の主たり。何ぞ大明の力を藉らんや。前日小西申上げけるは、大明より、吾を大明國の皇帝に封ず可しといふに依りて、朝鮮表の軍勢を引取りぬ。斯く有るべしと知りたらば、生捕りし朝鮮王子奴を還さず、王城の人數を引取るまじき者を、口惜しとも無念ともいはん方なし。小西奴日本に在りながら、志を大明に通ずる所、其罪輕からず。三族の刑に行ふ共、何ぞ飽き足らんや。吾を瞞しける腹立たしさよ。小西奴呼出せ、手討にし首を刎ぬべしと罵りながら、卽ち召したる大明の縫物の袞服を脫ぎ、冠を脫ぎて庭上に抛ち、踊上り踊上り怒り給ふ。諸大臣以下色を失ひ、手に汗を握り、唾を呑み、小西未だ御前へ出ざる内に、兌長老諫め申して曰く、大明は中國にて、諸國に勝りたれば、古より國國封を請る事無禮に候はず。今御威光日出度きに依り、冊使を奉る事、古今稀なる例

秀吉憤怒す

兌長老の諫言

再び朝鮮征伐

なり。願くば冊使を褒し返書を遣され、好を通ずるは本朝の光輝、末代の龜鑑たるべしと申上げられしかば、顏色少し解け給ふ所へ、小西は召に應じ、震戰き伺候せり。秀吉公御太刀を叩き、大の眼を見出し、怒り罵り給ふ聲、唯雷の鳴落るが如く、小西を已に御手討に成さるべき所を、三人の長老達御袖にすがり、口々に諫め止め參らする。小西も震ひ〱懷より、三奉行の命を受けて申行ひし條々、數通の證文を取出し、行長一人の爲業に有らざる旨申上げければ、憤りを押へて止み給ふ。小西も辛うじて命助りて、宿所へ歸りける。秀吉公は御廣間に出で給ひ、加藤主計頭清正竝に西國・中國・四國の諸大名を呼び、仰せ出されけるは、今度の次第、憤押へ難しと雖も、大明遙々と冊使を奉る所に、又宥免せずんば有るべからず。冊使も久しく留むべからず。明日堺迄歸すべし。吾再び大軍を起し、朝鮮を攻平ぐべし。皆々用意せよと仰付けられて、朝鮮入の日限を定め給ふ。翌日四日に、大明の冊使皆すごすごと伏見を立ち、堺の津へぞ下りける。楊方亭・沈惟敬等相議しけるは、吾等萬里に遠來して、御返事さへ取らずして還るは、何の面目有りてか人に面を向くべき、

明朝鮮の使節大いに窮す

秀吉兩使の情を憐愍す

且つ勅書の三事、初より行長と堅く約束せし事なり。今太閤逆鱗を叱り給ふにより、行長迄迷惑に及ぶ條、是非無き次第なり。再び行長に見えて、此儀を論ずべしとて、堺の浦に數日逗留す。秀吉公忿怒猶は止まずして、朝鮮の兩使黃愼と朴弘張とは、伏見に止めつゝ、御誅戮有るべしと仰せ出されけるを、三人の長老達、晝夜御前に相詰めつゝ、色々御詫言申上げられければ、御宥免成され、朝鮮の兩使命助かり、同八日、堺に下り著しかば、大明の冊使も明日出船すべしと定め、爰にて明使・朝鮮使共に相議して曰く、我曹歸朝の時、大明・朝鮮にて此爲體を明白に奏聞すべし。然らざれば、國事を誤る事疑ひ無しとて、只茫然として、進退爰に谷まりぬ。秀吉公は大明の冊使、萬里の雲海を航海し、簡だにも取らずして、空しく歸帆するを不便に思召し、且は其心の苦勞を哀憐し給ひ、柳川豐前守調信を御使にて、金銀數千兩・吳服・太刀・刀夥しく下し賜り、御返翰をば、此方より遣さるべしとぞ、仰せ下されける。九日に大明・朝鮮の四使、堺の浦を出船する刻、柳川豐前守調信、潛に朝鮮の正使黃愼に囁きけるは、來春再び朝鮮を征伐せられん事必定なり。汝等歸國せば、王子を

來朝させ、其宥免を乞ふべし。若し然らざれば、此二人の王子を擒にすべしと、清正・行長・長政・義弘等の四人の大將に仰付けられ、明年二月、大兵渡海すべしと告げければ、黃愼恐れ懼みて、大明二人の冊使に告ぐ。然れども沈惟敬は猶ほ之を信に用ひず。九月九日に大明・朝鮮の四使、已に堺の浦を出帆して、歸帆にこそ赴きけれ。文祿元年壬辰より、慶長元年丙申に至る迄五年の間、調ひし日本と大明・朝鮮との會盟の和談の事、朝鮮より王子をして、來り謝せしめざる事を太閤安からず思召し、又大明より、秀吉を封じて大明の皇帝に成すべしとの定め、行長並に三奉行の聞き違ひし事を怒り給ひ、再び大軍を起し干戈を動し、今度大明使等を追返して、將軍下令して曰く、加藤清正・小西行長兩先手にて、中國・四國・九國の勢は殘らず渡海し、朝鮮を攻め平ぐべしと仰出されしかば、九月の末より、九州・中國・四國の勢は普請を止めて、己が國々へ下り、來春朝鮮入の支度せり。

伏見城再度の普請

東國・北國・畿內の大名集り、二三年の間築立てし伏見の御城、去る閏七月十二日の大地震に崩れしかば、別に又所を點じて、上の高みへ引上げつゝ、一日も休息させず、夜晝の堺もなく急がる。天

災と謂ひ人の勞苦と謂ひ、其上に又朝鮮に入る御觸を聞き、こは淺ましき次第哉と、心有るも心無きも、軍旅の勞れ土木の役、竝に起る事を愁歎し、仁政に非らずと呟く人有りとも、顯に諫むる臣は無かりける。此四五年、吾人朝鮮に居住して、彼國の武勇を恐るゝに足らずと侮り思ふは、軍に負くべしとは思はねども、歸陣の後一年も休息せざるに、又陣觸あれば、船よ筏よ馬物具と、俄に拵急ぎ、人民の騷動斜ならず。最前は肥前名護屋迄御動坐有れども、今度は皆案内知りたれば、それ迄もなしとて、名護屋は在番計りにて、朝鮮へ兵粮運送軍勢渡海の爲め迄なれば、大將をば置かれず、何も來年二月、總軍又朝鮮に攻入るべしと仰せ出されければ、又大亂となりにけり。

大明朝鮮四使歸帆

大明・朝鮮の四使は、已に肥前國名護屋に到り、渡海の順風を待ちて、數日逗留する處に、長政豐前に下り、清正は肥後に歸り、人數を催集め、渡海の支度急なりければ、

楊方亭も朝鮮の兩使も色を失ひ、周章騒ぐ。獨り沈惟敬は、少しも騒がぬ體に持成し、我れ命だに有らば、和議又調ふべしと、强ちに驚く氣色もなし。斯かる所へ、倭の將寺澤志摩守正成、關白の書を賚して來り、大明・朝鮮使者共に謝恩の表ならんと思ひ、披きて之を見れば、朝鮮を責むる一檄にて、内に朝鮮の三罪を列擧しつ。其語甚だ倨れり。

秀吉の書翰

日本關白豐臣秀吉朱印下責朝鮮國王李昖

前年朝鮮使來、雖委悉下情、卒不達大明(皇朝イ)無禮多々其罪一。既依沈都指揮、寛宥二王子竝夫妻以下。不先致禮謝、隨明使(天朝イ)過海之役、歷數日而王子不親來、唯馳黃朴之賤价其罪二。大明・日本之和交依朝鮮之反覆(間イ)經歷數年其罪三。右件々之大罪、雖天地豈能可蔽之乎。明春擧百萬大兵、屠殲朝鮮、禽王李昖、懸首於日本獄門、且國城亦一炬成焦土者、猶指諸掌。爾莫悔。

とぞ書かれける。朝鮮使驚きつゝ先立ち、此檄を王京へ達しければ、朝鮮王敢て隱れ給はず、一通を寫し、大明へ進呈し、急に加勢援兵を下さるべき由、告げたりける。

沈惟敬復命を詐る

朝鮮八箇道の貴賤上下、只途方を失ひ騒動す。十二月十七日、大明冊使、釜山浦に著きて、急ぎ帝都へ歸り、奏聞すべき由をいひて、同廿五日、釜山を出で洑川に至る。此時に朝鮮京畿道の都體察使李元翼は、先立ちて歸へりける朝鮮の兩使黄愼・朴弘張に逢ひて、具に太閤の怒心を知りて、軍勢を集め、防ぎ戰はんと用意しけるが、今日、大明冊使の歸るに海邦寺にて行逢ひ、又日本の情を問ふ。楊方亨一々に申聞えければ、元翼さらば日本勢の多く著かぬ先に、先づ釜山浦の城を急ぎ攻め落すべしとぞ申しける。沈敬惟制して曰く、驢は眞に正に乘り動く可きも、又宜しく愼む。初手の軍を仕損じなば、後悔すとも叶ふべからず。其上日本人は武勇甚だ勝れたり。只策萬全なるを兵家の良將と稱すれば、幾度も謀略にて攻討つべしと申しければ、元翼此語に冷かされて、兵を出す事を停めたり。斯くて年も暮れ、明くれば萬暦廿五年丁酉二月十六日に、冊使關に入り、何れも日本にて多くの緡を受けて歸るとぞ見えし。遊擊沈惟敬は、人の疑ひ笑はん事を恐れ、和議の破れたる事を蔽隱し、日本國王關白秀吉、十分に恭順し、冕冠を戴き、頭を叩き恩を謝せんと、樣々作

言を奏聞す。日本より大明へ贈物なくば、猶は人疑ひあるべしと思案を廻らし、攜來りし金を以て小西行長に誂へ、猩々毡四條天鵝鵝及び大小の倭の金器皿三十餘擡を買取りて、其櫃の上に日本國王豐臣秀吉餽遣す所の什物なりと大書して、荷はせ、兵部が所へ行きて、之にも贈物を遣し、之より帝都北京に到り、太閤貢獻の物なりと披露し、朝廷に奉る。明人皆笑ひて、猩々緋・天鵞絨は南蠻より出づる土產なり。然るを日本の方物なりとす。尤も笑ふべき所なりと難じける。倭將正成が惟敬に與へる所の泥金の屛風迄、此內へ入れて奉る。朝廷之を罪せずして、勅して內府に藏させられ、司馬石星も惟敬が大功を立つといひて褒美せり。去り乍ら、猶も心許なくして、眞實に和議調ひたるかとて、楊方亭に問ふ。方亭釜山にて約束し、惟敬が節制を受くれば、一味朦朧として、敢て明にいはず。されども太閤の返書無かりければ、人の疑ひ彌〻增すなり。惟敬之を迷惑して、再び釜山に行きて、人に誂へて返書を書かせて、只今到來の由にて奉れども、運の盡きにや、年月を書落しければ、徐黃門之を見て、惟敬が贋なりと吟味しければ、群臣一同に彼が奸謀を訴る。惟敬

も爲方なく、慙懼れてぞ居たりける。

朝鮮征伐記第十終

朝鮮征伐記第十一

加藤清正・小西行長、朝鮮に入る幷太閤より仰付けられし軍法條々

大明・朝鮮の和議、一時に破れ、重ねて朝鮮征伐仰出されしかば、貴賤上下、夜を日に續いで支度せり。先手は先例の通り、加藤主計頭清正・小西攝津守行長に仰付けらる。兩人を御前に召し、清正には國光の御腰物を下され、此太刀を帶び朝鮮を攻平ぐべし。猶歸朝の上に、大身に仰付けらるべしと、直に上意なり。小西行長には、五年以來表裏を申し、何方此方と仕る事、是非に及ばず。殊に王子を返送りし事、千悔盡し難く、御成敗仰付けらるべく候へども、先づ差延ばされ候なり。今度朝鮮引口の樣子に依るべしと、したゝかに仰付けられしかば、行長赤面して、罷出でけ

り。小西熟〻と思ふに、今度、朝鮮表の首尾、一期の大事たるべし。進發若し延引せば、又御機嫌惡しかるべしと恐怖して、中國大名へは、二月に渡海仕るべしと觸れられけれども、將軍の御憤を恐れ、正月上旬に出船せしむべしとて、九月下旬より肥後に下り、其用意頻なり。加藤清正は之を聞き、誠に劉琨が、祖生が先鞭を著けし事を恐れ、戈を枕にして晨を待つ處なり。行長に先を駈けられじと、日夜の支度急なりける。さる程に、慶長元年も閙しきに早や立ち、同二年になりにける。加藤清正は部將豐臣茂守等を領し、先づ武者船二百餘艘にて、正月十三日、順風を得て渡海し、十四日に朝鮮に到り、竹島の古城に入る。去年より朝鮮に殘し置きし勢を一所に合せて、機張に陣を取り、頓て勢を出し、梁山を攻む。梁山の太守孔平春を追出し、加藤美作守を籠置き、土民は一人も打散らさず安堵させ、別に役を懸けず。同十五日に小西行長が兵船、釜山浦の外洋より、進んで豆毛津の浦に著く事、毎日引きも切らず。岸上に四色の旗を立て、觸れ聞かせけるは、朝鮮の人民疑義を抱く事なく、皆舊の在所に歸り安堵せよと、書載せたり。同廿二日に淸正が先手の

勢、船にて西生浦に渡り、城取を見廻し、依つて牌文一紙を示して云く、

日本國加藤主計頭豐臣清正、受太閤殿下命令、再航海於此道、使遣使者于朝鮮之京城回報之間、慶尙左道之民、更勿疑此書、莫恐怖而退散。先茲遣吾臣美濃部金太夫、以令告報也。

慶長二年丁酉正月日　平清正書牌

と書きて、所々の百姓に觸れ聞かす。是より加藤・小西、先手の勢三四萬渡海して、絕えず兵糧を運び、城々へ入れけり。二月朔日、小西行長、釜山の古城に行きて、材木を集めて內に殿主を上げ、外に三重の堀を掘り、塀柵丈夫に付けて、金吾中納言殿を入れ置き、之を本城とし、普請を始め據久の計を成せり。朝鮮の土民、初め和議の調ひたりと思ひ、山野に遁れ隱るゝ者、漸く還住せしに、今又日本の大軍到るを聞きて、晝夜驚惶して、荷物を運び、身の隱家を求め、騷ぎ立つ。釜山より王城迄の道筋は、數年の大亂に日本人通ひければ、亂妨せられて人居住せず。全羅道の地方は、兵火を脫れたれども、城々皆明けて、數年修理を加へざれば、之も去年夏より當

春迄、堺一所も付けず。然る所に、日本の大軍俄に至れば、朝鮮の貴賤老若、先年の敗軍に手懲りして、未だ攻め来らざる先に、親は子を負ひ、夫は妻の手を引き、資財・雑具を持荷つて都・邊戸を放取り、只蛛の子を散らすが如く、便に随ひ、南より北、東より西に徨(さまよ)ふ有様、目も當てられぬ次第なり。國王も前に懲り給へば、先づ宮中の后妃・皇子を連れて、海州へ落ちんと犇めき給ふ。之に依り、軍民各〻一家の氏族を連れ、遠き境に移らんとす。大明より在番せし兵、之を止むれども聞かず、國王の第一の寵臣柳承寵さへ、山中城々の兵糧・草糠を王城へ運び取らんといひ、託(かこつ)けて尙州へ逃去りけり。將官の權標等、獨なりとも軍をしつべき兵なるが、各〻戰はずして東方の境へ遁走る。此由急ぎて大明へ告ぐる事、毎日引きも切らず。餘りに恐怖して、日本の兵百萬騎、分つて十三備とし、大明へ向はんとす。關白も名護屋に立ちて仕し、自身軍の成敗を主りしかば、驛馬日々に馳せ、郵吏足繭(あかぎ)ると風聞しければ、大明・朝鮮の國の早馬、櫛の齒を引く如し。大明の徐給事も亦、朝鮮にありしが、註進して云く、日本の兵日々に增し、兵糧日々に積る。然れども、軍を出し城

秀吉軍法の條々

を取り、人を殺す事をせず。思ふに、潛に關白の親行を待つに似たりと告げ來る。獨り山海關の主事張時顯のみ申しけるは、關白秀吉を料るは此時なり。實に手を住めて粗略に爲すべからず。彼の六十六島の觀望、全く爰に懸れり。最前志を得ず、今國を傾け來る。時をば失ふべからざるなりといひて、罪を石司馬に歸す。兎や角といふ内に、三月になりにけり。日本より軍法條々仰せ下さる。其詞に云、

條々

一、先手朝ノ儀、加藤主計頭・小西攝津守鬮取ノ上ヲ以、可レ爲二一日代一。但非番ハ二之目ニ可二相備一事。

一、三番、黑田甲斐守・毛利壹岐守・島津又七郎・高橋九郎・秋月三郎・伊東民部大輔・相良宮內大輔、可二相備一事。

一、四番、鍋島加賀守・同信濃守。

一、五番、島津薩摩侍從義弘。

一、六番、長曾我部土佐侍從・藤堂佐渡守・池田伊豫守・加藤左馬助・來島名代中川修理

大夫・菅平右衛門。

一、七番、蜂須賀阿波守・生駒讃岐守・脇坂中務大輔。

一、八番、安藝宰相・備前中納言、此兩人同勢可レ爲二代々一事。

一、釜山浦城、筑前中納言御目附、太田飛驒守在番仕、先手之註進無二油斷一可レ仕事。

一、安骨浦之城、立花柳川侍從。

一、加德之城、高橋主膳・筑紫上野助在番。

一、竹島之城、羽柴久留米侍從在番。

一、西生浦之城、淺野左京大夫在番。

一、先手之衆御目附毛利豊前守・竹中源助・垣見和泉守・毛利民部大輔・早川主馬・熊谷内藏丞、此六人被二仰付一候條、任二誓紙之旨一、總樣働等之儀、日記相付候テ、善惡無二見隱聞隱一、具ニ可レ令二註進一事。

一、諸事高麗ニテ之樣體、七人ヨリ御註進申上儀、正意ニ可レ被レ爲旨、被二仰聞一候間、存二其上一ニ縱（旨カ）緣者・親類雖二知音一、依怙贔屓偏頗一有樣ニ可レ令二註進一事。

一、先手働等之儀、各〻以二相談之上一、多分ニ付テ其ニ可レ隨。拔懸ニ一人二人トシテ、中廻候ハヾ可レ爲二曲事一事。

一、赤國不レ殘一篇ニ成破申付、青國其外之儀ハ成程可レ被二相働一事。

一、舟手之働入候時ハ、藤堂佐渡守・加藤左馬之助・脇坂中務少輔兩三人申次第、四國衆菅平右衞門幷諸手警固船共可レ被二相働一事。

一、右働相濟上ヲ以、仕置之城々所納之儀、各〻見及、多分ニ付テ城主ヲ定メ、則普請等之儀、爲二歸朝之衆一、令二割符一丈夫ニ可二申付一事。

一、右七人之者共、七枚起請ヲ被レ爲レ書、諸事有樣之體可レ申旨、被二仰付一候條、忠功之者ニハ、可レ被レ加二御褒美一、自然背二御法度一族有レ之バ、右七人申次第、不レ寄二誰々一、八幡大菩薩可レ被レ加二御成敗一條、得二其意一不レ可レ有二油斷一事。

一、自然大明國之者共、朝鮮之京ヨリ、五日路モ六日路モ、大軍ニテ取出於二陣取一ハ、令二談合一、無二用捨一可レ被二註進一、御馬廻迄ニテ、一騎駈ニ被レ成二御渡海一、即時ニ被二討果一、大明迄可レ被二仰付一候事。案内ニ候條、猶油斷者可レ爲二越度一事。

以上

慶長二年二月廿一日　御朱印

とぞ載せられける。日本の軍勢は壹岐・對馬に充滿ち、順風次第に、相續いて渡海せり。海上の兵船引きも切らず、日々に著岸せしかば、釜山浦・安骨浦・加德西生浦・竹島等の處は、軍勢ならずといふ事なし。平安・黃海・忠淸の三道、全羅の道筋へ、人民も守護の軍兵も足を蹐て、今や日本勢寄せ來ると、荷物を除け、部・遣戸を放取り、只上を下へぞ返しける。淺ましや去る壬辰の年三月より、去年中の三日迄出入、五年の間の大亂にて、鐵原野に充滿ち、民屋火災に燒盡されしに、偶、和議相調ひ、去年夏初より、在々の舊宅へ還住し、妻子以下も少しく心を安んぜしに、又、此亂出來しかば、こはそも如何なる因果ぞやと、歎き悲しまぬ者はなし。

日本諸軍勢朝鮮渡海

日本勢朝鮮に入る

日本勢、淸正・行長を先として、三番備黑田甲斐守長政を始めて、總大將金吾中納言

大明朝鮮天運を悦ぶ

秀秋に至る迄、段々に一勢々々相續き、兵船數十艘にて、順風に帆を揚げ、引きも切らず渡海し、合せて十三萬騎、五路を分つて朝鮮に入る。東萊・機張・西生浦・豆毛浦・安骨・竹島・梁山・蔚山・加德等は、皆日本人の居城となつて、熊川・金海・昌原・咸安・晉州・固城・泗川・昆陽も日本人自由に横行すれば、大明・朝鮮の者は、此間を通る事叶はず、土民も亦安堵せずありしを、日本人相觸れ、盡く還住させ、耕作・商賣を快くせり。いつ迄も朝鮮に在住せんと思ふにや、地を取る事を速にして、財寶を掠め取らず、肝要の要害に寄る事を專一にして、人民を殺す事を欲せず、其志少にあらず、目中既に朝鮮を蔑如す。若し此時日本の勢、前の如く攻入らば、大明の加勢は未だ來らず、朝鮮の軍兵は退散する時なれば、全羅道・慶尙道には、拒（ふせぎ）の兵一人もなし。朝鮮王城に押入らんに、何の手間も入るまじ。さあらば少々殘りたる大明の兵も引退くべし。然れば朝鮮の王城を居城とし、大明へ働かんに、遼陽震動して、登萊・浙直も危急なるべきに、日本人も太閤は渡海し給はず、人數は不足なり。吾居城を取固めたる計りにて、敵を謀る手段のなきを、大明は幸に天運強きに依りて、日本人

朝鮮兵亂に疲弊す

寄せ來らずと悦び、朝鮮人も天未だ吾國を亡ぼさずと是を賴む。日本人は軍勢渡海すれども、此頃海上痛く荒れつゝ、兵糧船も來らず、先年朝鮮初入の時は、久しく兵亂に遭はざるにより、國々富貴にして、行先に兵糧澤山なりしが、今は近年の兵亂に國疲れて、城を取り館を破ると雖も、糧米少しもなく、土民は殘らず山壑に逃隱れぬ。在々村々は兵火に燒かれ、土地空虛にして、野には青草なく、家には積む薪なし。何方も赤土のみにて、巷に白骨充滿ちたり。日本勢も腰兵糧のみにて働けば、長陣を張り軍をなすべき樣なし。千里一望に人烟絕えぬれば、田地あつても耕す人なく、食物の類は一粒もなく、米穀魚鳥によらず、商賣する人さへなし。偶〻あつても凡人の口に入るべき價ならねば、三月より渡海して、五六月に至る迄、鷙鳥の形を隱す如くに、居城の外十里・二十里を領する計りにて出でやらず。朝鮮斥候の兵出でて、薪取る者を殺し、往來の雜者を殺すと雖も、日本人は構はずして、朝鮮王の子弟を渡海して、禮を調へざる事を咎むといひ、又は重ねて大軍の渡海を待つとの擬勢なり。此時、陳雲鳴は、日本人の內通を聞きて、遊將に向つて潛に云く、清正

兵糧一年分の支度あらば、兵を分つて進むべしと待つ。行長は兵糧船の續き來(こ)ぬを見て、竹島の大將と議して、七八月五穀熟する時、刈田をして、働く可しと約束をせりといふ事を聞きて、大明人も心を休め、要害を固め勢を乞ひ、日本人の張防を備へ、逃れ散る軍勢共立歸つて、己が城々を固めけり。

大明石司馬將軍囚獄に入れらる

大明石司馬の處刑を議す

大明の朝廷、公卿僉議あつて、今度、日本人再び大軍を動き來る事は、石司馬が雅意に任せ、封號の事を調ふ次第分明ならざるに依つて、朝儀を汚すのみならず、又大明・朝鮮の軍兵を働く事、曲事の至なれば、司馬石星を重典に置かるべしと、日々と申しけり。司馬之を聞きて、沈惟敬を責めければ、惟敬が辭亂れて、樣々に陳じ、日本人の來る事は、朝鮮の無禮なるを責むる計りなり。大明の御下知を背くにあらずと答へけり。

徐成楚の意見

徐成楚、之を折(くぢ)いて曰く、師を起す事十數萬、海に浮ぶ事數千里、獨の王子・陪臣の來らざる、豈失禮の故のみならんや。謂はれざる長僉議して、手延に

せんよりは、速に其不意に乘じ、間者を入れて虜を與ひ、忍を用ひ、兵糧を燒かんに如かずと申しけり。孫總督と巡撫の李化龍が徒は、皆老成の舊臣にて、日本へ渡りたる册使の朝鮮に歸る時、其心を計つて司馬に勸めて、豫め堤防をなさしむ。司馬猶も心に懸けず、惟敬が遊說を聞きて、再び和議を調へんと、寺澤志摩守をして、親しく關白に報せしめ、朝鮮の陪臣を、日本へ一禮の爲め遣はし謝せんとす。

石星の上疏

されども朝鮮の帝王、能く倭情を知り、背んじ給はざる故に、二月十八日に石星いかんともする事なくして、疏を以て請うて云く、司馬の官職を削り去つて、自贊書と同じく司官一二人を召連れ、便宜を伺つて朝鮮に行き、兩國をして會盟し、兵を退け無事を調ふべし。若し終に成る事なくば、大兵を動かして自ら進まん。今臣星を治るに、付託驗あらざるの罪を以て、身を獄中に極めんよりは、命を戰場に隕さんに孰歟と、頻に訴へ奏聞しける。趙相公は此儀尤なりと同じ、石星を往かしめんとす。

石星の罪科定まる

兵部王瓊が哈密を經略し、楊鎬が薊遼宜大を經略する事を引きて、石星が罪赦すべからずと決定す。萬事を止めて、先づ兵四五萬を出し、朝鮮を救はずばなるまじ

石星獄死

とて催せども、連年兵を用ひて、萬人疲れ苦しめば、召に應ずる者なし。朝鮮よりは日々に使を越し、先づ南兵三千か四千給はるべし。要害に差配して防をせんとす。時に劉綎が兵も泗州より歸り、天津・登萊の戍の兵も罷められて歸る。其上平壤にて手柄を顯せし兵共、右に李如松と約束し、一番鎗又は一番登する者には、銀萬兩を給はんといへり。平壤にて南兵先登せしに、其以後石門寨に群集して、右約束の通り、褒美の賞を乞ふ。總兵の王保と南兵と喧嘩を仕出し、千三百人固まり、軍門に押寄せて騷動す。王保之を謀り、盡く之を殺す。之に依りて人の心恨み怒り、催促に隨はず。朝廷別に謀を出すべき術なし。皆曰く、石星を誅し、國典を顯はさんと、群議一同し、其歲の春、司馬石星を牢へ入れ、獄に下しけり。哀なりける事共なり。石司馬終に其翌年戊戌の夏、獄中にて死にけり。彼人久しく大臣の位に居て、和議を主り、一朝一夕も國の爲めにせずといふ事なし。されども、偏に己が目金を第一とし、沈惟敬といふ賤奴が言を用ひ、三國和議の大儀を彼者に任せ、又、山東の楊文、船手より兵船を出し、朝鮮の境に於て、忠功を彰せしかば、朝鮮王より、之を

大明へ奏聞し給へども、石司馬之を功とせずして、却て楊文が任を罷め、知行を取上ぐる。又、參將の高可學標下の有官陳定等、日本人六十餘人討取り、高名を持來れども、石星褒美せず、頓て高下學を罪科に行ひけり。斯樣の偏見最屓強き事のみ積りしかば、諸人恨をなして、終に牢下になり、獄死せりとぞ聞えし。

大明國禁中に於て軍評定

司馬石星は牢舍に仰付けられぬ。朝廷の大臣並に總督經理參內して、朝鮮へ加勢を遣す軍の談合あり。又日本人、六年以來朝鮮に在陣すれば、案內を知りて、直に登萊か旅順かに來るべきか、北直隸天津の衞より山海關迄、陸路は百里なれども、海手よりは、旅順と相對して尺三十里なり。順風には頃刻の間に到るべし。登萊は海口に近くして、中國の襟帶たり。南は淮安に到り、三十里の間の船路なり。又、山東・江北の藩籬なり。此兩所に巡撫を置くべしと謀つて、周干德をして船師を領して、旅順に留まり、李承陽に戍卒を增して、登萊を守らしむ。其上に孫經略が議誑

明の軍計

にて、水兵三千人を統領して、旅順の口に止りて、天津を保守し、浙兵の遊撃三千人を以て、鴨綠江に止まり、海防をなさしむ。又張汝蘊が議謹として、旅順より天津に到る迄、大軍の著岸すべき處二箇所あり。一には大沽といひ、二には起口といふ。二所相去る事百五十餘里、此兩所の兵を以て守り、若し敵襲ひ來らば、各鎭の兵を調へて、力を合せ守るべしと、先づ日本勢の大明へ入らぬ手段を本にせり。内閣張洪陽が云く、開城・平壤の二所に於て、開府を置き、兵を練り、田を屯し、西の方鴨綠・旅順の軍勢に接し、互に援け合ふべし。東の方は、王城、鳥嶺の防の爲めに、援兵となつて奮發し、軍威を張り、勢便よくば、輕兵を選んで利に赴き、勝負を決すべし。便よからざる時は、虎路の敵の邪心を挫くべし。王城より釜山迄、一千二百六十里餘、王城より鴨綠江迄、一千二百里計りなり。然れば開城府は、朝鮮の眞中なり。是に屯して、進む事あつて退く心なきを專とせん。日本人も軍を止めて、軍の兵糧を儲け、久しく屯する手段を成さば、吾大明も亦、兵糧を運び、久住の策を成し、朝鮮人に敎ふるに大明の軍法を以てし、其怠氣を變じ、勇み進む樣に叱り勵まし、農を

力め、商賈を通じ、工を專にし、樹畜の源を廣め、山澤の利を開き、錢を鑄、粟を輸して軍用を定め、開城府・平壤を治め定めて、是より次第に慶尙・忠淸・黃海等の三道を取復し、人馬を選み、先の所を本城として懸引すべし。速に勝つ事を求めず、務めて久留の計をなし、烏嶺より南は、敵の居所なれば、猥に深入して威を損すべからず。烏嶺より北は、味方の地なれば、堅く守つて、尺寸も失はざる樣に爲すべし。凡そ事必ず先づ久計を成して、偶々倉卒に逢ふ時は、避くるに手段あり。苟も先づ暫く計を成して、思ふ如くにあらざれば、終を保つこと成り難し。一旦利を失ふといふとも、氣を屈すべからずと、進退の變化を、委細に朝鮮の諸大將にぞ敎へける。其年三月に、經略の孫鑛も又任を罷められ、天子の詔勅にて、侍郎邢玠に命じて、經略の官となし、楊鎬を經理とし、巡撫使麻貴竝に劉綎を南北大師とし、遼東・浙江・四川・廣東の軍兵を催して、朝鮮へ加勢とし遣す。邢玠は山東青州人なり。謹重にして識略あり。萬曆廿五年四月廿二日に、蜜雲に到りて孫鑛に替り、命を受け、經略になる時、麻貴謀を上りて曰く、宜大の兵の到るを待つて、日本人の未だ備へざる

邢玠の謀計

隙に乘じて、釜山浦城を取るべし。釜山浦城容易に取りなば、行長は擒とならん。然らば清正は、必ず走らん。一大事の儀、此一擧に定まるべしと、頻に諫めけるに、邢玠、思慮深き人なれば、兵道は先づ計を定めて、而して後に戰ふべし。今計畫未だ定まらずして、遽てゝ險阻の地へ行かば、是自ら敗軍を取る者なり。一度敗北せば、敵機に乘じて長驅すべし。然れば吾軍勢、氣勞れて、再び勢を奮ひ難し。吾分別するに、先づ楊元・吳惟忠に組を遣はし、兩將を全羅道の南原と、慶尙道の大丘・慶州とに屯せしめ、麻貴は王城に居て、兩方の懸引をすべし。但し楊元、此頃の註進に、南原城郭崩れ破損し、殊に櫓もなし。又、金銀も兵糧も半月の蓄もなし。慶尙一道は、又、半分日本人に取られ、吳惟忠、孤軍にて慶州に入り難し、今、只楊元を遣はして、兵糧を運び入れさせ、朝鮮王に相談して、塀・矢倉の普請し、南原を丈夫に持つ樣にすべし。吳惟忠は、暫く忠州に行きて、日本人の後を取切り、後門を挫き、七月に、大明の大軍の入らんを待つて、手段を運らして、勝つべしと下知して、邢玠は未だ山海關を出でず。麻貴は朝鮮の都に赴きて、楊元・吳惟忠と面談し、又朝鮮帝王に

朝鮮王疏を以て明國に哀訴す

諮りて、國中の諸臣を集め、兵を練り、堅く地方を守つて、要害の地を取り固め給へと諫む。朝鮮帝王も麻貴が申すに隨つて、明帝の勅命を請けつゝ、自ら新總督の官になつて、將官等を手分けして、慶尙道左兵使の成允門・防禦使の權應珠等を慶州へ遣して、鳥嶺に陣取りたる加藤淸正・黑田長政・淺野幸長等を防がしむ。右兵使の金應瑞をば、宜寧に陣取らせて、釜山城にある小早川中納言秀秋を防がしむ。統制使の元均をば、船手なれば兵船を集めつゝ、竹島・加德に控へたる久留米秀包・高橋主膳・筑紫上野介に指向く。大明勢も朝鮮人も、各〻勵み勤めて、大明より大軍の來るを待つ。此時大明にて、又評議して云く、朝鮮、數年亡國となつて、國中に防ぎ守る軍勢なし。日本人若し襲ひ入れば、朝鮮亡ぶべし。朝鮮亡べば、大明も亦、兵を出すに費えて必ず亡ぶべし。如かず大明の司道官となし、八道を分理し、各〻城々を守り、堅く山城に依つて兵を進め、敵を討たんと云ふ。此事朝鮮國王に達しければ、君臣共に大明へ、先づ吾國を取られん事を危ぶみつゝ、疏を以て大明へ報じて云く、朝鮮昔より三つの都あり。漢城・開城・平壤之なり。三都共に、數年敵に取られ、數

沈惟敬の苦惱

千里の間盡く煨燼となる、今朝鮮王、漢城府に居住すれども、荊棘未だ除かず、陪臣皆、墻壁に依つて餘命を次ぎ、升斗を食とす。民百姓山林より還住する者、百に二三ならず。手負疵を蒙る者、這々の體にてよろほひ出づれば、働くべき樣なし。若し大明の官人來つて、八道を分理せられば、其糧米を出すべき樣もなしと、歎き訴ふる故に、大明も尤とて、此儀は止められけり。四月より六月迄、日本人も面々に城普請を仕て働かず、大明軍兵は未だ來らず。朝鮮人は、此間に人馬を抱ふ用意するとて、各〻險安の地へ引籠りて、互に使者の往來も無し。只沈惟敬計りは、日本の城々へ往來す。是に依て、宜寧の一筋は日本人と相交はり、混亂して一家の味方の如し。大明の諸大臣よりは、日々に沈惟敬が方へ使を立て、何とて日本國王の封號を乞ひながら、是の如く兵革を動かすや、早々兵を撤して、日本へ歸る樣にせよと責め懲らす。關白秀吉よりは、前の約束の如く、速に朝鮮の三道を割きて與へよと、頻に使立てければ、朝鮮、日本に攻められ、兩方の意趣天地間隔なれば、如何せんと迷惑す。始め惟敬、只封號を乞うて、後の利害を顧みず、當座やかないに事を濟よ

せば、今、日本より三道を乞ふ。全羅道は土地肥饒にして、朝鮮の府藏なり。慶尙道は門戶なり。忠淸道其間にあつて道筋なり。慶尙道なき時は、全羅なくなり、全羅なくならば、他の道ありといふとも、根本の策をする事成らず、海道筋に依つて誤をいへば、敵全羅に依つて陣せば、遠くしては西海一帶、近くしては沈馬・濟川は皆敵の窟穴となつて、日本の兵船海上に縱橫せば、至らぬ所もなく、順風には一日二日の內に鴨綠に到るべし。然らば開城府平壤を持固むといふとも、何の益かあらん。獨り朝鮮のみに非ず、日本人海路より入つて、大明を犯す事も、全羅・慶尙より動く事、手向よければ、日本より朝鮮に入るには、南風なり。朝鮮より大明の遼東へ進むには、西風に追手よろし。日本人の海路より入つて、大明を攻めざるは、朝鮮の慶尙・全羅二道の、日本人へ取らざるによれり。此二道倭に取られなば、陸地より遼東を犯さず、船にて直に山海關に入り、之より日本人手分して、四方へ廻り、大明の四鎭を亂さば、東陽・沼海は、容易取らるべし。必ず關白に三道を分與すべからずと、僉議を極め、沈惟敬南方の間を往來して、謀略をなし、己が罪を遁れん爲に、樣々に

辭を飾り言ひ延ばす。始めは關白、日本の王になりたしと申候間、封號を遣され候へとて、大明をたらし、日本へは大明より降參し、關白を吾大明皇帝の壻にして、和談を乞ふとて僞をいひ、今は慶尙・全羅・忠淸三道を以て、日本へ渡すべからずといひて、日本勢の腹を立て、彌〻軍兵を進むる樣に手段をなす。兎角大明の爲め惡しく、日本の善き樣にして謀りける。五月に遊擊の茅國器、人數を連れ、初て王城に來り、惟敬に逢つて、日本勢の多少を問ふ。惟敬猥に答へて云く、多を要すれば就いて多し、只軍兵を退けて、鴨綠江を守る事、上策たるべしとぞ威しける。されども茅國器良將なれば、少しも誘はれず、只あざ笑ひてぞ居たりける。沈惟敬は、日本と大明と兩方より、日々催促の使立ちければ、三道を日本へ渡す事もならず、日本人を引取らする事もならず、只罔然として、呆れ果てゝぞ居たりける。

沈惟敬謀輸を加藤淸正に遣す

朝鮮在陣の諸將淸正・行長・義弘・長政等集まり、柳川豐前守調信を日本へ遣し、大明

加勢數萬騎、已に朝鮮に入る由承り候。何時此方より、相働き申すべく候やと申上ぐる。柳川が日本に歸るを朝鮮人聞きて、沈惟敬に問ふ。惟敬僞つて云く、柳川調信が日本へ歸るは、軍勢を撤せん爲めに遣すといひて、朝鮮人・大明人を騙す。さる程に、柳川は六月七日に伏見城に著き、此段申上げければ、將軍聞召され、仰下されけるは、朝鮮の奴原、吾所望に隨はざれば、全羅・忠淸二道の無事にある故なり。諸軍勢打汰へ、八月朔日打立ち、直に全羅へ打入つて、刈田働して兵糧を調へ、道筋の城々を攻落し、進んで濟州を攻取るべし。若し味方草臥る時は、人數を慶尙へ引還し、固城より打廻り、西生浦へ打入らば、所々の城々に人數を澤山に入置き、或は十日餘、或は五六日程、馬の足を休め、不時に打つて出で、機に臨み變に應じ、城々を攻取り、上下心を一致にして、力を盡して戰ひ、手負死人ありとも顧みず、力を合せて戰功を立つべし。若し吾が下知に隨はずば、日本にある汝等が妻子を御成敗あるべしと、事細かに仰遣されけり。義弘・清正・長政・行長以下、諸大將此御下知に驚いて、又、柳川豐前守を日本へ遣し、御下知の旨一々承り奉り畢ぬ。去り乍ら、大明

秀吉淸正行長等を激勵す

の兵楊元・陳愚衷等大勢にて、近日全羅道に到り候故、味方矢長に存候とも、合戰仕り難く、如何候はんと申上ぐる。將軍大に怒り給ひ、文祿二年六月に大明の提督李如松、二十萬騎にて開城府にありし時、淸正が手勢計りにて、安南府を攻落し、又一擧に晉州城を攻落したりき。今、大明の猛勢到るといふとも、何程の事かあるべき。備前中納言は、宜寧・晉州より全羅道に向ひ、安藝宰相は慶州より、蜜陽・大丘を經て、全羅道へ押し、兩方より立夾んで、大明勢を只一戰に踏潰すべし。何とて義弘・淸正・長政・行長は、いつの間に臆病者に成替り、大明人を恐れつゝ、弱き事を申上ぐるぞ。早々歸つて、此旨を申し聞かすべしとなり。柳川調信、朝鮮に渡海し、此旨を申さんとて、六月十四日に早船に乘り著岸し、右の通り申渡しゝかば、皆々相議して軍評定す。來る七月に日本より、大軍一時に渡海すべし。備前中納言秀家、其外釜山・竹島等の兵は、宜寧・晉州より、全羅に向ひ働くべし。毛利安藝宰相秀元並西生浦等の所の兵、慶州より蜜陽・大丘を經つて、全羅に働くべしとて、軍支度專ら最中なり。皆々兵を出さんとす。沈惟敬、此事を聞きて、如何せんと案じ煩ふ處に、大明の諸

惟敬密書を清正に送る

清正の返翰

大將より、此沙汰あるは如何なる仔細ぞと、日々に尋ぬる間、惟敬仔細を陳ぶるに及ばず、爲方なくして、朝鮮の禪僧松雲大師、惟敬を傭(やと)ひつゝ、密帖の書を認めて、清正に贈りける趣は、邢提督、大兵七十萬將レ至、勸二公等一速撤レ兵應レ歸二于日本一云々と。此時、清正は西生浦にありしが、松雲大師が書を見て、返翰して曰く、雲大師曰、大明兵將至焉、是吾所レ願也。朝鮮弱兵而無レ向二我之敵一也。對二大明之兵一快一戰則朝鮮國不レ足レ云、大明北京燒二却之一、不レ可レ同レ踵。幸又幸也。唯恨明兵來之遲矣。吾得二大師之書一而聚レ兵、待二明人之來一。餘不レ具とぞ書きたりける。惟敬を始め、大明・朝鮮の兵共、此清正が返事に驚いて、彌〻心を安んぜず、日々に大明へ加勢を乞ひ、城々を固めんとす。惟敬、爲方盡き果て、僧を使にして、清正が臣箋部金太夫に書を贈り、彼に付て和議を乞ひ、樣々誑さんとす。金太夫曾て同心せず。大明人寄せ來らば、一戰に打破り、直に大明へ攻入るべしとの返事、清正と同じ心なれば、惟敬も進退極つてぞ見えたりける。

遊擊沈惟敬召捕はる

邢玠沈惟敬を捕へんとす

日本人は、三道を割いて渡し與へよと求め、大明人は、日本の兵を撤して歸る樣にせよと、兩方より惟敬を責めければ、謀窮し術盡きて、返答にも及ばず。其上司馬石星召捕へられて、獄に入りしかば、惟敬身を怪しみつゝ、日本人に與みして、一命を續けんと思へども、其理由なし。邢總督、素より惟敬が、君を欺き國を辱しめ、石司馬を賣物にしたる事を心に啣みて、任を受け總督の官となりし日より、彼奴目を生取らんと志しけり。俄に取り騷げば、惟敬めが日本城へ逃入つて、大明の虛實を知らすべし。然らば大功なり難しと了簡し、先づ二つの檄文を作つて、惟敬が心を安んじ、又日本人と緩する計をなせり。之に依りて、沈惟敬嘗て邢總督を疑はず、其内に家財・雜具を南原へ運び入れ、透間あらば、釜山浦の金吾中納言秀秋の城へ走らんと工みけり。南原より釜山迄、七百里なれば、容易に入るべき樣なし。五月中に總督、未だ關（山海關なり大明の内）を出ず。楊元に遼兵三千人添へて南原へ遣し、吳惟忠・麻貴にも

惟敬日本へ亡命せんと謀る

牒じ合せ、密帖を遣し、元均に與へ、伏兵を設け、遁出を遮らんと謀を運らしゝかば、天を翔けんより外は、惟敬が逃るべき道なし。惟敬が平生養ひ置きし兵共二百餘人、何れも惟敬が命に替らんと、思ふ樣に心を得しかば、自然、夜の間に遁れ出づる事もあるべしと了簡し、邢玠諸將に下知して、其勢を引分けんと謀り、二百人の勢を遣し、惟敬が古參の二百人と置替りけり。惟敬彌、安からず思ひ、吾が賴み切つたる婁國安と張龍とを釜山へ遣し、訟へて云く、邢總督、吾を殺さんとす。日本の諸將慈愛の心あらば、其城へ走り込み、命を助からんと申遣す。行長元來知音なれば、返事して曰く、能き時分を見合せ、兵を遣し、迎へ取るべしと約束す。惟敬大に悅び、人を大明又は朝鮮の京へ遣し、虛堂・無準等の墨蹟、玉澗・馬龐・郭燕・東坡等が畫軸數十幅、硯屛・筆架・花瓶・文鎭・茶入・肩付等の珍奇の道具ども、高麗茶碗・虎豹の皮なんどを買調へ、竝に狐貂皮八百張を求め、日本の大將達への土產進物にせんとす。六月十八日に、柳川豐前守調信、其勢五百、兵船九艘に取乘り、惟敬を迎に出でつゝ、海邊に著き、使者を宜寧に遣し、惟敬を呼んで媾和せんとす。時に金應瑞が斥候の

兵共、是を見付け、柳川が使者を生捕り、書帖を奪ひ取り、惟敬が使者張龍、是を陸路より山道を忍び通り、宜寧に行き著きて、此旨をいふ。惟敬悦び騒いで、支度し出でて行く。金應瑞が斥候共の奪取りたる書帖を南原へ遣す。楊元之を聞きて、事急なり、手延にして取逃したりとて、鎧取つて肩に投懸け、馬を馳せて、南原より夜通しに馳付くる。宜寧のきは十里計りにて、惟敬が駄に狐貂を乘せて、先だつて行くに行逢ひたり。楊元天の與へと悦びつゝ、惟敬を眞中に取籠めつゝ、日本人の心如何と問ふ。惟敬答へて云く、和談は最早成るべからず。楊元責めて云く、和議成る事を得ずば、何ぞ分明に其旨を本鎭に申さずや。不審千萬なりと叱り讓むせ。惟敬承り、吾明日慶州へ罷越し、人を遣し淸正と媾和し、一箇月半にして歸らんといふ。辭は狂人の如くにて、顏色變りければ、楊元見るよりも、すはや逃れ去ると思ひつゝ、兼ねて本鎭に約束せし事なれば、官六人を著けて釣票を出し示し、是非に此方へ參らるべしと、兵共群り集まつて、惟敬が馬を圍んで、轡を執つて引戻し、楊元之を先立てつゝ、丹城の方へ歸り、此旨本鎭に申す間は、何方へも遣るまじと、警固を居ゑ

惟敬捕へらる

惟敬誅せらる

て置きけり。沈惟敬召捕られて、日本の向導、大明の禍根拔きたりと、大明・朝鮮共に悦ぶ事斜ならず。其年八月十四日に御史則、大明北京にて、惟敬が留主にある妻女陳澹如が家を按ずるに、日本の旗一面・長短の和刀・和劒共に三百三十六口、倭衣・倭器・細絹犀帶・日本の圖等共に三百六十三種あり。今年丁酉秋より、沈惟敬は北京の牢に入り、獄に下り、三年日萬曆廿七年九月廿四日に、終に誅せられけり。妻の陳澹如は、法の如く上り物にして、官家の奴となる。沈惟敬心を兩端に取つて、日本へも肌を合せ、大明へも忠功を成し、朝鮮の事をも荷擔し、僞を以て彼方此方と中言し、三國を戰はせつゝ、年月を送る。其內其間にて身を育てんと巧みしが、平壤の勝軍は、彼案內して、李如松に利害を告げ知らせたる故なり。又朝鮮二王を還す事も遊擊が功なり。其間に日本勢を延び／＼にさせ、大明の兵の到る樣にしたるも、彼が手柄なり。されども正使の李宗城を蔑如し、日本へ媚を求め、石司馬をたらし、大明の威を損じ、貴を減ずる事、其罪輕からず。之に依りて、邢總督等未だ闕を出でずして之を捕へ、大明心腹の患を除けり。然るに蕭應官が分別にて、惟敬を

赦さんと奏聞す。是れ惟敬が利口に惑はされて、斯くの如し。明帝逆鱗まし〳〵、蕭應官罪を得て、終に邊軍にあてられ、身外國に跡る。去れば利口の邪、家を覆す事を惡といひし聖人の敎、今こそ思ひ知られたり。

日本人南原城攻落附楊元敗北

沈惟敬は召捕へられつゝ、是れ楊元が所業なりと、痛く恨みけれ共、身擒なれば、此返報を爲すべき樣なし。其時俄に思ひ出し、婁國安を遣し、小西行長に申しけるは、南原城に楊元居ると雖も、さしての兵なし。兵を發して、襲ひ取らんにいと易かるべし。南原城といふは、東に雲峯鳥嶺あり、南に三良大江あり、路直に金海・竹島に通ず。之れ全羅道の門戸にて、肝要の地なり。之に日本より、馬武者を置くべし。閑山島は朝鮮の西海の水口に當る故に、朝鮮より元均、兵船を懸けて日本船の往來を阻てたり。是又南原の右障たり。邢總督が謀にて、楊元に遊兵三千を付けて、南原を固め、又、陳愚衷其勢二千を領して、全州に楯籠つて、南原若し變あらば、助合は

せんと控へたり。又、朝鮮の將金應瑞・李元翼が兵、雲峯の外にあり。權慄が兵閑山島の内にあり。閑山島は又元均が舟師を領して守をなし、各〻南原を取らんと、互に應援をなす。此所に手當を置き、南原を攻取らば、餘の城々は、必ず攻めずして落つべし。只萬方を措いて南原を取らば、彈指の間に功を立つべき事、必定なりと告げ知らせければ、小西此日來南原を攻落して、太閤の御感に預らんと思ふ最中なれば、大に悦び、南原城を攻取らんと支度し、潛に諸大將に牒じ合す。今年七月初より、大雨連日止まず、晝夜洒流すが如し。之に依つて、宜府・大同の大明勢支へられて、中旬に漸く平壤に到る。麻貴も七月二日、碧蹄館迄出でたれども、長旅の大雨に支へられて、續く兵皆殿馳になつて、追ひ〳〵に來る。此時、舟師に使あつて、歩武者は一歩も進み難し。之を見て、朝鮮水營の將官元均、閑山島にありしが、潛に謀つて兵を遣し、大明勢に約を定め、參會して、釜山城を忍び取らんと工む所に、宜寧を固めたる朝鮮の金應瑞、如何思ひけん、元均等が支度並に釜山へ寄る日限を、行長に告げ知らせたり。小西は南原を攻めんに、元均・權慄が舟師を以て、後より襲はん

行長閑山島を攻む

日本勢南原城を攻む

かと思案する折節なれば、聞くや等しく、得たり賢しと悦んで、七月廿一日の未明に、大村新八郎豐茂竝に舟手の勢を遣し、逆寄にしたりける。元均は、之をば夢にも知らずして、明日は釜山浦へ寄すべしと支度して、油斷したる所なれば、弓・鐵炮を取合せ、少々防ぎ戰ふ所を、行長眞先へ船を乘込み、弓・鐵炮にて打痿め、打鍮綱切にて、打懸け〳〵引寄せつゝ、吾先にと乘移り、舳艫に廻りて攻めければ、元均戰ひかね、船百艘計乘取られ、辛き命助かつて、眞一文字に押切つてぞ逃延びける。豐茂竝に船手の衆、追々に乘付け〳〵、逃ぐる船を五十餘艘乘取り、首數多討取り、其勢に閑山島の浦へ打上り、浦々の在家を放火して、卽ち島を乘取りける。閑山手に入れば、日本船手の勢ども、自由に往還し、舟師の便最もよし。此勢に押入れとて、船手日本勢は、二三日中光陽豆恥津に亂れ入つて、後陣の味方を待つ。此所南京城を去る事甚だ近く、之に機を得て、七月廿八日より、先手を繰出し、全羅・慶尙・忠淸の三道を押廻らんと支度し、先を競ひて進みけり。一方には小西行長を先手として、島津義弘・加藤左馬助・峰須賀阿波守・長曾我部土佐守・生駒讃岐守を加へて五萬餘騎、宇

喜多中納言秀家を大將とし、慶尙を右に見て、雲峯へ働き、南原を攻めんと押入りける。一手は加藤淸正を先手として、八月朔日より、段々に押出す。續いて黑田甲斐守長政・左京大夫義長・毛利壹岐守・高橋九郞・秋月三郞・相良宮內少輔茂守・鍋島父子・伊達民部等、此外中國・九國の勢を交へて五萬餘騎、慶州より押出し、密陽・大丘を經て、全義館へ打つて出で、王城より大明勢出でば、合戰を遂げんと、忠淸道殘らず打つて廻る。一手は小早川中納言秀秋が家老山口玄蕃允・伊藤雅樂頭・南部無右衞門等の六組、以上八千餘騎にて、密陽より玄風へ働き、胴筋より忠淸道に入らんと擬す。朝鮮の權慄・李元翼等數萬騎にて、雲峯近邊に充滿ちて陣取りたれども、中々遮止る事は扠置き、東の方へ雪頽崩れ、吾先にと落ちてけり。日本勢勝に乘つて、日々に人數重り、雲峯・烏嶺近邊は、敵ならずといふ所なし。楊元驚いて、八月十日に財物二箱を持たせ、平壤へ除きけり。南原平壤を去る事一千餘里なり。小西・宇喜多等、彌〻氣を得て、手分を定め、兼ねてより、全州より陳愚衷、後詰をする約束を沈惟敬が告げ知らせたれば、諸大將鬮取にして、全州の手當に置くべしと定め、島

南原城合戰

津義弘・加藤左馬助手當の鬮に取當り、兩勢一手になり、一萬五千餘、全州さして押出し、陳愚衷を押へられたれば、愚衷頭を出すべき樣なく、義弘・左馬助が武勇に恐れつゝ、城門を固めて、却て用心す。同十二日に、小西・宇喜多・蜂須賀・生駒・藤堂・長曾我部、其外の勢四萬餘騎、南原城へひた〳〵と押寄せ、山下を放火し、四方を稻麻竹葦の如く打圍みたり。城中には楊元竝に朝鮮全羅道の兵馬使李福男、都合六千餘騎楯籠りたれば、鐵炮・半弓を以て、射立て打立て、爰を先途と防戰ふ故、竹束持盾も怺へずして、寄手少しく引退きけれども、大軍なれば入替へ〳〵、手負死人を事ともせず、日本の名を惜しみつゝ、身命を捨て、乘越え〳〵攻め近付き、四方に手を合せ、鳥も翔らす樣に、十里廿里に打圍み、雲梯を作り、城へ懸梯を懸け、押入らんとす。又堀をば、埋草を以て晝夜埋め、堀の外に柵を三重ふりて、城より突て出でざる樣に拵へ、四日の間息をも續がず攻め寄せける。城中も汗水になつて、防ぐ事怠りなき間、秀家郎等明石掃部・花房助兵衞、蜂須賀内稻田・中村・森・進藤、藤堂が内藤堂新七・山岡兵部亟など申しけるは、當城の爲體が、攻むるに早速成り難く、熟と考へ候

に、先づ攻口を少しく甘られ、攻むる事を休み候はゞ、然るべく候。其仔細は、此中四日、晝夜怠なく攻め候間、内外同前の鬪とは申しながら、城中よりは、何方よりか攻入りなんと、安き心なし。寄手は是に違ひつゝ、荒手を入替へ〳〵、心任せに攻むるなれば、其勞るゝ所は格別たるべし。然るに今攻むる事を止め、虎口を遁れて遠く陣取らば、此間の草臥休めんとて、城中必ず油斷すべし。其變機を失はず、急に攻入候はゞ、勝利を得ん事、手の内なり。近而示之遠といふ、孫子が手段にて候と諫めければ、秀家を始め諸大將、等しく軍の事は、功者に任せ置かれ然るべし。兎も角も彼者共次第と感心し、十五日の夜半より、寄手鐵炮をも打たず、攻口を少しく明けゝる。案の如く、城中も此間の窮屈を休めんとて、大將も士卒も鎧を解き、甲を脱ぎ、弓鑓を枕とし、前後も知らず伏したりける。此四日が間、夜晝の軍に身心を勞したるを、俄にくつろぎ休みける程に、後先も辨まへず、高放鼾かき寢入りたる所へ、十六日の早天に、小西行長手勢計りにて、南門を打破り、城へ押入り、相圖の貝を吹立つれば、宇喜多・蜂須賀・長曾我部・生駒・藤堂之を聞き、すはや相圖の貝が立

つは、鬨の聲を合せよやとて、追手・搦手四萬餘騎、聲々に鬨を合せ、喚き叫ぶ其聲、天地を響かして、如何なる須彌の八萬由旬なりとも、崩れぬべくぞ覺えける。寄手吾劣らじと、面々の攻口より、打破つて乘入る。大將楊元は、帳中に伏しながら是を聞き、驚き騷ぎ起つて、衣裳を著るに及ばず、赤裸にて跣になり、逃げ去りけり。

南原城陷落

楊元逃走

傳報官の寗國胤、這々靴帶をきて追付きけり。其外家子十八人、西門より逃出し、共に離れ〴〵になつて、主の行方も知らず。遼東より來る兵共三千百十七人、城を逃出でて、三日目に思肆館に到るに、生殘る者僅百七十人なり。朝鮮の兵馬節度使李福男は踏み止まり、吾朝鮮の臣として、苟くも武官に列り、節度使の名を汚せり。爰を引くに於ては、何の面目あつて再び主君に謁せんやと、一思切つて劒を拔いて、眞裸にて踊り出で、四方八面に渡し合ひ、防ぎ戰ふ事何に喩へん方なし。然れども大軍、四方より攻入りければ、李福男、節石の如くなりと雖ども、其身金鐵ならざれば、數ケ所の疵を蒙りしかば、士卒・郎等共に城中にて討たれけり。其外の兵共は、一人も取合はず、赤裸にて皆闇の中より逃出づるを、追付け〳〵斬伏せしかば、助かる

者はなし。小西・宇喜多、其外大將達何れも手を砕き、首數三千餘、生捕少々相添へ、釜山浦へ註進す。金吾中納言秀秋之を早船に乘せ、日本へ申上げられけり。小西・宇喜多其一組の人々、之より全州へ働かんと、任實を指して押出さんとす。遼東の兵は、元來南兵より勇悍にして、馬上の達者なれども、日本人と戰ふに每度遼東の兵は利を失へり。最初に祖承訓、小西と平壤にて一戰し、盡く討たれ、今度又楊元、遼兵三千餘騎にて南原を守り、即時に攻落されたり。南兵は之に替り、日本人と每度闘ふに利を得たり。其故いかんと云ふに、遼兵は日本人に馴れず、常に見侮り、南兵は日本人に馴れて、能く軍の手段を知り、大事に懸けて利を見ざれば、猥に日本人も南兵をば恐れけり。扨も楊元、名城に籠りながら、一旦攻落され敗軍せしは、智略の足らざる故なりと、諸軍一同に難じ、沈惟敬が報なりとぞ笑ひける。南原攻落しつゝ、行長が威名、大明・朝鮮に充滿ちたり。王城近邊の貴賤男女は、こは如何せんとぞ騒ぎける。

陳愚衷全州逃去る

陳愚衷兵糧を掠む

邢總督兼ねて南原を攻められんかと了簡し、右より案内者なれば、陳愚衷を大將にて、強兵數千相附け、全州を守らせ、麻貴に二萬餘附けて、公州を固めさせ、南原城急あれば、救はん爲の手段なり。南原と全州の間、百餘里なれば、一日にも押來るべし。陳愚衷全州に入る時に、城中に兵糧なし。二千人の勢を養ふ事成り難しと、城番の者申しけり。陳愚衷、熟々と地勢を考みて、十里の外の山中に、米・大豆迄に甲冑・弓箭・鐵炮・丸藥に至る迄、朝鮮人の隱し置く所ありと推量し、出して運び取つて、城に入れんとす。留主居城番の者、之を迷惑し申しけるは、朝鮮より今大明の御加勢を請くると雖も、又大明の軍勢に攻められ、害せらるゝ者の多き事、日本人に殺さるゝと増減なし。十里の外の山里に隱し置く兵糧・雜具、時に當つて入るべき程には運び取るべし。若し皆々取寄せ置きて、日本人急に來る時、城を明除さなば、盡く日本人に取らるべし。然れば朝鮮の人民、一日も安んじ難しと嘆けども、愚衷此心を

悟らず、夜を日に續いで、山中の兵糧・雜具を一つも殘らず運び入れ、兵を分つて籠城の用意せり。然る處に、南原城急に取詰められしかば、楊元方より、櫛の齒を引く如く、後卷せよと告來る。陳愚衷此時領する所の兵三千人、朝鮮の兵を加へ、士卒を勵まし、枚を啣んで早く發り、南原城中に約し、火の手擧げ、楊元又城より突いて出でば、寄手の日本勢を追拂ふべし。若し敵強くして退かずとも、後詰の勢出張ると見ば、南原城を急に攻むる事なるまじ。南原にも少しの兵ありと見ば、心を堅くし、拒ぎ守るべしと、愚衷議定しける處に、島津義弘・加藤左馬助兩人二萬五千にて、後詰の手當に向ひけるを見て、愚衷畏懦して進み得ず、却つて申しけるは、今南原に向ふ事、彼を願ひ之を失するの喩に同じ、又此城も程近ければ、卒爾に兵を出し難しといつて、少しも人數を出し遣さず。其内南原攻落つれば、全州の百姓共驚き震ひ、何方へも逃隱れんと騷ぎ句る。愚衷が兵共之を靜むれども、制止を用ひず、百姓共却つて敵となつて攻戰ふ。近邊の百姓一つに固まり、城の兵糧藏を燒立て、夜に入つて城門を打破り、拔出でたり。愚衷爲ん方なく、兎や角やといふ内に、二十

愚衷全州を捨つ

日の寅の刻に告げ來るは、日本勢早や任實迄押來るといへり。任實此處を去る事二十里なれば、陳愚衷周章ふためき、取る物も取敢ず、城を捨てゝ逃落ちけり。大將斯くの如くなる上は、士卒・百姓・町人等、資財・雜具を持出し、妻子を先立て吾先々々と爭ひ逃げしかば、日本勢一矢も射ず、全州を取り、兵糧・弓・鐵炮收取つて、爰に少時足を休め陣取りける。麻貴は南原城取詰めらるゝと聞きて、急に牛伯英を遣し、愚衷を催促し、後詰をなさしめんとす。然るに陳愚衷、城を捨て馳落すれば、牛伯英手を失ひ、少時公州に止りて、勢を張り、後陣を待つ。此時宇喜多・小西等、公州を攻取り、王城へ入らば、勢竹を破るが如くなるべきを、南原・全州を容易く攻落したるを一面目にして、順天へ打入りけり。毛利宰相廻されし南の一手は、慶州より忠清・全羅を押廻さんと、全義館を指して進みける。公州は王城へ近し、其上公州の北に江道あり、王城にも漢江あり。麻貴急に日本勢攻來らば、公州近邊の勢を引取る事なるまじと思ひ、朝鮮の兵に言遣し、船を進めて浮船を連ね懸けて、往還の便にせんとす。朝鮮人は大亂に疲れて、四五日過ぎて、小船三十艘漸々出せり。麻貴大

いに怒つて、兵曹官を呼んで、大船を何とて出ださゞるやと叱り訇る。兵曹官答へて曰く、朝鮮の糧米、全羅道より出す。然るに今全羅道、日本人に攻め破られ、兵糧敵に取られぬれば、運び送るべき樣なし。此上は船をも、思ひの儘には出し難しといふ。麻貴怒甚だしく、是非船を出すべしと、嚴しく呵責を加ふれども、口にて肯ふ迄なり。前には大敵を受け、後には長江あり、進退窮まりてぞ見えし。忠州に入り、前後より敵を受くれば、難儀なるべしとて、吳惟忠を殘し置き、鳥嶺を守らせけり。されども小西以下の日本勢、全羅道へ赴きぬるは、爰は益なしとて引いて歸す。朝鮮王も南原・全州二つの城、即時に落ちたるに驚き、急に都體察使李元翼を選んで、將官高彥等を率ゐ、鳥嶺より忠淸道に出でて、日本勢の鋒先を遮り止めんとす。されども慶尙・全羅二道は、日本勢自由に横行すれば、遮る事も叶はず。國王先づ邢總督・楊鎬と謀つて、王城の中、老若婦女の軍陣の用に立たざる者共を盡く出して、敵を避けて山中へ落し給ふ。此時提督未だ關を出でず、萬事楊鎬が下知に任す。楊鎬共平壤に安坐して進ます。九月朔日に、二城の落ちたるを聞きて、王城に來れども、

陳愚衷金應瑞重刑せらる

朝鮮王陣頭に立つ

何の手段もなく、只南原・全州を落されし事は、二將の罪なりとて、檄を陳愚衷に傳へて、速に兵を出し、全州の辱を雪ぐ一戰をせよと、催促をすれども、陳愚衷兵を按じて敢て進まず。此由邢總督報ずれば、即時に失律の罪を疏して、愚衷を重典に置き、又今度行長方へ謀を洩しぬる金應瑞をも、朝鮮王と相議して、官を削り庶人になして、法度を正せり。邢總督、又書を朝鮮王に遣し、之を責めて云く、倭寇今朝鮮を攻侵す事は、之れ大明の恥なり。故に天兵數十萬、朝鮮に暴露する事既に久し。然れども朝鮮の人民、軍をせんといふ心なく、怠り疲れ、國王を初め群臣も戈を枕とし、膽を嘗むる志なく、軍に心を入れず、主辱めらるゝ時は、臣死するの節なし。今度、南原を取られ、全州を失ふこと皆王の過、臣の油斷なりと責めければ、國王も大に驚き懼れ給ひ、八ヶ道の勢を催し、軍列を稽へ、大明の諸大將に付いて、朝鮮の將吏を勵し、平安・黄海・京畿・咸鏡四道の軍兵、萬餘人を以て、經理提督が下知に付き給ふ。漢江の諸灘を計つて、其渡口を防守して、京畿都體察使柳成龍を差遣し、江と堀一筋とを巡歴し、守禦の形勢を察せしめ、國王も亦自ら甲冑を服して、戎馬

の間を驅廻り、四方に出で、所々の守の勢に氣を付け、力を致しつゝ、諸軍の成敗を主どり給ふ。總督、經理と共に王城にまし〳〵、晝夜防戰の術をなし、大明の下知に隨はれけり。初は南原・忠州を以て、左右の翼とし、王城を以て家とし、堅く守るべしと定めしかども、南原取られぬれば、朝鮮の大事此時なり、慶尙道・全羅道に日本勢充滿したれば、王城の防の兵とては、公州にある計りなり。其上、王城へ船手の便よし、又西北より、直に鴨綠江への船路あれば、日本勢半分は陸路より攻入り、半分は海に逆んで、北より入るれば、大明勢は眞中に取籠められ、籠の中の鳥の如くなるべし。但し日本人、久しく朝鮮に住居すれば、此手段を知らざる事はあるべからず。大明の軍兵未だ集まらず、兵糧多からず。日本人は船手の便よくて、運送の船引きも切らず。然れば日本人も寄せ來ぬは、一には大明勢百萬騎來る由、觸聞かするに依つて、恐れて來らざるか、一には沈惟敬擒となつて、案內者のなき故か、一には朝鮮、數年大亂にて亡國となり、城に居民なく、道に一夜の宿を取るべき處なければ、大にして攻入らざるかと、日本人の心は知らず、樣々に推量をなせり。加

藤・小西の諸大將も、將軍の御下知にて、朝鮮には入りたれども、數年の大亂に國荒れ、人逃げて田を耕す百姓もなく、萬づの商賣人もなし、山林・野際には、強盜充滿ちて、日本人通るとても、五十人・六十人固まらでは通り難し。此故に日本、又釜山浦より奥高麗へ飛脚の往還するも、絆々の城より、次第送りにするに、小勢にて送り迎へする事ならず。飛脚一人通るとても、馬乘五十騎・三十騎、弓・鐵炮百挺・二百挺宛にて送るに、夜とも晝ともいはず、奥高麗にて事ある砌は、一夜の內にも、飛脚三人四人通るを送屆けて歸れば、又飛脚通る間、送りに出よと呼はり、催促し、夜も定かに眠り得ず。朝鮮寒國にて、霰交りの時雨し、常に風烈しきに夜も晝も此の如くなれば、中々片時も堪へ難く、鹽・味噌の類は、大將とても目にも見得ず、鼻紙には四書・五經を始め、諸の文書、又は一切の佛經を亂暴に取つては洟をかみ、不淨を拭ふ位なれば、一日も居住せん心なく、況して兵を進むる擬勢もなし。されども徒に日を送れば、日本太閤より咎に逢ふにより、打廻りの爲めに出でたれども、前年の如く、王城を破らんと思ふ心なければ、只人數を損せざる樣に、宿々の要害を堅くし

て、全羅道・慶尙道を打廻る計りなり。此内に大明・朝鮮の兵糧も運送し、所々の城共も修理し、朝鮮の君臣の兵の調餉を送るに次第あつて、少しく心を安んぜり。

茅指揮平倭の十議を上る

總督邢玠、遼陽にあつて、毎日檄書を以て、浙江・川廣の各兵を催し、糧米・新草に至る迄、船と陸にて運送す。浙江の指揮茅明時といふ大將、兵を領して遼陽に來り、平倭の十議を上つる。邢玠之を美し、多く其弟を用ふ。其謀に云く、一には諸夷に檄す。之は琉球・女眞等の諸の夷國へ廻文を遣し、便よくば、直に日本の浦々に到り、朝鮮に渡る日本勢を遮るべし。之れ夷を以て夷を攻むるなり。二には間諜を工む。之は行長と清正と兩雄、久しく朝鮮に居て威を爭へば、間者を遣し、兩人の間を引放つべし。三には投順を招く。之は今日本の軍勢の內、半は是朝鮮人なり。日本人法度を嚴密にして、逃歸る事能はず。或は頭を剃りて、再び吾陣へ歸入らざる樣に制せり。是等を招取る事第一なり。されども事の心を知るべき樣なし。合戰に臨

む時に、此方の兵に竹の簡一枚宛付けさせて、軍陣に落すべし。上書に、吾が華人共、本國に歸らんと願ふ者は、縱ひ髮を剃り、形を改むるといふとも歸るべし。若し又罪ある者、當座の難を遁れん爲に、倭陣へ逃入る者も、今歸りなば盡く免すべし。其中に日本人の內、將官又は士卒に至る迄も、首を取り來るか、償ひ首を取る事ならずとも、一人にても殺し來る者は、恩賞・俸祿は例の如く行ふべし。此簡を日本人拾ひ得、疑いて彼輩に心を置くべし。朝鮮人之を見て、遁れ歸らば、彼は勢少く、吾は彼倭情の案內を知るなり。後に邢玠、此謀を用ひて利を得たり。四には軍威を壯にす。之は兵聚る時は強く、分るゝ時は弱し。今大明の兵を以て、朝鮮所々の要害に籠置き、之に依つて、日本人吾兵に恐れず、只要害の城には、朝鮮人を入れ置き、大明勢は一所に集り固まりて、戰に臨んで打て出で、大軍を見せて日本人の膽を冷すべし。後、此謀を用ひて、四方に分つ軍兵を一所に輯めて、三路に分けつゝ、島津・小西・加藤と三所に戰つて利を得たり。五には士庶に諭ふ。之は朝鮮、昔は高麗なり。三韓の內にて勇武の國たり。太平日久しきに依つて、民兵を知らず。され

ども人の心は、昔に變はるべからず、今、日本勢を攻落さん爲に、遙々來れる南兵、よく日本人に馴れて、軍能くせり。南兵を師匠として、朝鮮人に軍の仕樣を訓へ、一人にして十人に敎へ、又百人に訓へば、一年の間に朝鮮の兵も、南兵の如くなるべし。然れば何ぞ關白を恐れんや。後に此法を用ひ訓練により、朝鮮も能く軍をせり。六には屯練を更ふ。之は大明・朝鮮の維兵共、今日は調兵となつて、武具を帶び、明日は兵糧を運ぶ人夫となれり。之に依つて、人疲れて働き得ず。只屯練の法を行ひて、年代りに仕るべし。今年屯し、耕作し兵糧を運ぶ者は、明年は練兵とし、今年練つて兵となる者は、明年又屯をなさしむべし。格番に用ひたらば、人休息して兵强く、兵糧は澤山なるべしといへり。七には倭情を計る。之は日本人の心を能く知るべし。孫子にも、彼を知り己を知るが、兵法の肝要なり。今要害を架へ、丈夫に拵へ、大軍にて持堅めたる釜山の城を攻めんよりは、船手へ能き大將を遣し、大船數多懸置かば、數千里の陸路を凌いで、燕京を侵さんとする心あるべからず。又船手より東に渡らんとせん時、吾大明の船大將共、船師を懸け、歸路を取る樣會釋ひな

ば、人の心故鄕を思はずといふ事なし。誰か家を忘れて、千萬里の海路を經て、鴨綠江へ入らんや。是遠きよりして、敵の心を碎く謀なりとぞ差上げけり。邢總督甚だ稱嘆して、之を用ひける。後に陳璘其外船手の大將共、多く敵を討ちけるも、此計を用ひたるに依るなり。去る程に、毛利宰相秀元廻されし南の一手、一組の軍兵五萬餘騎は、九月朔日に全義館に到る時、大明の勢に朝鮮の將高參相加つて、三千餘騎、全義館の右脇庭といふ處へ打廻り、全義館へ取込まんとせしが、日本の先手加藤淸正と行逢ひたり。淸正が先備加藤淸兵衞・庄林隼人佐一備の者共懸け合せ、鐵炮を放たせければ、高參等も半弓を押立て、光手を張つて散々に射る。加藤淸兵衞指揮を振つて、時分を見合せ、下知をなすべき物前にて、逸りて鑓を入るれば、勢力拔く者ぞ、吾次第にせよと、馬を乘付け〱下知をなす。互に指取り引詰め射合せ打合けるが、味方の鐵炮に中りて、敵の馬武者・半弓の者共、手負死人多く出來て、聊か白んで見えける時、淸兵衞指揮を打振はす。懸れ者共と下知する言の下より、大將庄林隼人、自身一番に鑓を入るれば、淸兵衞隼人が一組の勢、續いて喧とぞ懸りける。

大明・朝鮮の兵共、悉く敗軍して、方々へ逃散しを、淸正が勢追驅け〳〵、屈强の敵七十三人首を取り、勝凱を揚げて全義館へ押入りけり。全義館は、王城を去る事百五十里なれば、近日に日本勢來る由を聞きて、城を明けて、人民盡く驚騷ぎ、王城へ逃入りしかば、數萬騎の日本勢方々へ入渡り、在々所々を燒拂ふ。副總兵の解生は、日本人の眞直に王城へ攻入らんかと驚き、其手の軍兵を稷山と水源と兩所の要害に置いて、防がんと打つて出でたり。折節秀元が先手は、黑田甲斐守長政なり。朝鮮の兵共、長政が武勇に恐れつゝ、城を守つて出で得ず。毛利・黑田・加藤等が進み向ふ所に敵なく、猛威を振はずといふ事なし。旗の手を靡かし、貝・鉦を鳴らし、曳々聲を揚げ、道筋を打つて行く程に、解生と長政が先手と、路五里を阻てゝ、忽に行逢ひたり。此頃日本人の打廻るを聞きて、二十日路の間皆籠城し、城を取られずとのみ用心し、出づる敵一人も無かりしに、敵珍しく見てんげれば、長政が先勢粟山備後守・後藤又兵衛を始めとして五十騎計り、驅付け追討たんとす。解生が逑や强かりけん、參將楊登山・遊擊牛伯英大將にて、大明勢五千餘にて、日本勢の通るを見んと

出でたりしと、長政が五十騎の勢はたと行逢ひたり。彼は大勢なり、一人も餘さじと眞中に押取籠め、火出づる程こそ揉みたりける。栗山備後守利安は、朱具足に銀の戻馬藺の指物にて、鹿毛なる馬に乘りたり。後藤又兵衞尉政次は、黑糸縅の具足に瓦毛の馬に乘り、黑き拘半月出したる黑母衣を懸けたりけるが、其勢五十騎を下知して、犇々と一所に寄り、眞丸になつて、同音に鬨を作り、解生・牛伯英・楊登山が大軍の眞中を、駈拔け駈入り、交合ひ頃刻に變化して、彼處に顯れ爰に隱れ、火花を散らし、東西南北に追ひ靡け、烟塵天を掠め、汗血地に滿てり。栗山と後藤と三所に分れ、一所に合し、四隊の陣を破つて、八方に同じく當り、千變萬化して攻戰ふ。大明勢大軍なれば、事ともせず、五十騎を眞中に取籠め、一人も洩さじと、栗山・後藤、弓手・妻手(めて)に敵を受け、數十騎斬つて落すと雖も、味方は手負・死人重なり、次第に弱り、援ふ勢はなし、栗山備後も後藤又兵衞も、數ヶ所創を蒙り、半死半生に討成され、本陣さして引歸る。之を見て、味方討たすな續けやとて、長政例の水牛の甲の緒を締め、馬上に手鑓提げ、麾を振つて下知しければ、衣笠因幡守・井上周防守・毛利

太兵衛・黒田總右衛門を始め、長政が二千餘騎嘩と懸かる。秀元が先勢なじかは怺ふべき。阿曾沼豊前守・宍戸備前等其勢一千餘騎、長政に先立たんと乘出す。まばらに追來る大明三將の兵共、一支もせず、捨鞭を打つて引きけるに、干總・李益喬・把總・劉遇節が二萬餘騎、折節馬煙を立てゝ馳來るに遇ひぬ。解生是に力を得て、取返して攻戰ふ。長政・秀元が軍兵共、少しも撓まず、乘付け〳〵攻戰ひ、喚叫ぶ音、山を動かし、大力の合音止む時なし。劉遇節・李益喬は荒手なり、兩陣力を合せて、火出づる程戰ひける。大明人百六十餘討取ると雖も、味方も屈强の兵廿九騎・雜兵七十餘人討たれければ、兩方互に颯と引きて、息つき居たるに、同勢秀元の旗本、其外清正・幸長を始め、路に續く大軍雲霞の如くなるを見て、解生・劉遇節・李益節・李益喬、叶はずとや思ひけん、手輕く山際の狹に取込み引入りけり。日本人も、日早や未の下りなり。爰にて時刻移りなば、晩の宿に遲く著くべし。大軍夜に入りなば亂るべし。軍は是迄なりとて、打つて通りけり。此時大明の大軍、未だ來らざれば、王城守護の勢多くもなかりけり。すはや只今都を取らると、朝鮮王を始め奉り、安き心

李如梅日本勢を襲はんとす

もなかりしに、解生手痛く合戰し、日本の首共持來り、軍に勝ちたる由を申しければ、王城主の軍兵共、氣を取靜め持固めたり。十月になりぬれば、打廻りの日本勢共、釜山近く道々の城を明けて歸りけり。來銳を避けて、惰氣を討つは、此時なりとて、麻貴が先鋒の副將軍李如梅等、二萬餘騎にて打立ちて、中節・星州・谷城等に陣取りたる日本人を襲取らんとす。星州城には、筑紫上野介・久留米侍從秀包等籠りありしが、小勢にて、退く事成り難きに依つて、小早川中納言秀秋家老山口玄蕃允が一與の內、南部無右衞門・伊藤雅樂助等五組二千餘騎、谷城を立ちて、星州の久留米筑紫が迎として、一日路遣しけり。かゝる處に、星州指して押來る李如梅が二萬餘と覿面に行逢ひ、路次中三十里が間打連れ、矢軍少々して送られけり。如梅が大軍急に懸り來れば、南部・伊藤等鐵炮を以て、打拂ひ〳〵多くの敵を打落せしかば、如梅大軍なりと雖も、三十里が間に、南部等が二千餘を討留むる事成らずして、無右衞門も雅樂助も、安す〳〵と星州城へ入りにけり。李如梅は今日事を齟齬して、後陣續けば、是非取卷いて討果すべしと憤る體なれば、星州城には是を見て、今夜明除

かずば、後悔すとも叶ふまじとて、夜半の鐘響き出しゝかば、下々に支度させ、筑紫上野介・久留米侍従・南部無右衛門・伊藤雅樂助等二千七百餘にて、曉方城を濳に出でつゝ、谷城へと志し引來りけるに、谷城を大明人攻落し、持固め、山口玄蕃も落ちて居らざりければ、力を落し、是より求禮へ退きけり。此間に大河あり。船一艘も無かりければ、久留米・筑紫が兵共、如何せんと遽て騷ぎ、兎やせん角やあるまじと、口々に罵りけるに、扠止むべきにあらざれば、雜兵を下手に立て、馬武者を游がせ、上手を渡し、一時計りに三千餘の人數、一人も流れず悉く渡しけり。大明人は、星州・谷城二箇所の城を安々と乘取りければ、青山等の要害に陣を張る。されども日本人は、十月の事なれば、寒氣未だ至らぬ先に、秀元一手の打廻の勢の引入るを待ちて、倶に引取るべしとの談合なれば、青山の大明人を追落さんともせず、秀元一手の勢も次第に寒くなり、風雪烈しければ、早々彥陽・蔚山へ懸り、漸くに引入りけり。されども後を氣遣ひ、毛利秀元手より、宍戸備守就宗一萬騎を添へ、淺野左京大夫幸長三千餘、太田飛騨守八百騎は、殿の爲めに路に殘りける。

朝鮮征伐記第十一終

朝鮮征伐記第十二

邢玠朝鮮王城に出陣

大明邢提督大軍を率ゐて朝鮮に入る

十一月中旬、邢玠鴨緑江を渡る。時に嚴冬に遇ひて、雨雪毎日降續けば、十一月廿九日に、初て朝鮮の王城に著き、楊鎬・麻貴と評議して兵を出し軍をせんとす。日本人も、大明の來るを聞きて、逆寄にする事も有るべしと、邢玠思索し、先づ斥候の兵を出し、日本人の動靜を窺ひ聞き、其間に、竹木を切取り、小屋具を用意し、稻を舂き糧を搜り、山谷の間に充滿ちて、亂妨狼藉せり。日本人のかたまりたる城々多しと雖も、大軍は三所に屯す。行長は、松嶋に之ある船手にて、順天へ持續けり。清正は、蔚山に有り、要害の地なれば、初より諸大將の談合にて、北は順天を固め、大軍を入置き、南に蔚山に著け、南方一筋を、心安く往還せんとの謀なり。共に

邢玠朝鮮君臣を勵ます

船手の便宜にて、然かも險岨切所にて、自然の要害なりき。此時蔚山普請總奉行は、加藤淸正にて有りしが、船手の城々も普請せんが爲め、自身は西生浦へ行き、夫より機張に歸る。蔚山には、家人加藤淸兵衞・小代下總守・佐々平左衞門・齋藤立木に、三千餘付け、殘し置き、毛利家の軍勢に、筑紫衆少々相加へて、普請最中なり。是に依りて、大明人は、淸正蔚山に有りと思へり。小早川隆景子息金吾中納言秀秋は、太閤御名代なれば、釜山城に有りて、松嶋・蔚山・釜山三箇所の日本人を合せて、兵馬十二三萬騎に過ぎず。大明の兵をも、三つに分けて、六備に分ちたり。三手の内大軍なれば、主將と偏將とを預ち、各〻一備にして、互に援け合戰せんと約束す。初め邢玠、遼陽を出でし頃より、朝鮮の君臣に、檄書を遣し、責めて云く、朝鮮人、日本人を恐れず、勵み戰ふべしと云うて送りぬ。今度朝鮮王竝に諸臣に面談し、大明より援兵をかし、此國を安ぜんとする恩を忝うすと思はゞ、王も群臣も、共に心を固めて戰ひ、主の義を專らにして、人馬を調へ、兵士を發し、日本人を殺すべしとぞ、恥かしめ勵しける。是に依りて、朝鮮の兵曹官李恒福と、諸道都巡察使權慄とを總軍

奉行として、十二月朔日より、諸方の城より打つて出でて、日本人の横行するものを遮ぎり止めて、小勢にて固めたる取出をば、攻めて破るべしと、下知をなす。初は朝鮮人の兵共、日本兵を虎の如くに恐れつゝ、逃げ隱れる計りにて、向ふ者なかりけるが、大明の提督に勵まされて、所々の朝鮮人討つて出で、方々にて軍をして、捉を獻ず。其内順天にて李順臣・任俊英との兩組の勢、小西行長が勢と矢軍して、打勝つ。小西が兵の首廿五取りて獻る。方々の手前より、あなたこなたに討取りし首數八十餘組、大明の邢提督に見せければ、朝鮮の兵、聊か賴もしとぞ悅びける。又李元翼・介の軍將守令等の官に告げて云く、日本人に降參せし朝鮮人は、罪の多少を論せず、逃げ來らば、悉く罪を免じ、本領を返し與ふべしと觸れければ、日本へ馳せ付きたる朝鮮人共、逃げ來る事數千人、日々に引きも切らず。此時宜府・大同・薊延・綏保・定浙・勝營の兵共、悉く來る。續いて葉邦・榮浙の兵共四千、南京の水兵二千六百八十人を募りて、陳雲龍と同じく朝鮮に來る。許國威は、福建の先調兵一千五百人を領し、參將王元周は、應天の先調水兵一千人を率ゐ、福昌升は、浪山の兵一千五

邢玠日本軍を攻む

百人を領し來れり。後より又浙福の水兵も續き、廣東の東璘も、陸兵五千・水兵三千人を召具して、既に路に有り。劉綎が川の兵と、陣廣が兵とは、來年戌の二月に、朝鮮に來る筈とぞ聞えし。提督邢玠は、朝鮮王城に有りて、諸大將と進攻の次第軍評定有り。先づ日本よりの根城なれば、金吾中納言が居住したる釜山浦の城を攻めん事を先とす。されども釜山の道筋、陸路より梁山の西北によりて、高山峻嶺有り。一騎打の事なれば、大軍を押す事叶ふまじ。又南原に懸れば三浪大江有り。金海・竹島へ通路宜しけれども、此二所は、咽喉の地なるに依り、日本人多く是を持固め、防を成せり。又巨濟・加徳・安骨の一筋にかゝるも、船手自由なり。是又吭の所なれば、日本人共船數百艘有り。いかんともすべからず。但し巨濟は、裏陽をあけて守りの船も、日本人をかざれば、是へ著岸せんと、議定すれども、梁山・三浪江を往きて、遙々と越ゆる大明の大軍を知らぬ貌にては、よも巨濟迄通すまじ。その上巨濟の隣は機張なり。機張は、清正が充滿したれば、聞くと均しく寄せ來るべし。然れば釜山へ寄する事、中々思ひも寄らず。只今、清正西生浦に在り。之を攻むる

には、陸路は西より東にして、東・萊機張に懸る。又北よりして、南の筋へ出づれば、慶州蔚山に懸る。此路東南は大海、西北は山嶺なり。いづれも日本人共の城を取固め、持續きたり。又船手より出でんとすれば、東よりして西に廻り、長鬐耳浦により、朝鮮の水兵此處に在りと云へども、小勢なれば、大軍の著くを見ば、やがて拂はるべし。兎角謀の第一は、一備は南原に屯し、全羅道を防ぐべし。一備は大丘に屯して、以て慶尙道を防ぐべし。一備は慶尙・全羅の中に屯し、晋州・宜寧等の所を、本陣と定め、兵を分けて、釜山・機張の兩城へ、陸より向ひ、水兵と東西四面より、一度に發して攻めんには如かじと、談合一決して定め、即ち此通り疏に載せて、北京の朝廷へ奏聞し、兵馬四萬餘人を以て、三協とす。左協は、副總兵の李如梅を大將とし、盧得功・董正誼・茅國器・陣宜・大綱を、部將とし、馬歩一萬三千人を領せり。中協は、中軍副總兵の高策を、大將にして、祖承訓・頗貴・李寧・李化・童紫・登科・苑忠・吳惟忠を、部將とし、馬歩官軍一萬一千六百九十人、右協は、副總兵の李芳春・解生を、大將にて、牛伯英・方時新・鄭印王・戴直武・盧繼忠・楊方金・陳愚聞を、部將とし、馬歩官兵一萬

一千六百二十八人なり。又標下の參將彭友德・楊登山、大同の遊擊擺賓・牛營の張惟城は、浮武者にて、其期に臨みて、何方へも働くべしと、遊軍にて列を成し、監軍は監察御史陳効なり。邢提督が本領には、麻貴と楊鎬と、左右に協の兵を率ゐて、忠州鳥嶺より、東に向ひて、慶州に赴き、淸正が籠りたる蔚山を攻めんと思へども、行長、西より來たりて援けなば、惡かりなんとて、中協の兵馬をして、宜寧筋に出し、東は左右協の脇詰になり、西は全羅道より、蔚山を援けんとする敵を遮らしめ、又三協の中より、兵馬一千五百人を選みて、朝鮮の兵と營を合せ、天安・全州・南原よりして下り、大に旗を張り、順天を攻取らんとする狀を見せて、行長を出すまじき謀なり。又平壤筋へは、兵糧十二萬石を備へ出すべし。頓て大明より、又二十萬騎到ると、僞りて觸れさせけり。王城の留守は、大明三將を殘し、二千人に過ぎず。悉く打つて出でたり。朝鮮の兵は、忠淸道節度使李時言二千餘騎、竝に平安道の兵二千餘、左協の組下に馳せ加はる。慶尙道節度使成允門が兵二千、應權珠が兵二百餘、慶州の撲殿長が兵一千、咸鏡道・江原道の兵二千餘は、中協の下に著きたり。慶尙道の鄭起龍が兵

一千、黃海道の兵二千、防禦使高彥伯が兵三百人は、右協の備に入る。 凡そ鐵炮一千二百四十四位、火箭十一萬八千支、鐵炮の火藥六萬九千七百四十五斤、大小の鉛千百七十九萬六千九百六十七斤は、今度の用意として、遼陽の分主張登雲、之を承りて運送せり。 此外、三眼銃・鐵鬚・董銃・悶棍・大炮・火箭・團牌・佛郞機等の兵具は、皆日本人の恐るゝ物なり。 攻道具一つとして、備はらざると云ふ事なし。 兵糧は一箇月のを、具ふべしとぞ、夫々に手分けをして運ばせけり。朝鮮王獨から將卒を勇進せんが爲め、近習の高官四人を遣し、三協は一人づつ入り、糺察使黃愼をば、全羅道の城々へ遣し、丈夫に持固むべき由、下知をなし給ふ。 自然兵糧續かざれば、大軍難儀なるべしとて、十日の食物を炒米にして、腰兵糧に充てがひ、俄事の用に備ふ。 陸の備は、是の如しと云へども、船手の分ちなし。 閩浙の水兵を催すに、未だ至らず、十二日の初、天津の巡撫萬世德、水兵を併せ馬武者六千を以て、旅順・登萊に分けて、犄角せしむ。小西行長が順天城も、船手に近し、此押に水兵三千餘人置くと雖も、自然の事有らば、防かすべしとて、朝鮮水兵を、又重ねて遣しむ。 又清正今に機張に居て、近邊悉

く切隨へて領知し、自由に働かば、此押に、朝鮮水兵官の李應龍五百餘人にて、伏島の中に有りと雖も、頭を出すを得ず。清正亦又侮り見て、物ともせず。國王に謀りて、重ねて鐵炮二百挺・弓百挺を添遣し、其上に南兵把總の楊貴と、于承恩とを遣し、李應龍と潛に、島の中に匿れ居て、時分を見て、軍を取りかけば、清正侮りて出づべし。其時清正兵を出し、挾みて討つべしと定めけり。此時陳璘未だ來らず、彼を待ちて、船手へ遣したらば、陳璘は、舟軍に老いたる良將なり。たとひ清正、出でずと雖も、挑出し討つべき者を、今少し待ちかねて、軍に馴れぬ者共を遣しけるは、謀の拙きなりと、老武者は、之を難じける。

明軍蔚山城に向ふ

日本人も内々大明の諸大將勇士等、數を盡して、蔚山城を攻めなんとの催にて、向ふ山開きしかば、去る十月十日より、諸勢を寄せ、普請等數日を分けず急ぎしかば、此頃は矢倉等も大方出來しかども、外郭・三の丸等は、漸く堀の手の、合ふ所も有り、未だ合はざる處も有り。蔚山本丸には、毛利宰相秀元の兵、淺口彥右衞門・三刀屋四兵衞・冷泉民部大輔元光・吉見大藏少輔・成羽紀伊守・竝に清正家人加藤清兵衞・齋藤立木・佐々平左衞門・小代下總・相良宮內

少輔・毛利壹岐守・高橋・秋月・伊藤等の筑紫武者を加へ、八千に過ぎず。本丸の南に、島山有り。之を出城として、出田宮内少輔・佐々平左衛門以下の清正が兵共、持固めたり。其間に入江の大河有り。是に船を繋き置き、本城との通路をせんとぞ計りける。

淺野幸長蔚山城に入る并大明人蔚山を圍む

大明人諸方の手分既に定りて、十二月四日に、邢玠、諸軍勢を集めて、大將壇に登り、天地を祭り、諸將を犒ひ、官兵に告げ警戒し、旗を祭る。時に數萬の鐵炮をつるめ放つ音、天地に震ふ。朝鮮の臣民、手を揚げて、額に加へて云く、生れしより以來、兵革に逢へども、是くの如くの威儀嚴重なる事を見ずと、軍法の正しき事を感じけり。是より楊鎬・麻貴は、三協の大軍を引率し、南を指して押出す。朝鮮王も、李大諫を遣し、日本人に交り居る高麗の民に仰遣し、此時手引をするか、又自分の心操をして、味方へ馳入るべしと、潛に申送り給ふ。同二十日に、大將經理の楊鎬、同麻貴、三

協の將士を引具して、慶州に會す。是より蔚山へ一日路に清正等、皆蔚山に集まり備る由、聞えたり。蔚山の南は、島山なり。二山甚だ高山ならざるに據りて、固めをなす。中に一つの入江有り、釜山浦への通路なり。陸路は、彦陽より釜山への大道有り。麻貴等、力を專らにして、急に蔚山を攻落さんと思へども、其内釜山浦の日本人、彦陽道へ出拔き來らば、味方難儀になるべしとて、中協の高策・吳惟忠等を遣し、官軍數萬を領し、彦陽・梁山により、要害の胴筋を遮り止めんとす。此時、打廻りの殿の一組、淺野左京大夫幸長・太田飛驒守・宍戸備前守等、明日は蔚山へ入らんと、廿一日の夜は、彦陽に陣を取り、一里計り後に川あり。川向ふに斥候として、阿曾沼豐前守を大將として、毛利家の勢五百餘騎を差遣し、一萬計りの日本勢、五里・三里の間に、陣を取り、吳惟忠・高策が先勢、之を見て、すはや能きものなれとて、廿二日曉方、宍戸が先手の斥候、阿曾沼が手へ斬つて懸り、五百餘人討取りて、山を隔てゝ、引入りけり。夜明けて、之を聞き、淺野左京大夫幸長、大に怒り、蔚山へ引入る儀なれども、五百人の味方を討たれ、敵のつらをも見ず城へ入りなば、後難天下の嘲哢と

日本軍明軍と小迫合

なるべし。あの山の彼方に、定めて唐人共は有らん。いざ懸りて、今朝討たれし味方の弔合戰すべしと犇きける。家老の淺野左衛門佐、馬より飛下り、主の馬口に取付き、こは勿體なき仰哉と、止る所に、宍戸が手に、古兵共多ければ、皆馬の前に馳塞り、左京殿の仰も尤もなれども、唐人百萬騎寄來る山、此中沙汰せり。治定山の彼方迄、押詰めたりと覺え候。其仔細は、今曉、味方の斥候の兵共の討れやう、又近邊に敵有りとも見えず、引入れたるは、大軍一度に押來らん爲めなるべし。只是早に蔚山へ入らせ給ひ、吾等が手の者、過半今朝討たせたれば、懸りてよくば、此方こそ進申さめ。されば孟子の、寡は固に衆に敵すべからずと云ひし處なり。其上先にも申せし如く、敵の引取り樣、餘り速なれば、不審に存候。只理を枉げて、引入らせ給へ。後日に難ずる者有らば、某ら罷出でて、其咎を負ふべしと、頻に諫め止めける。太田飛驒守も、此儀尤もなり。太閤の御前申分は、吾等御目附の事なれば、任せ置き給へと、倶に達て止めけれども、幸長此時廿二歳、軍法未だ鍛錬なし。剛氣なる猛將なれば、なじかは意見に付くべき、耳にだに聞き入れず、各々はよきや

うに計らひ申さるべし。某に於ては、敵を見ざれば、八幡大菩薩も御照覽候へ。蔚山へ引入るまじと罵りながら、駿馬に鞭を進めて、眞先にこそ進まれけれ。幸長其日は南蠻胴鳩胸に、象眼の入れたる鐙を、紫絲にて縅したるを、草摺長にざゞめかし、銀の鍬形打つたる甲の上に、黑熊をかけて、猪首に著なし、金の天衝出したる黑母衣を、嵐に吹かせつゝ、さび月毛の馬の尾髮あくまで縮みたるが、天へも上らんと、早り切つたるに打乘り笛卷の柄の鎌鑓を、馬の平首に引側めつゝ、志有る人人は續けやとて、馬を乘出し給へば、宍戸も太田も、今は制するに及ばずして、幸長に後れじと、馬を早めて驅出でぬ。相從ふ勢一萬三千餘、主に先立たんと、乘拔け乘拔け、向の山を押廻す時、案の如く、山陰に數萬の唐人、貝鉦をならし、軍勢を押出すに、出合頭にはたと行逢ひたり。幸長宍戸屹と見るに、山も一面に、旗小符充滿ちて、山より山、里より里に押續き、溢れ來る有樣幾千萬と云ふ數を知らず、夥しきとも中々なり。味方の兵まばらの馬驅に、備をなさず、驅け來るを見て、高策・吳惟忠等喚きて敵は小勢なるぞ、引包み討てと下知して、馬は上手なり、後を取

切らんと、猛勢の中より、駿馬に鞭を揚げ、數萬騎駈出し、引包まんとぞ取廻りける。百分が一もなき味方なれば押立てられ、蔚山へ引取らんと、幸長・宍戸、隰し合す。一大事の退口なれば、幸長の鐵炮頭稻田大隅守高總・岡野彌右衛門・森嶋新五郎・大駄源右衛門・長岡茂助・木俣彦三郎・箕浦大藏・枝田喜左衛門等を始め十餘人、殿と定め、先手淺野右衛門佐、二の手淺野右近と、次第繰りに引く。宍戸備前一萬餘騎、先手阿曾沼豐前守・兒玉等を始め、段々に引きけるに、大明人數萬騎、足をも亂さず、眞黑に追來る事、甚だ急なり。幸長も立怺へ／＼自ら手を下し、火花を散し防戰しけるが、彦陽より蔚山迄、日本道三里の間、幸長近習の士多く討たれ、諸勢も手負・死人の數を知らず。大明人勝つに乘じて、逃ぐるを追ひて進みけり。宍戸備前守・太田飛驒守も、自身鑓押取り返しては突倒し、取つて返しては突散らし、息をも續がず防戰して引退く。然れども西より北より、大明の猛勢共、嶺よりも溢れ來り、かしこの谷よりも押上げ、曳々聲を出し、貝鉦を鳴らし、中々冷敷き事、肝魂も有ればこそ、日本の弱き雜人共は、離れ／＼に退かんとせしを、宍戸備前守、大の眼を瞋らかし、斯樣の

時、冷敷に氣を取られ、脇道へ懸れば、必ず討たるゝものなり。只心を一にし、眞丸になりて、退き候へと、囘り〳〵退きて行く。餘りに強く追來る時は、幸長引返し、自身鎗を合せ、突き倒し〳〵首を取つては退き、斬拂つては引退き、逆も遁れぬ道に極りたるを、蓬き働して、敵に笑るゝなとて、幸長、後に引下り、返合せ〳〵、踏怺へては突き寛げ、立怺へては突退き、防戰して三里が間、防ぎ退にして五十餘度迄防戰しければ、幸長、賴み切つたる勇士共、手負討死し、諸軍勢も押阻てられ、備前守は、道筋を退きけり。是により、淺野左衞門佐も、宍戸が後に付いて、城へ入りにける。

幸長は、三里の戰に、身近侍共大方討たれ、金の唐人笠の馬印も斬破られ、殿の物頭岡野彌右衞門・森嶋新五郎・太田源左衞門・長岡茂助を始め、七八人討死し、漸く蔚山に著せしに、大明人急に來りしかば、城へ入る事も叶はず、返合す者は斬つて落され、城へ取込まんとする者は、城戸・逆茂木に堰かれて入るを得ざれば、蔚山城中、周章て騷ぎ、すはや此城、只今攻落されぬとぞ見えたりける。幸長も甲の吹返・鍬形、皆斬り落され、左の二の腕二個所、右の大股三個所手負ひ、血の流るゝ事瀧の如し。

龜田高總の奮戰

淺野幸長蔚山に入る

馬も七個所迄、手負ひたれば、倒れて死しぬ。持つたる鎌鑓も、太刀打より斬折られ、太刀は鍔本より打ち折れたり。馬には離れぬ、手は數個所負ひたり。敵・味方押立て押立て來りければ、幸長も柵に犇と押付き、母衣籠も押潰れ、動く事も叶はず。既に城門近所にて、討たれんと見えける。城中よりは之を見て、悲み喚き叫ぶとも爲方なく、見えける所に、幸長が兵、龜田大隅守高總、只一騎返合せ、大敵の中へ面も振らず、馳入りて、身命を捨て防戰ひ、吳惟忠が先手の部將王鶴子が勢二千計り、龜田を眞中に取卷きて、餘すなとこそ戰ひけれ。大隅之を見て、此處にて討死せずんば、幸長助かり給はじと存ずれば、目も懸けず、大明の王鶴子と押並び、むずと組み、馬より下へ落ち重なり、終に龜田上に成り、王鶴が首を取る。大將の討たれたるを見て、此手の兵二千計り、周章て騷ぎ、亂るゝ所を、城中より門を開きて清正が家人加藤清兵衞・小代下總守・佐々平左衞門・齋藤立木等、混甲千餘輩、拔連れて、突いて出でたり。寄手の大明人、一支もせず、ぱつと引きける。其隙に、幸長も、太田飛驒守も、半死半生に討ちなされ、漸々城へ入り給ひけり。加藤清兵衞勝

つに乘じて、逃るを追うて大明人の首三百八十九討取り、長追すな早引取れとて、城中へ取込みけり。幸長・宍戸・太田が軍勢、道にて押阻てられけるか、又討たれたるか、士卒半分は見えざりける中にも、宍戸備前守は、城へ入るやうには見えしが、討たれたるにやあらん見えず。宍戸が兵共、涙を流し、口惜しき次第なりと、憤りけれども、大敵四五里四方に充滿ちたれば、尋ねに出づべきやうもなし。幸長は數個所の疵を蒙り、鎧甲も斬散され、朱になりて、母衣籠潰れたれば、母衣籠を引摺りつゝ、木全彥三郎・原勘兵衞とに、兩の手を引かれ、片息になりて、城へ入られけり。龜田大隅も、王鶴子が首を取持ち、半弓にて、鎧の引合を射させ、郎等の肩に懸り、引入りけり。箇程の大軍にて、追ひ來る勢に、直ちに城を乘取れば、城中には矢間配もなし。俄の事なれば、防ぐ便もなき程に、其まゝ落つべかりしを、寄手も草臥れけるか、謀の拙きか、外郭引破られたるを手柄とし、諸方の寄手、一里計り引退きける。城中是に息をつぎ、諸方の矢間配をなし、幸長大手を固め、毛利家は大軍なれば、島山かけて請取り、太田飛驒守は目附なれば、持口をば請取らざる浮武者なり。加

藤清兵衛は、城代なれば、埓の手の合はぬ處諸人の糧米以下夫々に點じて渡しぬ。此城普請半ばにして、當座の人夫迄も集りたれば、兵糧少しもなし。殊に唐人の大軍に驚き、近邊の商賣人・百姓迄、妻子を連れ逃げ入りたれば、雜兵加へて二萬人計りなり。此人數を養ひなば、三日の糧も有るまじと、第一之を迷惑すれども、俄に運び入るべき手段もなく、働く軍兵共、其手を其手へ纔の兵糧を分け遣し、逃入る雜兵は、食物一粒もなかりける。寄手は楊鎬・麻貴大將にて、三協の大軍、追手・搦手五十萬騎、蔚山城外五里・七里が間に遠卷し、面々に陣取りて控へたるに、旗・小符の立並びたる體は、夏野の草の滋合ひたるが如く、甲冑・劒戟の映じ渡る有樣は、電光の激するに異ならず。四方十餘里が間は、野も山も、平等に人馬充滿ちたれば、蔚山城中の日本人共、雜人も肝を消し、膝を震ひてぞ覺えける。斯くして其日も暮れしかば、寄手陣々に、篝火を焼き連ねたるに、其光天地に映徹して、喩へば秋風吹き、晴れたる滿天に、星の列なりたるが如くなり。今日彦陽より蔚山迄、三里が間の戰に、幸長・宍戸・太田が士卒共、過半討死・手負、又は押され阻りつゝ城へ入り得ざる者共、

夜に入りて、方々の口々、又は塀柵を越えて、城へ入る輩、數百人なり。玆にても宍戸が兵共は、主の備前守行方を尋ねんとて、夜に入り、塀を越えて、外へ出で、方々を尋ぬる處に、備前守は、薄手少々負ひ、馬離れつゝ郎等二人と共に、蔚山より二十町計り阻りたる小山の上へ登り居て、如何して城へ入らんと、歎じ有りける處へ、迎の者共の尋ぬるに逢ひ、互に喜びの涙を流し、備前守を肩に懸け、田の中を傳はりて、城に引き入りけり。明くれば廿三日卯の刻、左協副將軍李如梅・楊登山馬武者を選みて、五萬餘騎城際近く寄せて城の樣を見る。幸長並に加藤淸兵衞下知して、わざと鐵炮一つも打出さず、靜まり反りて、待懸けたり。寄手も後陣の汰間は、岸涯に沿ひて、城中へ見えぬ樣に、平伏して待ち居りしが、巳の刻計りに、諸方の寄手集ひ集まれば、遊擊擺賽大將にて、勝ぐれたる兵五百餘騎、一方の架を打破らんと、ひた〳〵と堀涯に著し、兩方互の謀にて、城中は寄手を多く寄せて、突いて出で討取らんと工む。寄手は又後陣の備立ちたらば、擺賽・李如梅・楊登山、塀を打破り、乘り入る眞似をして、城中の勢を誘ひ引出し、討取らんと謀りしかば、擺賽が勢、城下に

付くを見て、城中より宍戸・淺口・阿曾沼等、毛利家の勇士一萬計り、鐵炮を一度に放ち、鬨の聲天地を響かし、扱連れ門を開きて、大山の崩るゝが如く、眞黑に突き出づる。擺賽兼て謀りし事なれば、捨鞭を打つて、逃れ行く。冷泉・宍戸・阿曾沼等、勝つに乘じて喚き叫び、逃ぐるを追うて進んだり。李如梅・楊登山、之を見て、天の與ふる處なり。一人も餘すなとて、四方の伏兵、一度に起りて、城中へ歸り入れじと攻戰ふ。吾れ先に高名せんと、深入りしたる日本勢共、冷泉民部・淺口彥左衛門・阿曾沼・兒玉・宍戸が兵共ものともせず、極めて馬强なる打物の達者共、善き馬には乘りたりける。田も畑も論ぜず、眞平に乘立つて、大明の大軍の眞中へ駈入り、弓手に馳合ひ、妻手に駈違ひ、大明の猛勢を、切つて落し追廻し、算を亂して追廻し、將棊倒しに斬落されければ、如梅・登山が大軍共、手下に討たれたる者、三千餘人、小腕討落され、朱に成りたる者數千人、爰に群立ち、彼に辟易し、七縱七横に駈立てらる。されども李如梅・楊登山、大軍にて競ひて來れば、城中の日本勢共、敵は大勢ぞ、討捨にせよと呼び、深入なせそ。早々引取れと、颯と打入れける。此時、敵を討つ事、若干なりと

いへども、彼は大軍なれば、少しも痿ます、切出でたる日本勢、四方の伏兵、起るに逢うて、討たれたる者、四百餘人なり。之を軍の手合として、副總兵の李芳春と解生は、西の手より攻寄せ、風を見て、近邊の在家に火を懸けたり。猛火雲を卷いて燒上り、黑煙城中に吹き懸りしかば、煙と雲と亂れ合ひて、空は霧の海と成り、十里・二十里に掩ひ來り、宇宙に[illegible]々とし、蔚山城を包みつゝ、常闇と成りにけり。解生・李芳春、是に利を得て、煙下に紛れて、塀際近く押詰め、本城と出城の島山の間の川に、日本船有りて、兩方持合ひけるが、芳春・解生共、其船を取りて、乘入らんとす。城中より、加藤清兵衞下知して、大筒・中筒の鐵炮を集め、數千挺筒を雙べて、雨の降る如く激しく打ちければ、芳春・解生が兵共、皆船底に平伏して、鐵炮を遁れんと犇めきけるを、加藤清兵衞、眼を瞋らし、身を揉みて下知し、大筒を雙べて、入れ代り入れ代り、隙間もなく打たせければ、寄手の大明人共、船四五艘乘沈めて、死者數を知らず。[illegible]に取付き、泣叫びて、浮きぬ沈みぬ流れ漾ふ有様、喩へん方はなかりける。城中よりも島山よりも、猶も力を得、指交みて打立ち射立つる事、雨の降るが如し。

大將解生も李芳春も、船を打沈められ、流木に取付き、漸々に游ぎ上り、命計り助かりて、本陣へ歸りける。寄手手段を替へて攻むれども、城中少しも撓まず、手強く防戰せしかば、攻倦んで、寄手是より引退くに、三里の間に陣を張る。此時寄手の方へ、城中の日本の兵、一人生捕りけるが、清正城中に有りと、堅く申しけるに依りて、大明人質なりと心得て、彌、攻口を寬げる。寄手猛勢たりと雖も、城中要害に便りて、防ぎければ、さまで退屈するに及ばず。清正名代加藤清兵衞は、城中を點檢するに、兵糧已に盡き、二三日の養ひにも不足なれば、此由、機張に居らるゝ清正に告げ、急ぎ後巻仕られ候へと、申し送らんとて、此旨淺野左京大夫の前へ參り、申達す。幸長尤もなりと同事し、其使をぞ選まれける。京兆申されけるは、誰にても機張へ使者に參らん者は、近頃の忠節たるべきぞやと有りけれども、此大敵の圍の中を出て、誰も機張へ行かんと云ふ者なかりしに、幸長の兵木村頼母助、進み出で、苦しかるまじき樣に候はゞ、拙者罷越し、見申すべしと云ふ。幸長大いに悅び、[illegible]頼母[illegible]は有る[illegible]、汝を

流し感じつゝ、さりながら數萬騎の圍を出で、安穩にして又逢ふべき事、定まらざるなり。 主從の名殘なればとて、幸長盃を取上げつゝ、頼母にぞ差したりける。木村盃を給はり、今生の御暇乞是迄なり。 今を限りと思ひければ、兎角の事に及ばずして、涙に咽びて立出でけり。 加藤清兵衞・宍戸備前も見送りつゝ、相構へて恙なく、著き致され候へとて、涙を流し別れにける。 哀れなる次第なり。 朝鮮、寒國の取りえには、塀柵を付くるに、少し鍬形を付け柱を立て、其根へ水を懸くれば、氷閉ぢて、磐石の如し。 一夜の間に、出城の島山と、蔚山本城との間に、塀を附け、矢間を切り、鐵炮を調へて待懸けたり。 明くれば十二月廿四日なり。 昨日此手を破りし寄手に、麻貴、又荒手に加はり、號令を嚴にし、諸卒を隨へ攻め近付き、茅國器も、浙の兵を引率し、昨廿三日李如梅、手痛く合戰し、多くの日本人を討取らば、彼が功に勝れんと工み、今日一手柄せんとて、兩手の兵、此架へ攻入りて、塀・柵引破り、三の丸迄込入りける故に、城中是に騷ぎて、鐵炮を集めて、雨の降るが如く、散々に打ち、五間・七間に引請け、差詰めて放しければ、鉛子一つにて、二人はつなげども、

冷泉元光討死

浮矢はなかりける。寄手の大明人、或は打殺され、或は手負ふ者數を知らず。されども大軍なれば、手負も死人をも顧みず、三の丸を揉破らんとせし處を、幸長自身鐡を合せ突出しけり。然りと雖も、新手を入替へ〳〵攻込み〳〵、透間をあらせざる事、誠に項羽が函谷を破りしも、斯くやありけん。三の丸を守りし毛利中納言輝元の家臣冷泉民部大輔元光は、毛利家に於て、事の急なる時は、必ず魁け殿の役たり。今度も、又普請等、首尾もせざる三の丸を守る可き旨、御目附太田飛騨守より、觸れ來りぬ。民部大輔、堅く守るべきの條、御心安く候へと返答せり。かく云ふも果てぬに、麻貴と茅國器、多勢手を分け襲ひ來りぬ。冷泉、手の者共、左右に從へ喚き叫んで、火花を散らし相戰ふ事、數刻に及べり。然りと雖も、或は手負ひ戰ふに困り、或は討死し、殘少に見えし處に、麻貴・茅國器、彌、勝つに乘りて攻入りしかば、冷泉民部大輔元光と名乘りて、長刀を水車に廻し、手もとに進む敵共、十五六人薙伏せ、阿曾沼豐前守と一所に枕を並べ、討死を遂げたりける。弓手・妻手にて、郎等共廿餘人、一つ枕に討たれぬ。白松善右衛門尉・伊賀崎又兵衛尉・吉安太郎兵衛は、其折節、他の

口に有りて、[illegible]を[illegible]給ひ其數にして
腹十文字に掻切り、二人共に[illegible]
殘感涙を流しける。[illegible]
假名實名を記付け[illegible]
位牌を[illegible]建置き給ひけり。其後、[illegible]吉晴[illegible]の忠節に[illegible]
家康將軍家より、雲州恩賜有りて、入部しけるに、此時の由來を聞き、吉晴涙を流し、其節義を感じ、艶くも先矩の如く寺領沙汰せられけるとかや。扨て又、淺野左京大夫は、猶も弓・鐵炮を多く寄せ、火花を散らし戰ひけるを、加藤淸兵衞申しけるは、淺野殿は將軍の御親族の中なり。急ぎ本丸へ入り給ひ然るべく候はんと、諫めけれ共、幸長他に讓り耳にも聞入れ給はず、二の丸に有りて、度々突いて出で、自身相働き、下知などもおいらかなり。されども冷泉元光討たれつゝ、皆以外あしく／＼になりしかば、麻貴・茅國器、兩大將勝つに乘じて、矢・鐵炮にも痿まず攻入りて、日本人の小屋、少々燒き拂ひ、城中の日本勢を、島山・島山とに追止めたり。今日の戰に、城中

に討たれたる者五百餘人、寄手は一萬人に餘れり。砦へ爰に陣を据ゑ、本城と島山の間を取切り、後陣の大軍を引付け、竹策を以て仕寄せば、城中怺へがたかるべきを、軍は是迄なりとて引退く。又明日寄すべしと議定せしに、夜に入りて、本城・島山兩城の通路をなし、塀・柵を附け、要害を構へしに依りて、毎日同様の追合なり。寄手は夥しき大軍なれば、新手を入替へ〱、少しも屈する體なし。日本勢は小勢なれば、軍に勝つても、底意がなし。毎日攻めらるゝ時は、城中も島山も、責念佛を申し、雜兵湧返り喚き叫ぶとも、敵引退けば、又其の透に息をつぎ怺へ居たり。兎に角に兵糧はなし、次第に手負・死人重なれば、城中以の外に、弱りてぞ見えたりける。

大明勢島山砦を攻む并加藤主計頭蔚山に入る

蔚山城強くして、寄手攻倦みしかば、諸大將、皆楊經理の前に來り申しけるは、只一途に、島山の取出を攻取らば、自ら本城は、弱るべしと評定し、十二月廿五日の巳の刻に、麻貴を大將にて、二萬餘騎、島山へ攻懸る。此島山と申すは、巖石峨々として、

古松枝を垂れ、蒼苔露滑なり。曲經凹凸として、人馬卒爾に登り難し。況んや物具差固めて、攻めらるべくや。城には、毛利家三刀屋四兵衞・野島掃部・淺口・高野瀬・三澤・佐世・高橋・官・三吉等に、淸正が兵出田宮内少輔・佐々平右衞門、籠りしかば、少しも騷ぐ事なし。大明の猛勢を、塀下へ引附けんとせし事なれば、寄手は塀に附くまで、鐵炮をも打出さず、寂莫として音もなし。大明勢氣を得て切岸を上り、取寄せたる處を、二三日間に引請け、千挺計りの鐵炮を、一度に放立てたるに、切岸より浪打ち涯まで、沓の子を打つたる如くに詰寄せたる寄手共、なじかは怺ふべき。一同に嚏とぞ崩れける。手負・死人の伏したるは、算を亂せるが如くなり、大將麻貴、大いに怒りて、白旗を取りて、士卒を勵まし、又取返し、彌が上に攻め上る。島山は小勢なれば、突いては出でず。又蔚山にも、數萬の敵を請けたれば、驅合ひては、惡しかりなん。只鐵炮にて打殺せと、下知して出でず。麻貴怒り悶えて、猶も攻入らんと、鐵炮防の道具挨牌布簾をかつぎ、連懸梯などの攻具を持ち、曳や聲を出し、險岨の山を攀登る。島山の兵共が、兼て工みし事なれば、架へ置きたる大石・大木を、一度

に二十計り切りて、落懸けしかば、壓に打たれ、石に當りて、將棊倒をするが如く、一度に捲り落されたり。上を下へと騷ぐ所を、塀裏の矢倉の上よりも、鐵炮にて打ちひしげば、或は甲を通され、或は手足を打落され、手負・死人は山の如し。大勢の中へ、打出す鐵炮なれば、彈一つに、二人・三人はつなげども、浮矢は一つもなし。三時間計りの戰に、寄手の討死六千餘人なり。半死・半生の者は、數を知らず。麻貴は之を見て、爰にて人種を盡しては、叶ふまじとて、手負を助けて、本の陣へ引取り、明日火攻にすべしとて支度せり。さる程に、淺野幸長の使木村賴母は、廿三日の月の出づるに、心細くも蔚山城を出で、十重・二十重の圍の中を、忍び出でて、山野の艱難を經、二日路有る機張へ廿五日の曉に、參著しけり。加藤主計頭急ぎ對面せられければ、木村蔚山籠城既に難儀に及び候由申す。清正聞くと均しく、庄林隼人佐一心を呼び、早々船を揃へよ。吾一騎なりとも、只今蔚山指して、乘出すべし。皆々其支度相觸るべし。吾日本を出づる時、淺野彈正暇乞に參り、子息左京大夫幸長事若輩に候なれば、必々賴入ると有りし時、心安く存ぜられよ。幸長難儀せば、必ず

助け申すべしと、堅く約束をなせり。幸長を討たせては、吾何の面目有りて、再び日本へ歸朝し、彈正に逢ふべきや。吾蔚山に入らざる前に幸長討死せば、一騎なりとも、敵陣へ駈入りつゝ、彼が弔の一戰し、討死を遂げつゝ、日本にての約束を、冥途黄泉迄合すべしと、淸正六具をしめ、早貝を吹かせ、旗を出し進みしかば、手元に有る軍兵共も、吾も〳〵と打立ちける。庄林は、船奉行梶原を呼び、船を點檢しけるに、只十艘ならではなし。此旨斯くと申しければ、さらば人を選乘せ候へと有りしに、隼人承り、屈强の兵五百餘騎選み出し、船十艘に取乘りけり。西生浦城には、加藤美作守・片岡右馬助、千五百餘にて、殘し置き、機張城は捨てゝも苦しからず。釜山浦の大將達へ、急ぎ後詰せらるべしと申遣し、十艘の船の纜を解き、鬨を上げて押出しける心の中こそ冷しけれ。漕げや急げと、下知する程に、廿五日の卯の刻に出でて、終夜漕渡り、廿六日の辰の刻には、蔚山城へ一里半計になりにけり。爰にて蔚山を見渡せば、鐵炮の音、事々しく鳴出し、汀には旗指物多く立騒ぎぬ。淸正之を見て、扨は未だ落城せざりけると、上下勇み喜と勢出にけり。然れども蔚山近邊の諸を

見れば、大明人の番船千艘計り漕竝べ、蜘の子を散らしたるが如くなり。水手・梶取之を見て、大に驚き震慴れつゝ、何としてあの中を御通り候はんや。及びもなき事にこそ、命知らずの主計殿哉と囁きて、艫を引入れつゝ、浪に搖られ居たり。箕部金太夫・庄林隼人、大の眼を見出し、船子共をはつたと睨み、何とて御船をば漕がざるぞ、言語道斷の奴原なんめりと、いらてけれども、聞かざる振にて、動きもせず。清正之を見て、井上大九郎・飯田角兵衞を呼び、あの紺の布子白き大筋附きたる大男めは船頭と見えたり。是へ連れて參り候へと、申されければ、大九郎・角兵衞承り、左右の手を引張り、主計頭前に引居ゑたり。清正はつたと睨み、只今の過言時も時にこそよれ。吾を始め、命有るべしとも思はざるに、汝一人死ぬる樣に得りし事、返す返すも奇怪なり。但し吾も、只今討死すべきなれば、先づ己を先に立てんと云ふ儘に、大兼光と云ふ刀を拔けば、玉散る計りになれるを、するりと拔き、齒を挽き試しければ、かの船頭以の外驚き騒ぎ、色違へして、平に御助下され候へ。御船をば一人早く仕るべしと、涙を流し歎きしかば、清正機嫌を直し、左もさうずとて助けゝり。

清正蔚山に入る

此船頭、聲を上げ、類船共を招き、いざ漕げや船子共とて、押立て漕出しぬ。吁大將哉とぞ覺えける。殘の船の水主共之を見て、吾も〳〵と艫を直し、漕出でしかば、清正斜ならず悅びて、門出はよきぞ急げやとて、大に笑ひつゝ、十餘艘の船共、旣に蔚山近く成りにける處に、大明の番船五百艘、主計が船を遮止せんと、漕寄せ引包み、一揉に揉み、手痛く攻めし所を、弓・鐵炮を放立て、曳々聲を揚げ、眞一文字に其中を漕通りしに、森本儀太夫・飯田角兵衞、猛威を震ひ、番船二艘乘取り、撫斬りに海へ斬浸りけり。夫より主計頭が妙法の旗の船を見ては、敵の船共中を明けて通しけり。蔚山と島山との間の川へ押入らんとするに、爰にも番船數百艘有りて、弓・鐵炮雨の降るが如く、放懸けしかども、主計頭十餘艘計りにて、妙法の旗を押立て、淸正は例の銀の長烏帽子の甲を著し、長刀を脇に挾み、六尺ゆたかにのび上り、船の舳先に立跨り、供船を下知しつゝ漕入りけり。大明人共、清正が出立を見知りて、恐れて近くは寄らず、只遠矢に雨の降るが如く、鐵炮を打懸けしかども、清正は徐々と蔚山城へ入りにける。城中大に悅びて、勇が以前に十倍せり。寄手は今迄、清正城中

に有るか無きかと、怪みけるに、まがふべくもなく押入らば、上下の大明人、力を落し、且は清正が武勇の程、敵・味方共に舌を振ひ恐れしかば、五十萬騎の明兵共、彼が籠りたるに恐れつゝ、攻めんと云ふ者なかりける。城中には力を得、回天の力を出さんと、勇む事斜ならず。加藤主計頭、事故無く、蔚山へ籠られければ、本丸をば、淺野左京大夫幸長・太田飛驒守、並に清正名代加藤清兵衛、持固めたり。二の丸は加藤清正・宍戸備前守、三の丸は、加藤與左衛門尉・永野三郎右衛門、中の丸をば、箕部金太夫・九鬼四郎兵衛、持固めたり。されども萬里の風波を阻て、異國の中の籠城にて、殊に數萬騎の大敵に圍まれしかば、心細く思はぬ者はなし。かゝる事を、本朝の靈神、哀憐の眸をや垂れ給ひけん。爰に不思議の事有り。廿六日の朝、清正、蔚山へ馳入りて、三時間計り過ぎて、釜山浦より、毛利壹岐守並に安藝宰相秀元より安國寺瓊長老、金吾中納言秀秋より山口玄蕃、彼是上下百人計り、蔚山へ指越されけるに、大敵四方を取卷きしかば、入る事は中々思もよらず。蔚山近き浦に、暫く船を浮べ、城の體を眺め居り。兎やせん角やせんと、談合せし處に、日本の方より怪氣なる黑

雲立出でて。風に隨ひて、蔚山の上へ舞ひ來たり、近付くに隨ひて見れば、雲にも霧にも非ず、大なる鶴共、百千萬固まり、風に隨ひて飛揚せり。只野分烈しき秋の朝、散亂れたる木葉の、空に飄りて行くが如し。其數幾千萬と云ふ數を知らず。蔚山城の上に、飛上り舞下り、良久しく翩翻し、梢の風に吹かれて、何方ともなく、飛去りけり。朝鮮在陣六年の間、終に此鶴の鳥を見ず。此國に鶴なし。然るに只今の奇瑞は、是全く他に非ず、本朝垂跡の靈神、宗廟遠く西戎の空に立ちかけり給ひ、官軍擁護の力を、添へさせ給ふ者なるべし。殊更鶴は、天照大神宮・八幡大菩薩の權化なれども、異國の軍神なりしと、城中にも島山にも、數萬の軍勢、頭を地に付け、手を叉へ、禮拜をなし、只日本國大小の神明、皇運の天降らせ給ふ心地して、信心を疑はざるはなかりける。毛利壹岐守・安國寺・山口玄蕃も、此靈瑞を、賴もしく思ひ、一刻も早く、後卷を急がんとて、釜山浦へ引返しけり。爰に又不思議の事有り。本朝肥後國に、藤崎八幡宮と申し奉る神社有り。加藤清正分國なれば、此宮を信仰し、常に歩を運ぶ。神田・社領なども、寄進したりしが、慶長三年正月二日に、彼藤崎八幡の

明軍圍を解く

神主の子、俄に狂ひ、様々の不思議を現しけるが、口走りて申しけるは、吾に八幡大菩薩乗りうつらせ給ひたり。如何に諸人能々承れ。高麗の蔚山城を、夷狄等數十萬にて、去る十二月廿二日より、今日正月二日迄、十一日の間、取圍みて攻むる事、夥しき次第なり。加藤清正も、彼の城に籠れり。夷狄等猛勢にて、既に城中難儀に及ぶ間、吾等彼地へ立護り、五十萬騎の夷共を、明三日に悉く追拂ひ候はん間、皆皆安堵仕候へとて、飛上り〳〵託宣し、良久しくして、物付は覺めて、本復せり。蔚山籠城は道遠ければ、日本にて知る人なし。皆々誠しからず思ふ處に、案の如く、正月八日に、高麗より飛脚舟著きて、舊冬十二月廿二日より、大敵蔚山城を取卷き、難儀に及びし由註進有り。扨こそ八幡宮の御託宣と、少しも違はじと、皆々信心を起しけるに、果して正月三日に、後卷有りて蔚山城圍を解き、大明・朝鮮人敗北仕り、大半討取り、籠城運を開き候通り、正月十八日に、註進到來せしかば、諸人彌々隨喜渇仰の頭を傾け、神力冥感の威徳を、讃歎せぬはなし。歸朝の時、清正右の旨聞き届けられ、増々歸依の思をなして、自ら社頭へ參詣し、重ねて社領を寄せられける。世

大明[illegible]加藤主計頭蔚山に入る

澆季に及びて、佛神の感應なきに似たりと雖も、かゝる奇特・不思議有りけるは、有難かりし事どもなり。

蔚山城兵糧盡くるに及び飢ゆ
并楊鎬加藤主計頭を虜にせんと欲す

明軍再び蔚山城を圍む

大明の楊經理は、諸大將に向ひて、最前船にて乘入る時、取卷きて討たば、清正をば安安と討取りし者を、今は後悔益なし。されば各〻今一と攻め攻め給へ。餘りに本意なき事なりと、下知しければ、大明・朝鮮の兵共、二手になりて、十二月廿六日の午の刻に、蔚山と島山と、一同に攻駈る。持楯・竹束をつきかざし、曳や聲を出し攀登る。荒手を入れ代へ〳〵攻めけれども、城中には、清正入りたるに力を得、寄手を近々と引付けて、大石を落し、壓木を放懸け、漾ふ處を狙ひ濟まし、鐵炮にて、雨の降るが如く、打立てしかば、塀下に雲霞の如く、蟻が上に重なる寄手共なれば、甲を摧かれ、腰を打切られ、岸の下へ捲り落さるゝ事、只沙を崩すが如し。城中の爲には骨折

りながら、心を慰めける。終日戰ひ暮しけれども、城中少も弱らねば、寄手の諸大將之を見て、總大將楊鎬に申す樣は、此城力攻にせば、只軍兵共の討たるゝのみにして、功をなす事有るべからず。某等熟と見るに、城中、水の手自由ならず、兵糧多からずと見え候間、只先軍を止めて、遠卷に陣取り、鳥も通らぬ樣にせば、日數を經て陷落になり、戰はずして、清正・幸長を擒にすべしと、諫めしかば、楊鎬、此儀尤もなりと同じ、廿六日の暮より、四方の寄手、城涯に押詰め、嚴しく隙間もなく、打圍みたり。されども清正、入りたるに氣を得て物ともせず、本城・島山、互に力を合して、持堅めたり。主計頭は、諸大將に向ひて、清正城へ籠りたる驗しに、一夜討仕るべしとて、庄林隼人佐一心・森本義太夫・飯田角兵衛・吉村吉左衛門を大將にして、混甲三百餘騎・鐵炮三百張、眞先に押立て、蔚山の東の門を開き、左京の李如梅が陣へ向うて、鬨を揚げたりける。寄手、是に驚きて、得道具押取り〳〵防ぎ戰ふ處を、清正が魁に、鐵炮をつるべ放つと齊しく、飯田角兵衛・森本義太夫・近藤四郎右衛門・古橋清助・相田權六、五人の兵共、眞先に進みて、一度に鑓を打入れ、黑煙を踏み立て挑戰

明軍復敗る

す。庄林隼人・吉村吉右衛門、指揮を打振り、先駈討たすな、續けや〳〵と、下知しければ、三百餘の兵共、鞆を傾け、鑓先を雙べ、一度に突いて懸りける。李如梅が先手、茅國器・盧遊擊・董正誼・陳寅等、東西に拔合ひ、南北に變化して、防戰ふといへども、清正が兵共、短兵急に拉げば、鑓下にて數輩の勇士討死し、大明人怺へ兼ね漂ふ處を、清正が兵、曳々聲を上げて、突立て〳〵、終に追崩し、軍に討勝ちて、大明人の首七百二十討取り、敵は大軍ぞや、長追すな。早や引取れと下知し、手負共を眞中に引包み、打散りたる人數を索し、早々城へ取込みけり。李如梅は、賴切つたる剛兵共を討たせ、先陣を切り崩されしかども、大軍なれば、遠引きせず、篝火を焼きて、持直しけり。清正は、討取りし首共實檢し、機嫌斜めならず。今度の籠城の事、軍兵計りに有らず。近邊の雜人迄、逃籠りしかば、城中分内狹くして、人數の居住、中々難儀なりければ、二の丸と三の丸との間に、小屋を懸けんとて、明廿七日の朝、清正、小性・物頭計り召連れ、二の丸・三の丸の間に、平かなる芝原廣き所ありしへ出でられ、小屋の評定をなす。爰に蔚山より、北の方に高き山有り。臨江山と云ふ。是に楊登

山・彭友徳、數千にて陣取りて、蔚山城内を、目の下に直下せり。されども其間六町程有りて、普通の弓矢・鐵炮の屆くべきにあらざる故に、大明人共、佛郎機を仕懸け、蔚山へ打懸る。清正は小性並に物主共召連れ、芝原の高き處へ打出でければ、彼山の寄手共、すはやよき仕物よとて、例の石火矢を打懸けたるに、其玉過たず、清正が左の方に居たる步侍に中り、胴中より上を寸々に打切り、腰より下計り殘しける。皆々色を變じ騷ぎけるに、清正下知しけるは、何れも騷ぎ立つべからず。少も動くべからず。居敷きて能有るべしと、掟をなし、皆々承り候とて、少も動かず有りけるに、又寄手より、同じ目當にて、石火矢を打懸けたり。此度は人には中らず、芝原へ狸の穴の勢に、黑煙を立て打込みたり。此時、小性・馬廻、猶々怺へ兼ね見えければ、清正眼を瞋かし、命の惜きは、吾も人も同じ事ぞ。清正、爰に退かず居候間、相構へて少しも騷ぎ立つべからずと、堅く下知しけるに、三番目に、又石火矢を打懸けたり。此彈丸、目當高くして、詰城よりも、遙に高く玉通りぬ。其時、清正、床几を立去れば、逃よ者共とて、一同にぱつと引入りける。楊登山・彭友徳等、之れを見て、初

て兩度は、目當下りたる故に、能く矢所へ行かず。さるにより、芝原の日本人共、少も騷がざりしが、三番目の石火矢、目當能くして、日本人の中へ打込みたるにより、皆々逃げ候と心得、其後は、石火矢を、三番目の玉行に、目當高々と打懸くる故、玉行、城の上を越え、城中へ一つも當らざるなり。其時、淸正が兵共、感じ合せ、初め兩度の石火矢に、淸正退き給はず、三番目の空を越ゆる、玉の時取られ退き候段、凡慮の及ぶ所にあらずと、稱美しける程に、城中偏に聞き及びて、哀れ能き大將軍哉。太閤の御器量、天才雄略は、古今に獨歩せし故に、御目金にて見立て給ひ、主計頭が勇士と云ひ、頓機と云ひ、人間の類にあらず。只鬼神の變化なるべしと、舌を振はぬは無りける。かくて寄手の大明勢は、遠卷にして、干殺にせよとて、竹束を附け寄せ、蔚山川には、船橋を架け、亂株・逆茂木を振り、城の廻りには、鹿垣を結ひ、所々に井樓を上げ、弓・鐵炮の手垂を入れ置き、詰り〳〵に番所を架け、衛士七八十人づつ入代り〳〵夜番・廻番絶間もなし。經理の本營に鐘を撞かば、諸大將の陣々の太鼓、井樓共の角を吹鳴し、一同に響き出し最喧し。夜中の挑灯・松火の火行違ふ影明か

日本勢水に缺乏す

なり。城方にも、櫓々に兵共弦音して、抛炬・猿火を塀より外へ投げ出し、若しや夜討も有らんと用心せり。されども水の手取切れ、城中、水に乏しくして、上下難儀に及べり。日中には汲むべきやうなし。夜々城外へ忍出でて、池の水を汲むに、池には死骸を取入れたれば、汲上ぐる水、盡く血なり。されども喉の乾くに堪へ兼ね、穢なき事も忘れ果て、之を汲み寄せ、清正・幸長を始めて、血水を呑みけるに、常々の宇治橋の一二の間、小醒井の風味も斯くやあらん。其上、早や兵糧殘らず盡きければ、紙を食ひ壁土を煎じて、呑みけれども、夫れも續かず、餘りに事迫り、清正が春風と云ふ名馬、幸長の巴と云ふ馬を殺し、其肉を調味し、兩大將、自身持口々々へ持つて廻り、働く兵共に、與ふる心の中こそ悲しけれ。働く士卒にこそ、一粒の米をも與へたれ。雜人共には、去る廿二日より、兵糧少も與へざれば、下々の窮困斜ならず、雜人原は、甲斐なき命助からんとて、柵涯迄よろぼひ出づる體、眞黑に痩衰へ、餓鬼道の罪人も、斯くやと覺えて哀れなり。朝鮮人の男女は、寄手に知人のみなれば、如何にもして、引出られば出でんと志し、柵に取付き、悶え焦れ、泣き悲し

む聲々、叫喚大叫喚の苦、目の前にて、見るにも聞くにも堪へ兼ねたり。外へ出でんとする餓人をば、寄手の大明人共、鐵炮・半弓にて射倒したるを、其外の餓人共、一所に集りて、未だ死に切らず、片息なる者を、小刀・脇差にて、肉を殺ぎ皮を斷つて、之を食す。目も當てられぬ有樣なり。田の畦・岸の額に有る草をば、足輕共を遣し、取寄せ、清正・幸長も食しける位なれば、其下々は、喩へん方もなし。木戸の内堀の蔭に、よろめき居たれども、太刀をつかひ、弓を挽くに及ばず、只息をついてこそ居りたりけれ。今は早や精力盡き果てしかば、餘りに詮方なき儘に、勇士共は、夜に入り、城より忍出でて、討死したる寄手の死骸を搜し、腰に付けたる炒米・牛の炙肉を取りて歸り、大將達に奉れども、餓を忍びて、働きの能き士卒に、少づつ與へける。隨珠・和璧の玉よりも、彌珍しく覺えける。斯くては叶はじと思ひ、寄手を謀り退かせん爲に、清正は箕部金太夫・宮田平七を使として、寄手の總大將楊鎬に申されけるは、日本國大將加藤主計頭清正と、大明の楊將軍と相戰ふ事數日、徒に兩國の士民、罪無して死傷する事を憐む。是を以て、吾直に、楊將軍に對面し、日本の意趣を申

し、軍を撤し軍兵を引取るべしと、云うて遣しければ、楊鎬大に悦びて云く、倭將清正、勢盡きて降參を乞ふ。然れども吾之を赦さず。只今清正を生捕りて、闕下に獻せんと、陣中へ觸れ聞かせければ、大明・朝鮮の百萬騎、皆喜悦の眉を開き、一同に萬歳を唱ふ。此時、吳惟忠は、軍中に有りけるが、物馴れたる老武者にて、獨り楊鎬に囁きけるは、圍師必缺と云ふ事有り。此間、數日攻むれども、落ちざれば一方を開きて、逃出づる者を出しなば、義を守る勇士も、心惹かれて、必ず落行くべし。此時、伏兵を以て、落行く者を討取りなば、清正猛しと云へども、即時に、擒にすべしと諫めける。此儀尤なれば、諫に隨ふべきを、城中より扱の事出來れば、容易く清正を引出し、生捕らんと思詰めて、楊鎬、目を張り手を上げて、吳惟忠に向つて罵りて云く、老將軍は、吾一箇の活、清正を遁さんと思ひ給ふか。今日・明日に生捕にして、御目に懸くべきものをと、憤りければ、此上は是非に及ばずとて、吳惟忠、再び諫めず。さる程に、約束の日にもなりしかば、城外の所を指圖し、寄手の大將楊鎬は、先立て其場へ行き、威儀を整へて、頻りに清正を呼び、兼ての約束なれば、參會せんとて、清

正、例の銀の長烏帽子の甲に、氷魚繊の鎧に、紫下紺の大袖付、小鍛光と云ふ太刀を帶び、軍粧を刷ひ、床几に腰を懸け、頓て出んと支度し居りける所へ、淺野左京大夫馳來り、淸正が鎧の袖にすがり、是は物の附きて狂ひ給ふか。是非出で給ふ事を、思止まり給へ。異國人の心、計り難し。若し對面の折節、傍に大力の兵共を隱置き、急に出でて御身を執へ、引立て行かんに、矢長に思ふとも叶ふまじ。將又彼と堅く約して、出でずして叶はざる事ならば、御身の顏を彼見知る事なければ、幸長御身の眞似をして、出でて會盟を降るべきなり。貴殿は、日本の弓矢の張本、幸長は數ならぬ者なれば、討たれても擒となりても、日本の弱將軍の御障になるべからずと、諫め申しければ、淸正承引の色なく、其方を名代に出し、敵の手に生捕らせ、淸正爭でか生甲斐有るべき。其上、流石本朝と異國との晴軍、殊更大明の將軍と約束せしを、忽に變改せん事、日本の御名折なり。是非出で候はんと、思切りたる風情なり。幸長、言を荒らかにし眼瞋し、斯かる淺ましき事にや候べき。太閤、多年思召立ち、朝鮮征伐し給ふ事は、今に七年、一朝にして捨てん事、豈悲しからすや。大行は不顧

幸長清正を諫む

細謹、大禮は不必辭讓、魚肉の身を以て、爼の中に入らん事、智才なきに似たり。されば人行非時不順、友之義也。是程に狹き所存にて、君の御大事に立ち給はんや。出でずして叶はざれば、某出づべきぞ。早く冑を脱ぎ給へ。幸長、著しつゝ、名代に出で、忠を君臣の恩に報い、義を朋友の交に盡すべしと、涙を流して諫め申されける。されば幸長、廿二歳の若輩たりと雖も、申される處、一々道理至極なれば、毛利家の兵宍戸・吉見・三刀屋・淺口等、竝に清正家人加藤與左衞門・箕部・九鬼・庄林・齋藤・森本・飯田等、皆一同して、左京殿御申しなされ候處、理に當り候。必ず御出候事、思止まり給へと、口々に押して遮れば、清正も道理に服し、某罷出でんと申すも、城中兵糧盡きて、爲方なければ、せめて斯樣に計りて、寄手の總大將楊鎬と、出合ひ刺違へ、死ぬ者ならば、寄手定めて敗北すべし。さあれば、吾一人の命を捨て、城中數萬人を助けんと存ずる故に、思立つては候へども、京兆申さるゝ如く、彼に空しく生捕られては、其甲斐更になければ、先づ止り候はんと、義信面に露れしかば、當座に有りける諸大將・士卒迄、皆清正の勇氣に感じ涙を流さぬはなかりける。卽ち人を遣し、

清正今日出づまじきと、申遣しけり。楊鎬、猶も僞り引出さんと、さまぐ\〵申越しけれども、城中一同に出すまじと思へば、後には中々返事もせず、古より城下の盟と云ふ事有り。城を圍みて後、城主出でて、和談會盟し、寄手を引取らするは、城中の恥辱にて、寄手の爲めに本意なり。清正、勇知たりと雖も、文學なき人なれば、斯樣の事を知らず、大明の大將に參會するは、日本の眉目なりと思ひつゝ、かくは取扱はれける。楊鎬は、相闘相違して、安すからず思ひ、一時も早く攻落さんと、士卒を馳集め、怒り悶え、攻めよ懸けよと下知しけれども、朝鮮國の習にて、寒き事斜めならず。風交りに降る霙に、肌迄濡れ通り、深田を渡りて攻懸くるに、深泥顏迄上り、鬚には垂氷下り、毛も氷れ、手足も凍え固りつゝ、一身に暖なく、寒苦に肩を閉ぢられ、骨迄も冷え貫きければ、後より進まんと勵めども、大明人も朝鮮人も、耳にも聞き入れず。爰の堤の陰、彼の岸の陰に固まり、鐵炮を遁れんと平伏す、聲々に喚き叫ぶ。只地獄の苦みも、かくやと思ひ知られたり。城中の日本勢も穀を絶つ事、既に十日に及びぬれば、極寒に攻められ、弓・鐵炮を持ち乍ら、雪雨にうたれ、飢には

及びたり。一身皆氷の如くなれば、飢え疲れ、皆塀裏に倒伏し、喚叫の聲々を聞くに、心も消々と、力弱る計りなり。數年の大亂に、瘦黒み、鎧甲は穢く損じたり。顏も手足も垢付きて、人間の體とは見えず。かくては怺へ難く、如何せんと身を揉みて、今年も既に暮れぬ。十二月晦日になりにけれども、歲末・年始の沙汰にも及ばず、最後の近附を待居たる、心の中こそ悲しけれ。此旨、方々へ聞えければ、朝鮮國所々に陣取りたる日本の諸大將、竝に釜山浦在城の大名・小名、悉く蔚山城に後卷仕るべしとて、西生浦迄馳せ集る事、日夜引きも切らず、近日、蔚山城へ押向はんと、支度せり。

日本諸軍勢蔚山城後卷幷大明人敗北

明くれば、慶長三年戊正月朔日になりしかば、小西攝津守行長、蔚山城後卷として、順天より打立ち、船にて先手の勢三千餘、大船共に乘り連れ、旗・指物にて飾立て、水の手より、城へ力を合せんと、漕上る。釜山浦より、毛利安藝宰相秀元・黑田甲斐守長

日本軍明軍對陣

政、竝に金吾中納言秀秋の勢、三萬餘騎にて、正月二日の晩景に、蔚山より十里計り限りたる高山へ上り、陣を張り、順天より加藤左馬助嘉明・蜂須賀阿波守家政・長曾我部土佐守元親・脇坂中務大輔安治・藤堂佐渡守高虎等、四國の兵共二萬餘騎、蔚山近き臺星山に取上り、大明勢と對陣せり。是をば城中には知らずして、元日にもなりしかば、清正は鎧櫃より、干飯を二袋取出し、粥に煮て、士卒共に少しづつ配與へ、年始の祝を表し、淺野幸長は、干飯だに無かりしかば、家の子・郎等を小屋へ呼寄せ、吾身は鎧の上に、北政所より贈り下されたる紫小袖をはをり、豆を火にて炙せ、物頭には三粒づつ、士卒には一粒づつ、年始の悦とて配り與へ、是非に及ばざる事なり。かくて餓死せんより、斬つて出で討死すべしとて、最後の支度せり。かくて元日も暮れ、三日にもなりぬ。斬つて出でやする、腹をや切るべしと、評定しける所に、大手を堅めたる清正が執事加藤與左衞門が方より、本丸へ人を走らかし、向の高山に雲の如くなる物、夥しく見え候が、多分後巻の旗共かと、見え候と註進す。城中是に勢ひて、清正・幸長・宍戸・太田も、矢倉に上り眺むれば、日本道二里計り阻てたる

向の嶺々に、日本の旗・指物、幾千萬ともなく充滿ちて、只白鷺の飛び集るが如し。海上を見れば、兵船千艘計り飾立て、小西が馬印日の丸書きたる茶袋を、春風に吹き靡かし、大筒・石火矢を放立て、喚き叫びて、蔚山指して漕ぎ近付き、すはや後詰の來るは、あはれ潤色やと、悦び勇む聲々、矢倉々々・塀裏・役所々々に喧しければ、其音、城中に響き渡り、只地震の搖るが如くなり。寄手の大明人は、後卷の押に置きし者共より、釜山浦の日本人、同勢雲霞の如く、近付き來たる由、告げ來れば、山を顧み海上を眺めて、如何はせんと周章てけり。總大將楊鎬恐怖して、後詰の手當をせんとも思はず。只明四日に陣拂して、引退くべしと定めけり。陣々是より騒立ちける程に、大明人の陣取りし所より、日本道一里計り近き臺星山に、狼煙二筋上りつゝ、日本の國勢共、雲霞の如くに取上り、大明の陣中を、目の下に見下したり。旗・指物の、嵐に飜へりて有る樣は、龍蛇の揚るかと怪まる。あはや日本勢の近付きたるはと、云ふ程こそ有りけれ。大明人の陣々は上を下へぞ返しける。夜に入りしかば、加藤嘉明・藤堂高虎以下、峯より嶺を傳へ、鶴翼に陣を取りつゝ、蔚山城中へ力を合せよ

明軍敗北

とて、近邊の林を切りくべて、數萬雲火を燒きければ、陣中、其光に照され、只白晝に異ならず。　蔚山城にも、遠火を合せよとて、本丸の高き大庭にて、通夜遠火を燒きたりける。　毛利宰相・黑田長政・立花右近・吉川廣家等が陣にも、所々に火を放しければ、海上の小西が數千艘の兵船にも、篝を油斷なく燒きける程に、汀につゞき、海上に光りて、身の毛竪ちて夥しく、其形勢、只四方に充滿ちて連りければ、銀漢高く澄みわたる夜に、欄干たる星の列るが如くなり。　夜深に隨ひて、日本勢、陸路・海手立挾みて、大明の陣に近付きたり。　寄手總大將楊鎬は、明四日に引拂ふべしと定めけれども、後卷の日本勢、近付くを見て、明日迄の恢場もなく、諸大將にも牒合(しめしあは)さず、吾先にと、遽に騷ぎて、三日の夜の亥の刻に、驚きふためきて逃げたりける。　之を聞き付け、すはや總大將經理の落ちられたるは、敵に取卷かれては、叶ふまじと云ふ程こそ遲かりけれ。　楊鎬が後を追ひて、吾先にと逃去る事、引きも切らず。　麾遊擊二千餘騎にて、水の手を固め、陣取有りしが、是にも告知せず、總大將楊經理を始め、大將分の輩、吾も〳〵と退きけり。　されども城北近く、押詰めたる勢は知らざれば、

日本軍蔚山城に詰寄す

城よりも打つて出でず、兎角する内に、雞の聲々打頻り、曉かけて野寺の鐘、五更の空にぞ響きける。　明くれば四日の未明に、後卷の魁黑田長政・立花柳川侍從宗茂・久留米侍從秀包・吉川藏人廣家等を始め、同勢安藝宰相秀元二萬餘、並に金吾中納言秀秋二萬餘にて、蔚山表へ押詰める。　加藤左馬助嘉明・脇坂・藤堂以下の四國勢、臺星山より下し立て、段々に押來り、海上より小西が兵船共、雲霞の如く漕寄る。　夜明けて見れば、寄手の大明勢、あはらになりしを見付け、扨は夜逃にしたる者なり。　殘る奴原、討止めよとて、後詰の日本勢、鐵炮を放立て、大軍、吾劣らじと突懸る。　一番に毛利元就の孫吉川藏人廣家は、紺の唐綾縅の鎧に、八重櫻と名付けたる貞宗の太刀を佩き、蜻蜓留めずと云ふ大長刀を、馬の平首に引き側め、兩筋の馬印を、眞先に押立て、其勢七千餘騎、喚きて懸入りしかば、大明數萬の軍勢、𢤦と崩れ立ち、吾先先と逃上り、向ふの山に、古城有りしへ取込まんと上を下へ逃げ重りし所を、又吉川廣家下知して　大沼・深田へ逃げ懸り、討たるゝ者數を知らず、黑田長政は、川向へ押詰めしかば、此有樣を見て、こは如何に後れたるは、軍兵共、川を渡して懸れや〳〵

と、指揮を振りて下知しけるに、喜多村孫之丞正清、其時は長三郎とて、十五歳になりけるが、金の桔梗笠の指物にて、高雀毛の馬に乘り、一番に川へ乘下り、駿馬に鞭を進め、漲つて流るゝ瀨枕に、逆浪を立てゝぞ游がせける。之を見て、喜多村討すなとて、村上彥右衞門・菅和泉守など、十騎計り、乘込み〳〵、續きけるに、栗山備後守・黑田宗右衞門等、五千餘一度に、𠵅と打浸り、向の岸へ懸上り、追立て〳〵討つて行く。加藤左馬助・藤堂・脇坂・蜂須賀以下の四國勢、大明人を一人も餘さすと、喚き叫びて、黑煙を立て馳來り、蔚山城中、是に力を得、鐵炮を一同に放立て、三方の門を開きて、鑓・長刀の鋒を竝べ拔連れて、突いて出でし所に、如何はしたりけん、清正が兵森本儀太夫・庄林隼人・赤星太郎兵衞・鶴平次・古橋淸助、五人の者共、眞先に鑓を打入れしかば、幸長・宍戶・三刀屋・太田の兵共、越されたるよと們りて、一度に鑓を入れ揉合ひて、追崩しければ、大明・朝鮮の數十萬騎、戰にも及ばず、前陣・後陣一つに成りて、捨先て鞭を打つて逃げたりける。返せ〳〵と們れども、耳にも更に聞き入れず、吾れ先と父をも子をも打捨て、橋の危きをも、道の嶮きをも云はず、彌が上に馳せ重り

ければ、人馬共に巖石・大河・沼田へ堰き落され押入られ、喚き叫ぶ音、さながら山の崩るゝが如くなり。潤川血を流し、死骸岡をなせり。吉川廣家・立花左近・黑田長政・淺野幸長・加藤清正等、手先を廻し、後を競ひ追懸けたり。手負ひたる者は、蹈殺され、押殺され、返合する者は斬つて落され、死ぬる輩數を知らず。吳惟忠・茅國器は、兩手の軍兵を急度備へ立て、殿をしければ、清正打見て、長追ひなせそ。早く引取れと、銀の馬簡の馬印を振りて、招き止めしかば、幸長・宍戸・太田は、追捨てゝ引返す。後卷の日本勢は、いづく迄もと、追懸けしが、茅國器・吳惟忠が除口へ追懸りたる者は、度々返合せ、六七度迄鑓の合ふ程なれば、戰ひながら追行き、日暮に引返す。脇道を追懸けし者は、夜に入る迄追詰め、翌日本陣へ歸りけり。清正手へ、討取りし首數二千三百七十一、幸長手へ七百三十二、宍戸備前守手へ二千五百八十九とぞ聞えける。後詰の日本勢も、一手へ五百・七百・千計り取りける。されども吳惟忠・茅國器、身命を輕んじ備を立て、防退にせしに依りて、大明の諸大將は、辛き命助りて、逃げ延びにけり。太刀・刀・馬・物具・旗・小符・弓・鐵炮、盡く捨てたる事、足の踏む所も無

かりける。されば大明人二年の間に七十五萬の勢を催し、四海の力を盡し、朝鮮一州の軍勢を加へて百萬騎、一城をも攻め落さずして、散々になりて引退く。楊鎬が汚名、麻貴が短才、世間に流布し、笑を遠人に殘す事、末代の恥辱なりと、沙汰せぬ所はなかりける。後卷の大將の中、黑田長政は、城中心許なく思はれしかば、逃ぐる敵をば、手勢共に追はせつゝ、吾身は栗山備後守利安を召具し、一番に城へ駈込み、主計頭恙なしやと、問ふ所に、淸正駈來り、互に悅びの淚を流し、萬死一生の難儀を語る。淸正、此頃の飢に及び、日夜の粉骨に瘦せ衰へ、人間の形とは見えず。右の頰も、片顏大に腫れしが、長政に向ひて申されけるは、不慮に萬死を出で、御目に懸り候。此間、大敵の圍を受け、旣に塀の手を破られ、漸く柵計りにて持ち怺へ候。兵糧一粒も之なきに付、吾等馬共を殺し、自身持廻り、皆々に食物に與へ候。士卒飢え疲れぬ。淸正自身、駈廻り、鐵炮隙なく打ち候故、かやうに顏も腫れ候なり。新田義顯の越前金崎の籠城も、かくや候ひつらん。さりながら各の御後卷にて、運を開き候事、言語に述ぶるに遑あらずと、申されしかば、長政も淚を流し、大將斯樣に

身命を輕んぜざれば、萬里の孤城に、數日の圍を防ぎ候はんや。年來と云ひ今度といひ、武勇のはたばりの程、舌を振り候とぞ申されける。扨も今日の後卷に、日本諸大將、何れも力を盡すといへども、中國勢毛利家より、一番に押懸けて、鑓を入れ其中に二つ引き兩の蜻蜒の樣なる馬印の大將、中にも早く下し懸け突崩し、又大將古城の方へ、横切りに乘込み候に付、大明勢、其方へ退く事叶はず。眞鷹池へ追込まれ、味方大利を得候。清正、蔚山城より右の次第能く見て、中國勢に逢ひ、其馬印を尋ねらるゝに、中國衆の云く、其馬印は、吉川藏人廣家にて候と答ふ。清正其後廣家に參會の刻、比類なきの働感入候。流石に毛利元就の御孫、元春の御子息なれば、尤とは存じながら、中々目を驚かし候。さりながら御馬印、細少にて遠くより見えかね候間、御改め然るべしと有りしかば、廣家申されけるは、主計頭御言に取付き、さ候はゞ、御馬印の馬簡中を下され候へかし。色を替へ持たせ申すべしと、申されける。清正所存に相叶ひ、さ候はゞ、吾の馬印は銀にて候間、其外は何色にもなされ候へとて、持替の馬簡を、廣家へ出されける。廣家、頓て朱にて塗り、赤馬簡

の馬印とせられける。初め蔚山取巻かるゝに及び、難儀に候段、清正より林田八郎左衛門を使として、日本へ申上ぐるに、正月十八日に大坂城へ著き、此旨を申上げければ、秀吉公、直に聞召され、扨主計めは何くに居候ぞと、尋ね給ふ。八郎左衛門承り、清正は其節迄、西生浦とて、二日路脇に罷有候へども、此段を聞くと均しく、手廻五百計りにて、船に乘り蔚山へ籠り申す通り、言上致しければ、太閤御手を打給ひ、偖は心安し、此城持通すべし。秀吉後巻すべしとて、御具足を取寄らせられ、日本の諸大名に急がれ度く、朝鮮の御動坐と仰ぎ出されける。然る所に其翌日、又清正より阿岐伊兵衛、早船にて歸朝す。去る正月四日に後巻候て、唐人百萬騎、悉く敗軍仕候を追詰めて、若干討取りて籠城し、運を開き、申し通り書付を以て、具に註進申上ぐる。將軍斜ならざる御感にて、清正が使を御前に召出し、段々直に尋ね給ふ。伊兵衛具に申上ぐる。寄手莫大に討たれ、蔚山近邊は死骸に充滿ち候故、諸大名知行高に制懸け、死骸を除き申候上は中々言語の及ぶ所にて御座無く候由、言上しければ、將軍斜ならざる御機嫌にて、御書を清正に下されけり。其詞云、

今度蔚山表大明人數萬騎取圍所、城中堅固相拘、數千人討捨付、敵令二敗北一之由、神妙の働きに候。然者兵糧五千石、最前被レ遣候へ共、重て五千石被レ遣候。都合一萬石被レ下候間、寺澤志摩守、手前より可二請取一候。就は其蔚山・西生浦兩城、難レ拘之由、被二聞召一候。則毛利壹岐守、同一手之者共、西生浦に可レ成二在城一の由、被二仰出一候間、其意になり可二相渡一候。猶歸朝之者共罷戻、樣子被二聞召一候て重て、可レ被二仰出一候也。

正月廿二日　御朱印

加藤主計頭殿

とぞ書かれける。其外の諸大將へも、銘々に御書を下され、或は御褒美、或は御切諫、其品々有りて、山城小才次・木下半助を渡海せさせられける。

朝鮮征伐記第十二終

朝鮮征伐記第十三

大明人重ねて軍評定

蔚山の寄手百萬騎、手負ひ討たれ落散りて赤裸になり、慶州へ北入る事、日夜引も切らず、楊鎬已下の諸大將、猶も日本人寄せ來らんかと恐怖して、堀を掘り柵を振り、却つて籠城の用意せり。王城にて邢總督、此由を聞きて大に怒を啣みけれども、如何ともすべき樣なし。只敗軍を盡く王城へ引返させ、再擧すべき謀をなす。爰に丁應泰といふ人あり。疏を奉りて、楊鎬が策少くして、敗軍せし罪を吟味す。爰に於て楊鎬は、經理の任を罷去り、諸大將も皆異官となりて、今一度合戰して、先敗の辱を雪がんと憤れり。邢玠思ひけるは、今度水路の兵來らざるに依りて、久しく師を繤ひ、兵糧乏しきに付きて、功を全うせず。今より江南の水兵を召し、海運

明軍の部署

日本軍の防備

を議し糧米を蓄へて、敵の働を見て、軍を致すべしと分別して、江南の兵を催す。陳璘・劉綎・張榜・鄧子龍・藍芳威等、先後打續き、二月中旬に王城に著く。又天津巡撫の萬世徳を以て、經理の官となし、楊鎬に代へたり。是れ明王の命ずる所なり。日本人は、蔚山の圍解けて、大敵引取りたる事を、虎の口を脱れたりと思ひ、重ねて寄せ來る事もあるべし。城郭を大夫に拵へ、兵糧を運び入れ、籠城の支度せり。大明人は、今や日本人寄せ來ると、安き心もなく、用心して待つも、其沙汰なし。闇然として一所に居らん事は、謀の拙きに似たりとて、邢玠、則ち左手・右備・中陣三協の兵屯を分けて、水の手一備・陸路三備と、四路に分つ。一路の主將を提督とす。中路の大將は李如梅、東路は麻貴、西路は劉綎、船手水路陳璘を大將とす。官兵屯に十萬餘騎、各、要害の地を固めて、機に應じ變に隨ひて、戰ふべしと定めたり。日本人、朝鮮に在陣する事、已に七年なれば、海手千百餘里に、二十箇所城郭を架へ、持固めたり。其内、大將の大軍にて、四方を下知する城三箇所あり。蔚山を東路とす。清正是にあり。順天を西路とす。行長是に據り、望洋・泗川を中路とす。島津薩摩守義弘・同

又八郎忠恒父子、之を守り、三所共に海を阻てゝ堅をなし、進みては大軍を以て長驅し、退きては人馬の足を休むる居城なれば、何れも丈夫に拵へ、城の近邊に多くの兵糧藏を立並べ、其外に塀柵を幾重にも附け、矢倉を上げ、人數を入れ置きけり。其上大船を懸並べ、船の往來絶えず自由なれば、之を拒がん爲めに、三路に水兵を一備づつ添へて、海手を守らしむ。是は蔚山を攻むる時、西生浦より清正、早船にて島山の水手より、押入りたるに懲りてなり。四路の手分、既に定まりて、邢玠、諸將に命じて、三月の間に吉日を選び、血を啜り神に誓ひ、諸大將互に應援をなし、其機變を失ふべからずと定め、約束せし所に、中路の大將李如梅は、正月中旬に朝鮮を立ち、遼東迄歸り、馬共を買調へしが、兄の李如松、寧夏の敵强きに依りて、去年より彼方に在陣したるが、今年寧夏、大に起りて、如松戰場にて討死す。此人は、最前寧夏を平げて功を爲し、又朝鮮へ向ひ、平壤の軍に小西に打勝ち、開城府の軍にも、隆景と對々にし、久しく開城府に陣を張り、南安府所々にて、功を立てし名將なれば、急なる方へは、毎度、李如松を差向けられしに、今度、寧夏にて討死せしによ

李如松討死

り、大明の天子を初め參らせ、下々迄力を落し、せめて弟なれば、李如梅を以て、遼東の總兵となしつゝ、朝鮮へは差越さゞりしかば、中路の大將なくなり、當時、其仁に當る器量の人なきにより、又月日を經て後、董一元を以て、李如梅が跡に入代り、中路の大將とす。此僉議に依り、大明の大軍、數月働かざりしかば、日本人も、此透に城々普請し、少時休息したりけり。

日本勢過半歸朝

小西行長等順天を退かんと評議す

蔚山は要害の地なり。之を敵に取られては、惡しかりなんとて、清正並に諸大將談合の上にて、毛利宰相秀元朝臣に、筑紫勢相加はり、正月より普請を始め、三月には塀・矢倉・門々・役所殘らず、丈夫に築き立てたり。普請成就して、清正に渡さんとせし時分に、順天城に籠りたる諸大將、小西行長を始め、皆城を開きて、釜山浦近邊へつぼまんと評定す。其故は、順天は北、蔚山は南、其間百里に餘れり。大明、百萬騎の兵を起し、今度は順天へ取懸かる由、頻に申し旬りけるに依り、取卷かれては惡し

かりなん。只中路の泗川・望洋と、蔚山の南方と、二筋を持堅むべしと定めけるに、加藤左馬助嘉明進出で、各〻御評定一途の上に、重ねて申す事、如何に存じ候へども、歴々の諸大將、此順天にありながら、百萬騎の敵、寄せ來るとの說に聞驚き、未だ敵の旗をだに見ずして、爰元を逃退かん事、町人・百姓さては公家・沙門はいざ知らず、侍の道には、先祖・子孫諸共に、皆廢れたる恥辱なり。誠に小松維盛が、鳥の羽音に驚き、富士川より北上りし、昔の臆病の跡を續ぐべき。將軍、吾々を此地に差向け給ふ事、全く別の事にあらず。敵を攻めよとの御下知なるに、追討使に向ひたる吾吾が、敵の寄するとて北げんには、兼ねて向はざるに如かず。各〻は苦しからずと存ぜらるれば、兎も角も御許らひ候へ。嘉明に於ては、一人なりとも此城に殘止まり、百萬騎を待受け、花々しき合戰して、討死仕るべしと申切られけり。行長・高虎・安治等、總大將宇喜多中納言秀家の前へ參り、此事、如何すべく候。流石、左馬助を捨置かん事も如何なり。又百萬騎を待受けんも、上策にあらずと、取々に評定し、口口に騷立つ。此由、蔚山へ告來れば、宰相秀元朝臣・主計頭清正大に怒り、安國寺の

加藤嘉明小西等の意見に反對す

璐甫惠瓊和尙を、順天へ遣し申されければ、大明[illegible]之あるに付き、秀家卿を初め參らせ、皆々其元、御引取り候はん旨、御相談の由承り候事、誠にて候はゞ、以の外然るべからず。縱ひ何事出來候とも、その表御引拂ひ候はん事、私にて叶ふべからず。日本へ仰せ上げられ、將軍の御下知次第に遊ばされ、尤もなるべきかと申されければ、宇喜多中納言も、小西・脇坂・藤堂等も、尤もなりと同じ、此旨、日本へ申上ぐる。太閤聞召し、大に怒り給ひ、大明百萬騎寄せ來らば、來るべきのみ。敵來ればとて、開いて退く事やあるべき。初日より城地を見定め、大明人猛勢出たりとも、越度を取らぬ樣にと、重ね〴〵申聞かせしを忘れたるか。先づ百里を阻てゝ廣々と城を取る事、沙汰の限なり。大明人、五日路・六日路の中にありとも聞かず。冬ならでは寄來るまじ。必ずおびえ、関を作り北げ仕り候はゞ、首を刎ぬべき事必定なり。其内に入らざる人數は休息させ、九月より又渡海さすべし。城々在番には、淸正・行長・義弘父子・鍋島信濃守勝茂・淺野左京大夫幸長・黑田甲斐守長政・毛利壹岐守・筑紫上野介・久留米待從秀包、六萬餘騎にて固むべし。

秀吉秀元清正を賞す

小早川金吾中納言秀秋・毛利宰相秀元・宇喜多中納言秀家、其外四國勢は、先づ歸朝して休息せしめ、九月にまた渡海さすべしと、五月にぞ仰遣されける。蔚山城攻のとき、早々後巻仕り、今度順天へ安國寺瓊長老を遣し、騷動を靜め候段、神妙に思召され候由にて、落葉の御茶入・正宗の御腰物に、一紙の御感狀を添へ、毛利宰相へ下され、清正にも、御感狀に光忠の御太刀を添へ下されけり。毛利安藝宰相は、蔚山を渡し、備前中納言秀家、竝に中國・四國衆は、順天を立ち釜山浦に出で、次第々々に渡海しけり。同六月中旬には、秀家・秀元・中國・四國衆、殘らず皆、京都・伏見へぞ上り著きたりける。

秀元秀家歸朝

日本中國四國勢歸朝伏見に著く

宇喜多中納言・毛利宰相、既に伏見へ著かれしかば、中國・四國の軍兵共、殘らず上京したりけり。太閤聞召し、江戸内府家康・上杉中納言景勝・中村式部少輔一氏を以て、朝鮮表の働の甲乙を正し、忠否を穿鑿ありて、蔚山の後卷に、遲く出でたりし大將

達、並に順天を開きて、除かんとせし者を御名ありて、御對面を致されて、毛利宰相秀元は、數度の軍功といひ、今度、順天へ安國寺を遣し、騷動を止められし條々、御感ありて、翌日御對面ありて、樣々の懇情を盡し給ひ、加藤左馬助をも召出され、數度の戰功の中、六年先き、巳の六月、朝鮮唐嶋にて船軍の時、番船數百艘の中へ、左馬助が船、只四五艘にて乘入れ、大利を得し事、今度蔚山へ後卷の砌、一番に後詰に出でし事、並に順天を開き除かず、一人なりとも守るべしと、申せし忠義、殊更御感ありて、若年よりの忠戰を、一紙の感狀に載せられ、領知を添へて給ひける。其狀に曰く、

其方事、天正十一年夏、於江北柴田合戰之刻、於秀吉眼前突一番鑓、其働揭焉。爲御褒美一廉令加增畢。又於朝鮮唐嶋番船數百艘の中、離味方類船乘入、乘取敵船數多之手柄、其勇功誰立于上手、孰比于下手。殊今度、於順天城可引入之旨、各雖令一途、重義勇蔚山加藤主計頭等難見捨付、不隨談合之旨、神妙之至、御感不斜也。依之手前代官所、有次第三百七千石令加增畢。本知合拾萬

石之內、一萬石者可ㇾ爲ニ無役ㇾ。諸大名之內、臆病者於ㇾ有ㇾ之者、彼闕所、猶以可ㇾ被ㇾ成ニ國持ㇾ之條、重命可ㇾ抽ニ眞忠ㇾ之狀、如ㇾ件。

慶長三年六月十六日　秀吉御判

加藤左馬助殿

とぞ遊ばされける。殘る大將達も、面々に申分あるは事無き故、召出され御對面ありて、御暇下され、皆歸國に定り休息をぞ仕りたりける

大明人蔚山順天表働
并劉綎小西行長を擒にせんと欲す

大明の總督邢玠は、七月下旬に諸大將に命じて、來月出陣して、九月廿日に、三路の大將を幷せて、一度に順天・蔚山・梁洋の三城へ働き、互に應援をなし、行長・淸正・義弘を盡く追落すべしと、約束を定む。是に依つて八月末に、東路の大將麻貴は、頗貴・牛伯英を率ゐて、溫井に陣を張り、蔚山城と對陣せり。されども淸正、爰に籠れ

は向城を堅く取りて勢を出さず其内扱をかけて後陣を待汰ふる謀をなせり。

九月廿一日に、諸手汰ひければ、夜中に蔚山へ取詰めたり。城中には、去る正月の籠城とは事違ひ、普請は思ふ儘に丈夫なり。兵糧は澤山なり。人數・丸藥、一として乏しからず。攻め近づく敵共を、日の下に見下し、夜晝矢軍して、射立て打立て、寄手若干打殺されければ、麻貴も攻め呻みて、厚き盾を拵へかつぎ、寄せ攻めけれども、清正が兵共、木村又藏・出田宮内少輔・鷗平次等打見て、盾板、端は厚くとも、眞中は薄かるべしとて、狙ひすまし打つ程に、一枚もつゞかず悉く打抜き、手負・死人數を知らず。九月廿一日の夜、清正は、加藤清兵衛を呼び、若き溢者共召連れ、今宵一夜討せよと下知しけるを、鷗平次・井上大九郎進出で、夜討は足輕の役にて候間、清兵衛・隼人は後詰めせよ。某共、先駈仕るべしといふ。清正尤なり。さあらば、鷗・井上に先をさせ、打立ち候跡へ、清兵衛・隼人は働くべしとて、九月廿一日の夜、小雨降り朧なるに、大手の門を開き、平次・大九郎鐵炮を調へて、一度につるべ放ち、鬨を揚げたりける。門涯に詰めし大明人千餘人、手負ひ討たれて、一度にぱつと引く。麻

明軍敗退

貴は之を見て、すはや天の與なるぞ。附入にせよとて、太鼓を打つて懸り、柵涯にひしと附く所を、城中より入代り〳〵、鐵炮にて打立つる事、雨の降る如し。寄手、打痿められ漾ふ所を、淸兵衞・隼人、指揮を振ひ門を開き、切つて出でよと下知するに、言の下より門を開き、榊平馬・和田備中・堤權右衞門、一番に鑓を入れしかば、殘る兵共、一同に喠と懸りける。先陣に進みたる大明勢、一支戰ひしかども、突立てられ、數輩討たれ手負ひつゝ、本陣へ引取りける。明くれば廿二日、麻貴、彌、怒りて、城涯に土手柵を付け、廿三日より總軍七萬餘騎を以て、蔚山總構へ押寄せけるを、淸正下知して、柵涯迄引付け、鐵炮にて打立て、其崩口を見合せ、加藤淸兵衞・同與左衞門・齋藤立木以下申合せ、諸口より一度に切つて出でしかば、寄手大明人、數多討取られ、手負數を知らざりしかば、麻貴、又討負けて本陣へ引入りけり。爰にて、色色手段を替へけれ共、淸正、少しも痿まねば相叶はず。同廿九日に、向城陣々に放火して、五里引取り、溫井に陣を取り、毎日物見を出したる計りなり。

西路の明軍順天を攻めんとす

西路の大將劉綎は、七月下旬より水源の地方に陣して、小西が籠りたる順天を攻めんとす。され

酒川の軍新寨に退く

同落城

雲霞の如く控へたる大敵の眞中へ、三百餘騎喚いて懸り、前後左右へ追散らし、是より日本道二里餘の新寨城さして引退く。新寨城にては、島津が軍兵共、泗川城の鐵炮・石火矢の音・鬨の聲、手に取る樣に聞えしかば、心許なく思ふ所に、案の如く、泗川落城と見えて、火の手夥しく上りたり。扨は攻め落されたり。急ぎ加勢して助けんとて、混甲五六百出立ちけるを、義弘大に怒り、一人も出づべからず。泗川の者共を捨殺すは、不便といひ本意なけれども、彼の大軍に、此城を附入にせられては、總軍の負なり。頓て敵軍、此城へ寄來るべし。役所々々を請取り、急度持固め、下知なくば一人も出づべからずと、制しければ、浮立つたる軍兵も、皆靜りて持口をぞ固めける。義弘が家老、伊勢兵部少輔貞昌進出で、泗川の兵共除來るべし。貞昌一人參り、其樣を見て參り候はんとて、只一騎にて乘出し、泗川さして馳行く所に、二十町計りにて、泗川より除來る者共にぞ會ひたりける。中書・新納も、其外の兵共も、手痛く戰ひたりと見えて、甲の吹返・鎧の袖に、矢三筋・四筋づつ射立てさせ、何れも切疵・矢創を蒙り朱になり、太刀・刀・鎧・長刀、盡く刃を折り、血の付かざるは無かり

敵兵新寨城を圍む

敵圍を解いて退く

けり。中書・新納・野村等、聲々に伊勢兵部と呼びかけ、萬死一生の戰に逢ひて、爰迄遁れ來れり。恩にも助勢を給はらずして、捨殺し給ふかとかこちけり。早追ひすがうて敵競ひ來れば、伊勢兵部、後陣に乘り下し、返合せ〳〵防ぎ戰ひ、漸く新寨城へ取込む。泗川を出づる時、三百餘騎ありける輩、大方討たれつゝ、新寨城へ取込み、殘る者共、僅に百二十人計りなり。勝誇りたる大明人共、追ひすがうて押寄せ、東陽の倉を燒立て、勇進んで新寨城を、ひた〳〵と取卷く。義弘嫡子島津又八郎は、若武者なれば、甲の緒を締め、手鑓押取り色めき渡つて、是非突いて出でんと進みけるを、父義弘堅く制し、何を騷ぐぞ忠恒よ。敵の人數を見切らずば、必ず卒爾に戰ふべからず。守則不レ足、攻則有レ餘。善守者藏二於九地之下一、善攻者動二於九天之上一といへり。少しも騷ぐべからずと怒りければ、忠恒も父の下知に隨ひ、是非なく靜まりけり。夜に入りて、數萬の寄手、いつの間にか、盡く圍を解いて、泗川へぞ引取りける。又八郎忠恒を始め、士卒共に至る迄、唐人共を討洩しぬる事、扨も殘多き者かな。手に取りたる敵なりしに、無念さよと憤り、泗川へ押寄せ、是非一合

戰せんと進みけり。此時、義弘は子息忠恒に向ひて申されけるは、又八郎、能く心得候へ。武勇の家を繼ぐべき其方が、左程に忍情なくては、中々叶ひ候まじ。士卒共、何といふとも、大將は左はいはぬ者ぞ。心を靜めて待ち候へ。頓て唐人共、寄來るべし。大事の軍仕損じて、日本の恥辱を取り給ふなと、事々しく叱りければ、忠恒を始め、諸軍勢も皆靜まりけり。

大明人新寨城を圍む幷大明勢敗軍

さる程に、九月廿九日に、董一元は、諸大將を集めて、島津義弘が居城新寨を、取らんと議定す。されども、義弘が居城なれば、如何あらんと、諸人の異見を聞く所に、茅國器進出で、吾れ頻に、數々の城を破ると雖も、敵、盡く新寨へ取籠れば、さまでの働にあらず。新寨に義弘籠れば、容易く攻め破り難し。先づ固城の砦を攻めば、新寨の銳氣、立所に拉ぎつゝ、來り救はん事叶ふまじ。固城は、城小にして勢少し。攻め取るに易し。固城降りなば、新寨の便なくなるべし。其後、機を見て進まば、全

敵兵新寨を攻む

策たるべしといへり。董一元、望洋等を容易く破りたるに、氣を得て、敵を侮り、新寨とても、多くの敵もなし。固城は、小城なれば攻むるに及ばず。今先づ新寨を攻むる事、疾雷耳を掩ふに及ばざるが如く寄せなば、必ず破るべし。然らば固城は、戰はずして自ら落ちんといふ。其上、彭信古も、元來敵を侮り、謀少き者なりければ、此評定に同じ、彼所(かしこ)より爰に至りて、探視するに、城中の煙火、多からず。今、大兵を一擧にして攻めんに、義弘、首を授けん事、手の中なりと談合一決し、十月朔日、先手茅國器・葉邦榮・彭信古が歩兵三備、直に新寨城へ取詰むる。又郝三聘・師道立・馬逞〔里イ〕文・藍芳威の四備、馬武者を分つて、左右の堵伏とし、歩兵一備を以て、本營を守らせたり。大手搦手二十萬騎、新寨城へひた〳〵と付く。中にも茅國器・葉邦榮は、卯刻より攻め進みて、巳の刻に至つて、塀下に附き、木楯を以て、大門の扉一枚はね破り、其外、矢倉三箇所打破り、彭信古を初め既に乘り入らんとす。城中より島津が者共、突いて出でんとせしを、大將義弘、馳廻り堅く制して、外郭を乘破るとも、突いて出でずして、只内より込出せと、身を揉んで下知し給ひけり。寄手、雲

霞の如く重り、猶も木楯を以て打破り、心安く乘入らんとする所に、石曼子が運や强かりけん。木楯破れて、內の藥に火付きければ、千雷の音の如くはね、黑烟半天に聳えて、四方眞黑になりければ、大手に付きたる寄手共、一同に喚き叫んで、上を下へ返すを見て、義弘、制せらるゝと雖も、最前寄せし時、突いて出でずして、唐人共を退かせしを、無念に思ひたる兵共、なじかは怺ふべき。手鑓提げ、堀を乘越え乘越え、三千餘一度に突いて出づる中に、上方牢人に、三浦三左衞門といふ兵、黑四半に、銀のぎら／＼付きたる指物にて、十文字の鑓を持ち、只一人、一番に堀より飛下り、面も振らず、大軍の敵へ走懸り、鑓を打入れ、名乘懸け、大音聲を揚げ攻め戰ふ。島津が兵共、あれ討たすな。三浦討たすなと、塀より飛下り／＼、三千餘眞黑に鑓を入れ、突立てしかば、群立ちたる寄手共、なじかは怺ふべき。一度に曈と崩れけり。島津又八郎忠恒は、之を見て、すはや敵が北る（にぐ）はとて、薰革（ふすべがは）の背割具足を、黑革にて中二段緘したるに、銀の鰍〔鯰カ〕尾の甲の緒をしめ、鳥毛の母衣かけ、黃尨毛なる馬に打乘り、穗長の鑓を馬の平首に引添へて、小門を開かせ、二千餘を左右に引率

敵兵敗北

し、鐵炮を一同につるべ放つて、濕雲の雨を含みて、暮山を出でたる如く、眞蕩に斬つて出でたりけり。此小門へは、彭信古、三千餘にて詰寄せたりしが、之を見て弓・鐵炮を下重ね、矢衾を作り、筒先を竝べ、散々に射る事、雨の降る如し。馬武者は、轡を竝べ犇く所へ、忠恒、眞先に進みて、喚いて駈入る。大明人、得たりやおうと待受けて■火を散らして戰ひけり。東西に分れ南北に靡き、萬卒に面を進め、一擧に死をぞ爭ひける。汗馬の駈け違ふ音、太刀の鐔音、天に應へ地に響き、追靡け駈立てられ、卷きつ卷かれつ、五六度が程戰ひけるに、大明人、爰にて屍を晒さんと、踏止りて攻め合へば、地煙は、大風の砂を吹立てたるが如く、血は混々として草を漾はし、屍は累々として散り滿ちたり。引組んで首を取りつ取られつ、切先より火炎を出し攻め戰ひ、互に味方を恥しめて、引退く者こそ無かりけれ。忠恒も、精兵七八百人、混甲にて身命を惜まず、進戰ふ所へ、新納武藏守手勢五百餘、柵を踏破り、喚きて横鑓を入れしかば、忠恒彌々進みて、曳や聲を出し、揉立てしかば、彭信古が三千餘、盡く討たれ、只五六十に討ちなされ、董一元が本陣さして引退く。郝三聘・師道立が馬

武者、踏止まりて半弓にて射んとすれども、引立ちたる大勢へ、島津が兵共、打交り透間をあらせず追立て來れば、叶はずして、郝三聘・師道立も、同じく押立てられ、右往左往に落ちて行く。勝に乘つて、新納・樺山・平田・伊川・野村・伊勢・松浦の兵共、鬨を作懸け〳〵、扱連れて追懸けたり。大明勢、爰にては追倒され、彼所にては突倒され、討たるゝ者數を知らず、野原を血に染めて、草はさながら色を變へ、人馬、汗を流して喚き叫ぶ音、天地に響きて夥し。されども、大將義弘は、少しも動かずして、赤地の錦の直垂に、紫厚紺の鎧に、糸緋緘の大袖付け、如意半月打つたる星甲を、猪頸になし、正宗の二尺七寸の太刀佩き、馬より下りて、手蓋兼長の長刀を小膝にのせ、床几に腰を懸け、屈強の兵五千餘、廣庭に竝居、面も振らず、急度城中に居給ひける所に、是をば知らずして、茅國器・葉邦榮は、城を攻めずして、五六町脇に控へたるが、城中より突いて出でたるを見おほせ、一樣に鎧立てたる赤武者一萬餘騎、城中に人なしと心得、乘取らんと進みけり。義弘、兼ねてより思儲けし事なれば、手元に殘し置く兵五千餘、天も落ち地も裂くる計りに、鬨を作りて突いて出で、餘さ

じと戰ふ。茅國器・葉邦榮も、爰を先途と喚き叫んで下知をなし、一足も退かず攻め戰ふ。義弘、眼を瞋らかし、軍兵を指揮に隨へ、千變萬化して揉合ひたり。義弘元來、堅を破り利を摧く事、趙奢が勢を呑み、子雲が勇に及ぶべければ、大勢の中へ駈入り、蜘手十文字に駈破り、八方を拂ひて、四面に同じく當られければ、茅國器・葉邦榮が屈强の兵共一千餘騎、義弘が馬の弓手・妻手にて討たれしかば、茅國器、聲もかれ息も切るゝ計りに、怒り罵り下知しけれども、耳にも聞き入れず、二組二萬餘騎、立足もなく捲り立てられ、吾一にと崩れ行く。藍芳威は、二萬計りにて十里の外に控へて、義弘突きて出でば、後を取切らんと謀りしも、大軍に引立てられ、拾鞭を打つて逃走る。董一元は、總大將なれば、馬を立直し〳〵、穢（きたな）し人々、一元是にあり。見捨てゝ何方へ退ぐぞ。返せや〳〵と身を揉んで、もり返さんと下知すれども、落行く勢は、耳にも聞き入れず、人馬一つに押立てられ、堀塹ともいはず崩懸る大軍、なじかは押止むべき。二十萬騎の勢、望洋にも怺へ得ず、大河を越えて、散々になりて北げて行く。中軍の徐世卿、二千餘にて望洋城へ取込まんとすれば、島津中

書、早や入代り、勝凱を作る聲、城の内に聞えたり。後より島津忠恒、勝に乘つて追懸けしかば、徐世卿踏止まり戰ひけるが、生捕られて討たれにけり。忠恒は若武者なれば、自ら數度勝負を決し、薄手少々負ひ、馬をも二太刀まで斬破らせ、馬も吾が身も朱になりて、何所迄もと追懸けしを、父義弘、乘切つて驅せ來り、團扇を振り、兵追なせそ。早く引取り候へと、制し止め下知し給ひしに依りて、望洋より追捨て、城中の勢は引入りけり。是に依り、茅國器は、望洋に踏止つて期する所は、天險の地なり。之を取る事易からじ。若し捨去つて、敵に取られなば、後悔すとも叶ふべからずといひて、諸大將を呼集め、打散る勢を收めて、望洋を守らんと、董一元に問ふ。一元、今度の敗軍に、諸人恐怖する體を見ていひけるは、此望洋とても、援の城なし。固城の日本人と、新寨の義弘と、よく力を合せて來攻めば、防ぐに便なかるべし。只少時、星州に歸り、再び大軍を起し、此恥辱を雪がんと申しければ、諸大將、なじかはたまるべき。前後を分たず、吾れ先にと、星州さして北げ入る事引きも切らず。此時、城中より追懸けなば、一人も生きて歸る者はあるまじ。跡より追

ふ者なしと雖も、吾れ先にと急げば、蹈倒され轉落ち、己が太刀・刀に貫かれ、死する者數を知らず。新寨より星州迄、百五十里の間、山野共に死骸にて埋れ、足蹈む所はなかりけり。大明・朝鮮の將士共、彌〻舌を振つて、島津が勇悍を、甚だ以て恐れけり。島津が手へ討取る首數、三萬八千七百六十六、耳・鼻をそぎ、大樽十に入れて日本へぞ渡しける。

淺野彈正石田治部少輔博多に到り朝鮮在陣の日本勢引取らんと欲す

さる程に、秀吉公御遺言の如くに、淺野彈正・石田治部少輔は、家康の指圖を受け、九月の初、伏見を立ち、筑前の博多に著き、渡海の用意せり。其内に、先づ家康よりの使、永壽昌法印・宮木長二郎豐盛を朝鮮へ遣し、太閤御薨逝の由を告げ、急ぎ引取るべしと、大將達へ銘々に觸れ送る。間人郭國安之を聞き、太閤薨逝し、日本人引取らんとする由、潛に大明人に告知らす。さりながら、泗川の新寨にて、島津義弘に

石田淺野博多に至る

打負け、大明人若干討たれしに依つて、結句小西行長が居城順天表へ、取詰めたる劉綎已下の大明勢も、十月十日に、圍を解いて引取りぬ。誠に今度、島津、新寨の軍に勝たざれば、中々、日本人は、一人も歸朝する事なるまじきを、今度の敗軍に懲りて、太閤薨逝の由を、敵にも聞くと雖、進近づかず。日本へは島津勝ちし事は、十月朔日の事なれば、聞ゆべき樣なし。彈正治部少輔は、博多に居て渡海せず。家康、晝夜苦勞に思ひ、利家に天下の制法を申置きつゝ、内府渡海あるべしとて、關東勢を呼上せらる。利家は其頃病中なれども、元來勇進んだる人なれば、家康渡海し給はゞ、天下の守なかるべし。秀頼、幼少なりと雖も、年寄奉行、守護し參らする上は、病中なりとも、利家渡海すべしと、達て申されけり。兩方互の志、尤もなれば相殘る大老、景勝・秀家・輝元を初、奉行衆に至る迄、兩人の間に異見すべき樣もなし。此間に、時日移れば、家康思案し給ひ、されば先づ、和泉守高虎を遣し、朝鮮の樣を聞くべし。此人、久しく朝鮮に在陣して案内者なり。殊に手輕き者なれば、早速に左右を申すべしと、加賀大納言へ相談ましませば、利家、尤もにて候と同じ、卽ち藤

堂、急ぎ筑紫に下り、朝鮮へ渡海せんとする所に、島津義弘、軍に打勝つて、軍勢引取る事、心安く候間、渡海せらるゝ事、止めらるべしと、淺野彈正・石田治部少輔方へ告來る。長吉・三成悅んで、飛脚を以て、家康へ申遣しければ、此上は、藤堂も渡海するに及ばずと仰遣され、高虎、之より伏見へ歸り上りけり。

日本諸大將朝鮮引取評定

劉綎和議を小西に求む

大明の諸大將は、義弘が勇略に摧かれ、才折れ氣屈しければ、謀を以て、倭を退けんに如かずとて、又和談を取立てけり。中にも劉綎は、最前に扱を仕損じ、諸人の嘲になりしかば、謀の足らぬ事を悔みつゝ、數萬騎にて、小西が籠りたる順天城近く陣を取り、重ねて和談の扱を致す。劉綎が子の劉天爵を、小西方へ人質として城に入れ、謀つて行長を生捕らんとす。行長は、猶も實儀と思はざりしかども、劉天爵を人質に取りし上は、虛實の所如何有らんかと、色々思案を運らし、此旨、釜山浦の城番、寺澤志摩守正成方へ申遣し、最前より御無事の相談人にて候間、如何有らん

寺澤正成和談のことを諸將に觸る

諸將引取評定

寺澤正成と毛利志摩守との問答

との事なり。是れ十月廿二日の事なり。元來寺澤は、思慮少き者なりければ、尤もたるべしと申遣し、廿五日には、此旨、廻文を以て、小西攝州、重ねて御無事與行の間、皆々其意を得らるべしと觸廻す。清正・義弘已下は、小西が短才にて、劉綎に誘はれ、今に日本の瑕瑾仕出すべし。勿論、劉綎が愛子を人質に出す上は、疑ふべからずとはいひながら、彼も命を大明に置奉り、此度を最後と極めたる者なれば、何ぞ一子を以て、四海の功に替へんや。其上、爲天下者不顧家といふ事あれば、又々扱公事たるべく候へども、各、分別次第と返答せり。此問答に、數日を經し內に、寺澤志摩守は、心淺き人なれば、小西が和談の扱を、正成も一つに致さんとて、十一月十六日に、釜山城丸山を打開き、順天さして漕出でぬ。加番に居たる毛利壹岐守は、大に驚き、毛利九左衞門を以て、丸山を開かれ候事、如何之有るべく候や。左樣に候に於ては、吾等一人、相殘るべき儀にあらざるの間、同前に城を開き、相働くべきやといひ遣しければ、寺澤聞きて、正成儀は、最前より行長同前に、和議を主り候間、只和談の爲め、出船仕る旨返答せり。壹岐守、重ねて使を遣し、仰、尤もには候へど

寺澤正成の素志

も、早此表へも敵の物見相見え、殊に小西・順天籠城の由に候へば、和議は必ず成就仕るまじ。其上日本勢、殘らず歸朝仕るべきに付き、淸正は蔚山を開いて、杭〔機カ〕張迄引取り、黑田長政、珊州を開いて引取り、何れも是へ罷出で候由、承り候へば、加藤・黑田、明日は著陣せらるべし。さあれば待付け給ひ、相談を以て、後卷にても、順天見廻をも、丈夫に致さるべしと、吳々申遣しけれども、寺澤承引せず、和談相違なく相濟むの由、返事して順天さして漕ぎ出でぬ。壹岐守、大に色を損じ、怒甚だしと雖も、又心を改めて、いや〳〵此上にも、和談相濟み候はゞ、日本の御佳名、末代の大切なりと思ひ、斯樣の砌、何れの道にもあれかし。城を急度相拘へ候へば、忠節なるべしと分別して、釜山浦の端城・本丸兩城共に、壹岐守請取り、堅固に在番せり。是は和談相濟むによそへ、壹岐守を出拔き、吾が一手にて、順天へ後卷せば、幸に島津義弘・淺野幸長も、順天へ出でらると告來る。是等と成合ひて、大の忠功を顯さんと、心中に思籠めし故に、壹岐守方へは、斯樣に誘謀りけるとかや。誠には、十二日に劉綎に出拔かれ、小西、又敗軍し、城へ逃入る旨を聞き定めたる上なれども、已に一

寺澤書を加藤黒田に送る

人のみ後卷に出で、壹岐守を入口の喰に陷れん謀に、斯くはいひ侍りぬ。初清正は、蔚山にて麻貴を追散らし、島津は、泗川にて董一元に打勝つて、敵盡く引取りければ、清正思ひけるは、太閤薨逝し給ふ由、有增(あらまし)聞き候間、朝鮮表、越度(をちど)なく引取り候へば、本朝の名譽、何事か之に如かんと存じ、此旨、黑田甲斐守迄、相談せし處に、長政も尤も至極に候間、家康の使德永法印・宮木長次逗留の內に、相談すべしと領掌し、卽ち機張にて、寺澤志摩守と長政參會し、此旨をいふ。寺澤も尤もなり。此上順天、其外西路の大將達へ、申渡さんと極めしかば、長政、されば註進狀已下、志摩守指圖を以て、西・東・中筋一同に、引取り候樣に致さるべしと、堅く申合はせける所に、右の如く、小西又和談仕る旨にて、志摩守觸狀、十月廿五日の日付にて、方々へ廻る。長政・清正腹立し、又々出され候はんと待つ所に、案の如く十一月十二日に、小西誘はれ、又順天へ逃入り、籠城し難き儀に付き、島津義弘・淺野幸長は、居城を引拂ひ、順天表へ後卷に出づる。此旨を聞き、寺澤も十二日に、此由、清正・長政へ申遣し、後卷として、十六日に釜山浦を出で候間、主計頭・甲斐守も諸城引拂ひ、釜山浦へ

出で、後巻の相談あるべしと告來る。淸正・長政大に腹立し、さこそ有らんと存じ候ひつれ。さりながら、後巻せでは叶ふべからずとて、淸正・長政返事しけるは、狀披見の事、今宵十五日の夜半の儀に候へば、明日城々引拂ひ候事、罷成らず候間、明後十七日に打立ち申すべく候條、寺澤殿も明日出船は、延引致され候へと申遣されけり。

加藤黑田の返事

さる程に日本人引取らんとする由、大明人聞付けて、陳璘を以て水路の提督に任じ、陸兵五千人、海上にありて防をなし、猶も軍勢を遣すべしと、副總兵鄧子龍・遊擊馬文煥・季金・張良相等を附けられ、以上一萬三千人、戰艦數百艘にて、忠淸道・全羅道・慶尙道の海口に懸竝べて、日番・夜廻、隙もなく日本船を遮り止めんとす。此已前は、船手に敵なければ、自由横行せしに、陳璘に遮られ、日本の小船渡海自由ならず。されども、日本人の城近くは寄せざれば、互に軍はなくて日を送る。陳璘は是に依り、兵船を分ち、加徳・巨濟、鼓金の島に遣し、往來の日本船を押止めんとす。此時に、鄧子龍、鼓金島に陣取り、方日・新淅の兵三千を率ゐ、義州より兵糧を、鼓金へ入れんとせしが、九月廿九日、颶風起つて船を打摧き、三千人盡く沈沒し、只五六人

明兵日本軍の退路を遮らんとす

劉綎行長を虜にせんと謀る

ども、順天は海邊に續き、大船數多懸りて、勢を廻すべき樣なし。沈惟敬がせし手段を思出し、扱をかけ、行長を誘引(おび)き出し、生捕らんと思ひ、帳下の將吏を集め、潛に謀りけるは、順天在陣の日本勢、誠に小勢なりと雖も、行長が勇悍、我が十萬の勢に敵せり。戰を以て卒爾に拉き難し。今吾熟〻と思ふに、日本人は武勇甚しと雖も、元、孫・吳を學ばずして、軍法に闇し。吾れ策を運らして行長を虜らんとて、吳宗道を問使として、順天へ遣し、行長に告げて曰く、先年貴公の封號を乞ひ、專ら和議を好まれし故に、事既に成就せんとす。然るに清正が邪謀に阻まれ、關白怒を起し、又今度の大兵起れり。誠に憤るべく歎くべし。今大明の官兵等、萬里の波濤を凌ぎ、朝鮮に來り、久しく師を曝す事年あり。望鄉の念、常に息まず、歸國の懷尤も深し。日本の諸將も亦斯くの如く成るべし。且つ兵を窮め武を黷すの戒、今此時に當れり。兩兵他鄉に間關たる事、猶以て君上の身として、痛まざらんや。矧んや今兩軍、共に師疲れ糧乏し。吾れ自ら出でて、親しく貴公と會盟し、好を通じ、前の盟を修し、兩國生靈の願を遂げ、互に軍を班さば、士民の大慶、爰に有るべしと中遣

しけり。行長、初は猶ほ疑ひて、和談誠しからずとて、取合はざりしが、通辭度重り、其上劉綎、只一騎にて中道迄出向ひ、日本人を疑はざる風情を見せければ、行長扨は眞實なりと心得、今は疑ふべからずと、信を取りて、九月十九日、城外三里にある〔カ〕靑鋼原といふ原に出でて對面し、和談致すべきにぞ極まりける。劉綎は、小西が返事を聞き、行長が淺智さぞあらん。天兵利を得ん事、此一擧にあり。誠に倭將勇猛なりと雖も、謀るには安かりけりと悦びて、大力の兵を數十人選置き、小西を生捕らんと支度せり。敵・味方よりかねて對面の場に、兵士を附置き、帷幕を引き、互に大將の來るを待つ。行長は大明人の手段をば、夢にも知らず、十九日の午刻、城より出でつゝ、對面の場へ赴く所に、小西が運や強かりけん。劉綎が陣中に日本人あり。此者仔細ありて、大明の陣へ去々年より駈入り、總の官になり、此謀を知りければ、行長が來る路次へ出向ひて、會盟の座にて、行長を捕へんとする謀を告げたりけり。行長大に驚騷ぎ、鰐の口を遁れたる心地して、胸に早鐘を撞き、大息ついて道より引返しけり。劉綎之を聞くよりも、さては謀洩れたり。此儘に追ひかけて討たん

とて、二萬計りを左右に隨へ、足をも亂さず、眞黑になりて追來る。行長追付かれ、返合に及ばず、屈強の兵數多討取られ、順天へ取込みかね、漸く松島へ逃入りしかば、對面所に附置きたる雜兵已下、悉く〔被カ〕拾殺、劉綎に討取られ、辛うじて命のみ助かりけり。劉綎、力に及ばずして、空しく水源城に歸り、如何して此謀を洩しぬらんと、牙を嚙んで憤りけり。監軍陳效咎めて、劉綎が謀、拙き事を禁めければ、劉綎も慚憤し、其手の兵も、口惜しく思ひて、是非一戰せんと憤りけれども、日本人は、大敵を見て。卒爾の軍しては惡かりなんと、楯籠りて出合はず、日々に矢軍計りなり。

太閤秀吉公御薨逝

斯かりける所に、同年七月初より、日本伏見の御城にて、將軍秀吉公、御心地例ならざりしかば、施藥院典藥頭は申すに及ばず、洛中・大坂・堺の醫師、數を盡して參集し、攻補寒温の術を施し、起死回生の劑を奉りけれども、病氣日を逐うて重り給ひ、今は早、賴み少く見え給ひければ、恩寵の近臣心を焦し、諸國の大名伺候して、

晝夜肝膽を碎きけり。然れども生者必滅の習なれば、誰か閻浮を去らざるべき。身體次第に衰へさせ給ひければ、江戸內大臣家康・加賀大納言利家は、太閤の御枕に近づき、淚を押へて申されけるは、相國の月再び光を增す秋に逢ひ、博陸の花、竟に咲くべき春を待ち候處に、有待の世、限ある事にて、無常の時既に到り、今は早、賴み少く見えさせ給ひ、御脈變らせ給ふ由、施藥院秀隆・半井驢庵・延壽院玄朔一同に申し候間、今は偏に一品の尊位を思召し捨て、九品の蓮臺に赴かせ給ふべき御志こそ、御尤に存じ候へ。さるにても、一念繫念の故により、五重罪障の雲に沈み候と承り候へば、萬づ御心に懸り候はん事、委しく仰置かれ候て、一筋に厭離穢土の御望を遊ばされ候へと、申されければ、秀吉公御頭をもたげさせ給ひ、苦氣なる息をつぎ宣ひけるは、吾は元、東夷の下賤たりと雖も、龍登鷹揚の器量あるに依り、東夷・南蠻を目前に隨へ、西戎・北狄を脚下に蹈至り、若鹽卽關の臣となり、一天四海を掌に握れり。故に生前死後の事、一つも心に懸る事なし。幼稚秀賴事は、親子の懷、不便少からずと雖も、是れ又彼が器量次第なれば、少しも思置く事にあらず。其故は、

秀吉の遺言

賴朝天下を以て賴家に授けしかども、終に豆州の謫死となり、北條九代の榮華、忽に高時が拙きに、亡父賢にして、富貴を讓ると雖も、子愚なれば、其後（あと）を嗣がず、之を以て思ふに、皆其身の戒か素姓に依るなり。父祖の力によらず。故に秀賴が事を少しも思置かず。只黃泉冥途迄、障ともなるべきは、此度思立ちし事を遂げず、大明四百州を斬伏せざる事、返々も無念なり。其に付けても、我れ死ぬるならば、少時之を隱し、淺野彈正・石田三成を渡海せしめ、朝鮮在陣の軍兵を、悉く引取るべし。諸軍皆、恙なく歸朝せば、吾が死したる事を披露し、諸大名それ〴〵に、皆遺物を與ふべし。若し朝鮮强くして、兩人渡りても、引取る事ならずば、天下の固に賴み思召し、家康渡海あるべし。若し又日本に逆心の族ありて、渡海する事成らずば、秀賴の後見利家、渡海せらるべし。天下に大名多しと雖も、兩人の內、一人渡海せずんば、大明百萬騎、出でて遮る事なれば、中々叶ふべからず。只是のみ心に懸るなれば、相架（かまへ）て家康・利家に賴み候間、朝鮮にある日本勢十萬餘を、空しく他國の土となすべからずと宣ひつゝ、只弱りに弱り給ひ、八月十八日に、秀吉公六十三歲にて、終

遺骨を阿彌陀峯に納む

に薨逝し給ひけり。悲しいかな。博陸位高くして、百官是に隨ふと雖も、三途の旅に赴くに、從ひ奉る人もなし。哀しいかな柳營勢甚しくして、三軍爰にありと雖も、九泉の途に迷はんに導き奉る人もなし。諸人の心、只萬里の航葦に楫を失ひ、五更の夜、雨に燈の消えたる如し。此人天下を治め給ひて十六年、四海、其威風に服すると雖も、身は忽に東岱前後の煙と立上り、骨は空しく止まり、黄泉莓苔の塵と成りにけり。さらぬ別の悲しき上、國家の倚頼失せぬれば、天下又亂れんずらんと、歎かぬ者はなかりけり。卽ち御遺骨をば、阿彌陀峯に納め奉り、其麓に御廟を建立す。木食興山上人承りて之を經營せり。萩原卜部某を以て神主となし、禰宜・社人、其外勝げて計るべからず。月忌毎に諸宗の僧徒を集めて御弔あり、聖護院門跡道澄を以て、大佛殿の任主となせり。樣々の御追善・種々の御弔ありければ、過去聖靈も、今は安養上品の臺に到り、成等正覺の門に入り給ふらんと、參詣集會の男女共に隨緣眞如の光を仰ぎ見、佛聞法の功德に預らんと、歡喜の涙を流さぬ人は無かりけり。

望洋永春昆陽の三城大明人攻取る

望洋の防備

將軍秀吉公薨じ給ふ事は、道遠ければ、未だ朝鮮に聞えず。中路の大將董一元は、部將已下十萬餘騎を率ゐ、八月末に尙州に到る。日本中路の受手は、島津薩摩侍從義弘・子息又八郎家久、一萬餘騎にて之を防がんとて、六七箇所に城を架へたり。望洋は、天險の地なり。北は晉江により、東は永春に築き、西は昆陽に築きて、三つの城、鼎の如く峙ちて犄角をなし。新寨の前に峙ちたり。新寨城、三面は海を廻らし、一面計り陸に通ず。之を義弘居城とし、外には石壁を高く架へ、柵を構ふる事數十重、海を引きて堀とし、大船數百艘、城下に絆ぎ置けり。又金海・開城を、左右の翼として、中に東陽の倉を作り、糧を積む事數百石。此外に、舊城泗川に、屈強の兵共を屯して、急あらば搦手より懸合はんと定め、望洋より新寨城に到る迄四十八里。日本道八里八の城を連ね築きて、歩々營をなす勢、甚だ盛なり。故に日々に、義弘兵を出し、陝川・〔宜イ〕宜寧・咸陽・高靈邊を掠めつゝ、在々を攻め隨へて、威を振ひしかば、かねてより島津が武

明將茅國器檄を日本の諸將に送る

明の將士島津を畏る

勇に恐れしに、今更、城郭の備、堅きを見て、攻めんといふ人こそ無かりけれ。此時に、全州に陣取りたる遊擊茅國器がいひけるは、義弘が狡黠、諸人の恐るゝ所なり。願くば、吾等先手を仕り、一當當(あて)らんと申しける。邢總督、其言の壯なるを感じ、重ねて人數を茅國器に加勢して、星州を守らしめ、島津に對陣せり。此時中路の大將董一元は、宣府にありて未だ至らず。此故に、茅國器が陣取りたる星州、三面に敵を受け、勢危きを以て、浙の步兵三千人に、盧得功が馬兵三千人を添へて、星州に遣し、茅國器に力を併せて之を守らしむ。石曼子が兵、物ともせず、日々に討つて出で、合戰を挑むと雖も、大將董一元、未だ著陣せざれば、茅國器も出でて働かず。此間に姪の茅明時に命じて、和に諭す檄の文を作らしめ、又史世用に下知して、平秀吉が十惡大罪を擧げて、一通の書に顯し、日本の諸大將へ遣しけり。同八月晦日に、中路の大將董一元は、數十萬騎を隨へて、諸大將と大擧を議し、進んで高靈・晉州に陣を取る。晉州といふ所は、前に大江あり。江の南は、即ち島津義弘が手先の望洋城なり。望洋の南は、皆日本の城、日本人望洋に據り、江を阻てゝ固く守る。其

上義弘が勇略大膽、かねて聞及びし事なれば、大明勢、恐れ震ひて進み得ず。故に義弘も出でず、互に守る事一月餘なり。茅國器進み出でて申しけるは、望洋城より、義弘が居城の新寨迄、城を取る事、勢長蛇の如し。望洋城は其頭なり。其首を摧けば、餘は竹を割るが如くならん。但し、晉江といふ入海を飛んで渡る事能はず。謀を以て取るべしといふ。董一元、此謀を用ひんと、工夫を廻らしける所に、茅國器が先手の者共、打廻りに出でけるが、日本城より女一人出でたり。即ち捕つて其故を問ふ。彼の婦人、一紙の書を懐中より出す。茅國器が兵共、驚きて披見するに、其詞に曰く、

此婦將レ度ニ異域一矣、吾甚憐レ之、捐レ貲以贖放ニ還故土一。天朝兵將、常恤ニ其窮困一。勿レ加ニ殺害一則、救レ蟻之德也。尾云、知ニ吾姓一者、介公之後埋レ兒之父、問ニ吾名一者有レ或之口無レ才之按、

とぞ書きたりける。即ち此婦人を引連れて、茅國器に見す。國器此書を讀む事再三、其心を曉らず。いかに案ずれども、合點行かざりけるに、標下の贊畫に、諸葛錄

茅國器郭國安に書を送りて內通せしむ

茅國器望洋城を攻む

といふ者あり。之を讀み、即ち解して曰く、介公は唐の郭子儀、兒を埋む父といふは郭臣なり。或を口に入るれば國の字、才なき按は安の字なり。姉を贖ひ出し、此書をかきたる人は、郭國安なるべしとぞ申ける。茅國器則ち參謀の史世用に語り、手を拍つて悅んで曰く、郭國安是より先に、日本にある時に、古き約束あり、中國に報じ記さんと云々。今日本の城中にあり。彼を間者として、城中を引破るべしとて、高麗人の商を三人仕立てゝ、日本の城中へ入れ、其隙を搜り窺ふに、義弘猶ほ泗川の城にあり。郭國安は、望洋城にありと聞きて、史世用が書を持たせて、潛に郭國安に見せ、約束を定めて曰く、九月廿日に、郭國安望洋城中の兵糧庫に火を懸くべし。其煙を相圖として、晉江の入海を渡り、望洋を燒落るべしと極めけり。されども、之を島津は夢にも知らず。大明人は、勇み悅んで其日を待つ。さる程に、九月廿日、相圖の時刻になりしかば、茅國器二萬餘騎、川を渡りて望洋城へ押寄する。望洋には、島津中務少輔忠豐楯籠りしかば、晉江の岸に備へて、渡口を遮止め、矢尻を支へて散々に射る。大明人射立てられ、遠淺に〔本ノマヽ〕洋控へける折節、望洋城中に、火の

島津忠豊泗川に退く

手を揚ぐ。島津之を見て、あはや、城中に失火の出來たるは。白晝なれば、よも手過にてはあらじ。心替の者こそあらめとて、入海の涯を打捨て、城中さして引取りけるを、茅國器勝に乘つて引付けて慕來る。島津が兵共、數度取つて返し突返しけれども、大明勢大軍にて晉江を早渡り、望洋へ押入り、城の架二箇所、並に軍勢の小屋二十餘燒間拂ひしかば、島津中書、爰にて討死せんと蹈止り戰ひけるを、軍兵共押阻て、今は矢長(やたけ)に思召すとも叶ふまじ。甲斐なき討死は、犬死同前たるべしと諫めければ、忠豊も是非に及ばず、望洋城を捨退きて、泗川の舊城を守る。董一元は、望洋城、火の手揚るを見て、同日申の刻、李寧・徐世卿を大將にて、二萬餘騎永春城を取卷き、平攻に攻入りけるに、城中島津が勢共、小勢なれば迚も叶ふまじとて、大手・搦手共に突きて、平田・本多・松浦・別所の者共、太刀・長刀・鑓先を並べ、喚き叫んで駈入りたり。大明勢多勢なりと雖も、兩方へ颯と分れ、中を明けて散々に射る。

島津勢新寨に退く

島津が兵共、東西に開合ひ、三方へ追捲り、黑煙を立て挑み戰ふと雖も、大敵拉ぐに難ければ、其勢、過半討たれつゝ、其上、敵、城中へ亂入りしかば、終に相叶はず、永

春城を捨て、新寨城へ落行けり。大明人永春城を襲破り、近邊の役所、悉く燒拂ひしかば、黑煙天にさゝへ、鯨波地を動すこと夥しとも斜ならず。茅國器・徐世卿、二つの城を乘取り、勝に乘つて、廿一日の五更に、西の方昆陽城を破り、月下に戰ふ。此城には、島津が一族、給黎・町田・佐多・新納等固めたりしが、此有樣を見るよりも、爰は遁れぬ所なり。何れも皆嗜みて、日本の者を下すべからず。一足も退くな。皆此城を枕とせよと下知をなし、島津が家の朱鑓の兵共、鋒を並べ、矢・鐵炮を左右に隨へつゝ、寄來る唐人原を、馬も人も微塵になさんと、獅子の切齒して、下重つて待懸けたり。李寧・盧得功二萬餘騎、矢頃に寄りて控へたり。島津が兵之を見て、なじかは怺ふべき。弓・鐵炮を一同に放立て、屈强の兵共、䩜を傾け鑓玉をついて、一度に突いてぞ懸りける。相從ふ若黨・小者原も、手々に刀を拔連れ、主々に引付いて、眞黑になりて馳入りたり。大明人、猛勢なりと雖も、日本一二と沙汰せられし、鬼神を欺く島津が兵共、一つ枕に討死せんと、死を競ふ事なれば、何者かは面を向くべき。一捲りに捲り立て、眞黑に馳入る勢々、左も右も嫌ふ事なく、只薙打に打つて懸

島津勢明兵二千七百餘を討取る

義弘泗川城に退く

る。大明人一刃も合せず捲り立てられ、魚鱗にも進み得ず、鶴翼にも開き得ず、人馬共に震慴れて、右往左往に北げ散り、討たるゝ輩數を知らず。一時計りの戰に、大明人、討たるゝ者二千七百五十餘なり。されども、寄手大軍なれば、搦手の柵を打破り、矢倉に火を懸けたり。折節北風烈しく吹きしかば、猛火城中に吹覆ひ、島津が勢、戰ひ疲れて見えけるに、大明人荒手を入代へ〳〵、透間をあらせず攻め入りしかば、義弘が兵共、過半手負・討死し、終に叶はず、昆陽城を開いて、泗州城につぼむ。頃は九月廿一日の寅の刻の事なれば、月は隈なく照りたり。明の大軍鬨を作り懸け〳〵、追來る事甚だ急なり。新納・佐多の兵共、取つて戻し、鑓を合せ七八度迄、突返しければ、大明人も戰疲れ、追捨にして引還しけり。三所の城を攻め破りしかば、董一元、兵を江南に留めて、石曼子、義弘と戰はんとす。新寨城中より之を見て、島津が兵共、突いて出で、追拂はんと勇進みしかども、義弘固く制して曰く、彼は大軍なり。卒爾の軍して、越度を取るべからず。さりながら、謀を全うし敵を不意に陷れ、其時一擧に戰を決せば、唐人原を盡く討果すべしと制止めしかば、皆

進んだる兵も、怒を抑へて止みにけり。

泗川落城

董一元島津に和談を勸む

董一元は、望洋・永春・昆陽三城を乘取り、勝に乘り進む事、恰も竹を割るが如し。大明勢、勝誇らずといふ事なし。然れども、義弘が居城新寨、堅く怺へてあり。其上、此間の戰に、石曼子が勇力を見るに、尋常に合戰して、中々、勝難しと見てんげれば、所詮只、和談を取組み、一には城中の案内を見、又は彼を服せんには、如かずと思ひ、茅國器が甥茅國科を使として、新寨城へ遣し、多くの金帛を進物とし、義弘に見えて、樣々に言を盡し、利害を說き、關白秀吉を捨て唐人と和談し、日本を取る謀をなすべし。然らば、大明の大軍を遣し、征伐すべしと誘ひ誑しけり。義弘彼が心を能く知らん爲に、佯りて同心しければ、大明の諸大將、手を拍ちて悅び勇めり。間人郭國安も、傍より進出で、頻に和談を勸めけり。されども、義弘實に與するにあらざれば、音信の金帛を返し、和議を破る。董一元、さては、謀を以て取難しと思ひ

つゝ、九月廿八日の夜半に、一元自ら、三十萬を率ゐて、島津中書・新納武藏守が籠りたる泗川城へ押寄する。此城に籠る島津が兵、僅に三百騎に過ぎざりければ、一番に攻め取り、高名を抽でんと志し、大同の驍將李寧手勢計りにて、拔駈に寄せたりけり。之をば夢にも知らず、新納武藏守手廻計りにて、夜廻に出でたりけるに、闇紛れに礑と行逢ひたり。出合頭の事なれば、一矢も射ず、田尻荒五郎、一番に鑓を打入れしかば、武藏守も、二番に鑓を入れ、一度に曈と突懸り、急に採立てしかば、李寧防ぎ戰ふと雖も、突立てられ、曈と崩れける所を、武藏守指揮を振り、急に透間もあらせず追詰めければ、大明勢數百人討たれ、剩へ、大將李寧も、島津が勢に取籠められ、終に討死してんげり。殘る奴原を、追伏せ〳〵首數多討取り、勝凱作つて、泗川城へ引入りけり。大明人は、李寧を討取られしに、氣を臆して、先手夜中には進み得ず、夜明けて後陣の大明大勢、數萬にて進來る。城中には、之を知らず、夜前の戰に、李寧を討取り勇誇りつゝ、明くれば廿九日早天に、刈田をせんと、島津が勢、討つて出でたりける所に、向を見渡せば、數萬の唐人充ち〳〵、只今寄來るに行逢

義弘和議に同ぜず

李寧討死

明兵大擧して泗川城を攻む

泗川の將士援を新寨に乞ふ

盧得功討死

敵兵城中に亂入

ひたり。味方驚きて、足早に策りつゝ、城中へ取込みけるを、大明人駿馬に鞭を上げ、眞蓦に追來り、其儘、門を立てさせじと攻め戰ふ。城中小勢なれば、籠城は中々なるまじ。突いて出で敵を拂ひ、是より根城の新寨へ取込まんと、中書・忠豐・新納已下三百餘騎、喚いてこそ懸りけれ。新寨へは、急に後詰して救はるべしと申遣し、爰を先途と命を惜まず、面も振らず防戰ふ。斯かる所に、遊擊の盧得功、眞先に進みて下知しけるを、大將と見おほせて、島津中書自身、鐵炮を以て狙ひすまし打ちたるに、盧得功眉間を打たれ、聲もせず俯に馬よりどうと落ちたりけり。其手の兵共、是に痿みて、三町餘引退き、二の手の茅國器・徐世卿入代りて、大手の門へ込入りけるを、島津中書、門口を堅めて、追込めば出し、斬入れば突出し、半時計りに九度迄込出しけり。島津中書が切つて出で、一捲、捲つて歸る。其跡は、手負死人の伏したる事、河原の石に異らず。中書眼を瞋らかし、臆したる者に言をかけ、餓鬼め引くなと恥しめて、後詰の來る迄、城を持堅めんと勵しけるに、寄手夥しき大軍にて、旣に城へ亂入り、早城に火を懸けたり。中書・新納も、斯くては叶ふまじとて、

萬世德檄を日本軍に送る

殘れり。十月朔日に、泗川にて大明勢敗軍せしかば、彌、氣を失ひし處に、十月上旬に、經理の萬世德、始めて朝鮮に來る。されども、諸口の調議已に定れば、別に行(てだて)をすべき樣なし。檄の文を作り、日本の軍中へ遣し、太閤死に給へば、兵を曳いて早く歸るべし。然らずば、甲を解きて來り、降參せよと觸遣す。茅國器も參謀史世用を使とし、島津義弘を誘〔誑カ〕し、弟の茅國科・毛間科を人質に入れつゝ、和談を求め、日本諸大將の間を引離さんとす。兎角する內に、十一月上旬も過ぎぬ。此時郭國安は、義弘が所に居ながら、大明人へ內通して、日本方の城々は兵糧もなし。國に大疲あれば、憂を捨てゝ歸るべし。此頃清正兵糧なし。故に義弘に借る。義弘も城に兵糧なければ借さず。釜山浦の外砦兵糧なし。釜山城へ忍を入れ、兵糧倉を焚かば、彌、倭人は、早く引取るべしとぞ敎へける。是に依り、大明の諸勢、悅勇みて、日本人の除口を付けんと支度せり。海口の浦々に、大明・朝鮮の船共、充ち〳〵しかば、日本勢もやはか、無事に引取るべしと、氣を詰めざる者はなし。清正・長政は、順天の小西を助くべしと、寺澤志摩守に相談を極めしかば、蔚山城、海手遠くして、自由

ならざるに依つて、淸正開いて機張に歸る。島津義弘も、泗川を撤し、小西行長も順天を引拂ひ、近日渡海せんとす。淸正・長政は、小西を心許なく思ひ、釜山浦の寺澤を待ち付け、後卷せんと思ひ、十一月十八日に、加德島迄出船し、鍋島信濃守勝茂と相談する所に、寺澤は、去る十六日に、順天表へ向ふとて、釜山城を開いて出船致せし由、聞きしかば、扨は是に陣取り、順天の安否を聞屆くべしとて、加德へ上りけり。

朝鮮在陣の日本勢殘らず歸朝

十一月十九日に、小西攝津守行長は、順天城を引拂ふべしと、定めける所に、如何にして聞付けゝん。海手の大將陳璘、之を知りて大に悦びて曰く、是れ固に倭を殲すの時なり。急ぎ遮り止めんと、鄧子龍を大將にて、朝鮮の李統制と同じく水兵一千餘を選び、大船三艘に乘せ、先手とし、鼓金より押出し、日本渡海の船を取らんとす。島津義弘・淺野幸長・宗對馬守義智・寺澤志摩守正成は、小西迎として出でけるが、宗

行長南海城に引揚ぐ

對馬・寺澤は、早くして順天表へ押著きしに、小西、大に悦び、島津・淺野が來るを待つ迄も、怺へ得ず、早や順天城を引拂ひ、南海城迄出でたり。義弘、行長方へ斯くともいはず、南海城の南の沖を廻り、引入りけり。島津義弘・淺野幸長は、斯くとも知らずして、順許表の事、心元なし。漕げや急げと、身を揉んで、順天さして行く所に、行長は、早や順天を引拂ひ、南海城の南の沖を廻りたる由、告來りければ、義弘・幸長大に怒りて、順天を引拂ふ事、此方へ註進にも及ばず、南海の沖を廻り引入る事、偏に吾々を、敵の餌に飼ひたる者なり。此上は、少しも早く引返せとて、南海城をば弓手に見て、十八日の夜通に、唐島をさして漕ぎ戻る。扨又寺澤志摩守は、小西と一手にならんと、順天へ押寄する所を、劉綎かねて番船を仕度し、五里・三里が間に充ち滿ちて、待懸けし事なれば、大筒・石火矢を放懸け、喚き叫んで攻懸りしかば、寺澤志摩守、一刃も合せ得ず、小西が善惡を見屆くるに及ばず、番船に追散らされ、三十里餘其日に逃退く。十九日の入相に、震ひ〳〵唐島の瀨戸口へ北げ上る。又島津義弘・淺野幸長は南海を直に渡りしかば、鼓金の敵にも出合はず、十九日の晩景、是も

唐島に著きにけり。加德にありける淸正・長政は、此由を聞き、飯田角兵衞・毛利但馬守を使として、唐島へ遣し、此上は順天城の安否、如何候はんや。順天城沒落仕り、小西討死致し候に於ては、後卷詮なく候間、各、早々加德邊迄打入らるべく候はんか。若し又、行長落著聞屆けられず候はゞ、是迄、後詰として、淸正・長政差出で候條、善惡を承り屆くべきの旨申越しけり。寺澤志摩守より返事しけるは、早々主計守・甲州も唐島迄、御越し候へ。參會して相談を極め、小西安否の行衞、承屆け候はんとなり。島津と左京大夫は、委細は寺澤申越さるべしとの返答なりしかば、淸正・長政も支度し、明日は唐島迄打出づべしと談合しけり。扨又、小西行長は、十八日の夜半に、順天城を引拂ひ、南海城の沖を廻り、船を驅せける所に、鼓金に陣取りたる鄧子龍・李統制、之を見て、すはや日本人の引取るは。追懸けて討止めよとて、船を押切つて進めけり。されども、島津は、早や行過ぎて、小西並に宗對馬守、又は島津が後陣の兵船共に行會ひたり。頃は十一月十九日の黎明の事なれば、海上晴れて、朝日の光、隈もなし。鄧子龍、第一の高名せんと志し、手勢屈强の兵二百餘人、

鄧子龍

小西等の兵船と戰ふ

鄧子龍討死

小船に乘り、押切つて懸り來る。小西・宗・島津が船共も、射手を汰へ鐵炮を竝べ、天地を動かし防戰ふ。鄧子龍が船には、鎌・熊手を手々に持ちて、船端に立竝び、喚き叫んで乘付け〳〵、棒火矢にて打疼む小西が船、疼む所を得たり賢しと、鄧子龍眞先に進みて、日本船十艘計り乘取り、悉く海上へ切浸しつゝ、猛威を振ひける所に、後に控へたる陳璘が船より、行長が本船を目當に、石火矢を打懸けけるに、誤つて鄧子龍が船に中り、帆檣を二つに打折りて、船中へ噇と落ちければ、鄧子龍を始め、驚騒ぎ漾ふ所を、小西・島津が兵共氣を直し、得たり賢しと、其船に乘り移りしかば、鄧子龍を初、兵共も今は叶はじと思切つて、身命を惜まず、玉の汗を流し防戰ふ事、喩へていはん方はなし。されども小西が兵共、爰にて討死せんと勵みつゝ、死狂に斬つて廻りしかば、終に相叶はず、鄧子龍は、日比左近右衞門に組まれて、首を取られけり。小西が兵共、勝に乘つて舳艫より乘移り、二百餘の唐人を、一人も殘さず討取りけり。二陣に控へたる朝鮮の李統制、之を見るよりも、鄧子龍を助けんとて、入代り懸り來り、小西が兵船共、弓手・妻手に分れて、大筒・小筒を放立て、相懸りに

大明勢敗北

大將李統制討死

小西の兵船鼓金城に逃入る

漕向ひ、左右より揉合ひ、互に先登を競ひつゝ、命を鴻毛よりも輕んぜり。敵・味方の叫ぶ音は、海上に響渡り、打合ふ大筒・石火矢の音は、天に應へ地を動し、互に鑓・長刀の切先を雙べ、追ひつ追はれつ、潮を蹴き立て、七八度が程、揉立てけるに、終に大明勢打負け、大將李統制も、深手を負ひ終に討死してんげり。殘る兵共前後に靡き、南北に散りて漕退く所に、第三〔陣脱カ〕の船・〔地イ〕把總の沈理、百艘計りにて、押立て懸り來り、前を遮り後を切取り、左より圍み、右より揉立て、喚き叫んで攻め戰ふ。小西が兵共、大將二人討取りしかば、是に少しも臆せず、數百艘の敵船の眞中へ乘入れ、船を引寄せ〳〵、或は引組んで首を取るもあり、取らるゝもあり。又俱に、海中へ落入りて沈むもあり。近きをば斬落し、遠きをば鎌十文字にて懸け落し、面も振らず防ぎけれども、沈理が船より、火矢を打懸け〳〵しかば、小西が船共、疲む所を得たりやおうと、船を押付け乘移り〳〵、船二三艘乘取り、小西が兵共を百三十餘人討取りしかば、大明勢是に氣を得て、陳璘・李金後より引包み、通さじと攻め戰ふ。小西が船共、散々に打負け、其上小船なれば、大方燒沈められ、爲方なく鄧子

龍が、架へたる鼓金の城へ入らんと、彼の島へ逃上る。幸、鼓金には鄧子龍討たれたるにより、唐人共も落散りて、敵多からざれば、此城へ小西・島津が兵共も逃入り、少時息を次ぎたりけり。されども、船を盡く燒かれしかば、逃歸るべき樣もなし。其上、敵、大船をかけて取卷けば、只籠鳥の翅を綴られ、九霄の天を望むが如し。行長も戰疲れ、船五六艘乘取られしかば、身を揉んで下知を爲し、雲霞の如くなる敵船の眞中を乘破りしに、小西が乘りし船、善ければ乘切つて、島津が著く唐島の瀬戸口迄、廿日の晩に、這々の體にて來りしかば、義弘・行長も、悅ぶ事限なし。此旨、加德へ申遣しければ、清正・長政、扨は安堵したり。小西が行衞を知らん爲め、是迄出で候へども、此上は、早々、釜山浦へ打入るべしと談合す。斯かる所に、麻貴・牛伯英を先とし、東路の寄手大明勢、十萬にて釜山浦へ寄すと、告來りければ、一國一城の釜山城、大事の所なれば、敵に取らるれば、悔ゆとも歸るべからずとて、清正・長政は、十一月廿二日に、加德を出で、釜山浦へ打入りけり。さて島津が後陣の勢五百計り、小西が勢も千餘り來らざるは、一定鼓金にて、大明人に取卷かれぬと覺えたり。捨

島津の兵陳璘の兵船と戰ふ

て丶還るも難儀なれば、先づ其體を見せに遣せとて、伊勢兵部少輔貞昌、早船三艘に取乘り、廿一日の朝、鼓金へ行き、伺ひ見るに、案の如く、小西・島津が兵追上げられ、船をも燒かれつゝ、船著には大船をかけ竝べ、鐵炮の音、事々しく鳴渡り、大明人取卷けば、近づく樣なし。夜に入りて、島の背へ廻り、切岸の下に船を付け、伊勢兵部少輔こそ、迎に奉りたれ。出合せよと呼びければ、城中の兵共悅びつゝ、夢の心地にて、木戸を押開き、誰々某、爰にあり、迎船を給はるべしと、聲々に呼ぶ。伊勢兵部、急ぎ漕戻りて、此旨を申せば、義弘・行長より迎船五十餘艘遣しけり。廿二日の辰の刻に、鼓金に押付けゝれば、大手の船著は陳璘堅めたり。島津が兵新納・野村・樺山等、少しも痿む氣色なく、眞一文字に乘付け、弓・鐵炮にて打立て、喚き叫んで攻め懸る。陳璘も、爰を先途と防ぎけれども、島津が兵共、先登を競ひ進み戰ひしかば、大明中軍の大將陶明宰、爰にて討たれければ、陳璘討負けて、大船共のもやひを解き、吾一々と、沖へ漕退く。其間に、迎船は鼓金の勢を船に乘せ、事故なく、唐島に著きしかば、島津・小西・淺野已下、加德迄引取りけり。劉綎は、行長を討洩らし、口

惜しく思ひつゝ、加徳迄追來り、小西が勢を能く見知れば、之を討たんと隙を窺ふ。されども、兩方對々の人數なる上、義弘があるに恐れ、卒爾に取懸る事叶はず。故に何れも加徳に引拂ひ、翌日廿三日には、釜山浦の瀬戸口迄、討入りけり。依りて寺澤志摩守方より、相談仕りたき事候間、左様に心得えらるべき由、廿四日の朝、釜山浦の清正・長政方へ申越す。主計頭・甲斐守、之を聞いて、如何様の評定にて候や。內意承りたしと返答せり。是に依つて、重ねて三井角左衞門を以て、小西行長・寺澤正成申越しけるは、一には、椎木島瀬戸口に、大明番船の押として、あたけ船をかけ置き候はんや、二には、泗川にて茅國器が出す所の人質、茅國科・毛閒科と、又順天にて劉綎が出す人質劉天爵は如何、取納め様を承りたく候。日本へ遣すべきや。又是にて誅伐有るべきや。大明へ還し遣るべきや。様子相極むべき相談なりと申し來る。清正・長政無興し、此旨は吾等分別に能はず。但し番船押の事だけは、敵の番船待付けて、入れざる事に候はんや。此談合は、承るに及ばず。次に人質の片附け様、各ゝ分別に任せらるべし。兎角間遠くして、萬づの評定なり難く候間、釜山

浦の丸山へ寄り見廻り然るべし。義弘・行長著岸候はゞ、それへ兩人參るべしと返答せり。寺澤より、重ねて使を以て、何れも參會して、衆議するに及ばず候間、何事も使を以て、申承るべしとて、此度は、一通の御朱印を相添へ、是にて兩人分別仕られ候へとて、德永法印・宮木長次渡海の時、秀吉公御名代に、家康越給ひし朱印を、其砌は隱置き、今度使に持たせ差越しけり。淸正・長政彌〻無興し、此御朱印は、初め和談の相濟まんかと、有りし時の御教書なれば、今の用には立つべからず。只今の仕廻は、博多より淺野彈正・石田治部差越さるゝ書中の趣か。又は伏見より、家康利家、仰せ下されし筋目か。兩條の間に、相極め然るべく候間、此御朱印は入らず候と、返遣しければ、行長腹を立て、彈正・治部が指圖か。內府・大納言御下知に極らば、談合するに及ばざるに、聞えざる返答かなとつぶやく所へ、庄林隼人佐一心を使にて、淸正・長政申しけるは、小西殿釜山城請けたき由、仰越され候は、又御無事の扱御興行か。扱は自分の御隙入にて、釜山御逗留ありたきや、承ると申來る。行長、彌〻氣色を損じ、謂はず邪推して、人の心中を探りける嗚呼の者かなと怒りけり。

此時庄林申しけるは、左様に仰せられ候はゝ、御談合にては之なく候なり。有無の御返事、承るべしと、色々責めけれども、小西は返事もせず。其時寺澤志摩守申されけるは、隼人罷歸りて、淸正・長政に申すべきは、最前の御朱印、能く今一度拜見ありて、其上にて分別候へと、申すべしと返答しければ、庄林立歸りて、有の儘に返事をいふ。淸正・長政、然らば、彼の御朱印、又此方へ給はり候へとて、取りに遣し、淸正・長政さし集ひ、數篇讀みて評定せしかども、最前、新寨の合戰を聞かざる時の御敎書なれば、此時の所用に、一つとして叶はず。扨は此旨申遣はせとて、栗山備後守利安に、御朱印を持たせつゝ、重ねて御敎書、拜見仕り候へども、初の分別に、變る事なく候間、御朱印返進申し候とて、廿四日の晩瀨戸口へ遣しければ、早や小西行長・寺澤正成・淺野幸長等、殘らず船に乘浮べ、今宵、月の出鹽に船出し候由にて、瀨戸口は上下共に取騷ぎ、御朱印を請取る人だになければ、栗山も色々驅廻り、寺澤家人梶原六兵衛に尋逢ひ、右の御朱印を返置き、急ぎ釜山浦へ馳戻り、小西・淺野・寺澤・宗・有馬の人々は、早や日本へ歸朝候はんとて、船に乘浮ばれ候と申しけれ

ば、主計頭・甲斐守大に怒り、此上は是非に及ばず候間、吾々も殘らず陣拂して、一同に船を出せとて、總軍へ觸廻す。釜山浦に集る所の日本勢、加藤清正・黑田長政・立花・久留米の人々を初、都合十萬餘、吾も〱と、數千艘の船に乘移り、碇を卸し檣を立て、艤して句り呼ばはる音、天地も動く計りなり。諸大將は、猶釜山城に踏止り、下々雜人原、一人も取殘すべからざるは勿論、兵具以下、忘れ置くな。下々周章騷ぐべからずと、堅く下知しければ、聊か騷ぎ亂るゝ事なく、雜具・兵糧・雜人を、一番に船に乘せ、扨士卒、其手々々の船共、悉く乘移り、今は少しも殘る所候はずと、城へ註進す。清正・長政を初、諸大將は之を聞き、されば打立ち申すべしとて、十一月廿六日の暮合に、城を出で、悉く船に乘りつゝ、湊口へ押出し、跡には手輕き兵廿餘人殘置き、釜山城に火を懸けたり。折節西風烈しく、猛火天に覆ひて燒上る頃は霜月廿六日の戌の刻計りの事なれば、火光雲を焦しつゝ、四方十餘里は、只白晝の如くなり。廿餘人の兵共も、城外の粮小屋迄に火を懸け、心靜かに陣拂し、憂かりし朝鮮の地を、今立出づる嬉しさに、早や船に乘移り、漕げや急げや者共とて、日本

に歸る嬉しさ、飛立つ計りなりければ、只一息に押切つて、湊口へ出でにけり。日本勢十萬餘、殿の兵共を待付け、數千艘の兵船共、一同に帆を上げたり。此時島津薩摩守義弘・子息又八郎忠恒は、釜山浦より二里餘隔て、船をかけ置き居給ひしが、廿六日の黃昏に、釜山浦に當つて、火の手夥しく上がりたり。義弘大に驚き、早船を以て、釜山へ遣し見せけるに、日本の諸大將・士卒に至る迄、一人も殘止らず、城中・城外、一同に火を懸けつゝ、餘煙雲を卷きて燒け上がる。早船急ぎ歸りて、此旨を主の島津に告ぐる。義弘大に怒り、兼日よりの約束にて、諸手一同に、陣拂を致すべしと、相定むる所に、斯くの如く仕る段、是非に及ばず、此上は當方も直に引取るべきなれども、猶子の中務丞忠豐を、釜山に殘し置きつれば、之が行衞を聞屆くべし。如何にして有りけん。心許なしとて、片唾を呑みて居給ひける處へ、中書忠豐は、釜山浦に殘りつゝ、日本の總軍、城を放火し陣拂して、出船すると雖も、伯父義弘に、此事を告知らせ、一所に引取らずば、以來の瑕瑾たるべしとて、總人數は引取れども、其には隨はず、伯父義弘が泊りし二里餘の浦へ驅來り、釜山城火の手を見

て、あはや日本人は引取るはとて、大明・朝鮮の番船共、數百艘押來りしかども、島津中書、少も痿まず、雲霞の如くなる敵船の中を、射立て討立て、眞一文字に乘り通りしに、大明・朝鮮の兵共、島津が勢を見知りたれば、只遠矢に射たる計りにて、恐れ慴れて近づき得ず。中務は難なく乘通し、義弘父子の船を日當、恙なく驅來りければ、伯父の侍從、涙を流し悦ぶ事斜ならず。されば、此方も引拂ふべしとて、明くる廿七日の朝和(なぎ)に、義弘父子島津勢、兵船盡く待汰へ、心靜かに陣拂し、陸の陣小屋に火を懸け、鬨の聲を上げ、大筒共を打立て、瀨戸口より船を出す。折節、地嵐吹きし故、清正・長政以下十萬餘の船共も、沖に風待して有りしかば、義弘父子も、急ぎつつ總軍へ追付きけり。斯くて廿七日辰の刻より、風變りつゝ、順風快く吹出でしかば、風能くなりぬ。急ぎ船を出せとて、清正・長政・義弘父子・小西・寺澤已下、日本勢總軍數千艘の船、共に一同に帆をぞ上げたりける。順風小止なく吹來れば、其日の中に、四十八里を走りつゝ、日本の地へ著きにけり。島津は、人質に取りし茅國科・毛間科已下八人、又小西は、劉綎が出す所の劉天爵を召連れ、何れも恙なく對馬に

上り、之より劉天爵・毛間科巳下の人質を返遣しけり。淸正・幸長・鍋島等が船は、順風よければ、對馬へ上らず、直に九國の地へ走りければ、總軍勢も大方打連れて、廿七日の晩景に、筑前灘肥前國湊口へ、思ひ〳〵に悉く歸朝せしかば、日本一州の貴賤・上下、喜悅の眉を開きつゝ、中國・四國・九國の留主に、殘居たる侍共、己が國々より立出で、湊々・浦々へ、迎に出で充滿ちたり。人々の主々、諸大將の船著きしかば、船場へ罷出で、主從父子兄弟に對面し、悅の淚せき敢へず、手に手を取り、七年間の心盡し、互の安否の覺束なさ、萬里の空を思ひやりし其志を、一時に晴し、悅勇む音洋々たり。迎の上下、各〻面々の主仁大將へ目見し、御歸朝目出度き旨、祝儀を申述べしかば、此所も彼所も、さゞめき渡りてぞ見えたりける。島津義弘・小西行長も、對馬に二三日滯留し、大明より取りし人質共の埒を明けつゝ、兩大將潸連れて、是等も博多湊に付きしかば、彌〻賑ひて見えたりけり。朝鮮征伐は、去る文祿元年壬辰より、今歲慶長三年迄、七年の間なれば、日本・大明・朝鮮の騷動、貴賤・上下の困窮、斜ならざりしに、秀吉公御遺言ありて、諸軍殘らず引取りしかば、三國の緇素悅勇みて、

董一元日本人の築城術を歎美す

島津義弘の居所

只蘇生する如く思へり。

日本勢殘らず歸朝して伏見に著す

日本人殘らず歸朝すれば、中路の大將董一元、新寨城に入りて、城中の體を見るに、三里・四里に塀・柵を架へ、丈夫に拵へたり。城中の固め塹隍の架へ、孫・吳が法に叶ひ、李靖が陣を移し、奇正の用・犄角の備、其宜しきに當りしかば、實も卒爾に攻め入りて、仕損じたりしは理なりと、日本人の手段を奧深く思へり。島津義弘が居所と思しき所を見るに、泥金の屏風・梨地の床几等あり。床には、螺と鈿との卓の上に、螭頭の香爐を置き、金紫銅の花瓶を飾り、玉澗が三幅對の懸物・青磁の硯屏・臥牛の筆架・金泥の茄子の墨・雲龍の硯を竝べ、壯觀奇麗を盡す。又金絲の鸂鶒・金絲の掌扇あり。光耀目を奪ひ、言語を絶する計りなり。之をば、皆朝鮮王城にて亂妨せしものならんといひながら、一物も取らず盡く放火せり。曾洋・固城の二城も、皆捨てけり。邢玠、其功を論ずるに、四路の大將の內、董一元、初に晉江を渡り、曾洋を破る。

明將の論功

之を首功として、新寨の軍に手を碎き、勝たずと雖も、敵討つて出でざるは次功なり。八寨を平げて、一人も殘さず引取りしは、全功なりと褒美しけり。又海上の軍は、陳璘が功を第一とす。今年十二月朝鮮國安堵し、國王を初め臣民、共に大明の恩を頂き、再び蘇生するが如く思へり。

戰後の部署

總督・經理其外の諸大將、各、兵を率ゐて星州に歸り、善後の謀をなす。李承勛・杜潛等は、人數を散さず、朝鮮の王城に留りて、守禦の備をなす。劉綎は南方の播の楊應龍、又發るに依りて、直に播へ向ふ。茅國器・陳蠶は、釜山浦に止まり、張良相・張榜は、海口にありて、日本の動靜を聞きて、明くる萬曆廿七年四月迄、守禦の備を緩うせず、堅く守りけるが、日本人、再び來る事なく、海上も穩なれば、九月に陣拂し、大明へ歸へらんと、次第々々に打立ちけり。

明兵各、國に歸る

明くる廿八年正月に、大明の軍勢、盡く關に入り、是より己が國々へ分遣し、牛馬を放ち、又用ひずといふ事を示せり、邢玠今度の軍功に依りて、爵を南天司馬に進む。獨、萬經理は、朝鮮王城に留りて、善後して朝鮮一州の仕置き、隈々の城々を再興し、政法を沙汰して、未だ還らず。大司農度支するに、萬曆廿五年、邢玠山海關を出でしよ

明軍の戰費其他

り廿八年、歸陣に至る迄、用所の金子八百萬兩、其外兵具・玉藥・馬牛・藁薪芻、中々數ふるに遑あらず。さる程に、日本人も盡く歸朝して、筑前の博多へ集り、石田治部少輔に參會す。加藤清正は、淺野彈正名島にあれば、先づ彈正に逢ひて、博多へ行くべしとて、名島に三宿し、彈正と同道して博多に來る。翌日彈正・治部、諸大將を召集め、朝鮮在陣の苦勞を感じ、將軍の御遺言を申渡し、銘々に御遺物を頒ち與ふ。諸大將、之を頂戴し、各〻涙に咽びて物もいはず。やゝ暫くありて、彈正・治部少輔、涙を押へて申されけるは、各〻是より伏見へ上られ、秀頼公へ一禮申上げ、面々の國に下向し、窮困を慰めらるべし。來年夏の頃、上洛あらば、茶の湯を始めて、各〻慰めらるべしとぞ申しける。

清正と三成

清正、元來、石田と中惡しければ、進出で、各〻へは御茶を下さるべし。清正は朝鮮に七年在住し、兵糧一粒もなく、茶も酒も持たざれば、稗粥にて持成し奉らんと、大聲にて申しけり。治部少輔心に得り奇怪に思ひけれども、是非の問答に及ばず、是より打連れ〳〵、伏見へ上り進みけり。

諸將伏見に集合

朝鮮歸朝の諸大將、伏見へ著きければ、家康・利家・景勝・輝元・秀元對面ありて、五奉行と相談し、

島津、泗川の軍に勝たずば、日本人引取る事なるまじ。家康・利家の內、一人渡海あらば、天下の騷動たるべきに、島津が功を以て、容易く引取る事、拔群の忠節なりと、一同に感じ、薩州の內、和泉・高城二郡四萬石の領知を加增とし、義弘には、吉光の御脇差を添へ、子息又八郎忠恒をば、少將に任じ、長光の御太刀を添へ、五人の大老連判にて、感狀を給ひけり。朝鮮にて島津討取りし大明人三萬八千七百の馘・劓をば、車にのせ、洛中・大坂・伏見を引渡し、諸人に見せ、東山大佛殿の前に、塚を築き納入れ、僧を供養し弔ひ給ふ。日本末代迄の威光赫奕たり。此塚を耳塚と名づけ、兒童迄も其德を頌せり。其後朝鮮人來朝する時は、國の爲めに死を輸したる輩なりとて、祭文を作り哭泣し、此耳塚を祭りけるとぞ聞えし。偉なるかな盛なるかな。太閤秀吉公は、陋巷より起りて、空曠孤獨の身たりしかども、天才英武、古今に獨步せしかば、卒より士に遷り、士より大夫に至り、諸侯を經て、程なく主君の仇明智光秀を、目前に討平げ、東西南北を切隨へ、次第の昇進滯らず、剩へ關白・大相國の尊位を極め、日本は扨置き、朝鮮・大明迄切靡け、忝くも豐國大明神と祀られ給ふ事、是れ直

太閤の武徳

事にあらず。偏に日輪摩利子天の應化なるべしと、掌を合せざるはなかりけり。實に足利公方普光院殿義教公、赤松に討たれ給ひし嘉吉元年より、天正十年迄百五十年が間、天下絲を亂したるが如く、五畿・七道、修羅の巷となり、彼を討ち此を隨へんと、互に威を震ひしかば、都鄙盡く兵革のみにて、士民一時の安を得ざりける所を、秀吉公、方寸の謀略を以て、東夷・西戎を掌に握り、南蠻・北狄を立處に切隨へ、天下一統に歸しつゝ、今の末々迄も、四海の浪治まり、九島の狼煙立おり、禁中・仙洞も、古の風に立返らせ給ひ、貴賤上下、干戈を納め、甲冑を箱物とし、無爲の樂に逢ふ事、偏に秀吉公の武徳に頼りし事、誠に只尋常の儀にあらずと、心あるも心なきも、頭を傾けて稱歎せり。傳聞く漢朝の王夫人は、日輪、懷中に入ると夢て、武帝を誕生し、吾が朝の秀吉公も、日輪慈母の懷に入ると夢て、降誕し給ひし故に、斯かる大功を、四海に殘し、今の代迄も、其恩澤を蒙り、其威德を頌し、彼の恩化を尊ばざるはなかりけり。

吾三十一歳の夏の頃、亞相君の御使として、上杉景勝卿の猶子上杉義眞、此頃は

畠山休心とて世を遁れ、都に住居せさせ給ひし許へ上り、其歸に秀吉公の御廟豐國の社に詣でみれば、傳聞く故秀頼公御代の時は、此御社、宮殿・樓閣玉を連ね、社頭は瑠璃の世界の如く、錦の戸帳を懸廻し、瑞籬に金銀を鏤め、社僧・社人は車を飾り、珍膳・妙草を備奉り、結構美を盡せしかば、禮讖・讀經の聲絶間なく、神樂の鈴・音樂の響は、菩薩聖衆の來迎かと疑はれ、國々の大名・小名、在大坂・伏見の御馬廻、引も切らず社參して、神徳の威光を耀し、信心渴仰の頭を傾けたりしに、悲しい哉、大坂亂逆の後は、時移り世換り、今は昔に引替へて、詣づる人もなかりしかば、濃々たる露の色は、古を忍ぶ涙を添へ、折を忘れぬ春の花、誰見よとてや咲きぬらん。社頭荒れ損じて、洒掃する人もなければ、荊棘道を塞ぎ、蒔苔扉を閉し、年月を經て心の儘に荒果てしかば、檐の瓦地に落ちて春の叢に隱れ、門の扉朽果て、秋の月を宿せり。垣にも牖にも苔むして、嵐に咽ぶ松の響に、心なき啼く鳥も、哀を添ふる音を吟じ、岩漏る水の流のみ變らで、年は歴にけん。神樂所・拜殿は傾きつゝ、御簾も几帳もなかりしかば、金爐香盡きて、草殘る一叢の煙、玉殿燈なく、

螢五更の夜を照し、夕の月、木の間に洩れて、梟鳴く松桂の枝、鴟の風寒くして、狐蘭菊の叢に隠れ、閑庭に落葉満ち、何方も蕭々たり。寂々と荒廢の跡を拜し廻り、さしも一天四海の主、博陸殿下の御跡、斯く計り荒果てん事、争でか悲まざらんや。嗚呼殷の湯王、夏の桀を討ち、天下を取り給ひしか共、禹の廟を尊び祭り、周の武王、商紂を亡し給へ共、殷の社稷を修理しつゝ、祭祀を専にし給ひしに、秀頼の罪何か桀紂に及べる。苟くも簒奪の功を立つるのみにて、天下中興の豐國の御社を、斯樣に荒し給ふ事、後世誰か痛まざらんや。韓文公が一文にて、潮州の鰐を退治せしだに、後世其功を尊びて、百世に廟食せり。如何に況んや、二百餘年の衰亂を、秀吉公十年の内外に平げ、剩へ日本の武威を大明迄彰し給ひ、今の世迄も、本朝の勇略に服せしめ、日本一州の貴賤上下、枕を泰山の安きに置き、四海鎖さぬ世となりし事、古今無雙の大功なり。されば心あらん人は、豐國を以て伊勢・石清水に准へ、祭祀の禮などかなかるべき。予卑賤の身たりと雖、豐國の廢壞を拜し奉り、感慨止難くして、せめて秀吉公の大勳を、末世に知らしめ、

其恩化を尊ばしめんと志しつゝ思立ち、此書を書立て侍りぬ。凡て戰場の事は勿論、傳聞く古の事は、違へる品のみ多き者なり。軍場の働も、一を二に記し、又大功あるを知らずして、記し洩したる事多かるべし。然れ共、悉くに其品を糺し、露違はざらんとせば、年月を經とも、本意を遂ぐべからず。唐土の聖の文より、吾朝古の賢き御世の博士の記し置く文にも、違へる事のみ多かるべし。心狹き人・愚なる人は、其分を辨へ得ずして、平家物語に蒲殿の働を記し洩せり。信濃前司行長が誤、今は平家物語信用するに足らずと誹り、太平記には新田殿を斯く書し、楠が事を斯樣に記せし、之等を見れば、此書も面白からずと笑ふ。近年甲陽記・信長記・太閤記を見る人は、猶以て、近き事なれば、其場に居たりし兵も、十年・十五年已前迄、存命居たりしかば、其人の語るを聞きて、彼の書此文相違せり。今は見る所なしといへり。知らず、又其語る人の過にて、書の誠なる事も有りなん。其を憚りて少も誤闕くる所なからんと、心を盡し書傳を訂さんとする輩は、才暗くして孔子・司馬遷・左丘明に勝らんと欲するか。誠に下賤の諺に、富士山に長競

する喩ならん。只大樣の筋目を正し、秀吉公の奇計・智謀の活動、隆景・淸正が進退宜しきを得、長政・宗茂が隨機應變の所を見せしめ、後の人に知らしめん爲に、筆を起す事につき侍り畢んぬ。心有らん人は、哀にも斯計り愚なる身にて、唐・倭の文字の澄濁だに知らずして、斯く綴り書きたる事よと、咲かしく見なして、心に憐みつゝ、見免し給はゞ、幸の中の幸ならんかし。

此書、全部十三卷、朝鮮征伐記と題す。大閤定祐の所撰なり。是より先、堀正意の所撰の朝鮮征伐記あり。全部九卷板本なり。名同じくして物異なり。因つて之を大閤本と云ひ、彼を堀本といひて以て別つ。

朝鮮征伐記第十三　大尾

蒲生軍記

序

孔子曰、古之聰明叡知、神武而不殺者夫。孟子曰、不嗜殺人者、能一之。彼謂其體用之妙。此謂天地爲生物之心。爲主將者、能自識得、然後可與言兵矣。天下之治亂、邦家之盛衰者、仁與不仁、義與不義之所爲也。徒非讀此蒲生軍記語者之所識得也。古今所謄寫兵書者、主將之糟粕也。不用計策、不依奇正、獨安不殺人者、能自治天下者也。爲主將者、何爲其不鑒乎哉。其必勿坐勝敗之上云爾。

元祿八年如月既望日　　攝陽北水浪士弌時軒惟中序

蒲生軍記卷之一

蒲生由來の事

蒲生氏郷の元祖

夫れ日出でゝは、天地明かに、花開きては山林美なり。聖人國に在す時は、必治まり、賢人家に住める時は、安寧なり。爰に近代出羽陸奥の守護從三位、會津宰相兼飛驒守藤原氏郷といふ人ありき。文武の兩道に達し、先祖の名を揚げ、其身の譽を顯し、子孫の後榮に及ぶ。其根源を思ふに、或時は、文を用ひ、或時は武を用ひて、國家を安ずるを慮り、實に世の鑑とも成りぬべき事多かりけり。其先祖を尋ぬれば、人臣の祖天兒屋根命廿三代の苗裔、大織冠鎌足大臣八代の後胤、武藏守鎭守府將軍秀郷朝臣廿一代の末葉、蒲生下野守定秀の孫、左兵衞大夫賢秀の子なり。抑〻秀郷朝臣、本は大和國田原の里に住みければ、田原藤太とぞ申しける。後に俵と字を改む

る事は、醍醐天皇の御宇、延喜十八年十月廿一日、秀郷近江國勢多を通りけるに、大蛇橋の上に横れり。往來の旅人、之を畏れて、通り得ざりけるに、秀郷少しも驚かず、大蛇の眞中を踰えて通りければ、大蛇湖に入りて、一人の男と成りて出で、秀郷に追著きていふやうは、我は此湖の龍神なり。然るに當國三上山の蚣は、彼山を七重に纏ひ、威を奮ひて、我年來の敵なり。彼と數度に戰ふと雖も、利を得る事少し。故に然るべき武士を賴んで、退治せん爲に、此頃人の心を試るに、御邊に增したる弓取なし。願くは我に賴まれて、彼を退治し給はんやと、懇に申しければ、秀郷聞きて、夫は安き事なりとて、彼男と共に、勢多の橋より下り、水中に入ると思へば、程なく龍宮城に到りぬ。其夜例の如く、夜半計りに、百足の蚣、大山の如く、押寄せたり。秀郷五人張の弓に、十五束三伏の矢取つて打番ひ、鏃に唾を吐懸けて射けるが、其矢違はず、百足の蚣の眉間に、立つて倒れぬ。秀郷太刀を拔いて、寸々に斬捨てたり。龍神感謝して、秀郷に十種の引出物を出されけり。其時龍神御邊の末葉に、將軍になる人、多かるべしと申しける。十種の寶とは、太刀一腰・鎧一領・

秀鄕押領使となる

旗一流・幕一走・卷絹一本・早小鍋一箇・頸結俵一箇・庖丁一箇・心得の童一人・鐘一箇なり。秀鄕歸來の後、鐘を三井寺へ納めて、今にあり。露といふ硯は、竹生島に納めらる。童は思ふ事を叶へて、久しく仕へしが、後に下野國佐野の家に渡りけり。太刀は、勢州赤堀の家にあり。其名を遲來矢といふ。卷絹は裁縫うて衣裳にすれども耗らず、衣服充滿しけるが、後に其末を見ければ、延ばすといふ。鍋は兵糧を炊ぐに、少間に煮ゆるとなり。是も後には、底拔けて、其影を寫して、蒲生にありとぞ聞えし。俵は、米を取れども〳〵耗らず糧に乏しき事なし。夫故に、名字を改めて、俵藤太とぞ申しける。將門退治の時、女房、俵の底を叩いて、米を覆しければ、一尺計りの小蛇出で去りしより、後米出でざりけり。是より始めて、今に俵の底を、叩かぬものといひ習はせり。亦、秀鄕の末孫、陣中に女を忌む事も此謂れなりとかや。此時、主上叡感あつて、秀鄕を從五位下野國押領使に補せられけり。勢多に祠を建て、秀鄕を神と崇めて、今に在り。秀鄕の子孫勢多の橋を通るに、必ず下馬して、笠を脫ぎ、鈎匙・小刀・鞭・扇子等の類にても、水中に投入れ、禮拜して通るに、必ず

平將門謀叛

秀郷征夷將軍となる

雨降ると申習はせり。希代の事共なり。亦、朱雀院の御宇、承平五年二月に、平將門謀叛を企て、伯父常陸大掾國香を討つて、東國を討隨へ、下總國相馬郡に、都を建て、平親王と自稱して、新に百官を置いて、既に都へ攻上らんとしける由、聞えければ、頓て國香の嫡子、平貞盛下野押領使俵藤太秀郷に、討手の勅諚あり。則ち秀郷に、征夷將軍の宣旨を賜つて、關東へ發向す。斯くて兩大將、身を捨てゝ、命を輕じ攻戰つて、將門が徒黨を討ちしかども、平親王は、身皮金鐵の如くにして、矢石にも傷れず、劒戟も貫く事能はず。さるに依つて、平貞盛は、陣を張つて戰ひ、秀郷は近年、下野國にあつて、將門に降參し、僞つて從ひし程に、何卒將門に近付いて、撃たんと窺ひけれ共、將門顏色容貌己の如くなる者、七人相伴ひて、主從の分なき故に、討つべき人を辨へ難く、途方に暮れて居たしが、彼將門に最愛の女あり。此女、生國は、京都の者なる事を聞出し、究竟の事と喜びて、是より樣々に方便を廻らし、謀を以て、彼女房に近付き、何れか將門にてありやと、問ひければ、女房語つて曰、常に云ふ人は、是化生なり。七人の内に、食給ふ時、米嚙の動く者、君なりといひければ、秀郷

秀郷將門を討つ

悦びて、食事の時に試みれば、實に一人米嚙の動く者あり。是に依つて、眞の將門を知りて隙を窺ふ。依つて都にも亦比叡山にて、將門調伏の法を行はれけり。其驗にや、貞盛の軍利に乘つて、城中に攻入つて、急に戰ひけり、軍始まつてより六年、雌雄を決せず。然るに天慶三年二月、天より白羽の矢、飛び來つて、將門が眉間に立つて、痛む處を、秀郷之を討つて、首を取り、同四月の末に、其首京師に到著し、獄門に懸けられけり。三箇月まで色變せず、眼塞がずして、牙を嚙めり。亦夜々呼ばはりけるは、我五體、何れの處にある。此に持來つて、我頸に繼げ、今一度戰はんといふとぞ。同五月三日に、藤六左近といふ者之を見て、

將門は米嚙よりぞ斬られける俵藤太が謀にて

と詠じたりければ、此首、呵羅々々と笑ひけるが、眼忽ち塞いで、遂に枯れにけり。體は首を慕ひ、兩大將の跡を追つて、武藏國神田邊まで上るとなり。則ち神田明神は、將門の祠なり。是に依つて、貞盛・秀郷の子孫は、神田明神へ參詣せずといへり。斯くて兩將へ勳賞を行はれて、貞盛は從四位下、陸奥守秀郷は、從四位上、武藏守に任

せられて、下野國に住しける。子孫繁昌して、國々に蔓れり。先づ下野國には、小山・長沼の一黨、佐野・足利の一家。上野國には、結城の一黨。陸奧には、秀衡・佐藤が末葉・伊達の一族。越後に、內藤の人々。近江國には蒲生の一黨。伊勢に、赤堀の一族是なり。秀郷に男子二人あり。嫡男千常は、小山・結城の祖なり。二男千晴より、六代の後雅俊、平家の頃、始めて奧州より上洛して、江州蒲生郡を賜はつて、蒲生太郎とぞ申しける。其弟和田二郎・小谷三郎・儀俄五郎・須月六郎兄弟六人、近江國に住してより以來、蒲生氏と號し、日野・牧・音羽といふ所に、城郭を構へて居れり。幕の紋は、立鶴なり。一族の人々は、鶴の丸なり。其子蒲生俊賢、賴朝卿に隨順して、一門共に繁昌しぬ。俊賢七代の孫、蒲生秀朝、建武年中に源尊氏に從つて、忠を抽んで、武功高し。舍弟蒲生將監高秀・儀俄五郎等は、皆將軍の爲めに、命を委ぬる者なり。

知閑入道の事并秀糺自害の事

我朝保元・平治の頃より以來、世亂れて平清盛、王法を傾け、天下の權を掌に握れり。

又文治年中に、源氏世を取つて、政道を我意に任せ、諸國に守護を置き、庄園に地頭を立て、承久には、平義時朝臣として、一天の君萬乘の主を、遠國へ移し奉る。武家の權威盛なる事斯くの如し。尊氏卿、朝家の威を奪ひ取りしより、愈〻王法は、無きが如くなり。而して後、尊氏の子孫、代々天下の大將軍に、備はり給ふと雖も、叛逆絶えずして、四海更に穩なる事無かりき。就中世の大亂に及びしは、應仁年中に、將軍義政公、政道正しからずして、諸侯命を用ひずして、細川と山名、私の怨を以て度々合戰に及びしより、國郡、將軍の命に從はず、庄園も、守護の命を用ひず、主君を亡して、自ら國司となり、兄弟を殺して、所領を合せなんどせしかば、國々所々、悉く亂れて、天下皆合戰の事を、宗とするより外の事なし。古の日出たき例をば、引替へて、諸事我思ひ〳〵に、執行ふ故に、武具・馬具の昔に替りしも、此時より始まるとぞ聞えし。況んや官職の制なども亂れて、民間の人、受領衞府・諸司百官を自稱す。古の將門は、心剛にして、新に百官を制して行ひ、今の萬民は、心愚にして、之を常の名と心得て、自ら呼べり。嗚呼日月の光の及ぶ處に、かゝる無道にして、亂れ

蒲生貞秀知閑と號す

持是院と知閑合戰

たる國もあるものかは。其頃蒲生貞秀と申すは、秀朝七代の末なり。後剃髪して知閑と號す。斯くの如き世に生れけれども、武藝はいふに及ばず、歌道にも達したり。明應四年に、撰める新莵玖波集にも入れたり。また都の七月、踊歌に、知閑が念佛、持是院が頭巾と申して、無益ぞ無益と謠ひけり。是は持是院・知閑、共に血氣の勇者にてありければ、變りたる擧動あり。持是院頭巾を拵へけるに、頭の用心とて、鐵にて張りたりけり。頭巾は頭を溫めん爲めなるに、却つて涼(ひや)すは、入らざるもの、又知閑は、武勇に長じて、人を殺す事を好めり。近邊へ兵を出し、合戰止む時無かりけり。常に念佛を唱へて、眼を塞ぎ、數珠爪繰れども、内には諸方への手遣・行兵の事のみを、工夫して、其惡心は、止まざりしかば、是も入らざるものとなり。されども信心を顯さん爲めにや、菩提所の寺を建て、信樂院と號し、毎年元三の早旦に、彼寺へ參詣し、念佛數遍高聲に唱へ、法施回向し歸宅し、其後、年始の儀式あるなり。明應五年の冬、持是院、數萬騎を率ゐて、近江國へ發向し、知閑と合戰ありし時、知閑、武略を以て、持是院が軍を追崩し、敵を討取る事千餘人、持是院、終に引退

きて後、似たるを以て、友となる習にや、持是院と知閑と其中親しくなりしとぞ聞えし。亦文龜二年の夏、細川武藏守政元の僚朋に、澤藏といふ入道あり。諸藝に器用者にて、武勇人に勝れしかば、數箇國を切隨へて、猛威を振ひける。近江國も、大半彼に屬すと雖も、蒲生一人は、彼に隨はざる由にて、澤藏二萬餘騎を引率し、江州音羽の城を圍み、數月攻戰ふと雖も、究竟の兵栖籠り、殊更、武略の達人知閑大將なれば、城を堅固に持ちけり。爰に鑄物師の安川とて、無雙の弓の上手あり。本は勢州日置の一族なり。さのみ大兵にては無けれども、遠矢射貫の名人なり。殊に矢さきの細なる事は、養由・基吏贏に類ひつべし。澤藏音羽より三町餘に、陣を取りけるが、安川が矢に中る者、數を知らず。一矢にて、二人死する事も度々なり。或る時一園計りの柳のありしに、鮲尾をすげたる矢を以て、羽袋せめて射込みければ、敵の軍勢之を見て、舌を巻いて、昔の鎭西八郎殿・能登守の矢さきも、是にはよも勝らじ。末代にも有難しとて、其木を伐つて、城中に送り申されける。亦或る時知閑、敵陣へ書簡を投せらる。其狀に云、

合戰雌雄、依レ不レ窮決、數日御在陣御辛勞、令レ推察レ候。驚レ武威之雷鼓、被レ奪レ鶴翼術レ之條、輕レ命重レ義、尤感入候。浴レ久年之恩レ彼諸國之猛卒、抽レ忠勤レ被レ盡レ粉骨、神妙之儀候。仍掛替弦五百張、令レ進入レ候。可レ被レ御用レ候。恰城中之翟、似レ鷹前之雀レ雖レ隱レ草底、今卑賤之藝術、近レ華洛勇將、捨レ命曝レ骸事、一天下面目、千萬々々、幸不レ過レ之候。急破レ四圍之構、靡レ凱風之旌旗、武名佳名可レ被レ傳レ後代レ候。恐惶謹言。

卯月廿八日　　　　　　　　　　　蒲生國人

澤藏軒御陣所

知閑之を自筆して贈られける。澤藏倩此城の體を見て、力戰には成り難し。山城なれば、水乏しかるらん。只水邊を取切つて、水渴の攻にせよや者共とて、城を眞中に取籠めて、空しく日數を送りける。案の如く城中水渴しければ、士卒皆呆れ果てたる處に、知閑一の謀を設けたり。敵軍より見ゆる櫓の前にて、馬共數多引立て、白米を桶に入れ、柄杓に汲んで、裸に成つて、馬を洗ふ體を見せければ、敵の大將之を見て、此城は水乏しからず。我長陣に糧つゞかずとて、引退きけるを、知閑

案内は知りたり、中山の方へ、軍兵を廻し、小谷繩手の切處に待受け、一度に噇と突懸け、前後より揉合せて、追討に討取りける。澤藏も、辛き命逃れて上りける。討洩されたる者共、國へ歸つて、小唄に作つて謠ひける。

思果てずと忍びはせまい近江國の小谷繩手は

と、知閑の謀由々しかりける事どもなり。亦或時、知閑江州口鼻に陣する事ありしに、此處は天狗の栖として、度々人の心を誑らかす事あり。案の如く、知閑の心を天魔様しけるにや。山の上より、草木鳴渡る事夥しうして、家の子・郎等、皆恐れけるに、知閑は少しも騷がず、きつと睨んで立つたりけるに、大石一つ轉び落ちて、知閑の居られける傍に、來りしとなり。不思議なりし事共なり。知閑の嫡男蒲生兵部大輔秀行は、總領なればとて、將軍義輝公に出仕なり。次男左衞門大夫高鄕は、佐佐木左京大夫義賢の幕下に屬し、三男音羽右馬助秀順は、細川某へ奉公なり。秀行の息藤兵衞秀紀、十三歲の時、父秀行早世せしが、高鄕父の知閑へ申されけるは、秀行旣に死去し、又藤兵衞尉は幼稚なり。且は落胤なれば、家督職は某に仰付け

らるまじき事にやと、訴訟ありしかども、知閑終に承引なかりしかば、秀紀既に將軍家へ繼目の禮を申されけり。知閑程なく死去して、後高郷と秀紀と不和に成りにける。左衛門大夫の所領少かりければ、子息藤十郎定秀は、日野に勘忍叶はずして、尾張國へ出奔し、佐治の一門大野左馬助といふ人、尾州知多郡を領知して居られしを、好みの仔細あるに依つて、彼を賴んで居られたりけり。藤兵衛秀紀は、勇猛人に超えて、祕藏の宇津の太刀にて、人を斬る事數を知らず。一族・家の子に至るまで、恐怖せずといふ事なし。所詮此人は、蒲生の家を繼ぐべき人にあらずとて、疎にする者多かりければ、秀紀も其消息を勘へて、左馬助秀順の居られたる音羽城は立退きけり。左衛門大夫高郷より、秀順の方へ言遣られけるは、藤兵衛を拘へ置き、崇敬せらるゝに於ては、時日移さず押寄せて、共に誅罰を致すべしとありしかば、左馬助返事に、我等が事は、細川家の奉公なり。全く當家へ構なしとて、打棄て上られけり。さらば秀紀を退治すべしとて、人數を催さるゝに、馳聚まる者多かりける。秀紀の勢、始めは籠城する者なかりしが、流石一家の總領なれば、見捨て

高郷秀紀和議

難く思ふ輩、數多あり。中にも長臣たりし森五郎左衛門とて、器量人に勝れたる大剛の兵にて、肩を並ぶる者なし。殊に義深き士なれば、一番に馳入りけり。之を始めとして、忠を存ずる者は、親子・兄弟引別れて、思ひ〳〵に、音羽城へ馳入つて、秀紀を助け、寄する敵を待居たり。斯くて高郷手勢數多引率して、音羽の城へ押寄せけれども、究竟の兵、數多籠りたれば、さうなく攻むべき樣もなく、徒に月日を送られ、佐々木義賢へ、加勢を乞ひければ、義賢、則ち出張して、共に戰ふと雖も、今まで睦じかりし中なれば、手痛く攻むる事もなく、三年籠城せられけり。終には左京大夫扱を入れられ、一門の中にて、鬪爭に及ぶ事、外見・外聞然るべからず。兎にも角にも、義賢に任せられて、蒲生の領地を二つに分けて、守られよとありしかば、雙方共に納得して、無事に成りにけり。猶は入魂の爲めにとて、藤十郎定秀が妹を、秀紀に娶せ、和睦にこそは成りにけれ。斯りしかども、高郷は、如何にもして、秀紀を亡して、蒲生の家の名跡を合せんと、思ふ心根深うして、新發が一族に、善知客といふ禪僧あり。之を密に近付けて、平に賴むとありければ、日來懇志を受け、今

更爭でか否とは申すべきとて、頓て了承申しけり。高鄕斜ならず喜んで、引出物をぞせられける。善知客兎角謀つて、秀糺へ降參せしが、始めは心を許されざりしが、忠功を勵んで、無二の奉公に見えければ、心許して、後には近習に伺候す。或時、女に心を合せ、時を窺つて、秀糺に鴆毒を與へければ、秀糺、毒に中てられて、身心惱亂せしが、大の眼に稜を立て、顏色朱に變じ、忽に鬼の形と成つて、傍なる太刀を拔きて、善知客を斬らんとせしかども、深く隱れて見えざりければ、秀糺立ちながら、腹十文字に掻切り、自ら肮をかいて、前なる堀へ飛入りける。其死骸を求めしかども出でざりけり。藤兵衞堀とて、今にありとぞ聞えし。斯くて秀糺毒害にて死去の由、風聞ありければ、將軍家より、佐々木に仰付けられ、義賢強く穿鑿あつて、彼の善知客を搦捕り、五十五度の拷問に及べども、白狀せざりければ、殺すべき樣もなく、召籠めてこそ置かれけれ。或時義賢、銀杏の紋ある作の鞍を、他國へ遣すことありしに、吏官不學の者にて、銀杏といふ字を知らずして、あたりの人に尋問じけれども、知りたる人なし。假名には書かるまじ、如何はせんと、僉議するを、彼

僭獄舍にあつて、此事を聞きて、イテフといふ字は銀杏と書き、鴨脚と異名ありといひければ、義賢、此事を聞きて、奇特の事を申したり。當座の恥を雪がむとて、深く感じ給ひ、即ち命を助けらる。身に著きたる藝能程、重寶なる物なしと、人皆申しあへり。

小倉兵亂の事

斯くて定秀尾州より歸つて、日野の宗領を併せて、後には蒲生下野守とぞ申しける。子息四人あり。其嫡男蒲生藤太郎賢秀、後に左兵衛大夫。次男は、當國佐久良の城主、小倉越前守が養子、小倉權之丞、後に豐前守。三男蒲生左衛門尉、四男は三井寺にて、金光院と申しけるが、後に還俗して、青地の家を繼ぎ、青地勝兵衛とぞ。息女二人あり。一人は、北伊勢の神戸藏人大夫の室。一人は、同國關安藝守の室なり。其頃伊勢國の住人千種は、近江國の守護佐々木左京大夫義賢の執權、後藤但馬守が弟なりければ、心を合せ、北伊勢を切取らんとしけるに、近江國より、小倉參河

守は、佐々木の武者大將として、其勢數千騎を引率し、伊勢國へ發向す。千種本より同心しければ、近邊に相働き、小城共少々討從へたり。爰に北伊勢平家の一黨三人衆と聞えし、神戸藏人大夫・嶺治部少輔・關安藝守、此人々は、皆文武に達し、殊に大名なれば、北方に威を振ひて、國司にも從はず、近國にも屬せず。南方伊勢の一味たりし九頭の人々とて、長野・乙部・雲林院・木造・矢野・大宮・田丸・九鬼等、一黨として、國司の幕下に屬せんと、數度合戰に及びしかども、毎度九頭に、勝討ちし人々なり。されば參河守如何にもして、彼の三人を退治せんと、種々智略を廻す中にも、一黨の旗頭、神戸藏人大夫が家の子・郎等共を潛に相語らひしかば、神戸が六奉行の中山路紀伊守・三宅權右衛門・高田玄蕃允などいふ、一騎當千の者共、五百餘騎、隱謀を企て、小倉に心を合せ、内外より攻めしかば、藏人大夫が不及一味の家の子・郎等、堀内監物・白兒木工右衛門・伊藤・古市・鈴木・立木・野村・川村・國府・服部の者共、五百餘騎、散々に討ちなされ、潛に神戸の城を落ちて、脇城岸岡の城に栖籠り、嶺・關の人々に、加勢を乞ひければ、雲霞の如く、岸岡へ馳來る。小倉にて入替り、神戸の城にあり

けるを、時日を移さず、一黨の人々、二千餘騎、神戸の城へ押寄せ、案内は知りたり、手々に赤旗を差揚げ、喚叫んで攻めければ、參河守頼み切つたる宗徒の兵共、多く討取られ、叶ひ難くや思ひけん、城を落ちて、千種へ引取りける。藏人大夫城を取返して後、彼謀叛したる者共、首を延べて、參りしかば、皆勘當を許しけり。此時蒲生下野守、我が人數を揃へ、小倉が所領へ押寄せ、一宇も殘さず、燒拂ひしとかや。是は神戸藏人に、敵對せし故なり。藏人は、蒲生の婿なりし故、其上亦參河守が擧動、常々惡しゝと思はれしとぞ。されども佐々木の幕下にありながら、斯かる手痛き振舞は、勇々しくぞ見えたりける。剛兵に疵付くことなければ、佐々木も、如何ともする事なかりき。されば日野ぶしの小唄にも、參河守が所領、燒かれし事を笑うて、

日野の蒲生殿は百廿八鄕小倉與力は伊勢計り

とぞ謠ひける。

後藤兵亂の事

抑、氏郷の母儀は、後藤兵衞實基が家胤、當國の執權後藤播磨守が息女なり。其嫡男後藤但馬守、次男は、江北の住人、上坂治部少輔が養子にてぞありける。四男は、比叡山の法師にて、宗禪院とぞ申しける。女子は、佐久良の小倉左近大夫の室、次女は、石過の三雲新左衞門尉の室なり。さる程に、後藤播磨守・同嫡子又三郎、威を逞しくし、肩を並ぶる者なかりしかば、佐々木左京大夫義賢子息左右衞門督義弼、後藤父子が擧動、過分なりとて、之を惡めり。永祿六年癸亥三月十五日、種村大藏大夫・建部釆女佐に下知して、後藤父子が登城の次手を覘ひて、之を討ちたりける。

後藤父子要撃せらる

後藤が一族・家の子共、此由を聞き、こは口惜しき次第なりとて、觀音寺の城二の丸に、後藤が屋敷ありけるに、火を懸け、本丸指して斬つて入る。中にも後藤が一族に、後藤次郎左衞門とて、名を得たる剛の者、眞先に駈込み、比類なき働して討死す。續いて込入れば追出し、押出せば込入り、相戰ふ處に、折節蒲生左兵衞大夫賢秀、城中

後藤一族蜂起

に居合せけるが、鑓押取つて突て出で、敵を遙に追退け、門を固めてありしかども、後藤に內々一味しける國中の武士共、數多馳集つて、押寄せければ、佐々木父子無勢にはあり、度に迷うて蒲生に向ひ、如何はせんと申されける。賢秀聞いて、此體にては叶ふべしとも覺え候はず。一と先づ某が館へ御立退き、重ねて謀を廻らされ、然るべく存候と、ありしかば、佐々木父子、兎も角も賢秀の計らひ次第とぞ申されける。賢秀然らばとて、父下野入道快幹軒へ、此由を申遣しけるに、入道の返事に、年來兵糧以下、貯へ置きしは、斯樣の用に立つべきが爲めなり。凡そ三千計りの人數を、召連れられ候て、三年の間は、相抱へ申すべし。早々御供申せよ、某も早く御迎にこそ出で候へと、申送りければ、佐々木父子、力を得、賢秀相伴うて立出でらる。玄宗皇帝安祿山に襲はれ、蜀の國へ落ち給ひしも、斯くやと思ひ知られたり。入道卽ち一千餘騎を馳催して、迎に出でられしに、定秀の武勇、兼て知つたる故にや、手指す者も無かりしかば、難なく日野・中野の城へぞ籠られける。賢秀は歷然後藤が緣者なれども、義深き人なれば、無二に賴まれ給ひけり。猶も後藤が一族、並

に蒲岡筑後守以下の家の子・郎等共、深く恨を含みて、江北淺井備前守を相語らひ、佐々木父子を討果さんと、近江一國の人數を催し、雲霞の如く、中野の城へ押寄せて、攻戰ふといへども、毎度城中討勝つて、追崩しける間、遂に落ちざりけり。是に依つて、賢秀國の煩ひなきやうにと相計らひ、但馬守が次男後藤三郎を、但馬守が名跡と相定め、主從無事に相調ひ、佐々木父子元の如く、觀音寺の城へ歸られける。此賢秀無二の忠節なり。其後佐和山の城淺井方より、城主を居置きけるを、左兵衞大夫の謀にて之を取り、佐々木方へ附けらる。亦後藤喜三郎も、後には氏郷へ奉公して、勢州にて戰死す。其嫡男蒲生千壽とて、十三歲にて、氏郷に從ひ、九戶陣の時にも、備書に入られたり。其後は蒲生三郎左衞門といひ、其弟を金左衞門とぞ申しける。斯くて左京大夫に、息女數多ありけれども、男子は氏郷計りなり。長女は、布施忠兵衞尉の室、後には、關安藝守の嫡男長門守の妻となるなり。次は藤三郎氏郷、其次は南伊勢の住人田丸中務少輔の室、是は北畠殿の一族なり。此關と田丸は、後に氏郷の與力にてありしが、其後將軍家の直參となつて、過分に所領

を給はれり。其次は小倉豐前守嫡男作左衞門尉の室、今一人は氏鄕會津に移らる　る頃、南部信濃守利直の室となる。此は賢秀の養子なり。實は舍弟豐前守の息女なり。

信長出張の事幷賢秀幕下に屬する事

其頃尾張國の守護織田上總守信長は、平相國淸盛公廿一代の後胤なり。最も武道に長じ給ふに依つて、先づ駿河國の守護今川義元を討取つて、參河・遠江兩國を從へ、次に美濃國の守護齋藤右衞門大夫龍興を亡し、美濃國へ打越え、岐阜に居城を仕給へり。其後永祿十年丁卯の春、信長數千騎を引率して、伊勢國へ發向し給ひしに、先手の兵共、久須の城へ押寄せ、攻めければ、城中叶ひ難くやありけん。久須降參して、先手を申受けゝり。其外當國の住人等、降參する者多しとかや。斯くて神戶藏人大夫が家の子、山路紀伊守が子息久之丞が、栖籠りし高岡の城へ押寄せて、攻め給ひ、町口悉く放火し給ふ。神戶の城は、北伊勢の要害なれば、早速には落つ

信長伊勢出張

神戸信長に和睦す

べからずとて、是より先勢を打入れ給へり。翌年永祿戊辰の春頃、信長數千騎を引率し、北伊勢へ出張し、高岡まで押寄せ給ひければ、北伊勢の武士共、過半信長に屬せり。信長神戸藏人の方へ、使者を以て、宣ひけるは、當時源家の輩、無道にして、國土亂逆絶えず。故に信長苟も平氏の苗裔として、身を碎き、朝暮弓矢を放たずして、謀逆の族を討つて、國家を安んぜんと欲す。御邊は平家の嫡流なり。爭でか一家として、戰を致さんや。速に和睦し給へ。我れ聞く、御邊は蒲生下野守定秀が娘の腹に、息女一人にて、男子無しといふ。我に數多の男子あり。一人養子に進らせんと宣ひければ、藏人大夫仰の趣、誠に辱く候とて、頓て和睦にぞなりにける。之に依つて、信長の三男三七殿とて、生年十一に成り給ふ若君に、幸田彥右衛門といふ者を、乳夫として、其外岡本太郎左衛門・坂仙齋などいふ侍共、數多相副へ、神戸が養子に遣はされければ、頓て婿君にぞし進らせける。斯くて藏人大夫・嶺治部少輔・關安藝守を始めとして、皆味方に成り奉りければ、北伊勢の武士共、一偏に信長に從へり。是より上野の城には、織田上野介殿、安濃の城には、織田掃部助をぞ、居

置き給ひける。さる程に信長公は、既に尾張・美濃・伊勢・參河・遠江五箇國を討從へ、數萬の軍兵を催し、永祿十一年の秋、都へ攻登り給ふべしとて、先づ近江國は、通路なれば、佐々木左京大夫入道承禎・子息左衞門督・次男次郎左衞門尉定賴、彼等を味方にせんとて、種々に詞を和げ、扱を入れ給ふ。今度一味し給ふに於ては、末代まで當國の守護たるべしと、再三言遣されけれども、佐々木父子、曾て同心なく、此時神戸藏人大夫を以て、日野の蒲生左兵衞大夫賢秀にも、一味の儀を、言遣せども、賢秀、御諚の趣、忝く候へども、一旦佐々木に同心仕候者が、爭でか逆心を致候べきと、返事申されければ、近江國和睦の扱絕えにけり。信長も、此上は先づ近江を討從へて、上洛あるべしとて、同九月十二日、佐々木が觀音寺の城近く、押寄せ給ふ。佐々木義賢は、之を料つて、信長出張に於ては、入口なれば、定めて先づ佐和山の城を攻むべしとて、究竟の兵を勝つて、籠置かる。次に箕作の城にも、大勢籠りけるに、信長此由を聞き給ひて、先づ箕作の城を攻めらるべしとて、佐和山の押には、西美濃の三人と聞えし氏家常陸入道卜全・安藤伊賀守・稻葉伊豫入道一轍を差向けらる

信長觀音寺城を攻む

箕作城沒落

觀音寺の城の押には、先手柴田修理亮勝家・池田勝三郎信輝・森三左衛門尉・坂井右近將監等を差向けらる。斯くて箕作の城の攻衆には、佐久間左衛門尉信盛・木下藤吉郎秀吉・丹羽五郎左衛門尉長秀・淺井新八等、閧を揚げ、揉みに揉んで攻めしかば、怺へべうも見えざりけり。此箕作の城は、觀音寺と其間近し。此時蒲生賢秀は、觀音寺に居られけるが、進み出で、義賢へ申されけるは、箕作の城定めて落去致すべし。賢秀に勢を附けさせ給へ。當城の押を突崩し、箕作の城へ、力を合せ候はんと、申されければ、義賢我に任せて置かれよ。佐和山・箕作兩城には、究竟の者共ありければ、容易くは落つべからずと、緩々と申されて、曾て同心なかりければ、賢秀も行末賴もしからず思はれけん。さあらば賢秀、當城にあつても何の益か候べき。我館に籠つて、信長の人數を引受け、最後の合戰仕り、腹切らんには如かじとて、手勢引分け、觀音寺を立退き、日野の城にぞ楯籠られける。案の如く、箕作の城攻落されければ、佐和山の城も開き退きぬ。義賢・義弼、案に相違して力を失ひ、兎やせん角やあらましと犇めき騷ぎけるが、叶ひ難くや思はれけん。馴れて久しき觀音寺の城を、

賢秀城を落つ

開き退きて、行方知らず落ちられける、哀なりし事どもなり。斯かりしかば、國中の城々に楯籠りし士共、或は城を開き落つるもあり、或は信長へ降參しける者多かりける。信長は、觀音寺の城へ本陣を移され、暫く人馬を休め給ふ。さる程に、蒲生左兵衞大夫賢秀は、信長の兵と、一軍して腹掻切り、數年佐々木厚恩を報ぜんとて、日野・中野の城に楯籠り、一族若黨を相催すに、一家には、和田・小谷・儀俄・三木・小倉・寺倉・上野・田・音羽、林紋の內には、內池・町野・森部・室本・鳥養、家の子郎從には、外池・稻田・門屋・岡田・比川・福滿・田・花木・小林・池田・竹林・中林・榎木・寺倉・安井・大森・新開・町田・新古・尾角・池內の者共都合一千餘騎とぞ聞えし。爰に賢秀の妹壻伊勢國神戶藏人大夫は、信長の御手にありしが、此由を聞きて、信長へ申上げけるは、當國の蒲生左京大夫は、我等が緣者にて候が、日野城に楯籠りて候なり。御免を蒙り候はゞ、蒲生を諫めて、御味方へ仕度と申されければ、信長公、兎も角も御邊相計へと宣へば、藏人大夫斜ならず喜んで、頓て日野城へ馳行き、賢秀に對面して申されけるは、今度籠城の事を止まり給ひ、今信長へ味方し給はゞ、先祖の名をも落さず、子孫榮耀たるべし。

何ぞ佐々木滅亡の跡を守り、無道に與し、一命を捨て、家を亡し給ふべけんや。幸に信長の味方に、某斯くてあり候上は、隨分馳走申すべし。只降參し給へと、諫められしかば、賢秀、實にもとや思はれけん、籠城を止めて、神戸同道にて、觀音寺へ參り、信長公へ御禮申上げられしかば、本領安堵の御書を給はりけり。此時子息鶴千代丸、十三歳に成りけるを、人質として、信長へ進らせられければ、信長、之を見給ひて、蒲生が子、眼睛常ならず、只者にてはあるまじ。天晴若者かな。我婿にせんずるぞと、直に賢秀に、契約し給ひてけり。賢秀稽首して、御諚の趣恭しと申し、謝して、退出しけるを、羨まぬ者はなかりけり。鶴千代をば、人質なればとて、町野左近を乳人として、岐阜の城へ遣され、乃ち岐阜にて元服ある。其頃信長忠にて御坐しければ、忠の字を賜はつて、蒲生忠三郎賦秀と名附けらる。其後秀吉公の名字を給はつて、羽柴飛驒守とぞ申しける。秀吉公の時、秀の字憚ありとて、氏郷と申しける。斯くて信長は、頓て京都へ攻上り給ひ、程なく五畿内近國を討平げ、天下の將軍と成り給へり。

信長の威振ふ

大河内軍の事并氏郷祝言の事

さる程に信長公、伊勢國司北畠權中納言具教卿を、退治あるべしとて、永祿十二年八月廿日、岐阜を立つて、其日は桑名に著き給ふ。夫より敵に氣を付けさせん爲め、又は山野の難易を見給はんために、北伊勢の在々處々に、鷹狩などし給ひけり。爰に國司の舍弟木造左衞門佐は、現當院が勸めに依つて、謀叛して信長へ一味なり。此現當院は、還俗して後、信雄の士にて瀧川三郎兵衞とぞ申しける。九鬼右馬助も志を變じて、信長へ一味せり。斯くて信長公同月廿三日に、木造が居城戸木に著き給ふ。一兩日軍評定あり。其間に、先手の兵共、早田山の城を攻取りける。木造申しけるは、當國の案内は、某能く存じ候。大河内の城へ寄せ候通路は、本道も能く候へども、船江越とて、大難所あり。其上、船江の城主本田如人・子息本田左京亮と申すは、父子共に剛の者にて、森中・高島・山邊などいふ究竟の兵數千騎にて楯籠り候。御共の人馬許多にして、難所如何に候なん、脇道にて候へども、淺香口より、寄せさ

大河内合戰

せ給はゞ、然るべしと申上げければ、信長公尤と仰せられ、頓て淺香の城を攻め給ふ。淺香の城主大宮九兵衞は、大河内の城にあり。其父大宮含忍、叶ひ難くや思ひけん、降參を請ひて、城明き渡し、大和國へ引退きしかば、此伊勢の一黨瀧川右近將監を入置かる。財寶以下をば、殘らず大和國へ送り遣はし給ひけり。同廿八日、國司父子一處に、楯籠り給ひける大河内の城へ押寄せ、四方の攻口を定めて、七重・八重に取圍まれけり。明くれば廿九日の曉より、四方の寄手、大手・搦手五萬餘騎、楯を敲き箙を扣いて攻めける、鬨の聲・矢叫の音、肝魂も消えつべし。城中にも聞ゆる兵多かりければ、此を先途と防ぎ戰ひければ、落つべしとも見えざりける。寄手の方にも、究竟の兵共多く戰死す。斯くて信長公如何思召しけん、大河内の城へ扱を入れ給ひて、次男茶筅御曹司を國司の養子に、進らせ候はんとの和睦に、定まりける。其間に、今德山の城をも、織田掃部助・蒲生左京大夫賢秀、其外都合一萬餘騎にて押寄せ、揉みに揉んで攻落しける。此軍に蒲生賢秀、子息忠三郎をも相連れらる。氏郷生年十四歳にして、軍始の事なれば、賢秀殊に心許なく思はれて、結解十郎兵

衞・種村傳左衞門といふ剛の者を附けられける。賢秀は、士卒を下知して、馳廻られけるに、氏郷見え給はぬを聞いて、大に驚き、結解・種村を怒つて、汝等を附置く事は、何の爲めぞやと、いひ悶えて、馳廻られけるに、氏郷は首を取つて出でられけり。賢秀、之を見て、嬉しさの餘り、感涙を流し、鐙の袖を濡されけり。頓て其首を、信長公へ見參に備へられければ、信長公御感餘あつて、自ら打鮑を取つて、氏郷に給はりけり。　左兵衞大夫申されけるは、忠三郎が働、賢秀が大慶、何事か是に如かんや。夫に付て十郎兵衞が儀は、淺井備前守長政と、佐々木左京大夫義賢と、合戰の時、佐々木が手に屬して、淺井が先手の大將佐和山の城主百々内藏助といふ大剛の兵と、鑓を合せ、百々を討取りしより以來、數度の軍に、手柄を顯せし者なり。種村といふ者も、結解に劣らぬ兵なれば、賴もしく思ひて附けたりしに、其甲斐もなく、見失ふ事、以ての外の不覺なり。譬ひ氏郷戰死すとも、汝等附副ひて、一處に戰死することこそ本意ならめと、怒られければ、二人の者、兎角の言葉に及ばず。やゝあつて、十郎兵衞申しけるは、某若年の頃より、多くの合戰に逢ふ毎に、人に先を越えら

大河内沒落

れじと思ひしに、若武者の忠三郎殿に、先を越えられし事、面目なき次第なり。今度の忠三郎殿御働を見るに、英傑の勇將に成り給はんと、申しければ、賢秀笑を含まれけるとなり。氏郷之を初度の高名として、以後の合戰の度毎に、其戰功許多なり。斯くて茶筅御曹司、其頃十二歳に成らせ給ふを、國司の養子となし、織田掃部助を乳夫として、相副へらる。其外林備後守・生駒半左衞門といふ士共、數多附置かれ、先づ本多左京亮方まで、進せられければ、御曹司は、暫く船江に居給ひけり。同年の冬、蒲生忠三郎は、信長公兼年の御契約の事なれば、九歳に成らせ給ふ妃君を給はり、岐阜にて御祝言ありて、其後日野の城へぞ送られける。妃君の御乳夫には、加藤次兵衞を副へられ、目出度かりし事共なり。

蒲生軍記卷之一終

蒲生軍記卷之二

蒲生左兵衛大夫領分の事

信長朝倉義景を追討

さる程に、永祿十三年庚午二月に改元あつて、元龜と號す。此年四月十日に信長公、越國の守護朝倉左衛門佐義景を追伐有るべしとて、濃州岐阜の城を立つて、近江路を經て若狹の國へ掛り給ふ。此時蒲生賢秀父子も、柴田修理亮が與力として、先鋒たり。其頃は柴田手勢六百餘・蒲生手勢一千餘、其外江州の集勢都合五千餘とぞ聞えし。同廿五日には、越前國敦賀に著かせ給ひ、頓て手筒山の城を攻めらる。城中にも究竟の兵ども籠居たりければ、輙く攻入る事成り難くぞ見えたりける。信長公、さらば荒手を入替へ攻めよとて、柴田修理亮・木下藤吉郞・池田勝三郎など承り、喚叫んで攻上る。賢秀は此場にて粉骨を竭さずんば、何時をか期すべきとて、懸け

よ懸けよと下知せられける處に、黑糸縅の鎧著たる武者、大長刀を水車に廻して擊つて懸かるを、賢秀十文字の鑓を提げ、之を懸倒しけるを、氏郷其首を取つて、其儘塀を乘越え、又能き首を取つてぞ出でられける。四方の寄手、我先にと攻入りければ、城中の兵も、互に首を取りつ取られつ、引組み刺違へるもあり、一人も殘らず討たれにけり。蒲生の家にて名を得たる者には、結解勘助・種村傳左衞門・岡左內・蒲生主計助・森民部丞・門屋助右衞門・寺林半左衞門・結解十郎兵衞・新開半右衞門抔いふ一人當千の兵共、分取り高名しければ、皆信長公の御感に預りける。夫れより朝倉中務少輔が籠りたる金崎の城へ押寄せ、取圍み給ふ處に、城中怺へ難くやありけん、降參を乞ひければ、命を助けて城を請取り給ふ。朝倉義景が本城を攻圍まんとて、既に打立たんとし給ふ處に、飛檄到來して、御妹壻近江國北郡の淺井備前守長政、心替りの由を告げければ、先づ淺井が一黨を退治して、其後越前を討從へらるべしとて、金崎より引取りて上洛し給ひけり。是に依りて、淺井が一黨・佐々木が殘黨蜂起して、近江國の通路穩かならず。信長公江州へ歸著有つて、國中の城々の大名中へ

蒲生領分目錄

下知せられ、押への兵數多籠置かれたり。又當國の武士、幕下に屬せし輩には、本領安堵の御書を下さる。此時蒲生父子に加增とし給はる御書に云く、

領中分目錄

一、千　石　吉田分、　一、五百石　河井分、　一、二百五十石　栖雲分、
一、二千石　小倉越前守・同右近大夫分共に　一、四百石　赤坂分、
一、三百石　大塚分、　一、三十石　梅若太夫分、　一、八百石　安部井分、
一、二百石　横山分、　一、三十石　文山分、

已上五千五百五十石

此外市原四郷一職加レ之

右宛行也。全領知不レ可レ有二相違一之狀、如レ件。

元龜元年庚午五月十五日　信長御朱印

蒲生左兵衛大夫殿

同　忠三郎殿

杉谷善住坊信長を狙撃す

蒲生賢秀信長に用ひらる

信長公は夫れより岐阜の城へ還へり給ふに、佐々木父子、愛知郡鯰江の城に楯籠り、江州南郡處々の一揆を催し、諸牢人を集めらるゝに、唯今まで信長へ一味しける者共、忽に心變りして馳集るもあり、濃州より京都の通路を差塞げり。斯かりしかども、蒲生賢秀並に香津畑勘六左衞門などは、無二に一味申され、案内をば能く知つたり、千草越に御供申し、嶮しき山路を通り給ふ處に、間近く鐵炮の音しけるが、信長の著給ひたる羽織の兩袖に中りたり。危かりし事なり。やがて御供の八人、山中へ分入りて、捜さんとしけるを、信長公如何思召けん、止め給ひけり。之は杉谷善住坊といふ鐵炮の上手なりしが、佐々木承禎に賴まれて打ちたるとなり。二つ玉を以て、纔二十間計りにて打ち外づせし事、偏に天運の信長を加護し給ふ處なりと見えたり。後に善住坊を捜し出し、鋸にて引かれけるとぞ。夫れより賢秀をば、義深き者なりと賴もしく思召して、數度の留守居を仰付けらるゝとかや。其後佐々木父子、野州河原へ出張せしを、佐久間右衞門尉信盛・柴田修理亮勝家懸向ひ、承禎の兵を悉く討散らしてけり。さる程に、朝倉・淺井一味同心して從はざりし

信忠元服

を、信長北郡へ出張し給ひて、姉川にて、大いに戰うて敵を追崩し、勝利を得給ふ。次に三好山城守入道笑岩、攝州にて旗を揚げければ、卽ち攝州へ馳向ひ、野田・福島の城を攻め給ひしに、大坂の門跡も叛逆なりと聞いて、淺井・朝倉、東坂本まで出張しければ、攝州中島より引返へし、朝倉・淺井と相戰ふと雖も、頻りに扱ひになつて、岐阜へ歸り給ふ。其頃茶筅御曹司は、船江の城に御坐しけるが、具教卿の子息信意の壻になし給ひて、田丸の城へぞ移し給ひける。元龜二年五月には、大坂と一味の尾張國西方長島の一揆と防ぎ戰ひ、更に止む隙なかりけり。同じく三年、信長公の若達各、元服し給ひけり。嫡男奇妙御曹司は、十六歲秋田城之介信忠と號し奉る。次男茶筅御曹司は十五歲、北畠三助信雄と號し、三男三七殿も信雄と同年にて、元服あり。神戶三七信孝と稱せられ、何れも優劣なき御器量なり。其中にも、三七殿の養父神戶藏人大夫は、關安藝守盛信と一家たりし故に、其子息關勝藏を養子に契約有りてより、信長の若君に疎意なりしかば、翌年元龜四年癸酉正月に、神戶夫婦日野へ年始の禮に參られけるを、信長押へて隱居させ、則ち蒲生へ預けられ、關をも

惡しとや思召しけん、所領を沒倒して、父子ともに同じく賢秀に預けられ、其後藏人は日野にて遂に果てられけり。其頃嶺治部少輔も果てらる。子息孫三郎は未だ幼少なるに依つて、信孝の計らひにて、岡本太郎左衞門に給はり、孫三郎には僅の所領を給はる。同じく三月、將軍家室町殿、御旗揚げ給ふに依つて、信長公早速に攻め上り、將軍の營を取卷いて、既に押破らんとし給ふ所に、和睦の儀調ひて、信長公は四月七日に都を立ち給ひ、岐阜へ下向ありと雖も、近年、佐々木右衞門督義胤・江州鯰江の城に栖籠り、浪人を集め、一揆を催し、事の障りを成しければ、同四月上旬に、佐久間右衞門尉・蒲生左兵衞大夫・丹羽五郎左衞門尉・柴田修理亮に仰付けられて、鯰江城を攻めしむ。諸將命を承つて、則ち四方より仕寄りを付けて攻め戰ふ處に、同年七月に、室町殿大納言義昭卿、重ねて旗を擧げ、槇の島に栖籠り給ひ、二條の城にも人數を籠め置き給ふと聞えければ、信長頓て攻め上り、二條の兵を追落し、槇の島の城をも攻め破り給ふに、蒲生父子も御供なりき。其時氏郷十八歲にて、比類なき働して、能き首を討取り、見參に備へ、御感に預るなり。斯くて義昭卿を

關勝藏討死

ば流放せらる。同じく八月には、江州大槻の城を取卷き、二三の丸を採破る。又越前の凶徒退散する處を、刀根山にて相戰うて追加せり。此時氏郷、大の男と組討ちて首を取る。郎從置崎宗左衞門も首を取つてけり。夫れより信長越前へ發向ありて、朝倉左衞門佐義景を討ち給ひて、江北へ引返へし、淺井備前守長政をも討ち給へり。柴田修理亮勝家は、鯰江の城を攻め陷しければ、佐々木義賢は、流浪の身とぞ成りにける。天正二年甲戌八月に、尾州長島をも討平げらる。蒲生父子は、柴田が與力に付けられて、先手をぞせられけるに、松木の渡りを氏郷先陣して、敵の中へ馳入り、散々に戰ひて首を取れり。外池長吉も氏郷と同年にして、十九歲なりしが、先年父此處にて戰死す。之に依つて、今度一番に駈け入つて、首を取りて父の孝養に報ぜんと言ひつるが、其言に違はず、氏郷に引付いて相戰ひ、能き首をぞ取りたりける。其外の兵共、我も〳〵と勵み戰ふ程に、蒲生の手へ首數多く取つてけり。關安藝守子息關四郎は、蒲生に件ひて此陣に向ひしが、深入りして戰死す。此外家の子・郎從、手を負ひ討死する者多かりけり。渇りける處に、敵叶はじとや思

信長北畠具敎を討つ

ひけん、船に取乘りて、落行く處を、蒲生が家の子杉山外記進といふ大力の剛の者、川へ飛入り、船に取付きて引留む。布施次郞右衞門といふ者、之も劣らぬ兵にて、其船に取乘つて、敵を組伏せ、首を搔んとする處を、脇に立ちたる敵、布施が首の骨を突通せども、少しもひるまず、其首取つて出でにける。杉山無念に思ひ、尙ほ船を引留めんとするを、甲の鉢を破れよ砕けよと、したゝかに打ちけれども、事ともせず、曳や聲を出し、川岸へ二三間引寄する處を、鐵炮を差付け、左の肘を打貫きければ、力及ばずして、船を放してけり。天正四年、信長江州安土山に城を築き、居城とし、岐阜の城を信忠へ讓り給ふ。同五月に大坂の城を攻めて、勝つ事を得たり。同年伊勢國司北畠權中納言具敎卿を亡し給ふなり。此具敎卿は、心剛にして力も勝ぐれ、塚原卜傳が一の弟子にて、兵法は一の太刀までも極められたり。されば信雄を養子にし給へども、孫壻にし、田丸の城に置き、我は大河内の城に居し、子息中將信憲を多氣の城に置き給へり。然るを信長宜しからず思召けん、去々年より瀧川左近將監一益を中島の城に、北伊勢四郡を差添へて置かれ、或時一益に命じて、國

司並に一味の大臣共を、能く謀つて殺すべしと、仰付けられけり。之に依つて、一從謀を設け、國司の大臣坂・名井・三瀬羽・長野などいふ一族を始めとして、十三人を味方の大臣等の方へ招き請じて、思ひの儘に殺し、内々信雄と示し合せ、鐘を相圖として、早旦に國司の御所へ押寄せける。具教卿の士將一人もなく、有合せ者とては、物の役にも立たざる者、周章騷ぐ計りなり。具教卿只一人門外に進出でて、差詰め引詰め散々に射給ふ。究竟の強弓なれば、矢庭に鎧武者數多射倒し、又大長刀を打振つて斬つて廻り、大勢の敵を薙伏せ、或は十文字の鑓を提げて突散らし、後は太刀を打振つて斬つて出で、道具を取替へ〳〵、兵法の秘術を盡し給ふ形勢勇々敷く、あたりを拂つて見えにける。卯の刻より巳の刻まで防ぎ戰うて、遂に討死し給ふ。四十九歳とぞ聞えし。之より信雄、大河内の城へ移り給ふ。國司の嫡男北畠左中將信憲は、本より村上源氏の公家なればとて、京都に置かれける。次男は出家して、奈良東門院後院家と申しけるが、此由を傳へ聞いて、如何にもして、此恨みを散ぜんと、還俗して北畠具親と號し、隱れて居られしとぞ。同五年に松永彈正少弼久

北畠具教力戰

具教討死

蒲生賢秀布施藤九郎を養子とす

秀、大和國に有つて從はず。之に依りて、信長の嫡男秋田城之介信忠、此を伐つて平らげらる。同六年戊寅、荒木攝津守、攝州に叛す。同七年己卯、荒木を追崩す。同年三月十七日、蒲生下野入道快幹軒死去、行年七十二なり。同八年に大坂を伐つて平らげらる。其頃布施藤九郎といふ者は、素佐々木の士なりしが、今度蒲生左兵衛大夫に仕へたり。文武の道を得たるものなれば、賢秀も能く采釋ひて婿にせり。信長布施が擧動を聞召して、武士の鑑と成るべき者なり。斯樣の者を取立てずんば、誰をか擧ぐべきやとて、三千石を下し給はり、後に布施忠兵衛と申せしなり。同九年に、北國へは、柴田修理亮勝家、西國は羽柴筑前守秀吉、五畿内は池田紀伊守信輝に仰付られ、諸國を征伐せしむ。岐阜に在城の時は、方々の合戰に蒲生父子、共に幕下に有りしが、安土に移され給ひて後は、賢秀は義深き勇士なりと、賴母しく思召し、毎度出陣には安土の留守居に置給ひ、氏鄕ばかり御供なり。父子數度の戰功を顯し、身を全うして忠勤を盡され、並に家の子・郎等、處々にての働きは、計るに遑あらずとなり。

信長公自害の事附日野籠城の事

信長信忠甲州に出馬

織田信雄四國の總大將となる

天正十年壬午、正二位右大臣征夷將軍平信長公、嫡男三位中將信忠卿、父子倶に甲州へ御出馬有つて、武田四郎勝頼を滅し給ふ。夫れより、瀧川左近將監一益を關東へ遣され、關東の征伐仰付けらる。其頃、次男北畠中將信雄朝臣は、穗嶺といふ處へ、大河内の城を移され、松ヶ島と名を改めらる。又土佐の國の守護長曾我部は、四國の大將を申請けゝれば、三男神戸三七殿に四國を給はりて、總大將に遣さる。此時關安藝守盛信は、日野に預け置かれしを召出され、本領伊勢の國龜山を給はり、信孝に副へて四國に遣さる。賢秀妹壻なれば、日野よりも結解十郎兵衛を盛信へ付けられける。斯くて信孝一萬五千餘の人數を揃へ、既に神戸を立ちて、攝津國住吉に下著し給ふ。又羽柴筑前守秀吉は、近年播磨國に有つて、中國毛利右馬頭輝元と合戰して、數箇國を從へり。今度は大將軍四國へ出陣有りて、九州二島まで討一に歸せしめんとて、諸將に觸れ渡され、京都にて諸勢を待ち揃へ給はんために、幾

に御旗本計り召具して、信長・信忠上洛し給ひ、假に京都に御在陣なり。然るに六月二日、丹波國の守護明智日向守光秀逆心して、二萬餘にて夜中に潜んで押寄せ、夜明方に本能寺の御陣へ攻め入りける。將軍拒がんとするに、兵無くして御自害なり、御年四十九歳とぞ。次ぎに信忠の御坐ます二條の御所をも攻め破り、信忠生害なり、廿六歳とぞ。數度の危難を遁れ、鬼神の樣に謂はれ給ひし將軍なれ共、御取立の光秀に御命を失ひ給ふ御運の程、申すも中々口惜しかりし事どもなり。斯くて安土の御留守承りし蒲生左兵衛大夫賢秀、此由を聞いて、口惜しき次第と、涙に咽びけれども甲斐ぞなき。之に依りて、何んとなく城中・城外共に騷ぎける。賢秀之を隱して、詮なしと思ひければ、外池甚五右衛門といふ者に言付けて、鎭めさせけるに、外池裸馬に乘りて馳廻り、明智逆心して、君は御生害なり。されども御城に於いては、堅固に守り申すなり。氣遣致さず、下々騷ぐ事なかれと下知しける。左兵衛大夫は、あはれ明智が寄せよかし、此御城を枕として、後世の御供致さんと、一途に思ひ定めて居たり。御臺所・女房達よりは、急ぎ御供申して、日野へ退かさせ給へ

賢秀の沈勇

とて、折返し〳〵。御使度々に及ぶと雖も、賢秀領掌申されず。信長公、某を頼母しき者と思召し、御留守を預けさせ給ひしに、爭でか此御城を立退き申すべきや。いかに女性にて渡らせ給へばとて、武士の御妻とならせ給ひては、斯樣の御事にも會はせ給ふ慣ぞかし。然るを見苦しく、退かせ給ふべしとは薄情(うたて)けれ、只御自害候べし。賢秀も御供仕り、君に追付き奉らんとて、金石よりも猶ほ堅く、思ひ切つたる形勢なり。又、美濃國の士共、大勢附置かれければ、皆一同に申されけるは、御邊こそ獨身にて御在せ、此者共は皆妻を持ちたれば、一類共の悉く絶果つべきこと、歎はしき事に存候と、言葉を盡して申しけれども、更に同心無かりけり。

赤佐隼人が事

爰に赤佐隼人とて、左兵衛大夫寵愛せられて、身近く仕へし扈從あり。其頃風氣を煩ひ、養生の爲にとて、在所赤佐へ遣し、京都より知若齋道三を呼下し、附け置かれしが、信長父子御生害と聞くやその儘、道三は歸洛せられたり。隼人佐は、前後も知らず臥したりしが、此事を聞くと等しく、かつぱと起き、馬に鞍置け、安土へ參らんといひければ、親類共驚きて、是程の大病にて、道三を呼下さるゝ事、其謂れなし。然る上は、參

賢秀の義氣

らずとても何の仔細有るべきなりと留むれば、隼人聞きも敢ず申しけるは、賢秀、安土にて果てさせ給はゞ、此に有りても、某は腹切つて、御供申すこそ本意なりとて、眼眩き足たゆみ、馬にもたまらざりしかども、抑へ抱へられながら、馬を早めて行きければ、程なく安土へ著きにけり。人々隼人にいひ含めて、賢秀を色々と諫めさせけれども、賢秀申さるゝは、國中は既に明智と一味なるべし。然らば道路にて、御臺所や女房達、見苦しく果てさせ給ひなば、信長公無き御跡迄も、御名を汚し申さん事、骸の上の恥辱たるべしと、疊を叩き申されければ、此上は力なしと、皆僉議あり。兎角氏郷、御迎に參られんには如かじと、急ぎ飛脚を遣しければ、氏郷五百餘騎を引具して、乘物五十丁・鞍置き馬百疋・傳馬二百疋追立つて、其夜中に腰越までぞ參られける。先へ案内ありければ、御臺所・女房達の喜びは言ふ計りなし。左兵衛大夫も、此上は力なしとて、御供の支度をぞ致されける。御臺所より仰せらるるは、上樣の御座所を蹈汚させんも口惜しければ、御殿に火を放つて、寶物を取集め、日野へ持たせ參れよと宣へば、賢秀承り、若御取立の城を、賢秀が燒拂はん事、冥

賢秀父子日野の城に楯籠る

加も恐しく候。縱ひ明智が手へ渡り候とも、天命遁れ難く候へば、長世をば保つまじ。且つ寶物を取らせ參らせ候はゞ、賢秀欲に耽り、金銀を貪りて、御臺所・君達を退け申すと、末代迄も嘲られんは、無念にこそ候へと申し、少しも手を付けさせず。御城をば森次郎左衞門に預け置きて、引退かれける。誠に義深き武士なりと、感歎せり。扨明智日向守光秀は、急ぎ江州へ馳下り、城を請取りて守りしかば、當國の武士共、我も〳〵と降參して、光秀に屬す。然るに蒲生兵衞大夫賢秀、子息忠三郎氏郷は、信長の厚恩に明智と一戰して、腹掻き切り、御供せんには如かじとて、日野の城に楯籠り、要害を構へて、人數を催さるゝに、宗徒の人々には、小倉豐前守・子息孫作・林藏人・小倉又次郎・三雲新左衞門・外池周防守・町野備前守・子息左近將監・儀俄（きが）三河守・子息忠兵衞・音羽右馬允・三木式部之丞・小谷越中守・中將左近大夫・和田左近大夫・青地勝兵衞・寺倉助兵衞・北川佐渡守・內池備後守・子息孫三郎・森信濃守・同民部之丞・新（にひ）伯耆守・上野田主計介・比川（なびかは）平左衞門・外池甚五左衞門・稻田數馬助・室木伊豆守・結解勘助・同十郎兵衞・岡宗左衞門・町野新介・同主水介・赤佐隼人佐・河井新左衞門・横山

明智光秀賢秀父子に味方を勸む

賢秀光秀の使者を嘲る

喜内・布施三河守・馬淵安井孫左衛門尉・高橋常陸介・大森左京之進・種村大藏大輔・蒿卷隼人・古屋木工之丞・福滿次郎兵衛・蒲田内之丞・小澤新兵衛・種村傳左衛門を始めとして、其勢都合一千九百餘騎とぞ聞えし。光秀、此由を聞いて、使を以て申しけるは、今度光秀に一味したらんに於いては、近江半國を與ふべしと、言送りけれ共、曾つて同心せられざれば、當國の住人多賀豐後守・布施忠兵衛なども、明智が方になりぬる上、何れも疎意なき人なれば、いざ參つて異見申さんとて、日野へ立越え、使を以て再三諫めらるれども、賢秀・氏郷聞入れ給はず。兩人ともに寄付けず。增して對面は申すに及ばず、返答には、恩を知り、義を失はざるを武士とは申すなり。御邊達の明智に降參したるは、人畜と申す者なりと、大きに嘲られ、兩人も口惜しくや思ひけん、歸りて光秀に申しけるは、蒲生父子は、以ての外奇怪者にて候。急いで御退治然るべく候とぞ申しける。中にも布施忠兵衛進出で申しけるは、日野の城は、昔日の普請にて、塀・矢倉・壁に候へば、蹈破り易く候はん。一日も早く押寄せさせ給ひて、然るべしと申しければ、光秀聞いて、此義尤もなりとて、支度し、既に

打立たんとしける處に、信長の三男三七殿、堺より引返し給ひ、光秀が壻織田七兵衞尉信澄、大坂の城に有りしを、取圍みて攻め破り給へば、信澄終に自害す。廿五歳なりとぞ。之は信長の弟織田武藏守の子息なり。信長始め、尾州に御坐ます時、武藏守謀叛の志あるに依りて、誅せられたり。其恨みあるの上に、明智が壻なれば、明智に與すと聞えし。光秀此由を聞いて、さらば急ぎ攻め上らんとて、安土には明智彌平次を殘し置き、人數を揃へて、日野を攻めよと下知して、光秀は馳せ上りける。

織田信澄自害

北畠中將信雄朝臣も、伊勢國より、多勢を引率して上り給ふが、賢秀籠城を聞給ひて、先づ之を援ひ給ふ。氏郷の養子二歳に成りしを、人質として信雄に進らせ、彌、無二の心底を申されけり。信雄も日野近邊に陣を張りて控へ給ふ。明智彌平次、既に日野の城へ押寄せんとする處に、同十三日に山崎に於いて、三七殿と光秀と合戰に及ぶ處に、先手の諸將勝利を得たり。折節羽柴筑前守も馳せ上り、信孝に力を合せ相戰ひ、終に光秀打負けて、誅せらる。信孝の御手柄、勇々しかりし形勢なり。彌平次、此由を聞きて、安土をも伱へ兼ね、さしも美々しかりし城に火を懸けて、引

光秀山崎に敗北

秀吉氏郷を賞す

諸將評定

退き、勝龍寺にて討たれたり。さる程に、信雄は氏鄕同道にて上洛し給ふに、氏鄕の士共は、皆半月の立物なり。信孝殿、秀吉に參會し給ひ、先づ信長公の御事を歎き給へり。秀吉、氏鄕の手を取りて、今度籠城の趣き承り及び候。尤も信長公の御壻とは申しながら、切なる時は、其にも寄らぬ者なるに、天晴高名かなと感ぜられ、其後瀧川左近將監一益も關東より上著す。さる程に、諸大名會合評定して云く、信雄は合戰の手に會ひ給はねども兄なり。信孝は先公の讐を伐ち給へども、之は弟なり。信長の御名跡、何れか繼ぎ給ふべきとも辨へ兼ねたりとて、先づ北畠中將殿をば尾張の屋形と定め、淸須の城に居ゑ奉り、松ヶ島の城をば、信雄より武藏の一族津川玄蕃頭にぞ下されける。又、神戶三七殿をば美濃の屋形と定め、岐阜の城に居ゑ奉りけり。神戶の城をば、信孝より、一腹の舍兄小島兵部少輔にぞ讓られける。斯くて兩大將と仰奉りて、柴田修理亮勝家・羽柴筑前守秀吉・丹羽五郎左衞門尉長秀・池田紀伊守信輝四人、天下の奉行として、政道を行はれけり。明智に一味の者共は、皆所領を沒收せられける。布施忠兵衞が所領五千石は、氏鄕へ付けられ、之を稻田

數馬助貞に與へられたり。其節氏郷、布施と中を絕して、布施が室を取返し、後に關右兵衞尉の方へ遣しけり。

信孝御自害附龜山軍の事

爰に伊勢の國司の次男北畠具親は、時既に到りぬとや思はれけん、南伊勢譜代重恩の武士稻生・山副・安保・岸下などいふ者共を催し、都合其勢一千計りにて、伊勢の國篠山の城に楯籠りて、近邊を放火せらる。又天正十一年辛未正月朔日、信雄へ一味の南伊勢の大名・小名、篠山の城へ押寄せ攻めけるに、城中叶ひ難くや有りけん、一方を打破つて、伊賀の國へ落ちける。同年春、美濃國の太守信孝は、我既に先公の讐を討亡す上は、誰をか憚らん。然るを兄弟を兩大將とする事は、偏に羽柴筑前守が計ひと思召し、如何もして秀吉を伐たんと議せられける。筑前守之を聞いて、さらば尾張中將殿を主君に崇め奉るべしとて、信雄へ御味方に參らる。其外池田紀伊守入道勝入・丹羽五郎左衞門長秀を始めとして、大名・小名數多信雄へ相從へり。又

信孝秀吉を謀る

賢秀父子秀吉に一味す

柴田修理亮勝家は、天下の主に仰ぎ奉らんは、美濃守にしくはなしとて、信孝へ相從へり。其外瀧川伊豫守一益・佐々内藏助成政・前田又左衞門利家を始めとして、大名・小名數多信孝へも相從へり。爰に蒲生左京大夫・子息忠三郎は、信雄にも信孝にも從はざれば、秀吉も勝家も是非一味を賴む由、申し遣されける。人々の推量には、蒲生父子は信長公より、柴田が與力に付けられ、毎度の出陣に勝家が先手をせられけるが、勝家越前國を拜領せられて、後に獨立ちとなれり。故に、昔の好みなれば、定めて柴田が方へ一味たるべしと思ひしに、氏郷如何了簡し給ひけん。勝家方へ言葉を絕して、返事せられける。其頃、安非孫左衞門といふ者を越前に附け置かれしが、使者歸りて、蒲生が返答の趣き申しければ、勝家案に相違し、事切つたる返答に力を失へり。彼の安非に別して懇志なる故に、別れの名殘りを惜み、今度の軍に打勝ちたらば、近江國に於いて、過分の所領を與ふべしと、折紙を出し歸しける。斯くて蒲生父子は、秀吉へ一味の趣き申し遣しければ、秀吉斜めならず喜び給ひて、賢秀の娘を乞請けて、秀吉北の方と定め、一入睦しくなり給ひけり。斯樣に諸侯・

柴田勝家自害

信孝自害

大夫二つに分れて、越前と近江の境なる柳が瀨にて、柴田と羽柴と合戰に及べり。始めは勝家利を得て、勝つに乘つて戰ひしが、同四月廿一日、柴田が運命や盡きたりけん、敵も未だ來らざるに、味方逃げ崩れて、散々になりしかば、樊噲を欺く程の勝家も、討負けて、終に腹搔き切つて失せにけり。年五十八歲とぞ。美濃守殿は、岐阜に籠城し給ひ、拒ぎ戰ふ處に、勝家自害の由聞えしかば、美濃守殿、宗徒と賴み思召しつる齋藤玄蕃允・岡本太郎左衞門・稻葉刑部少輔、忽ち謀叛しければ、力及ばず、城を落ち給ひて、尾張の野間の內海にて、終に御生害なり。其時、源義朝、此處にて長田に殺されし事を思召し出されけるにや、

　昔より主を內海の浦なれば尾張を待てや羽柴筑前

と詠じ給ひて、腹十文字に搔切り給ふ。御年廿六歲なり。乳夫幸田彥右衞門、頓て介錯し奉りて申しけるは、君御幼少より附進らせて、御最後の今に至るまで、無二に奉公仕る剛者の自害するを手本にせよとて、之も腹十文字に搔切りて、自ら肌を搔いてぞ伏しにける。天晴勇々しき剛者かなと、皆感じ合へり。扨羽柴筑前守秀

吉、越前表より歸陣の次手に、日野の城へ立寄り給ひ、增入りの祝儀を調へて、歸國有りしとなり。さる程に、美濃守殿へ相從ひし人々は、主君と賴み奉る信孝は御生害なり、大將と賴みたる勝家は討たれぬ。瀧川・佐々・前田など大剛の人々さへ、爲方なうして過ぎられける。爰に小島兵部少輔は、伊勢國神戸の城に籠りけるを、尾張中將信雄の長臣林與五郎命を承りて、數千騎を引率して馳せ來り、神戸の城へ押寄せ、攻戰ふと雖も、城强うして落ち難かりければ、扱ひを入れて城を請取り、林與五郎入替りける。又、關安藝守盛信も、信孝の味方として、同國龜山の城に楯籠りけるを、林與五郎、神戸より龜山の城へ押寄せけるに、折節城中に、士十二人ならでは無かりければ、盛信は、敵に無勢を見迦(みきや)されては、叶ふまじとて、如何にも靜まり切つて、敵の町際まで寄來ると等しく、安藝守下知して、町屋に火を懸け、其烟の中より、噇と突いて出で、信盛自ら鑓を合せて、推つゝ推されつ十二人の士共、此を先途と拒ぎ戰ひければ、烟に紛れて、小勢とは知らざりけるにや、突崩されて敗北するを、少々追伐にして、いや〳〵味方の小勢なるを見て、若し取つて返し、附入りにせら

關萬鐵の素姓

れては惡かりなんとて、凱歌を咄と揚げて、引取りて入りにける。此時佐久間甚太郎も、信雄より伊勢國嶺の城を給はりて居られける。抑も關安藝守入道萬鐵は、北伊勢平氏の一黨三人衆の其一なり。其先祖は、相國淸盛公の嫡男小松内府重盛公の次男新三位中將資盛、十三歲なりし時、殿下の乘合ひの事に依つて、父小松殿の不興を蒙り、當國久我といふ處へ追下されて、十八歲まで居給ひしが、其時に若君一人出でさせ給ひて、盛綱とぞ申せしが、源氏の世と成つて後も、未だ幼少なれば、當國に隱れて居れり。此□人には、末葉まで關の家を繼ぐ子には、乳房四つありといへり。萬鐵の嫡男右兵衞尉は、左もやく、其上足片輪なれば、法師にせんとて、幼少より比叡山へ登せて、兒にて居られける。次男勝藏は乳房四つありければ、名跡には之を立てんと思はれしに、神戸藏人大夫の養子契約なりしも、此勝藏とぞ聞えし。何れも蒲生下野守の娘の腹なり。盛信、先年信長公の勘當を蒙りて、日野に牢落の間は、勝藏は柴田を賴みて、越前にぞ居たりける。然るに去年、盛信勘當を許され、本領安堵せられけるに依つて、譜代の家の子共、皆呼返さる。長臣

岩間・羽赤などいふ者を召して、我が名跡には、何れの子を立つべきぞ。僉議せよとあれば、岩間八左衞門を始めとして、勝藏殿を召寄せられ、御代御讓り給ふに仔細や候べきと、一同に申しける處に、羽赤藤左衞門進出で申しけるは、勝藏殿は旣に柴田殿の家に有附き給ひぬ、比叡山に御坐ます若君は、嫡子と申し、殊に器量の主質にて渡らせ給へば、法師になして、朽果てさせ給ふべけんやといひければ、盛信も此議に同じて、頓て比叡山より呼下し、右兵衞佐と號して、蒲生左兵衞大夫の壻になし、名跡に定めらる。さるに依て、羽赤が權勢は彌增りけり。然るに關勝藏は、仔細有つて、今度の軍以前に柴田の家を立去り、蒲生を賴みて日野にぞ居られける。信孝御生害の後に、其御前は元來より契約の事なれば、萬鐵の計ひにて、勝藏にいひ合せて、日野へ遣されける。さる程に、關右兵衞佐は、今度始めて信雄公へ降つて、味方に參りければ、秀吉へ禮の爲めに、赤佐藤左衞門以下を供として、上洛ありけり。其留守に岩間八左衞門・同七左衞門入道夢庵を始めとして、佐野・豐田・萩野・草川などいふ家の子・郞從共四十二人、談合していひけるは、當時瀧川殿は天下の敵に

萬鐵蒲生氏郷に賴る

てあり、いざや謀叛を企て、瀧川殿を賴みて、勝藏殿を守立て申さんとて、此趣長島へ申し送りければ、瀧川伊豫守一益、大きに喜びて、頓て龜山の城に移りて、栖籠られける。之に依り、萬鐵父子上洛も叶はず、氏郷を賴み、日野へ參られける。氏郷之を憐みて、秀吉へ此由を告げられければ、秀吉數萬の軍兵を帥ゐて、同じく八日龜山の城へ押寄せ、急に攻め戰へば、瀧川終に降參す。夫れより瀧川は越前國へ流罪に行はれけり。此度氏郷忠功有りしかば、秀吉より龜山を氏郷へ給はりける。氏郷申されけるは、關の家絕え候事、不便に存じ候間、龜山を其儘關に給はり、我與力に仕度と申されければ、夫れは兎も角も、御邊の心次第と宣ひければ、氏郷、關右兵衞佐を龜山の城に居ゑられけり。一黨の一家とて、威を逞うしける中にも、二人は家亡びて、此關の家計り名跡を續くこそ目出度けれ。其後氏郷は受領して、飛驒守に任ぜらる。

蒲生軍記巻之二終

蒲生軍記巻之三

信雄秀吉と不快の事附松ケ島軍の事

信雄秀吉不和

天正十二年甲申の春、尾張中將信雄公と、羽柴筑前守秀吉と不和に成り給ふ處に、諸大名悉く秀吉に從ひ服してけり。蒲生飛驒守氏鄕は、秀吉と親睦なりければ、倚以て一味申されけり。さる程に、佐久間甚九郞は、信雄公の御味方として、勢州嶺の城に楯籠りしを、蒲生飛驒守氏鄕等、命を受けて、勢州に發向し、嶺の城を攻圍まる。

秀吉嶺ケ城を攻む

然るに氏鄕の士、上坂左文・坂・小坂等、大手口にて鑓を合せ、其手を突崩し、終に此城を攻落しける。此小坂は、後には源次郞とぞ申せしなり。此時氏鄕の手へ討取る首數七つの內、一番首取りしは岡越後守、其頃は左內とぞ申しける。二番首、其頃は結解文右衞門、其前は駒之丞といへり。其外記するに及ばず。是に依つて、

木造左衛門佐武勇

嶺の城沒落しければ、神戸の城に籠りし林與五郎も、城を開いて、美濃國へ落行き、加々井の城に籠りけり。勢州の住人、嶺・久次・上木・千草四人、加勢として、是も加々井の城に籠りける。斯くて神戸の城をば、信雄の士瀧川三郎兵衛といふ大剛の者に給はつて、急ぎ馳せ來りて、此を守れり。後には羽柴下總守と申せし人なり。さる程に尾張中將殿の近侍に、津川玄蕃頭・淺井民屋・岡田助三郎といふ者共は、不斷伺候の人なり。然るを秀吉、密に謀りて謀叛せしむるに、何れも異議なく、同心の由聞えければ、信雄怒つて、彼三人を召され、自ら討たんと仕給ふを、土方彥三郎、後には河內守といふ人なり。折節御前に伺候仕りしが、之を見て、主從二人して、彼三人の者を斬伏せけり。其後淺井民屋が居城參河國假屋・須賀の城を攻取り、津川玄蕃頭が居城松ヶ島の城を、瀧川三郎兵衛に仰付けられけり。松ヶ島には、玄蕃が舍兄津川彙入・同弟彌太郎、其外神田淸右衛門・中村三右衛門などいふ究竟の兵、楯籠りけるに、同三月三日、松ヶ島の近邊、戸木の城主木造左衛門佐などいふ大剛の人、信雄の味方なりければ、此事を聞くよりも、急ぎ松が島へ押寄せ、攻めければ、

松ヶ島城沒落
秀吉更に松ヶ島を攻む

城中よりも、斬つて出で、防戰ふと雖も、左衞門佐勢に乘つて、手痛く攻戰ひ、城の大將津川彌太郎を始めとして、其外首數百餘討取りて、戸木の城へぞ歸られける。勇々しかりし働なり。同六日瀧川三郎兵衞は、數千騎を引具し、松ヶ島へ馳せ向ひ、城中へ使者を立て、急ぎ城を發き渡されよと、申しければ、城中三人の者共、先日木造に荒斬せられて、心弱りけるにや、防ぐに力及ばざれば、城を渡し、大和國へ立退きける。瀧川三郎兵衞、城を請取つて守りけるを、秀吉諸大名に仰せて、松ヶ島を攻め給ふべき由、聞えしかば、當國蒲田の城主日置大膳亮、瀧川を見次がんとて、千餘人にて馳來る。其外服部半藏といふ名高き兵、鐵炮百挺にて加勢す。都合三千餘騎とぞ聞えし。天主は瀧川持たれしかば、門の矢倉をば、日置固められけり。伊勢國は、大方信雄の國なりければ、國中の城々よりは、人質を取置きけり。さる程に、近湊船江には、本田左京亮、千餘騎にて楯籠り、戸木城には、木造左衞門佐、千餘騎にて籠城す。此木造は、無二に賴母しく見えしが、船江の本田は、覺束なく思はれける、其故は左京亮が壻中村三右衞門は、秀吉へ一味して、本田にも謀叛を

高島次郎左衛門が事

勸めしとなり。斯くて秀吉より、攻手には、大名差向けられしかば、軍兵雲霞の如く靉き、三月十五日松ヶ島へ押寄せ、二重・三重に取卷いて、明日早天より、攻めらるべしと聞えし。斯くて船江の城主本田左京亮、謀叛の志ありと雖も、子息千勝丸、生年十四歳に成りたるを、人質として、內々松ヶ島の城へ入置きたる故、彼を棄て難く、心一決せざりけり。祖父の如人夫婦左京亮は、申すに及ばず、家の子・郎從以下に至るまで、只一人の若君の、明日は伐たれさせ給はんかと、聲々に泣き悲しみければ、猛き兵も、皆鎧の袖を濡しける。爰に高島次郎左衛門といふ兵あり。本田父子、彼を呼んでいひけるは、汝より外に賴むべき者なし。如何にもして松ヶ島へ忍入り、千勝を竊出して參らせよ。若し竊み得ずんば、人手に懸けんより、御邊が手に懸けて、千勝を刺殺し、其死骸を枕にして、腹搔切つて果てよ。此度の用に、汝が命を我に得させよかしと、申されければ、高島畏て承り、命を限りに計略仕りて見候はんと、御謀申し、已に立ちしが、又立歸り云ふ樣は、七日が內に、歸り候はずば、定めて死につらんと、思召し候へといひ捨てゝ、我家に歸つて、妻子・兄弟に最後の暇

を乞ひ、盃を取交はして、物具取つて、肩に懸け、頼み切つたる兵一人、召連れて出でければ、舍弟椋右衛門・同孫兵衛、鎧の袖を引留め、是程の御大事はあるべからず。敵已に十萬餘にて取巻きぬ。城中にも、究竟の兵、三千餘はあるべし。是皆御敵なり。城中も城外も、皆敵の中へも忍び給はゞ、終には討死し給はんは、必定なり。日頃より某等は、最後の供とこそ存候に、口惜しくも、今度召連れ給はぬものかなと、恨顔にて謂ひければ、次郎左衛門聞いて、志の程こそ嬉しけれ。さりながら本田殿、某を行らん者よと宣ひしに、兄弟三人行きては、縱ひ本意を遂げたりとも、何の甲斐かあらん。其上大勢行きては、忍び得る事成り難かるべし。我若し討死したりと聞きたらば、妻子を守り立てんこそ、實の忠義たるべけれと、制し留めければ、二人ながら、力及ばず留りにけり。夫より次郎左衛門は忍び出で、寄手の勢に紛れて、此彼と懸巡り、日の暮るゝを待ちて、漸く堀際まで著きけるが、今日家を出づるより、命は君に奉ると、覺悟を定めて忍び寄り、難なく堀を乗踰えて、主從二人城中に入りしかば、暫く息を繼いで居たりしが、天運や強かりけん、見尤むるもの

もなかりけり。千勝は何くにかと、彼方此方を尋ぬるに、とある所の長屋に、座敷をしつらひて、國中の人質を籠置き、堅く番を附けければ、中々竊出づべき便もなかりけり。然れども、漸く千勝殿に逢ひ、某をも附置かれん爲めに、是まで參り候と、申しければ、千勝大きに悅び給へり。附置かれし人々には、和泉の局、小性には中西與次六郎といふ童共なり。其後高島、日置大膳亮手へ、參りて申しけるは、某も千勝に附置き候はんとて、先日是へ罷越し候。明日の御合戰には、御手に加はり申すべしと、いひければ、日置も、高島が是まで參りたる志を感じ、其上申されし樣神妙なり。急ぎ此手へ參られよと、申されければ、大膳亮の手に加はりて、門・矢倉を堅めける。本田左京亮と日置大膳亮と、相聟なれば、日來より知りたる故なり。此寄手の大名の内、長置兵部大輔藤孝・蒲生飛驒守氏郷は、尾張國額殿表へ、秀吉出陣に依りて、發向せられ、松ケ島に殘り留まる人々には、秀吉の御舍弟羽柴美濃守秀長・筒井順慶を大將として、其外當國の大名、秀吉の味方に參られたる織田上野介・九鬼右馬助・田丸中務少輔・關右兵衛佐、其勢四萬餘と聞えけり。同十六日の早天に、

寄手の大勢、黒烟を立て、松ヶ島の四方より乘込み、織田上野介の手の者、早士町へ火を懸けて、攻めければ、黒烟雲井遙に揚りけり。船江と松ヶ島とは、其間十八町なれば、此放火の烟を見て、扨は千勝も高島も、討死しつらんとて、人々悲歎頻なり。松ヶ島の城中は、少しも騷がず、防ぎ戰ひける間、本丸へは火も付かず、弓・鐵炮を射懸け、放掛け防ぎける。寄手も押詰め〳〵攻戰ひけり。日置大膳亮の持口門・矢倉の寄手は、其頃天下に名を得し大剛の兵、大和國の守護筒井順慶なり。然るに大膳亮は、門を押開かせ、切つて出で、敵の中へ駈入り、蛛手十文字に、切つて廻りければ、寄手の大勢、怺へ兼ねて、四方へぱつとぞ引きにける。實に由々しき働なり。大膳亮が兵士は、小性より下部に至るまで、手柄をせぬは無かりけり。されども寄手は、多勢なれば、之を事ともせず、堀際に陣取つてければ、いつ果つべしとも見えざりけり。同十九日、尾張國長久手表の先鋒の諸將、敗北して、賴み思召したる池田紀伊守入道勝入・子息勝九郎勝入・壻森武藏守などいふ歷々の大名、討死せられたり。されども、秀吉其外の諸將は、恙なく引取り給へり。同十日日野にして、蒲生左兵衞

蒲生賢秀討死

大夫賢秀死去せらる。年五十一なり。天下兵亂の折柄なれば、隱密せらる。其頃氏鄕に、江州の內にて、加增の地を給ふ。扨松ヶ島の城へ忍入りし高島次郎左衞門は、日置大膳が手に加はり、數度の戰に、分捕高名して、隙を窺ひ、千勝丸を竊出さんとせしかども、內には三千の士卒、目の隙なく、外には軍兵雲霞の如く、四方より堀際まで攻寄せたり。高島既に六日まで城中にありしかども、叶ふべしとも見えざりけり。高島案じ煩ひしが、七日と限りしも、明日計りなり。今夜竊み損せば、是非なしと思ひ切つて、此上は隱れても詮なし。若し討たるゝ時の證據にも、成り給はんずれ。押留められれば、案の外よも此人左樣にはあるまじと、密に大膳亮に近附きて、有の儘に意趣を語り、若し討死仕候はゞ、此形勢を、本田に仰せられて給はり候へと、申しければ、日置之を聞いて、さても御邊は、大事の使に來る者かな。我は苦しからず、內外の人の目を、能く忍ばれよとぞ、申されける。則ち二十日の夜、千勝丸其外の者共に、心を合せ引具して出で、一人宛堀を越えさせ、我は太刀拔持ちて後に控へ、誰と尤むる者あらば、刺違へんと待ちかけたり。四五人の者共、皆堀を

踰えければ、下人・乳人女にいひけるは、我身は千勝丸に、立副ひて、太刀提げ、若し退き得られぬ者ならば、千勝丸を刺殺し、討死せんと思ふぞと、堀際まで出でけれども、天運や強かりけん、尤め怪しむ人もなかりけり。爰に次郎左衛門が弟椋右衛門・同孫兵衛は、兄の行衛の覺束なさに、主從四人、十六日より夜々忍びて、寄手の勢に紛れ、堀際まで來りけるに出會ひたり。弟共之を見て、如何に嬉しやと立寄りしかば、次郎左衛門も、大きに力を得、主從十人計りになつて、千勝丸を中に立て、本道指して出でけるに、敵方より見付けて、城中より落人こそあれ、討取れと呼ばはりければ、追懸くる者ありけれ共、早程遠く落ち延び、難なく船江に著きにけり。本田父子、喜ぶこと限りなく、高島が手柄の程、感せぬ者はなかりけり。

本田左京亮死去

本田家滅亡

本田左京亮、人質は取返しけれども、徒に籠城して、流石に秀吉へも參らず。又松ヶ島とは手切しつ、磯にも著かず、波にも依らずして、遂に身上果てにけり。本田次郎親經が嫡流にて、代々武勇の家なりしに、此度亡びけるこそ口惜しけれ。さる程に、松ヶ島の城、四月下旬まで、攻められしかども、瀧川・日置、志を堅くして守りける。殊に

日置は、其後も兩度まで門を發いて、切つて出で、毎度敵を追拂ひ、首數多く討取り、手痛く戰ひければ、寄手も氣遣して、此手へ人數を增して、圍みけり。又伊勢國の住人木崎新四郎といふ者、瀧川に與して籠りけるが、早行々しき軍も、せざりければ、何者がしたりけん、城中に札に書いて建てたり。

城中に入らざる者が三つ御座る蟻と虱と木崎新四郎

斯くて日數漸く四十日に及びける。其頃勢州に慶法といふ人あり。是は岸江といふ人の娘なり。さる人の妻にてありけるが、十六歳にて、夫に離れて、悲しみの餘りに、再び夫に見えじとて、長と等しき黑髮を切つて捨て、蕾める花の姿を、作ちに出家の姿と成つて、眞心を失はざりし事、最も優しかりし女性なり。されば若年の頃より、老いたる今に至るまで、諸人其志を感じ、諸大名も、皆此尼公を憐れみ給へり。或る時尼公美濃守長秀の前に來り、瀧川・日置殿は我等の檀那にて候處に、永々の籠城痛はしく存候。何卒我等扱ひて見候べしと、申しければ、優しき志かな。尤も然るべしと、各〻申されければ、頓て城中へ入つて、此由申しけるに、瀧川・日置、同

心せざりしを、色々に諫め申されければ、兩大將然る上は、門前の堀まで、船を下され候へ。城を渡し申さんとありければ、慶法喜び立歸り、長秀へ申されければ、異議なく船を遣はされけり。夫より瀧川は神戸へ、日置は蒲田へ、服部牛藏は參州へ歸りけり。斯くて秀吉より、松ヶ島の城へ、岡本下野守を遣はされ、城を受取りて守りける。

加々井軍の事

尾張國竹ヶ鼻の城には、不破權內・子息源六楯籠つて、信雄に力を合せ奉りけり。斯くて秀吉・其外の諸大名、此城へ押寄せ、水攻に然るべしとて、大河と小河とを流し懸け、卽ち攻落し給ひけり。夫より直に、美濃國加々井の城へ押寄せ給ひける。寄手の勢に城中の兵を比ぶれば、大海の一滴・九牛の一毛なれば、叶ふべしとも見えざりける。城主加々井駿河守、謀を廻らし、寄手の陣へ、夜討をせんとて、勢州の住人嶺・久須・千草・上木四人を大將として、子の刻計りに、大手の門より、打つて出でた

り。千草は蒲生氏郷の母方の叔父にてありしかば、宵より飛驒守へ、內通ありしとかや。されば氏鄕心得て、眞一番に懸合ひて戰ひける。郞從には、上坂左文・小坂、左右に相從へり。其外寄手の軍兵、我も〳〵と追手の陣へ向ひける。頃は五月六日の事なれば、暗さは闇し、敵も味方も、見分たざりし處へ、敵二人落來る。氏鄕、何者ぞと、言葉を懸けられければ、假言いうて、淺野彌兵衞・生駒彌五左衞門と名乘る。氏鄕聞いて、さないはせそとて、主從二人鑓を合せ、二人共に討留められけり。爰に嶺孫三郞は、生年十八歲にて、容顏美麗人に勝れ、心も優しき者にて、小唄に作りて、人の謠ひし程の若者なりしが、眞先懸けて戰ひしを、寄手取籠めて、討取りけり。久須は、十六歲なりしが、氏鄕の手にて討取る。千草は六十計り、是も氏鄕の手へ打取りける。上木は三十計り、是も戰死す。其外敵數を知らず。爰に關勝藏が家の子、佃又左衞門は、大手の門際まで攻込み、比類なき働にて、好き首取つてけり。然る處へ、群々と懸來る敵を、主從三人、氏鄕眞先に鑓を合せらる。其外諸手へ討取る首も、限りなくして、漸く夜も白々と明けゝれば、氏鄕は、左文・小坂を

呼んで、鑓を突出し、之を見よとありけるに、氏郷の鑓下頸曲つて、柄へ血流れにけり。左文・小坂が鑓を見られしに、皆さゝらの如くなりにけり。其時氏郷、今夜の合戰は、此三人こそ骨を折りたれと、申されける。寄手へ討取る首數、都合四百餘の内、氏郷の手へ百餘討取りけり。諸卒我も〳〵と攻入りければ、大將與五郎・加々井駿河守は、潛に搦手より出で、尾張國へ落行きけり。

氏郷松ヶ島に封ぜらるゝ事

蒲生飛驒守氏郷、今度勢州加々井に於て、拔群の戰功ありしかば、日野六萬石の地に倍して、勢州松ヶ島本田が領知を併せて、十二萬石に封ぜらる。田丸中務少輔・關右兵衞佐は、氏郷の縁者なればとて、與力に附けらる。和州宇多郡の住人澤源六・秋山右近・片野宮内をも、同じく與力とせらる、是等は、伊勢の國司の時より、其旗下に屬せし例なり。天正十二年岡本下野守、松ヶ島を請取つて、氏郷入部せらる。路次の行列の中に立留つて、水田懸くべからずといふ法あり。然るに福滿次郎兵衞

は、勇士にして、殊に氏鄕の倖臣たりしが、其法に違ふ。監察外池甚五左衛門・種村慮齋に介して、福滿を刑戮せらるゝ事、惜しむ者もあり。忠をば必ず賞し、罪をば必ず罰す。賞罰正しければ、一は以て進み、一は以て懼る。其罰する所の者も、亦其子をば扶持して、父が過を補せしむ。諭戒最切なるに依て、志を勵まさゞるはなかりけり。罪嗣に及ばざるの意を得る者なり。氏鄕松ヶ島に到り、一夜も寢ぬる事を安んぜず、屢、歎息の聲あり。明旦起きて不快の色あり。今新たに增封せられて、喜ぶべき時なれば、憂ふることあるまじきに、福滿に死を給うて、其器量を惜しめるもの歟。思ふに法は私を以て曲ぐべからざるが故なり。扨氏鄕は松ヶ島の城郭を修補し、先づ其戰功の小大に依りて、行賞の多寡を分たるゝに、皆理に適うて、下情怨なし。又本より其國に名ある武士を招來す。爰に松田金七といふ者あり。大和國の士にて、生得剛强なりしが、南都に五年、浪人して居ける時、不慮に持ちたる棒に中る。是非に死なんと思ひけれども、人々無理に押留めければ、力なく勘忍す。韓信は股の下より出で、木村は面を搏たる。皆當前の恥辱を省みずして、後に碩

松田金七が事

動を顯せり。松田も、其存念ありけるにや、鐙の背に、金溝を以て、天下一の非強者とぞ、書付けたる。此者、氏郷の家を望み、河合公右衛門を賴み、我等は、天下一の卑怯者に候。若し御用に立つ事も候べきか。御日短に任せ、御扶持を蒙り、明君の下にて、我等が安否を定めたく候と、いひければ、河合取次で、氏郷へ披露す。飛驒守聞いて、前件の事、腹藏の意なくして、正直の道を好む處、一力あり。如何樣、唯者にはあらじとて、祿を與へ、鐵炮頭に成し置かれしが、果して其後戰功あり。

木造軍の事

上野國織田上野介信包も、氏郷と同時に、勢州安濃津を給はりけり。斯くて木造左衛門佐は、松ヶ島と、安濃津の境戸木の城に住して、信雄の味方たり。是に依りて、信包・氏郷、小城を構へて守らせらる。松ヶ島の小城四つに、上坂左文・坂源次郎小坂始は・生駒彌五左衛門・谷崎忠右衛門を入れ置かる。信包の小城三つなり。何れにも勇將を、籠置かれければ、誠に籠中の鳥、網裏の魚の如くなり。されども木造、物の數と

畑兄弟の武勇

あらせず、従兵一千餘人を、二手に分つて、爰に火を放つかと見れば、彼處に夜討し、東に鬨を揚ぐるかと聞けば、西に切つて出で、千變萬化して、敵に形を窺はれず、忽然として、勢を取らず。案内は知りたり。兩方の城際まで、度々攻入りければ、信包も氏郷も、少しあぐんで見えけるが、敵の勢は少く、味方は多勢、彼は衰へ、我盛なれば、見侮りてぞ居たりける。木造が兵士の中に、畑作兵衛・同勘太郎といふ兄弟二人は、勝れたる剛の者にて、兄作兵衛は、十九歳、强弓の手利なり。弟勘太郎は、生年十八にて、打物の達者なり。二人ながら大力の大男にて、十四五の時より、戰場に臨んで、此年まで取りたる首、作兵衛は二十、勘太郎は十九なれば、我年よりも、首數は兄なりとぞ答へにける。此者共が、向ふ處、討破らずといふ事なし。其頃漸く秋にもなりければ、戸木の者ども、刈田の働せんとす。之を松ケ島・安濃津よりは拒ぎて、晝夜の鬪擊止む時なし。八月十五日の事なるに、曽原の寨を守れる上坂左文が方へ、木造左衞門佐より、使者を以て、今日逍遙の爲め、河邊に出で、鵜を遣ひ度候。其御心得有るべしとぞ、いひ遣しける。左文此由を氏郷に告げければ、手の者、

二人遣して、木造が體を窺はせけるに、戸木の士共百餘人、島鶏の遺物二三十を、瀬瀬に放入れて、川を上りに遣ひ、其日取りたる魚どもを、氏郷へも贈られけり。斯様に、外には心を寛くして、内には隙を求めければ、敵今寄すべしと思はじと、木造が兵二三百人、松ヶ島の領分小河に夜討し、菅瀬といふ處に、圓形に備へて控へたり。常に氏郷下知しけるは、木造若し出張せば、相圖の鐵炮、三つ放てと、兼て定めらる。是に依りて、鐵炮三つ放つ。折節氏郷松ヶ島の城に在つて、今宵は名に負ふ月なれば、歌を詠じ情を述べばやとて、盃を廻らし、一興を催さるゝ處に、相圖の鐵炮聞えければ、例の木造こそ出でたれとて、氏郷便殿に、つと入つて、鎧を肩に懸け、鑓提げて走出で、馬を牽寄せ、乘ると均しく、法螺を吹立てさせ、人數をも集めず、軍列をも整へず、眞先に馳せられける。法螺を聞いて、漸く七八騎馳出で續きたり。木造方の者共は、氏郷常に先駈を好めるなれば、我討たん人、討取らんといふ處に、案の如く、氏郷人數を離れて進まれけり。敵之を見て、すは大將よ。而も小勢なるぞ、此にて打洩しなば、何れの時をか期せんと、眞中に取籠めて、追儺の豆

氏郷奮戰

を飛ばすが如く、鐵炮を放ち懸けたれば、氏郷の冑に、鉛玉三つまで中りたれども、透らざれば、手も負はず。馬は名譽の逸足なり、乘手は稀代の猛將たりしかば、向ふ敵を突伏せ踏倒し、縱橫自在に相當らる。外池長吉は、深入して討死し、外池孫左衞門良重は、組討して、其首を取つて、見參に入る。又木造が家人に、隱れなき金子十郎左衞門・中川左衞門といふ者なりと、高聲に名乘つて、二人ながら、鑓を横たへ、大將を目に懸け、一文字に進來る。氏郷是と鋒を合せ、左右を拂つて、突立つれば、金子・中川手弱くなつて、言葉にも似ず引退く。野田龜之丞・岩田市右衞門も鑓合せ、味方追崩せば、敵馬を引返し、之を破れば、味方又備を立直し、兩方入亂れて戰ひけるに、味方の兵黑川・西田・大門等、一處にて鬪死す。赤佐隼人佐・吉村助左衞門・結解駒之丞など、兵士骨を粉にして力を盡し、各〻首數を得たり。岡半七（後半兵衞と改む）其頭は、扈從たりしが、好き首取つて馳來る。兄源八（後儀太夫と改む）十八歲にて、畑作兵衞と引組んで、上を下へと返しけるが、畑は聞ゆる大力にて、源八を取つて押付け、既に首を搔かんとす。時に半七走り來つて、助太刀打つぞと、詞を懸くる。源八下に伏しな

木造勢敗軍

小山戸合戰

から、此敵の首、汝がにせば、無用なりとぞ留めける。後に聞く人、其壯志を感じ、大膽者と稱す。半七畑を一太刀切ると均しく、源八下より刎返し、畑が首をぞ取つたりける。其隙に味方の軍勢、追々に馳加はつて、彌〻勇み戰ひけり。木造が從兵は、多く死傷して疲れければ、遂に切靡けられ、敗北するを、追討に討つ程に、木造頼み切たる兵共、四十餘人討たれにけり。雜卒は、數を知らず。是より左衛門佐、身を護つて、手痛き戰もせざりけり。

小山戸軍の事

勢州小山戸六十六鄕の者共、信雄に心を寄せ、一揆を起し、城郭を二箇所に構へて、籠りたる由、聞えしかば、九月上旬に、氏鄕數千餘騎を帥して、小山戸に馳向ふ。爰に嶮難の一徑に、山の腰を廻る所あり。其山陰に、敵伏勢を置いて、不意に打つて出で、谷底へ追落さんと、謀るの由聞えしかば、軍兵踏止つて、相議する處に、佃又右衛門進出でて、敵に遭うてこそ分別もあらめ、見えたる事もなき先に、踏止つて

遲滯する事や候べき。縦ひ伏兵を置くとも、兼て期せざる事かは。首尾の備左右の翼は、何の爲めぞや。我等道指南仕らんとて、眞前に立つて行きたるに、敵は一人も居ざりけり。其前路に川あり。向の岸に山峙ちたり。其陰も亦常に敵の待つ處なり。是に依りて、軍勢川岸に控へたるを見て、佃我等瀬踏仕らんとて、一番に乘入れ、白浪を蹴立てゝ、打渉りければ、爰へも敵は出でざりけり。氏郷先づ出城へ攻寄せ、城際まで押詰めたり。氏郷の從兵に、青地庄司といふ者あり。(始は名千世兵衛)本は信長の士にて、生國は近江なり。明智が一味たりしが、明智亡びて後、氏郷に仕へたり。此青地が寄せたる攻口には、敵多く討つて出で、既に危く見えければ、氏郷扈從廻りの者共に下知して、青地助けよとあれば、我も〳〵と馳行きて、遂に敵を切靡けつ。されども和田左近大夫が嫡子和田龜壽丸・岡田閑兵衛・外池樂次といふ扈從共、目を驚かす働して、枕を雙べて討死す。斯くて諸方一同に攻入りければ、即時に追崩し、首を撃つ事、六十餘級なり。是より直に進んで、今一箇所の城を取圍み、攻破らんと勇む處に、國司の次男北畠具親、伊賀國より馳來り、氏郷に使者を以

て、申されけるは、城中の者共、我申すことをば、定めて承引仕るべく候條、和を調へ見候はんやと、申遣しければ、氏郷其儀に同ぜらる。されば貞親計らひにて、遂に無事になりければ、城を渡して出でにけり。又伊賀國に信雄一味の者あつて、賊徒等を聚め、壘に道路を塞ぐと聞えしかば、貞親と打連れ、伊賀國へ發向し、頃刻の間に、一城を屠り、松ヶ島へぞ歸られける。戸木の木造と貞親とは、叔父甥にてありければ、其後貞親又木造をも說きて、和を請はんと謀られけれども、一向返事にも及ばず。然るに戸木は、十月下旬までは、敵地の中に獨立して、屈する氣色も無かりけるが、伊賀・伊勢兩國を、氏郷の武功に依つて、一遍に靡け從ひければ、木造行末如何ならんと思ふ所に、松ヶ島・安濃津より、和を入れらるゝを幸として、遂に同心し、城を避けて、尾張國へ引退く。木造今まで撓色なく、孤城を守りて、軍兵大敵に對す。此度も我より降らずして、名を高うし、峻節を全うす。貞親は武藝才覺ある人なれば、氏郷當分酒茶の資用として、祿千石を與(あたへ)らるゝに、貞親隨分忠義を盡したる由、秀吉にも達せられ、領地をも申給ふべきかと存ぜしに、思の外なる

事かなとて、辭して浪士となりぬ。

紀伊國軍の事

信雄秀吉媾和

さる程に、正二位内大臣秀吉は、尾州・勢州の城々には、守將を置きて歸京なり。武威日々に耀き、諸將靡き從ひ、軍勢大になりければ、信雄、始終如何と思はれける處に、秀吉富田左近・津田隼人をして、更に害心を挾まざる由を、申されければ、遂に媾和せられけり。紀伊國の者共は、信雄に心や寄せたりけん、未だ悉くは、隨はざりけり。天正十三年三月、秀吉大軍を帥ゐて、和泉を經て、紀伊に入る。泉・紀の間に、敵砦を十四箇所に構へて、拒ぎけり。其中に十二城をば、攻めずして、千石堀・積善寺二つの城をぞ攻められける。千石堀より、人數五百計り突いて出づる處を、秀次及び堀秀政等、横ざまに駈破り、挾みて討取り、逃ぐるを遂つて、直に攻入らんとす。此千石堀の城には、名を得たる鐵炮の上手根來法師八百人まで、籠りければ、大軍の人數を的にして、放ち懸くるに、人馬を選ます、堀の中に打倒されて、いやが

秀吉千石堀積善寺兩城を攻む

上に重なり死す。爰に筒井順慶は、物馴れたる宿將なりければ、頻に火矢を射させけるに、忽ち口屋に燃付きたり。內に入らんとすれば、烈火城櫓に充滿ちて、避けんとするに處なく、外に出づれば、數千の兵鏃を揃へ鋒を雙べて、待ち懸けたり。打破らんとするに、陣堅くして、城中の兵或は火に焦れ、或は刃に割かれて、死を免るゝ者、僅に二人なり。此勢に恐れて、積善寺の者共は、戰はざる先に、城を棄て逃げ去りぬ。

紀州諸城秀吉に降る

氏鄕は、田中の城を圍まれけれども、殘の十二城は、皆攻めざるに落ち、招かざるに降りけり。秀吉進んで、根來寺を攻破り、夫より兵を移して、雜賀・太田の城を取卷かる。知伯圍趙襄子の謀に效うて、吉野川の水を引き、城に灌げば、城中滔々たる水勢を見て、惶れて降を乞ふ。秀吉其棟梁を殺して、餘は皆寛宥せらる。熊野も亦秀吉の威風に偃して、滿山降參しければ、其押領の地を還させ、紀州悉く平治して、秀吉大坂に歸り給ふ。

秀吉紀州を平定

或時秀吉人に謂ひて曰く、信長は勇將なり、良將にあらず。剛の柔に克つ事を知つて、柔の剛を制する事を知らず。一度敵せる者は、其憤怒終に解けずして、悉く其根を斷ち、其葉を枯らさんと欲す。故に降を誅

し、服を戮して、怨仇絶ゆる事なし。是れ最窄く、器少なるが故なり。人の爲めに憚らるれども、衆の爲めに愛せられず。譬へば虎狼の如し。其嚙まれん事を惶ると雖も、見る者之を殺して、其害を免れんとす。是明智が、弑逆の由つて生とする所なり。秀吉實に之を曉るにや。一剛一柔にして叛者をば、之を討つて、以て其威信を示す。故に速に不意に起り出で、其鋒に當る者なし。從ふ者をば、之を撫でて、以て其寛大を知らしむ。本領を復し、舊惡を忘れて、有容の氣象あり。故に東西を討從へ、南北を討靡け、高山・大川の如くなるも、平地の周道を行くが如く、十萬の師の進退、分合も一心の四肢を、恣にするが如くして、天下を撫育し、四海を掌に納め給へり。若し夫れ嗜欲の者をば、抑へて儉素を守らしめ、驕傲を制して、謙遜に處せしめ、放恣を戒めて、敬禮を存し給ふ。希代の良將なり。

越中軍の事

秀吉長曾我部元親を討つ

秀吉舍弟秀長・同甥秀次を將として、長曾我部土佐守元親を伐たしむるに、速に來

秀吉越中出陣

外山城陷る

服し、諸將連降して、四國平ぎしかば、阿・讚・豫の三州を、功臣に分ち給ふ。越中大守佐々陸奥守成政は、先年信孝にも志を合せて、其後終に上洛せず。又信雄より、味方に賴まれしにも、異議なく同心して、秀吉と相矛盾す。故に秀吉馬を越中に出す。一番に前田利家・織田信雄、加賀尾張の軍勢を帥ゐて前驅たり。此軍粧を見物の者の中に申しけるは、信雄若し明智叛逆の告を聞くより、早く師を出し、至惡を討たば、天應じ人服して、武威自然に備はり、誰か命を背く者あらんや。孝道を忘れ、天理をも知らず、延々と十餘日を過されしは、勇氣の缺けたる人なり。昔は秀吉拜謁の臣ならずや。然るに今更、其馬前の塵を拂つて愧とせず、顔に血ある者、此の如くならんやといひて、彈指（つまはじき）せり。斯くて秀吉は、多勢を以て、外山の城を攻め給ふに、叶はじとや思ひけん、降參しければ、越中を給ふ。利家、島津退治の後、成政に肥後を給はつて、熊本に在城す。時に國人一揆を起す。成政、之を伐平ぐと雖も、秀吉の己を怒らん事を恐れて、尼崎まで來る。秀吉、其罪を責めて自殺せしむといへり。去年、木造の城を、明け退きし故に、木造が兵士畑勘太郎・河合加兵衛

等、勇名ある者を、四人招來す。今度越中の役に畑勘太郎を殘し置かる。安濃津の領分、中村に年來惡しと思ふ者ありしを、畑、氏郷の留守の隙を窺ひて、首を刎ねんと、畑が朋友二三人に語り、中村へ夜討せんと謀るに、皆一議にも及ばず同意す。さらば今夜こそよけれとて、中村に亂れ入つて、遂に其惡しと思ふ者を、斬り得たり。されども近邊の里々より、聞付けて、炬火を燈し連れ、鑓・長刀を提げ、百人計り出合ひて、畑が主從廿四人を、中に取籠め、一人も泄さず、討止めんとす。畑は物の屑ともせず、彼と打合ひ、是と切り結び、前後に當り、左右を突いて、七八人斬り伏する。畑が手に懸けて、三人斬り、手を負はする者、數を知らず。競ひ懸りて追討ち、味方は一人も討たれず。半途まで引取りしが、畑、刀を落したり。夫より取つて返し、中村の里の中に、札を立て、今度落したる刀を、拾ひたらん者、此札の立木に、結付けて返せ。返さゝるに於ては、百度も夜討して、一鄕悉く野原になさんとぞ書きたりける。此刀は元來神戸が郎等、誰とやらんが持ちたるを、後に畑が買取つて、重寶としたりと聞えければ、中村の者共、之を見知りて、さらば夜討の輩は、松ヶ島に居

住する木造が兵士ならん。日來の猛勇壯力をば知りつ。實にも刀を返さずば、亂暴止む時なかるべし。縱ひ萬金の價なりとも、一刀を千萬人の身に易へんや。又我等が刀を以て、彼と相鬪はん事は、鼠を聚めて、猫に敵し、卵を擧げて、石を伐つに近しとて、刀は卽ち札立てたる木に、結付けてぞ返しける。其後、此事を安濃津の奉行に訴へければ、織田信包の執權より、松ケ島の留守居小倉豐前守・上坂兵庫介が方へぞ、いひ遣はしける。小倉・上坂承り候ひぬと、返事を仕て、畑を殺さんずる談合するに、畑若し彼等と一つにならば、必ず人多く、害せられん間、先づ畑をば、知らざる振をし、畑に與みしたる者のみを、夜討の張本人なれば、國法の爲めに、斬戮するぞといはせ、畑も討手の人數に加へん。彼等畑に勝たば幸なり。畑彼等に勝たば、畑を獨身になして殺さば、容易かるべし。若し逃げて行かば、斬つて棄てよとて、二三十人の討手の中に、立てゝぞ向ひける。畑も斯くとは、推量しながら、曉らぬ體にもてなし、河合加兵衞を始めとして、二三人の者をば討つて、下部をば擒にす。其時、畑衆中に向つて打笑ひ、今は我が身の上なりと、匂言吐いて、鑓提げ、

白晝に、松ケ島より出奔するに、日來の勇にや恐れけん、又其器量をや惜しみけん、手指す者もなかりけり。其後豫州に往いて、福島左衞門大夫正則に仕へぬ。畑始めには我身の爲めに、各、倶に命を捨てんと、契りたる者を、後には討手として、彼等を殺さむ事、少も憐む氣色なし。寔に勇なる事は、勇なれども、虎狼の心ありと、聞く人皆惡みけり。其頃信雄の士に、森本飛騨といふ者あり。隣境にて同名なりしが、心行氏鄉に似ざりければ、狂歌を詠んで、勢州の童女口ずさみ、蒲生を擧め、森本を毀る。此秋秀吉、始めて五奉行を置いて、國郡・山川・神祠・寺務の法令・訟獄の事に至るまで、相議して公平明察ならしむ。

蒲生軍記 卷之三 終

蒲生軍記卷之四

筑紫軍の事

島津修理大夫義久は、薩摩・大隅・日向、三國に有つて、屢、豐後の國主大友が地を侵して、止む事なし。天正十四年、大友使者を秀吉へ上せて、援兵を乞ひ、麾下の臣たらんといふ。之に依りて、長曾我部元親・仙石權兵衞に命じて、大友を救はしむ。二將秀吉の命を受けて、豐後に到りて書を遣し、如順に歸せずんば、秀吉兵を出すを欲するの意を述ぶ。義久披見して、大に罵りて、書を地に投げて嘲笑ふ。二將聞きて甚だ怒つて、大友の兵に六千餘の師を率ゐて、義久の地に入りて、陣取りたりける。時に島津中務大輔家久、二万計りにて馳來り、兩軍互に進んで相戰ひ、鐃聲鳴り、劒光閃いて、天雨降らざるに、殷雷を聞き、激電を見る。長曾我部元親は、銃兵

長曾我部元親討死

秀吉九州出陣

氏郷巖石の城を攻む

を以て、島津家久の陣を突破り、驅散らしけるが、終に取籠められて討死す。薩摩の軍兵、勝に乘つて、勢彌、盛なりければ、元親も亂軍し、仙石も敗走す。十二月關白秀吉、太政大臣に任ぜられ、姓を豐臣と改めらる。時に氏郷も從四位下に叙せられ、侍從に任ぜらる。是より松ヶ島の侍從といふ。天正十五年、秀吉、去年島津命に逆らうて、長曾我部・仙石等を擊破る事を怒つて、同年三月、十七箇國、二十餘萬の大軍を發し、長艟・巨艦を西海に浮べ、帆影晴天に懸り、櫓聲白浪を揚げて、九州にぞ越えられける。島津兵庫頭義弘が所領、豐後・日向の境高城、島津中務大輔家久が守る所の豐後府内の城、皆攻陷さるゝ。秀吉は豐前の馬嶽に豐かに陣し、諸將に下知せらる。爰に豐前と筑前の境に、巖石といふて、一の塞あり。嶮山絶谷にして、尤も要害の地なり。此處に熊井越中、精兵・猛卒三千を勝ぐつて守り居たり。氏郷・秀吉に申して、巖石の塞を攻めんと請ふ。秀吉、丹波少將秀勝を大將として、蒲生氏郷・前田利家を副將とす。氏郷は三千餘騎、利家は二千餘騎、四月七日、巖石を取圍む。氏郷、城の面に當り、利家、城の背を襲ひて、早や二三の城門を破れば、敵、本城に引籠る。氏

郷、其日軍奉行一番左上坂左文・同右谷崎忠右衛門、二番左本多三彌・同右横山喜内、此四人を以て、軍令を出だし軍爭を監せしむ。其部曲を雜へて、獨り進むは勇なりと雖も、必ず利せず、是氏郷第一の制なり。然るに此時、本多三彌、衆を抽でて先登し、大に叫び戰ふ。上坂左文・横山喜内、之を見て、本多に劣らじと、堀際まで攻寄せ、揉みに揉みてぞ迫合ひたり。氏郷之を見て、騎使を馳せて、腹切らせんずるぞと、怒られければ、三人打連れて引返へす。坂源次郎は、先鋒を承つて、一番に攻登り、白き吹貫きに、假名にて一番と、墨黑に書きたるを、城門の眞中に打立てたるに、城中より放つ鐵炮・弓矢中つて、秋風に破れ果てたる芭蕉の如くになりたれども、坂、之を事ともせず。斯かる處にこそ、勇怯の二つは見ゆれ。此を退きては、武夫とせんやとて、軍兵を勵まして、彌、前にぞ進みける。陣々より之を見てあれば、何者ぞと問ひければ、之こそ聞ゆる蒲生氏郷の將、坂といはる大剛の者よとて、皆口口に譽めにけり。寺島半左衛門後に美濃守と改むは、黑き吹貫を先きに推立て、坂に續きて攻入り、一番首をぞ取りたりける。二番に、前田利家の兵士太田喜藤次・松平久兵衛・

相竝びて乘込み、四方均しく攻め近く。岡左內・同半七・西村左馬之助・岡田大助等は、氏鄕の旗本に在りけるが、鷹の雀を見て、拳にとまらぬが如く、後如何なる罪にも、當らば當れと思ひ、走り出でて、鑓を合せ刃を接へ、各〻冑首を獲たり。中にも左內は、城戶の邊にて、從者を斬られて、其敵を鑓も立てず突倒して、首を取り、如何に面々、今の鑓の手は、出來物ならぬかと自讃して、呵々と笑ひ、皆本陣に馳歸りて、見參に備へけれども、氏鄕淺に歎美の詞を加へば、是より軍備も、亂れんと思はれければ、見ぬ體にて居られける。西村は何の故にか、御氣色に協はぬぞと訇つて、又敵の中へ驅入りて、首を取つて來れども、氏鄕、叱咤して構はず。

野矢甚左衞門が事

野矢甚左衞門は、弓の上手にて、山田の畔に立渡り、敵五人射倒し、首五つ揚げて來る、類ひ希なる高名かな。一つも難しとす、五つまでは、何として取りたるぞと、其故を問ふに、敵の鑓先の拳に、中りたる程に、近付け寄せて、放つ時は、外るゝ事候はずとぞ答へける。寔に今の世の爲朝・教經とも謂つべし。斯くて兩將の大軍、大手より亂入れば、搦手に廻り、塀を越え、垣を破りくゞつて、逃行く處を、關右兵衞は、

搦手に向ひしが、逃ぐるを逐つて、首を斬り、或は搦め捕る事、數を知らず。中間・下部に至るまで、手に遭はずといふ事なし。城既に陷つて、兩將に取りたる首、四百級を記し、秀吉に獻ず。増田右衞門尉長盛をして、氏郷・利家に感狀を給ふ。又今度、先陣したる者共を召して、坂源次郎には、金錢十疋・吳服・折紙、御前にて給はるなり。源次郎拜受して退く處に、傍に並居たる人々、あはれ武士の冥加かなとて、坂が鐙の草摺を取りて、戴きてこそ通しけれ。次に寺村半左衞門にも、金錢十疋・服折一つを給ふ。太田喜藤次・松平久兵衞には、銀錢十疋を給ふ。扨氏郷、功過の甲乙・輕重を沙汰して、賞罰を行はるに、本多三彌・上坂左文・横山喜内を呼びて、汝等は我が腹心なり。而も今日の軍奉行にて、一言一動、士卒の則となる身の、汝等より、先づ我法令に違ふ事は何ぞやと、責めらるゝに、左文・喜内は、首級の功を以て、賞に預らん事を貪り候に非ず。火を放ち候はんと存じ、馳行き候へども、嚴命に依つて、罷歸り候といへば、眞實ならじとは思はれけれども、其器量や惜まれけん、さも有るべしとて赦さる。三彌は兎角言はず。當座の勘當を蒙りける。都鄙に隱れなき勇士なり。

岡左内・同半七・西村左馬助・岡田大助は、皆擯排せらる。秋月三郎種長は、小熊の城を守りしが、巖石既に拔けぬと聞きて、城を出でて山中に逃げ、使を以て罪を謝し、誓詞を載せて、永く叛かじと請ふ。秀吉之を宥めて、小熊を還へし與へて、前驅に加ふ。之より壹岐・對馬・平壺・五嶋・筑紫・龍藏寺・麻生・高橋・宗像・原田・立花・長野、新納等來り服す。秀吉、菊亭殿・勸修寺殿・中山殿へ使者を以て、九州平均の趣を奏達せらる。

秀吉九州平定

同五月に、進んで島津義久の居城鹿兒嶋に到り、大軍山野に充滿して、雲霞を望めば、旌旗かとまがひ、草木を見れば、兵衆かと疑はれ、只魂を搖し、膽を落す。是に依りて、義久の元の臣伊住院右衞門大夫入道、大和大納言秀長に就て、義久、逵命の罪甚だ大なりと雖も、仁惠を以て一命を繼がれば、軍門に降つて永く臣從せん。若し憐愍せられずば自頸し、怨怒の帥を、五年も十年もして、勞せしめんといふ。

義久秀吉に降る

秀吉、吾れ島津を從へんと欲す。今既に降りぬ。攻むるに及ばずとて、使せる地を還さしめ、舊領は故の如くならしむ。義久、剃髮黑衣單身一僕にて來り謁して、秀吉へ寛宥の忝なきを拜す。扨諸將を分ちて、大隅・日向に向はしむ。氏郷は日向に向

ふの將たり。然るに西國の累々、皆冑を脫ぎ、弦を弛ずして降參して、九州悉く平夷したりければ、國郡を功臣に割與へて、海路の風景を遊覽し、七月十四日に、大坂歸陣あり。諸將の勞を慰めて後、洛に入りて、聚樂に居す。氏鄕、九州にて追放せられし者、京都の寺々に潛居せしが、岡半七は、黑谷の僧坊に、口を餬て、世を渡りしが、氏鄕、都に到ると聞きて、頭を圓め形を窶し、煤けたる頭巾を被り、破れたる麻衣を著て、氏鄕の眼前を、乞食してぞ遇ひにける。氏鄕見てあれば、如何に、半七が惡しき振舞をする者かなとて、大に怒る色あり。其頃、氏鄕は、羽柴の姓を給ふ。氏鄕も亦戰士に、功を論じて、蒲生及び鄕の字を與ふ。源次郞は、源左衞門鄕成、赤佐隼人佐は四郞兵衞鄕安、二人は姓名とも改められて、鄕の字を給ふ。坂は生國尾張の者にて、若年の頃は、關十郞兵衞に仕へ、其後、柴田勝家に仕へし者なり。上坂左文鄕可は、姓を改められ、名は故の如くにして、鄕の字を給ふ。谷崎忠右衞門・生駒彌五左衞門・安藤將監・本多三彌・横山喜內・上野田主計助・儀俄忠兵衞尉・林五郞作（後內藏介と改む）・小谷越中等九人は、姓を改められ、名は故の如し。生駒、生國は尾張にて、初

は瀧川伊豫守の士なり。安藤法體名宗齋、濃州安藤伊賀守弟なり。横山・上野田・儀俄・小谷は、生國は江州日野の人なり。後藤喜三郎・戸賀十兵衛・岡彦作・岡部玄蕃は、姓名ともに改めらる。後藤は、明智・柴田に從ひたりし者なれば、氏郷に預け置かれて、後臣となる。稻田數馬・玉井・大塚左兵衛・松浦姓を改められて、名は故の如し。是皆忠義の志を存し、文武の藝に達したる者共なり。町野・外池・北川・森・門屋などは、譜代の臣にて、君を崇めて祿重く、武を好んで名高かりしかども、如何なる思慮にや、姓及び郷の字を給ふの數に入らず。其後蒲生彌五左衛門・同三彌は氏郷の心に違ひて、永く黜けらる。秀吉、筑紫より凱陣の後、國々の廣狹を點檢し、税斂の厚薄を定めらるに、松ヶ島の領分十六萬石となり、其下臣に與ふる處の祿も、亦是に從ひて增す。

氏郷居城を松坂に移す事

天正十六年四月十四日、後陽成院、聚樂に行幸あり。國母・准后・女御・典侍・攝家・清

氏郷松ヶ島に封ぜらる

華・天下の牧伯、鳳輦の前後に相從ふ。應仁年中に、山名宗全・細川勝元が大亂より以來、六十餘州悉く分裂して、一統に歸せず。近年は朝に入る國守もなく、貢を捧ぐる土民も無くして、京都甚だ衰微したりしに、公卿・武臣の行粧、輿車の飾・衣裳の美麗、嘗て見ざりし事なれば、老若男女、街に滿ちて、道も去りあへず。禁中・仙洞の料を定め、御劍・重器を獻り、和歌を講じ、音樂を奏して、十八日に還幸ある。此時、除目行はれて、氏郷正四位に敍せられ、左近衞權少將に任ぜらる。四五百杜は、勢州の舊壘地形廣くして、海邊に續きたれば、商船相通じ、年々に豐饒成るべしとて、氏郷松ヶ島の居城を此地に移さる。氏郷、松ヶ島に封ぜられてより、爵祿彌〻加はり、武名倘ほ盛なれば、我家、松の字を吉祥すといひて、四五百杜を改めて、松坂と名付けられ、是より氏郷を松坂少將といふ。寔に氏郷の福榮は、松の若綠の春に向ひて、日々に立のぼり、三日月の天に懸つて、宵々に光を添ふるが如し。種村大藏入道慮齋は、元は織田信長に仕へし人なり。今度、松坂に於て、人々に宅地を給ひ、屋舍を造る。慮齋が庭の築山に富士の形を寫せり。氏郷、之を一興として、慮齋が亭に入つて觀

るに、山の頂圓形なり。氏郷は、甲州一亂の時、富士を一見せられければ、富士こそ知らざれとて、狂歌を詠じて、大に戯笑して、世に其實を辨ぜずして、其名を成さんとし、其本を正さずして、其末を務めんとする者、皆此の如しと、諭戒せらる。

西村相撲の事

西國にて、軍令に違ひて、勘當せられたる者共、氏郷を慕ふ心ありければ、他家に仕官を求めずして、身の便について、忍び居たりけるが、或る時、氏郷の懇友長岡越中守忠興を頼みて、歸參を願ふ。是に依つて、罪を赦され本知に歸復せしむ。其中に西村左馬助（後に志賀與左衛門と改む）は、長大壯力にして、而も武名ありければ、氏郷、西村と相撲を取らる。西村、吾敵には主人といひ、殊に歸參の翌日なれば、手に過ぎたる事を辨へたれども、之を次手に、我心を試みんとの事なるべし。然りと雖も、某勝ちたらば、氣色や損ぜん、負けたらば、輕薄者とやならん、如何はせん、一生の浮沈こゝに究まつたりと、思惟しけるが、人は名こそ惜しけれ。輕薄人と爲りて用ひられんより、氣

色を損ぜんには如かじと、自ら決して、卽ち座席に於て、相接へて、遂に氏郷に勝つ。氏郷、無念の事なり。今一番とて、力足を蹈んで、立向はる。近習の侍あれば、西村心よせかし。然らずば、氏郷機嫌や惡しかりなんと思ひ、西村に目くばせして、息を呑み、汗を握りて見物す。西村思ふ樣、此度負けなば、巧に諛へるなり。よしや怒に觸れば觸れよと、少しも用捨なく、又勝ちたり。其時、氏郷打笑ひ、汝が力は、吾に倍せりとぞ、譽められける。翌日、西村に加增の祿を與へらる。去年より勘當を受け、今赦され、始めての行跡には、如何なる剛强の武士なりとも、必ず媚を求むべき時なり。然るに此西村が心、堅陣に入りて、白刃を干よりも、尙ほ難しと思はれける。

秀吉大佛殿建立の事

畿內・南海・北陸・西國、悉く平治して、上に鹽梅たり、下に棟梁たれば、秀吉の心に逆ふ者無かりけり。さらば洛陽に大佛殿を建立すべしとて、東山の麓に地を開き、前

秀吉大佛殿建立

田・淺野・増田・石田・長束に命じて、其事を司らしむ。材木は、土佐・飛驒・岐岨・熊野・富士より伐出し、海路を漕渡して、大坂に達し、淀・島國より、凡そ此役に充つるもの廿一箇國、其番匠・人足・傭役者、幾萬億といふ數を知らず。佛殿の四方に石垣を築く。其隅石を、松坂少將より、之を運ぶ。三面一丈二三尺の大石なり。三井寺の山上より、大路まで引出したるに、大儀にて傭役の費ありとて、秀吉より先づ之を措く。時に京童一首の狂歌を綴りて笑ふ。氏郷聞いて、是程まで取懸りたる事を、半ばより留めて、嘲弄せらるゝこそ、口惜しけれ。さらば引けとて、蒲生源左衛門尉郷成は、太布の帷子の袖をはづし、背に大きなる朱の丸を付け、小麥藁の笠を著け、采配を持ちて、氣遣の音頭をぞ取りにける。笛は、蒲生左文が家人中西喜内、太鼓は、蒲生四郎兵衛が家人赤佐市藏なり。氏郷、自身綱引きに、手を懸けられければ、近習外様の侍、悉く引きて殘る者なし。戸賀十兵衛が僕一人、草鞋の裁判して、傍に居たりしを、あれは如何に、手足を遊ばするぞ、捕へて參れと有りければ、扈從上田久助走寄つて、縛來るや否や、田の畔へ引居ゑて、即ち刎ねられける。夫よりも

諸人、斬罪を恐れ、一つは氣遣に勇み、全力を出したり。されども容易に轉動せず。是に依りて、形うるはしく聲能き傾城數十人、衣裳に紅を飾らせ、石の上にて拍子を取り、小唄を謠ひければ、是に皆競立ちて、日の岡まで引附けたれども、坂に向つて、登り兼ねたるを見て、鄕成、態と田の中に轉び墮ち、裝束皆泥に成つて起上れば、諸人一度に嚔と笑ふ聲、半時計りは靜まらず。其勢に乘じて、勇み立ち、難なく坂を引上げたり。氏鄕、喜悅の餘りに、日來愛せられたる駿馬を、鄕成に與へらる。之は戸賀十兵衞が、飼立てたる馬なりしが、騎る時は馴れたる如くに、背をかゞめ、より足を縮む。鞭を打つ時は、飛騰つて峻嶺を一駈に踰へ、激川を渡る良馬なり。鄕成、謹んで拜受し、是より彌〻氣を發し、聲を張るに、大綱切れて、傭夫一人、石に額を當てゝ死す。粟田口を過ぐるより、左右の屋に乘つて、引入るゝに、家々多く蹈破れけり。彼の狂歌の遺恨を報じたりと笑ひける。秀吉來りて、此石を見て、輙く上に登らるれば、木村常陸守も、亦從ひて登る。市藏早く飛下りて平伏す。鄕成・喜內も、續いて下らんとする處を、秀吉、之を留め、卽ち衣服著替へ、異樣に成つて、常

陸守に太鼓を打たせ、喜内に笛を吹かせ、自身氣遣の聲を發す。是に依つて、其れに有り合ふ大名・小名・扈従・馬廻に至るまで、之を引くに、さすがの大石なりと雖も、飛ぶが如くにして、程なく大佛に到る。凡そ大佛殿の造營、天正十四年に始まりて、十七年に至つて、其功成就す。

小田原攻の事

秀吉小田原を攻む

さる程に、諸國治るに隨つて、上の化に順じ、下萬民も家に悦び、衢に謠ふ。然れども、相模國小田原の北條左京大夫氏政・子息新九郎氏直、大郡數多を領し、多く兵を従へて在城し、王命を輕んじ、關白を侮る。秀吉、氏政・氏直をして、京都に朝せしめんとすれど、曾て意を解かずして、箱根を西にし、滄海を南にし、籠り居て、伏兵を難所に置きて、馬の足は石徑に碎き、兵船は巨波に沒すべしと、其山海の固を頼みて、秀吉の事を聞入れず。是れに依りて、北條を誅伐せし爲めに、郡國の兵を催し、小田原攻めとぞ聞えける。内大臣信雄も出陣なり。氏郷の馬驗、始めは熊の毛の棒な

山中城合戰

りしを、佐々陸奥守成政が馬験、三階菅笠に易へ候はん、御免し候べきやと、申請けければ、秀吉聞きて、餘人は知らず、御邊の武勇、佐々が右にも立つべければ、苦しからじとて許されけり。氏郷之を面目と思ひ、今度東國に下りて、戰功衆軍に抜かずんば、恥たるべしと、心中に思ひ籠めたり。然らば若し討死もやせん、我形を寫留めて殘さばやと、畫師を呼寄せ、綾の小袖を著、手に扇子を持ちたる平生の體を寫させて、菩提所に納めらる。秀吉、之を聞きて、其志を感ず。氏郷、松坂に歸つて、軍兵相催す。天正十八年三月、秀吉、出京の由聞えければ、氏郷は二月二日、松坂を立ちて、關東へ發向ある。先陣より後陣に馳廻りて、軍令を定めらるゝに、蒲生家累代重寶の冑持ちたる者に、汝玆を去るべからずと、示されけるに、其所に居ざりければ、召出し、其場にて手討にこそはせられけれ。士卒之を見て、大に恐れて、法令違ふ事なし。斯くて秀吉、三島に到著あり。三月廿一日より、諸將、山中の城を攻めて、之を抜く。守將松田右兵衛大夫が從兵、間宮豐前守戰死す。此戰に、秀吉の愛臣一柳伊豆守鬪死せり。秀吉進んで、眞覺寺に到る。宮城野口·湯本口·竹浦口

氏郷韮山城を攻む

の諸壘、悉く屠られて、防兵小田原の本城に走入る。氏郷は、蜂須賀家政・福島正則・細川忠興・中川秀政等と共に、氏政の弟北條美濃守氏規が守る所の韮山の城を攻む。氏規、敵を目の下に見下し、鐵炮を連れ打に放して、之を拒ぐ。然る處に蒲生左文、列を出で、城中の體を見、軍の下知をし、駈巡ぐれば、城より放出だす鐵炮の鉛玉、左文が眼に中つて、血流るゝ事瀧の如くなりしかども、顏色も變ぜずして、遂に自らほり出せり。見る人、其壯烈に服す。扨秀吉、小田原の圍に及びて、四國の兵を以て、韮山を押へ、皆小田原に聚る。同五月、奧州の伊達左京大夫、來り謁す。上杉景勝・前田利家・利長は、北國より搦手に廻つて、松坂・松山、其外の諸城を攻めて、皆之を降す。又上杉前八王寺の城を屠る。本多忠勝・淺野長政等、岩槻を降して、氏政・氏直の守所只小田原の一二城のみ殘れり。秀吉、城の體を見て、守禦の軍兵は、北條五世・三世の恩を荷うて、主と共に、討死と思ひ極めし者なるべし。殊に要害よく、壘高く聳え、水深く湛ふ。一旦に攻取らば、味方多く損じ、敵に利を得させん。敵の利は、急に戰ふにあり、味方の利寛く攻むるにあり。今拔くべきに非す。此一郭の

外を、我先づ取つて、其地・其民、敵ありともせずば、敵兵終に退屈し、糧道絶えて、續く者なけん。其間に、樞機を以て誘ひ、敵の元臣・舊將を招き降さば、城内に群疑起つて、我師危からず、卒を勞せずして、敵自ら屈せんと謀り定めて、日數をこそ送られけれ。或夜、城兵夜討す。營法正しくして、斫つて入る事能はざれば、須臾の間に追拂はる。敵小補・寸切もなく、徒らに骨折つて、逃げ歸る。態と制して、長追させざれば、討取る者はなかりけり。其後、氏郷は斥候を用ひ、自身見巡りて、怠慢を戒めらる。同七月二日の子の刻計りの事なるに、町野輪之丞といふ伊賀の者、忍の名譽にて、今夜、忍入るに、埋み門より、事の體を窺はゞ、軍兵數多物具して、氏郷の陣に夜討せんと、早や人數を出すを見て、町野、事急なるに依りて、先づ幸持ちたる弓を、門の口より、矢次早に射込みければ、夜は昧し、思ひ寄らざることなれば、敵何十人ありとも、知らねば猶豫する。其隙に疾走り歸りて、此由を告ぐ。氏郷、心得たりとて、軍使を陣中に馳せて、告げ知らすると雖も、餘り事急にて、法令未だ整はずして、兵衆練習せざるに、俄に起騷ぎて、用心する者もあり、熟眠して手に合

小田原合戰

ざるもあり。其夜の番兵闕右衞門佐が手の者共、面々に得物の道具を提げ、驅合せたり。氏郷の旗本宿直の武士には、蒲生左文・同弟上坂源之丞・佃又右衞門、走り出す。城兵は、岩槻の城主北條十郎氏房を將として、切つて入るに、味方の先手敗られて、度を失ふ處に、鐵炮頭蒲生源左衞門・門屋助右衞門・寺村半兵衞・森民部丞、弓頭には蒲生忠右衞門・梅原彌左衞門、彼等敵の持ちたる火繩を目當として、打立て射立て、蹈留つて之を防ぐ。北川平左衞門は、氏郷を尋ねて馳來り、上坂源之丞に、大守は何方にと問へば、此に御座候ぞとて、蒲生左文・佃又左衞門・上坂と、相共に進みけり。佃は、元來勇力の者にて、前方濃州加賀井の城にて、目を驚かす高名をしながら、名乘らざれば、知るもの少かりしを、常々殘念にありければ、敵と鑓を合はする最中に、如何に上坂殿、佃が鑓の手を、御覽あれと、名乘つて戰ひけり。此時、周章てやしたりけん、氏郷の冑を持たせたる者、來らざれば、北川、恐れながら之を召されよと、冑を脫げば、上坂取つて進らせたり。後會津に於て、津川といふ所を、北川に與へて、此等度々の忠を賞せらる。扨て氏郷、壯年なれば、百千人をも恐れず、

敵の眞中を駈破らんとせらるゝを、上坂制して申しけるは、兵殊に寡うして、後に繼かず。主將は、一軍の司命なれば、危に來つて幸に勝は、士卒の業にこそと、諫めけれ共、聞き入れ給はず。良狗の走つて兎を見るが如くに、後を顧みず直に進まるれば、四人の者、氏郷の矢表に立塞りて、散々に相戰ふ。氏郷、首十を取るぞ、一人も洩さず、斬捨てにせよと、馳廻りて下知し、十人餘り討取りたり。中にも蒲生左文は、眞先に走り出で、大音にて呼ばはりて、前を拒がんよりは、後へを討つべし。引退かば、附入りにせよと、態と味方を、多兵の樣に聞かせければ、敵歸路を斷たれては叶はじとや思ひけん、城中へ引返へす。爰に關右兵衞佐が兵士川北彌次郎といふ者、後れ武者に渡合せ、鑓を以て、四つ五つ相突きに突いて、後には鑓の太刀打を、互に執つて、奪ひ奪はれじとしたりしが、川北、敵の引く力に添うて、我鑓を放つ、放たれて後へ、たぢ／＼とする處を、刀を拔いて、關が家人、功名するぞと喚ばはれば、左文、詞を合せて、能くせよ。あれ味方を救へといふ聲に、川北、大に力を得て、もぎ付けに首取つて、左に首を提げ、右に刀を持ちながら、關が從者を、味方討すなと

て、氏郷の前に來り、見參に具ふ。又川合辨之助が若黨、小勘といふ敵一人生捕りて參る。是は北條氏房の郎等三島文右衛門といふ者なり。斯かる處に、非番の田丸中務少輔が一與の兵と、氏郷の旗本馳聚りて斬伏せ、或は虜にするに、味方の傷者五六人、死する者は一人もなし。翌日、陣所・近邊の藪原に、敵兵深手負うて、死したる者あり。川北が取りたる首、小勘が生捕を、秀吉に獻ず。川北にも小勘にも、緞子・呉服・折紙を給ふ。此川北は關萬鐵が隱居せし時、侍三人・足輕十人を、子息右兵衛に讓りたる其一人なり。小田原陣中の功、氏郷の手には、川北最一とて、氏郷より、青毛の馬に鞍鐙を添へて送らる。右兵衛佐は、名馬一匹・鑓一筋、當座の褒美として與へ、後に祿を加增す。秀吉、小勘が生捕を召して、城中の形勢を問はるゝに、糧乏しくて、士卒の心一つならざるの旨、言上す。是に依て、城中の虛實、具に知りたる由を、矢文に書きて、射込みたり。是敵をして、力を失ひ、氣を屈せしめんとの謀なり。七月に及びて、北條の長臣松田尾張守、逆意を挾んで、上方の兵を、我役所に引入れんとす。氏政怒つて、之を責め、終に罪に殺す。韮山の城は、守將北條美

北條氏政氏直秀吉に降る

氏直死去

濃守氏規去つて、小田原の勢、日々に困窮して、守防の計ひも絶えて、士卒の志縮まり、闘戰の勢なし。氏政・氏直、城を避け、兵を散らして秀吉に降る。氏政弟北條陸奥守氏輝をして、自殺せしむ。氏政時に五十二歳。北條新九郎氏直は、高野山に赴かしむ。北條美濃守氏規・同左衛門大夫氏勝等從へり。明年十一月、氏直廿一歳にして卒す。世人諺曰、秀吉潜に鴆殺すといふ。抑も此北條は、平時政より相傳へて、高時の代正慶二年に、一類滅びし時、其親族勢州山田に逃隱せし者あり。其末孫伊勢新九郎氏茂が朋友に、荒木・山中・多目・荒川・佐竹・大道寺といふあり。共に武者修業の爲めに、關東へ赴きしが、此七人の內、一人にても秀づる者あらば、殘り六人は臣となり、其一人を君として輔佐たらんと、互に契約したりしが、此新九郎、其後三木杉に奉公し、其主を弑して、領地を奪取り、駿河の國主今川氏親に屬して、謀を以て、豆州堀越の御所成就院殿を滅して、遂に其地に有りて、韮山に在城し、自ら早雲庵宗瑞と號す。其後扇谷の家臣大森式部少輔を襲うて、夜討にし、相州小田原の城を抜きて、又此に移りて、是より北條と名乘りて、古河の公方政氏より、氏の字

織田信雄配流

を給うて、武威漸く兩上杉を壓し、氏康の時に至つて、大に管領に戰ひ勝ち、益々盛大なりしが、此時に至つて、氏茂より氏綱・氏康・氏政・氏直五代の榮貴、一時に滅亡す。我力の敵ならざることを知つて、始めより隨順して其家を存するか、大軍を引請けては、能く之を守りて、死を致し、其義を全うするか、此二つに過ぎず。然るに始めには、敵を侮つて兵法の理に昧く、後には自弱して、武將の節を棄てたり。此時までは、東國に於て、北條より強きはなく、國彌々廣く、兵益々多くして、未だ勝負を決せずして降る。惜しむべき哉。秀吉、織田信雄をして、下野の鳥山（一説には出羽秋田とも云ふ）へ流す。入道して織田常眞と號す。其後赦されて歸京す。伊豆・箱根より、奥州出羽に到る迄、一城の將・一郡の主たる者、悉く來りて、秀吉に拜謁す。或は舊領を給はり、或は改易して、恩威を示さる。扨て加賀中納言利家・越後少將景勝に命じて、奥州出羽の田畝・町條・村々の長短・上下を校定せしめ、並に淺野彈正少弼長政に、其政事を聞かしむ。木村常陸介、之に副うて下りけり。

佐久間兄弟附尾藤が事

小田原の城兵に、佐久間久六安次（後に、久右衛門に改め、又備前守に改む）・同源六政頼（後に大膳亮に改む）とて兄弟あり。久六は、佐久間右衛門尉信盛の與力なり。源六は、佐々陸奥守成政の養子にて、二人共に、佐久間玄蕃允盛政の弟なり。先年、蒲生源左衛門・同左文、柴田勝家に仕へし時、交を厚うし、志を一にせしかば、今其懇意を復さんと、或時忍びて、佐久間兄弟に會ひ、互に涙を流し、舊友を忘れず訪はるゝの段、兎角言語に述べ難しと、少らく談謝す。左文歸りて、氏郷に歎訴す。氏郷其才器ある事を聞いて、秀吉に啓す。即ち預けられて、後臣となる。尾藤甚右衛門も、小田原の城に籠りたる者なれば、罪を宥められん事を、秀吉に請ふ人あり。然れども此尾藤は、深く惡まるゝ故あつて、首を刎ねられたり。一赦一刑、是又、秀吉政道を見する術なり。

氏郷會津を拜領の事

天正十八年庚寅七月十四日、關白秀吉公、相州小田原を立ち給ひて、陸奥國へ御出馬あり。先手は松坂少將氏郷朝臣承りて、攻め下られけり。同八月中旬に、先鋒已に大森まで、馳行きける。此時殿下、木村伊豫守に仰せて、伊達左京大夫政宗より、會津の城を受取らしめ給ひて、其城に御在陣なされけり。同八月十七日、氏郷を召して、當城に御邊を居置くべし。領知は、昔より會津に付たる分、一所も相違あるべからず。並に越後の內小河庄・仙道にて以上五郡、先の領分六郡、都合十一郡、高四十二萬石なり。此處は奧州・出羽の押なれば、能く守護致されよ。家中の士の儀は、縱ひ秀吉に敵をなし、又勘當の者なりとも、文武を得たる侍ならば、扶持せられよ。只文臣・武臣を持つ事、肝要たるべし。其外法度の條々は、逐一に書付を以て、申渡すなりと仰せらる。又木村伊豫守子息彌市右衛門も、同時に御前へ召出され、葛田・大崎を給はる。此木村、本は明智光秀が家の子なり。秀吉公仰せらるゝは、氏郷は木村を子とも從者とも思はるべし。木村は氏郷を親とも思ふべし。木村は小身なれば、若し一揆など起らば、政宗を先きに立て、案內者として退治すべし。

木村は、向後上洛の儀無用なり。會津へ出仕致せとぞ仰せられける。斯くて秀吉公は、八月二十日に會津を御發駕有つて、九月上旬に都へ御歸陣なり。氏鄉朝臣は、當城を給つて、會津の屋形に居れり。其名を改めて、若松と號せらる。此會津の城は、元來三浦の佐原十郎義連が末葉盧名平四郎盛氏、先祖より持來りしが、尙ほ方々を手に入れ、白河の結城・須賀川の二階堂・二本松の津川等、其幕下に屬しけり。盛氏子無くして、岩瀨・須賀川の城主二階堂が子を養子にして、盛隆といひしが、去去年、近習の扈從三左衞門といふ者に害せらる。盛隆にも亦子なくして、伊達輝宗の二男を、養子に契約せしが、盛隆死去の後引違へて、常陸國佐竹義重の次男義廣を養うて、繼嗣とす。伊達輝宗・同嫡子左京大夫政宗、之を無念に思はれけん、去年四月、會津へ押寄せられけるに、輝宗は二本松の義次が爲めに討たれたり。子息左京兆政宗、生年廿三、勇剛なる人なりければ、摺上にて合戰して、會津の武者大將金神といふ者を討取り、其後會津へ攻入りけるに、盧名の家の四天王と聞えし平田・松本・佐瀨・富田等、政宗の智謀に依りて、忽ち心變じて一味しければ、遂に軍に打勝

ち、蘆名の家を亡して、會津を我居城にぞせらる。其上に舅の所領田村・濟須をも、併せ、奥州五十四郡過半領せり。義廣の兄佐竹右京大夫義宣、之を口惜しく思はれければ、今度秀吉公へ訴へ言上せらる。是に依りて、政宗を本領米澤の城へ遣され、會津を氏郷に下されける。是より諸浪人に扶持し、雜人の内にても、其氣質を察して、其氏姓を尋ね、分限に隨つて、知行を給はる。近年忠功を盡せし武士には、過分の加增を與へらる。領分の城には、腹心の大臣等を居置かる。白川の城には關右兵衛尉・須賀川に田丸中務少輔・阿子島には蒲生源左衛門・大槻には蒲生忠右衛門・猪苗代には蒲生四郎兵衛・南山には小倉孫作・伊南には蒲生左文・鹽川には蒲生喜內・津川には比川平左衛門なり。其後、二本松には、蒲生源左衛門を阿子島より移し置かれ、長沼を蒲生四郎兵衛に移し替へ、猪苗代には町野左近將監を、居ゑ置かれけり。斯くて氏郷、家中の軍法を定めらるゝに、其頭家の紋を三首の左巴に改めけり。故は一家の總領下野國の住人小山四郎、今度舊領を離れければ、會津へ下り、氏郷に仕へしが、俵藤太秀郷より、傳はりし幕を進上す。其幕の紋に、三首の左巴

あるに依つてなり。其後小山小四郎には、千石の祿を與へて、蒲生源左衞門郷成が與力に附けられけり。

葛西大崎の一揆

葛西大崎一揆蜂起の事附氏郷發向の事

玆に伊達左京大夫政宗は、會津を追出し、米澤へ移されし事を口惜しく思はれければ、所々に一揆を起させて、今度當國拜領の城々を、追落さんとの方便なり。時に木村伊勢守、法度苛く猥にして、諸民憤怒を懷きける。折節同十月下旬、奥の一黨共、一揆を起して、伊勢守が脇城新田・佐沼・一關・水澤などとてありける中に、成合平左衞門を置きし佐沼の城を取卷いて攻めければ、伊勢守子息彌市右衞門、之を救はん爲め、上方勢數千相率いて、佐沼の後卷に、出陣の間を、一揆共見すまして、伊勢守居城葛西の豐間、彌市右衞門居城大崎の古河へ攻寄せて、此兩城を乘取りける。其外の脇城どもは、いふに及ばず、皆一揆の手へ渡りしかば、木村父子、木に離れたる猿、水に離れたる魚の如くにて、爲方なく佐沼の城へ籠られけり。其後一揆共、彌、

近邊に威を振ひて、佐沼の城を取圍みけり。伊勢守、會津へ早馬を立て註進して、加勢を請はれければ、氏鄕は聞くとひとしく、先づ飛檄を馳せて、關白殿へ此由を言上せられ、又政宗方へも、使者を以て、秀吉公御意の如く、御邊は此表案内者の事なれば、先手をなされよとて、申遣され、會津の城の留守居には、蒲生左文鄕可・伊勢より以來每度の留守居小倉豐前守・上坂兵庫に關萬鐵を相加へ、已上四人なり。其外歷々の勇士共、數多殘置かる。今度木村伊勢守、新守護として、法度猥りがましき故に、一揆蜂起し、此が爲めに、守る所の城々を奪取られ、面目を失へり。前車の覆へるは、後車の戒なり。殊に政宗逆心の由、風聞の上は、留守居を大事とすべしとて、城内へは古參の大臣・小臣ならでは、出入を止め、下﨟の者も入るべからずと申付けられ、諸方の口々に、押を置かる。關東口白河の城に關右兵衞・須賀川の城には、田丸中務少輔。是は田村三春に、政宗長臣片倉備中守を置きし故の押なり。中仙道口南山の城には、小倉作左衞門、(其頃は孫作といふ)越後津川には北川平左衞門・奥海道鹽川には蒲生喜内を置かれ、氏鄕は時日を移さず、諸勢を引率して、十一月五日、會

津を打立ち給ひけり。此時町人・百姓共、申しけるは、政宗逆心の由、風聞隱れなし。さあるに於ては、出羽・奥州の者、皆敵たらん。然らば爭でか、利を得させ給ふべしやと、申しけるに、早や出馬ありければ、荒痛ましの事かな。此殿は必定討死し給ふべしとて、老若男女、涙を流せり。殊に其日大雪降りて、甚だ寒かりしに、氏郷は、諸勢の見せしめとや思はれけん、直膚に鎧計りを著せらる。其口勢、由々しくぞ見えにけり。大將此の如くなれば、家臣・郎從・與力に至るまで、皆輕々と出立ちてけり。一番先手蒲生源左衞門・同忠右衞門。二番蒲生四郎兵衞・町野左近將監。三番五手與梅原彌左衞門・森民部丞・門屋助右衞門・新國上總介。四番六手與細野九郎右衞門・玉井數馬助・岩田市右衞門・神田清右衞門・外池孫左衞門・河井公左衞門・五番七手與蒲生將監・同主計助・同忠兵衞・高木助六・中村仁右衞門・外池甚五左衞門・町野主水佐。六番寄合與佐久間久右衞門・同源六・山上彌七郎・水野三左衞門。七番弓鐵炮頭鳥居四郎左衞門・上坂源之丞・布施次郎右衞門・庭部五左衞門・速水勝左衞門。八番手廻扈從與。九番馬。十番後備關勝藏、彼等を宗徒の武者大將として、都合其

勢六千餘騎、寒風に旗を飜し、降雪に道を埋めども、佐沼の城とかやを、心當にぞ向はれける。其夜は猪苗代に宿られける。當所の城主町野左近將監繁仍が館へ入らせ給ふ。繁仍諫め申しけるは、今此寒天に向はせ給ふとも、人馬勞れて、勝利を得給はん事難かるべし。唯來春暖風を得て、御出馬然るべしと存ずるなり。氏郷聞召し汝が諫を破るにあらず。秀吉公我と木村と、父子の思をなせと、仰せ置かれし、其甲斐もなく、木村を討たせては、末代の恥辱たるべしと存じてなり。繁仍承りて、御意尤もなりとて、相從ひて打立ちけり。六日には、二本松に著陣す。伊達政宗は、奥方の案内者として、一萬五千の人數を引率し、信夫郡飯坂の城まで出張して、氏郷を待たれけり。氏郷の先手、早や政宗の領分信夫郡鎌田本折杉目の邊に著き、政宗勢と入交りて、陣を取りけるが、政宗はいつ立つべしとも見えざり。先手より蒲生四郎兵衞・玉井數馬助兩人を以て、本陣へ註進しけるは、政宗の謀叛に疑なく相見え候間、夫に二三日も、御逗留ありて、彼が形勢を御見合せ候へかしと、申しければ、氏郷大に怒りて、政宗が謀叛は會津より覺悟の事なり。相支へん所

にて、一戰を遂ぐべし。明日は早天より打立つべしと、仰遣されけり。其夜は、大雨なりしかども、翌朝に二本松を出馬あつて、政宗の領分大森城下に著陣せられ、政宗油斷に於ては、先へ越すべき形勢なり。政宗之を察して、打立ち給ひけり。氏郷は後より、押進んで打たれける。氏郷の兵共、心は先へ進めども、雪は野原を埋め、降雪に老馬も道を忘れて辨へ難く、向風面を打つて晴間なく、馬の毛も鎧の色も定かならず。旗は皆白旗となり、行路絶え難くぞ見えにける。刈田・岩沼・丸森などいふ宿々に逗留あつて、天氣次第に出馬せらる。然るに町人・百姓等、政宗の領分よりは、宿をも借さず、或は敷物・薪・諸道具を借さず、惡しき仕方かなと、人皆呟きけり。

蒲生軍記 卷之四 終

蒲生軍記卷之五

●名主軍の事

天正十八年十一月十七日には、伊達政宗領分前野より、黑川に至つて、陣を取りし時、政宗より使者を以て、氏鄕へ申されけるは、此邊よりは、私領分にて候條、諸事申合せ度候間、當所の柴の庵へ、明朝御出で之あるに於ては本望たるべし。御茶進上仕りたしとなり。氏鄕より、寔に御懇志忝く候。參りて御禮申さんと返事なり。是は敵方と、相圖を定め置かれしかども、爰にて若し首尾能くば、討たんとの謀計とかや。其翌朝に及ばは、氏鄕一人を數寄屋に請じ入れ、大臣共をば、一間へ呼集め、軍評定し、其内に氏鄕を討つて後、諸勢を討取らんと、相議せらるゝとぞ。氏鄕は、此節、彼が館へ行かずんば、臆したりと思ふべし。何程の事かあるべき、立寄りて

高清水城合戰

彼が氣色をも見んとて、同十八日の早朝に行き給へり。氏郷、數寄屋の路次へ入られしかば、郎ち戸をさし鎖んとしけり。時に蒲生源左衛門・同忠右衛門・町野左近將監・佐久間久右衛門・舍弟源六・亘理八左衛門等、一人當千の兵共、無理に押破つて、我等は、何の處までも、氏郷の相伴に外れぬ者共に候なりとて、鎧著ながら、七八人、座敷に推直りたる有樣は、唐土漢楚鴻門の會に、樊噲が軍門を押破り、帷幕を褰げて、項羽を睨み、高祖恙なく覇上の軍中に引取りしに異ならず。其外の軍兵共は、甲の緒を締め、刀の柄に手を懸くる計りにて、門前・門中に、稻麻竹葦の如くに並居つゝ、座中へ心を通はして控へたり。左京大夫此を見て、此者共が形勢は、國土を闇に爲さん顏色なりとて、討取らんとの支度相違してけり。斯くて政宗出座あり。饗應樣々なり。氏郷申さるゝは、是より佐沼への道の程、又其間に一揆の守城、何程之あることに候やと、相尋ねられし時、政宗の云く、佐沼へは、是より田舍道百四十里計りなり。其間には、一揆の城高清水一つなり。佐沼より、三十里前にて候なり。氏郷申されしは、さあらば今日より、道筋の家共に放火せしめ、明日は高淸水を蹈落さ

んといひて、歸られける。右京大夫本意なくして、毒を進められしとなり。氏郷も之を心得て、卽ち西大寺藥を多く服用して、大に吐かれしかば、何の障もなかりけり。其日頓て打立ちけるに、政宗は一萬五千餘を、一備に爲して陣を取る。氏郷は、六千の軍兵を四段に立てられ、右京大夫は、爰にて一戰せんと思はれしが、いやいや、會津勢は小勢なりと雖も、遠方より深く入りたる者なれば、志を一致にして、死を決し、引退く者は一人もあるまじ。又我士卒は、面々の國なれば、退散しやすかるべし。名主の城に相圖の事なれば、會津勢、城を攻めん時、城より相圖の狼烟を揚ぐると等しく、押寄すべし。宮澤・古河・岩手山・松山四箇所の城よりも、人數を出し、中に取籠めて討たんに、何の仔細かあるべきと、謀り定めて、人數の備を崩し、河へ颯と乘入れ、眞丸になつてぞ渡しける。斯くて氏郷は、本海道、政宗は右手に付いて、兩所の道筋を悉く放火して通らるゝに、前野・黑川より、三十里・四十里の間の本道筋に、早や敵城共ありけり。飾間・中新田の兩城は、氏郷の武威にや畏れけん、城を開きて引退きけり。其日は、中新田に著陣して、氏郷は城に陣を取り、政宗は城

氏郷飾間中新田兩城を陷る

より、七八町向ふなる大屋鋪に陣を取られけり。氏郷の先手四人の者共は、政宗の押の爲めに、其近邊に陣を取りける。是より高清水への其間、名生といふ所に、敵城ある事は、氏郷知り給はずして、明日高清水を攻むべし。若し日暮に及ばゝ、明後日は必ず攻むべし。其用意仕れと、諸軍陣へ觸渡さるゝ處に、政宗は兼て定めし相圖なれば、俄に虚病を構へ、同日亥の刻計りに、使者を以て申さるゝは、今日暮時より卒に腹痛仕候て迷惑致候間、明日の御働は、相延させられかしと存申候。其故は、御先を仕る事、此體にてはなり難き由、申越されしかば、氏郷聞いて、すははや隱謀露顯すとて、返事には敵を近所に置きながら、留るべき儀に存ぜず候。明日は、我等が人數を押通すべし。御養生あつて、後より御出馬あるべしとなり。政宗は、氏郷を先へ遣らんとの手術なれば、此返事を聞いて、悅ばれけるとぞ。扨氏郷は、同十九日に、中新田を立たんとする時、政宗へ使者を以て、某は只今打立ち候。彌、後より御出あるべしと、いひ遣され、是より政宗を後に置く上は、日來の備に同じかるべからずとて、五手與・六手與・七手與、此三備を後備に定め、關勝藏をば、又三與

の跡へ入替らる。此三輿の備は、政宗の押なれば、背後へ向ひて、跡すざりに歩みける。政宗討懸けば、一と軍せんとの形勢なれば、奥方の武士共之を見て、上方の武士は、攻むる敵方へは、前まずして、後への用心する事は、珍しき備やうかなとぞ、申しける。斯くて氏郷の先手の者共、名主に敵の籠城するをば知らざれば、高清水へと押しけるに、二三十里の間にて、敵城見えたり。然るに名主の城よりも、氏郷の勢を見て、鐵炮を打懸けしかば、先手の四人之を見て、頓て名主の城へ押寄せ、鬨の聲を作り懸けて攻めけるに、城中にも、奥の一黨、汗水になつて戰ひけり。蒲生源左衛門・同忠右衛門・同四郎兵衛・町野左近などは、數度武功の者共なりければ、弓・鐵炮を射懸け打懸け、自ら鑓・長刀提げて先登し、敵・味方討つゝ討たれつ、片時の弛みなく、急に攻めける程に、二三の丸まで、乘込みて戰ひけり。源左衛門も手負ながら、身朱の如くになつて驅廻り、四人の者共、敵を討取る事、數を知らず。味方も多く討たれけり。氏郷は、鐵炮の音を聞いて、此近邊に敵出づるや、急ぎ見て參れとあれば、池野作右衛門とて、馬上の達者あり。岩岨溪谷の底をも、一かけに越

ゆる者、畏り候といふまゝに、即時に走り付くと均しく、戰場に乘込み、首取つて本陣に馳歸り、見參に備へ、爰に名生と申す敵城あり。先手の四人、急に攻戰ひ、早や二の丸まで乘込み候旨、言上す。氏郷聞いて、さらば急いで押寄せよと、下知せられ、後備三與は、三頭に陣を立てよ。定めて後より、政宗攻來ることあるべし。必ず油斷あるべからずと、申し渡され、夫より氏郷の軍兵、名生の城へ我先きにと馬を馳せて、扈從・馬廻りまで、本丸へ押寄せ、火花を散して攻戰ふ。一揆とはいひながら、昨日・今日まで、一城を持ちたりし大剛の與士共なれば、命を惜しまず拒戰ひければ、敵・味方入亂れ、討ちつ討たれつ、互に隙はなかりけり。爰に上坂源之丞・西村左馬助・比川久八三騎、轡を竝べて、大手口より寄せけるに、上坂が與力吉右衞門、早や首を取つて、見參に備へけり。比川久八は、其頃、氏郷の扈從にて、生年十七八になりしが、之を見て、勇み進んで馳せ出でけるを、上坂・西村之を制して、さはせぬものぞと、押留めけるに、如何して駈出でけん、門隙にて、敵に渡し合せ、唯一太刀に斬伏せ、首取つて、之は如何にと、兩人に見せければ、上坂・西村は、若者に先きをせられ、

無念なり。いざ進まんとて、二人共に、敵の中へ駈入りけり。上坂源之丞鑓下に、敵十人突倒し、首を取りてけり。源之丞其時鐵炮の將なれば、鐵炮の者を一人呼んで、首を持たせて、本陣へ遣しける。常の人は首一つ取れば、合戰をも心に懸けず、先づ本陣へ參つて、主人の感悅に預らんと欲す。然るに此源之丞は、急の戰に當つて、虎口を外にして、首を持參せば、軍利を失する事も、あらんと思ひて、使を以て、首を獻ずる事、其志定に淺からざる勇士なり。西村左馬助は、坂ある所にて、鑓を合せて、敵と引組んで落ちけり。西村、元來大力の剛の者なれば、彼敵を取つて押へけるが、敵下より小脇差を拔いて、西村が首へ引懸けて、此を先途と引切りけれども、西村も脇差を拔いて、喉より押へければ、早く敵の肮を推切りて、首を取つてけり。然れども我首も、半ば切られければ、片手には、敵の首を持ち、片手にては我首を、抱へて立ちけれども、既に危く見えし處に、關十兵衞、(其頃は勝藏)此を見て、西村を扶けんと駈寄り、引連れて退きければ、敵又數多著來るを、十兵衞引返し、鑓を措つて、敵を四方へ追散し、難なく二人ともに引取つて、其首を見參に備へける。西村が手柄、十

兵衞が働、諸人目を驚かせり。斯かる時節に、十兵衞が左馬助を、助けし事は、定に義ある勇者とも謂つべし。是に依りて關は、西村が高名の證據になり、西村は關を命の親と申しける。又中堀彦右衞門は、日來より兵法の上手と聞えしが、弓を持ちて、門際まで攻登り、敵三騎射落し、首をぞ取つたりけり。又氏鄕の小扈從那古野山三郎は、生年十五歲、性質勝れて、美麗なりしが、白綾に赤裏付けたる具足、下に色々の糸を以て、緘したる鎧を著し、小梨打の甲に、猩々皮の羽織を著て、手鑓提げ、城中へ駈入り、一番に槍を合せ、大勢の敵を東西へ颯と追散し、好首一つ討取り、比類なき働きして、名を揚げたり。されば其頃の小唄に、鑓仕々々は多けれど、那古野山三は、一の鑓とぞ謠ひけり。彼が先祖尾州那古野とて、代々振袖の間に高名して、其袖を塞ぐ吉例と聞えしが、山三郎も、此度の高名にて、袖を塞ぐ吉例に合せたり。其外、大名・小名・大扈從・小扈從・陪臣・雜兵等に至るまで、首取つて參る事、計るに遑あらず。或は其中に、首一つを、我の人のと爭ふあり。氏鄕の下知に、奪うて取るは、猶ほ甲斐々々しけれど、申されけり。互に入亂れて戰へば、味方にも道家孫市・粟井

名主城沒落

六右衛門、竝に町野左近が家子町野新兵衛・田村理助等を始めとして、一人當千の兵共、大に戰うて討死す。其外、陪臣・雜兵に至るまで、手負・討死、其數を知らず。暫時の合戰に、城中敵の首討取る數、六百八十餘なり。其首共を、塚に築いて、今に名主の首塚とてあり。扨城中に、火を放ちければ、此城は落ちにけり。岩手山・宮澤・古河・松山四箇所の城より、討つて出で働きしかども、名主の城、既に陷ちければ、其形勢を見て、皆引退き、直に落行きけり。さる程に左京大夫は、氏郷をたばかりて、先きへ通しけるこそ本望なれ。急ぎ打立つべしとて、伯父の重實・片倉小十郎を、先手として、名主城へ押寄せ、氏郷の跡備を引包み、箕手に陣を立てたりける。彼の三與の後備、之を見て、元より三段に備へ、後へ向けて、待設けたる事なれば、鏃を揃へ、鐵炮に火繩を挾んで加へたり。其中に、城に火の手の揚がりしかば氏郷の軍勢共、皆城を後にして、政宗の方へ向ひしかば、左京大夫、案に相違して、左の野へ引取りて、陣を取る。氏郷は、名主の城へ打入つて、人數を立てらる。其時政宗より、使者を以て申さるゝは、名主の城を攻めらければ、一方は我等にも、仰付けられず、京

政宗隱謀密告

都の聞えも如何と、存じ候とありければ、氏郷の返事には、此城に敵ある事を、吾も存ぜず候處に、先手の者共、早攻破つて候。此向ふに、宮澤とやらん敵城之ある由に候。之を攻めらるべしと申されける。是に依りて、流石異議にも及びかね、宮澤へ押寄せて、八日計りに、虛鐵炮を打懸けられしとかや。氏郷は、明日は高清水へ押寄せ、攻破らんと議せられける處に、同日亥の刻計りに、山戸田八兵衞・手越宗兵衞といふ士、氏郷の陣所へ駈入り、政宗隱謀の證文を持參して、蒲生源左衞門を賴んで、始終の姦計を、證文に合せて、申上げけり。第一に、一揆を勸めて起さしむる事、次に、黑川にて氏郷を討たんと謀りし事、中新田にて虛病の事、名主の城と相圖の事、委細に述べけるに、疑ふ處はなかりけり。今日名主の城を、攻給ふ時、相圖の狼煙を、擧げよとの約束ありしに、餘りに强く攻めらるゝ故に、其隙なかりしと、落人共申せしなり。此上にも、高清水籠城の者、又佐沼への寄手の者共も、政宗下知なくては、働く事なるまじく候。先づ〳〵是に御逗留あつて、政宗形勢を見計ひ給へと、申しける。此兩人は、政宗近習の者なりしが、恨を含む仔細あつて、註進しけり。

氏鄕、悅喜斜ならず。さあらば汝が言ふに、任すべしとて、名主の城へ、兵糧を取入れ、弓・鐵炮・玉藥・鑓・長刀の用意して、控へらる。政宗は、之をば知り給はずして、氏鄕、名主に長陣せば兵糧盡きて、獨ほろびするぞと申されけるとかや。斯くて政宗は、隱謀顯れて、大事とや思はれけん、二心なき由、種々斷りありければ、氏鄕の返事には、何樣のことも、我等には苦しからず。唯天下の爲めを、専一に思召されよと、申されけり。其後、宮澤の城を攻落さゞりければ、氏鄕より使者を以て、其城攻落すこと成り給はずば、某も一方へ向つて、蹈破らんと、申遣されければ、政宗の返答には、此城の儀は、頓て落し申すべしとなれども、徒に日數をぞ過されける。其後、山戸田・手越は、過分の知行給つて、懇志を加へられけり。

會津騷動の事附氏鄕歸陣の事

さる程に、左京大夫は、遂に宮澤の城をば、攻落さずして、同十二月二日、其勢を引取る由、聞えしかば、氏鄕、之を聞いて、我を蹈付け、此表を通らば、爭でか心安く通

らんや。其用意せよとて、三百騎の兵をすぐり出し、持鑓一本づゝ、抜身にして持たせて、送りに出でたる體に見せて、打取らんとぞ議せられけり。然るに政宗は、脇道より引取りて、飯坂へ人數を入れられ、夫より會津を攻めんと思はれしかども、後に居られし氏郷、馳付けられんは、必定なりと思惟して、遂に果さず。氏郷も亦佐沼へ、人數を押出し、一揆共を追散さんも、政宗は大敵、一揆は小敵なり。本を斷たば、梢自ら枯るべし。變動無常同敵轉化すといへば、政宗若し會津へ打つて懸らば、後より此を討たんと思ひ、暫く政宗の擧動を見合せ、名主の城に居給ひけり。

同月十二日、政宗會津へ攻寄する由、風聞しければ、鹽川の城主蒲生喜內方より、早馬を馳せて、會津へ註進して、今夜寄來る由、其聞えあり。急ぎ加勢を給はれと、蒲生左文を始めとして、其外留守居の者ども、評議して、誰をか遣すべきといひける處に、武藏國の城主成田下總守・同舍弟左衞門尉、會津に勤仕せられけるを選出し、此成田兄弟然るべしとて、府藤市藏を以て申渡され、成田兄弟承つて用意し、已に打立たんといひ、鐵炮・玉藥・弓・鑓等を、鹽川へ遣す。會津の城には、本より人數を

賊つて、處々を堅め守られけり。同日、亥の刻計りに、又鹽川より飛脚到來して、寄手、今夜は延びて、明日に定まると聞え候。明朝は早天より、加勢を出ださるべしと申しければ、成田兄弟、明朝立たるべしと、神方平六を以て、觸れられたり。平六承つて、本町を通りけるに、町人共、唯今寄來るとて、家財を運び出だし、騷動する事夥し。平六之を見て、是は如何に騷々しと、制しけれど、大水の落つる川口を、手にて塞ぐが如く、曾て耳にも聞入れず。平六歸りて此由を申しければ、留守居より、町奉行池田和泉守（其頃は傳之丞）方へ、急度制止せられよとなり。之に依りて、和泉守、頓て彼町人百餘人、搦取つて、磔にぞ懸けたりける。斯くて翌日、成田兄弟は、加勢として、鹽川へ參りしが、敵は寄せざりけり。是は後の氏鄕を恐れて、事止みしとかや。亦名主の城より、會津へ飛脚到來して、鐵炮の玉藥を越すべし。敵若し見合せたりとも、其とは知らざる樣に、才覺して越し候へとなり。蒲生左文が計らひに、山伏を數十人相語らひ、笈の中へ玉藥を入れて、頭巾鈴・懸螺の貝・金剛杖を結構し、湯殿參詣に事寄せて、遣しければ、氏鄕、此を深く感ぜられたり。抑ゝ氏鄕朝臣、初

て會津を立ち給ふ時、飛脚を以て、關白殿へ、奥方の一黨共一揆を起し、所々に楯籠るに付いて、退治の爲め、出陣仕るの旨、言上せらる。其節淺野彈正少弼は、東國處々の政道、已になつて上洛せられし處に、駿河の府中にして、此飛脚に會うて、其樣子を聞かれければ、其より引廻して馳下り、氏郷加勢の爲め、奥州二本松に著陣ある。同十二月中旬に、政宗、之を聞いて、すは大事に及びぬと思はれければ、伯父の重實・片倉小十郎、其外扈從三四人召連れて、二本松に來り、種々の言わけせらる。彈正少弼聞いて、さあらば氏郷へ、盛重・盛實兩人を人質に遣され、先づ氏郷を、是へ引取らせ申して後、其樣子を承り、仔細を言上申すべしとありければ、政宗、卽ち同心して、盛重一人を、人質に遣しける。彈正少弼より、氏郷へ書狀を添へらるゝには、盛重・盛實兩人を、政宗より人質に遣し候間、先づ〳〵歸陣し給へとありければ、氏郷、此書狀披見あつて、書中には人質二人とあるに、一人は相違なりと怒らる。扨又我當城にある事、全く政宗を恐れて、引籠ねたるには非ず。引かんと存せば、人質に及ばずとも、引くべきが、殿下より、定めて仰付けらるゝ旨あるべしと、御意を待

氏郷の武威

つて、此地に逗留仕候。殊に書中には、人質二人とあつて二人來れり。此上は、彌、御意を相待つべし。然るに人質は入らずとて、盛重を返されけり。政宗も、此時氏郷は、天晴勇將かなと、譽められしとかや。さる程に、葛西・大崎の一揆等、名主城を攻落されて後は、氏郷の武威に恐れて、或は城を開きて、落るもあり、或は降參するもあり。高清水・宮崎等も、遂に城を開いて引退きけり。佐沼城をも、一揆共取卷いて、守居たりしが、後陣の氏郷を恐れて、攻めざりき。爰に佐沼の城へ、黑澤豐前守濱田何某といふ者の人質として、其子共を取つて、城中に置きけるを、潛に名主の城へ遣しけり。濱田が人質の子をば、町野左近に預けらる。黑澤が人質の子を、蒲生千代壽が士共に、預け置かる。此濱田は、今度名主の城に籠つて、討死しけり。黑澤豐前守は、佐沼の寄手方へありけるが、子を思ふ道、誰も深き習なれば、黑澤は子童子丸氏鄕の手へ、渡りたりし由を聞き、定めて死罪にも行はれんと、泪を流して歎きけるが、何卒今度、回忠をして、我子の命を助けんと思ひ定め、潛に使を以て、名主の城へ、文通しけるは、某が世悴童子丸、御手に渡り候由、承り候。彼を御助に

於ては、私才覺仕り、木村殿御父子を、御一處に恙なく、名主の城へ、遣し申すべきにて候。當分は、先づ佐沼の城をば、一揆共に下され候へと、此旨、宜しく御披露と書きければ、氏郷披見あつて、元より願ふ處なりとて、卽ち望の如くに、返答せられしかば、黑澤、如何才覺したりけん、同十六日に、木村父子、名主の城へ參られけり。氏郷よりも、迎に千五百人出されけり。黑澤豐前守、其勢五千餘にて、無事に送屆けゝり。此童子丸、後には黑澤六藏とじひて、氏郷より知行給はり、會津に勤めたり。然るに木村父子は、氏郷に對面あつて、手を合せて申されけるは、此寒天に、早速御出馬故に、露の命を助かり候。此頃は、兵糧も盡きて、雜菜計りをたべて候。定めて殿下より、死罪流刑にも行はるべし。此上にも、御扶助に預かるべしと、申されければ、氏郷、されば秀吉公仰置かれし御諚、默止しがたければ、是まで出張する處に、今生にて、二度見參に入るこそ、寔に本望の至りなれ。御邊若し討死せられば、其甲斐なかるべきにと申されける。又政宗より、重實・盛重兩人を人質として、名主へ遣し、彈正少弼より、先づ〳〵引取り給へと、申されければ、氏郷も、さら

ば引取らんとて、明くる天正十九年正月朔日、名主を立つて歸陣ある。又會津よりは、氏郷の迎として、關・田丸兩人出でらる。田丸中務少輔は、其勢五百餘にて、冬の中より、桑折まで出で、爰に越年して、中新田にて出合はれけり。關右兵衞佐も、五百計り引率して、杉の目まで出でらる。同十一日、氏郷二本松まで歸陣ある。彈正氏郷へ對面あつて、今に始めぬ事ながら、今度の御擧動、無類の美擧なりとぞ、申されける。夫より諸事の談合あり。先づ右の人質を召連れ、上洛あつて、段々の樣子言上せらるゝにぞ窮りける。去冬、會津よりの飛脚、京都へ到著して、後秀吉公、石田治部少輔三成を、奥州へ下し給ひけり。扨氏郷・彈正、上洛の聞えありければ、政宗、今度の仕方、其罪遁れ難くや思はれけん、各〻と相伴ひて上洛仕るべき旨、二本松へ申遣されければ、兩人此を聞いて、一段然るべしとて、先づ彈正少弼打立たれ、其次に政宗立たれしかば、氏郷も其次に立たれ、此上は別儀なしとて、二本松より、彼の人質を返されけり。扨何れも上洛あつて、秀吉公の御前にて、始終言上あり。政宗の士山戸田又兵衞・手越宗兵衞が持參せし證文を、差上げられければ、秀吉公仰

せらるゝは、氏郷、今度名主の軍功、勝げて計ふべからずと、御感あり。斯様の事のあるべしと、思ひてこそ、御邊を名代として、會津に置きたれとなり。時に政宗中譯に、私家來山戸田・手越と申す者、幼少より近習に召仕ひ、且つ右筆など申付け置き候處に、恨を含む仔細あつて、逆心仕り、今度私を謀叛人と、訴へ候と申され、件の證文を、申し受けて見られしが、正しき謀判にて候。某の判は、鶺鴒の形を崩して、何れも目を付け候が、此判には目なく候と申されければ、秀吉公、大名・小名中より政宗書狀を取集め御覽あり。實にも其目を付けたり。是に依りて、秀吉公も御機嫌直り、彼が上洛して、是の如く平伏する上は、罪するに忍びずとて、宥免せられ、久しく留めて、在京せられけり。政宗、證文の判形に、目を付けざるは、智謀深き人なりといふ者、多かりけり。

九戸謀叛の事并根勇利穴田井の城攻落す事

同年夏の頃、奥州の住人南部大膳大夫の家の子、九戸左近といふ者、謀叛を企て、櫛

引將監・七戸彦七郎・久慈中務之丞・天湯四郎左衛門・大黒某など一味して、南部に背きしかば、奥の一黨共、我も〳〵と、皆九戸が下知に屬しける。是等は、去年一揆の餘黨なり。大膳大夫合戰に及ぶと雖も、敵猛勢にして、退治なり難く、却て難儀に見えければ、飛檄を馳せて、關白殿へ告げ、加勢を請はれける。是に依りて、秀吉公聞召され、會津の少將氏鄕に、仰付けられ、大將軍には三好中納言秀次卿、武者大將に堀尾帶刀、奉行は淺野彈正少弼、横目には石田治部少輔なり。敵猶は順はずんば、御馬を向けらるべしとぞ。之に依りて、何れも命を承つて、急ぎ下向ある。氏鄕は、名主出陣の以後、始めて會津へ歸られければ、貴賤上下悅んで、迎に出でける。蒲生左文鄕司は、去年より留守居にてありけるが、先きに進んで出でにける。氏鄕、之を見給ひ、左文が前にて、下馬せらる。左文、首を地に付けて居けるを、左文が手を取つて、名生の軍より、以來の事共語られしかば、斯かる君臣の交は、珍しき事とて、諸人感じけり。其外の武士にも、夫々に言葉を懸けて懇意なり。斯樣に禮儀正しき故にこそ、諸人好く懷きたれとて、貴賤・上下共に歎息せり。此時、眞田安房守含

弟眞田隱岐守、曾根内匠助といふ武功の者を、召抱へられたり。此眞田・曾根兩人は、本甲州武田信玄に仕へし者なれば、氏郷召寄せて、武田家の押太鼓の法を問はれ、之を制令にして、三首の左巴の紋を附けられ、旗本竝に長臣等を、備に置かれ、此太鼓を以て、士卒の進退を定めらる。又弓・鐵炮の大將鳥井四郎左衛門・上坂源之丞を、軍奉行として、諸手へ法度を觸れ渡されける。其掟、

軍中法度の條々

一、備々之者共、其備を守つて、他備へ不レ可レ交事。

一、武者押之間に、道筋之家へ、一切入間敷事。

一、用事不レ申付レ者、不レ依二上下一不レ可レ爲二脇道一事。

一、脇宿取間敷事、附宿奉行次第に可レ請事。

一、武者押之時、馬上下に至迄、不レ可二高聲高雜談一事。

一、雖レ出二鳥類・畜類一、高聲して不レ可レ追事。

一、喧嘩口論仕者、雙方共に、不レ立二理非一、可レ爲二曲事一事。

一、相與を外にし、思々に陣取事、可レ爲二曲事一事。

一、於二野陣一者、雖レ爲二一夜之陣一可レ振レ柵事。

一、武者押之遲速、可レ爲二太鼓次第一、留太鼓を聞かば、田之中・橋之上・河之中たりと雖も、可二蹈留一事。

一、先手又は何之備手も、不レ因二勝負一、無二下知一以前に、助候事、可レ爲二曲事一事。

一、城攻合戰に、足輕等迄も、無二下知一以前に働事、堅無用之事。

一、馬を取放候者、可レ爲二曲事一事。

一、火を出者、可レ爲二死罪一、若捕遁そこはゞ、可レ引二牙歯人一事附不レ可二陣拂一事。

一、羽織猩々皮の外は、差物指たる者、可レ爲二曲事一附鑓驗異態之事。

一、前立物一同に、可二相揃一事。

以上

七月十三日　氏郷

鳥井四郎左衛門どのへ

上坂源之丞どのへ

斯くて留守居には、小倉豐前守・上坂兵庫介を大將として、其外大勢殘し置かれ、同廿四日、會津を立ち給ふ。其備の段々、一番右蒲生源左衞門尉・同左蒲生忠右衞門尉。二番右蒲生四郎兵衞・同左町野左近將監。三番田丸中務少輔。四番關四郎兵衞佐。五番五手與右梅原彌左衞門尉・森民部丞・同左門屋助右衞門尉・寺村半右衞門尉・新田上總介。六番六手與右細野九郎右衞門尉・玉井數馬助・岩田市右衞門尉・同左神田清右衞門尉・外池孫右衞門尉・河井公左衞門尉。七番七手與右蒲生將監・同主計助・同忠兵衞尉・同左高木助六・中村仁右衞門尉・外池甚五右衞門・町野主水佐。八番寄合與右佐久間久右衞門殿・同源六・眞田隱岐守・曾根內匠助・同左山上彌七郎・水野三左衞門尉・成田下總守・同左衞門尉。九番與右岡部玄蕃允・同左松浦左衞門。十番與弓・鐵炮、右弓鳥井四郎左衞門尉・上坂源之丞・同布施次郎右衞門・同左鐵炮建部令吏・同永原孫右衞門尉・同松田金七・同坂崎五左衞門尉・同速水勝左衞門尉。十一番前後結解十郎兵衞尉・岡左内・關勝藏・河瀨與五兵衞尉・伊賀衆。十二番手廻右左扈從與・馬廻・右手六

與・左手六與。十三番後備、右蒲生左文・同千世壽・同蒲生喜内・小倉孫作・比川平左衞門尉なり。都合其勢三萬餘騎、法度嚴重にして、押行きける。同八月中旬には、一戸邊へ、雲霞の如く到著す。町人・百姓等、皆九戸一味の奴原なれば、宿をも借さず、惡き仕方なり。同廿二日、嶮難を經て行きける處に、九戸が脇城根勇利・穴田井とて、二つの城あり。穴田井へは、蒲生源左衞門尉・同忠右衞門尉、馳向つて攻戰ひ、速に攻落し、首數多討取りけり。此時、鄕成が兵士本田九助とて、生年廿一歲になりけるが、先登して、柵の木を乘踰えんとするを、内より鑓にて、草摺の間より、腰の後まで、突通されけれども、九助勇强の若武者なれば、柵の外へ突落されながら、立ち上り、其旗なしと思ひ、其儘内へ飛入りけるを、本田が郞從共、我も〳〵と飛込み、九助を扶けて、引返したりしが、痛手なれば、遂に死す。諸人惜まずといふことなし。九助は、本伊勢國飯高郡船江の城主本田左京亮が子息、千勝といひし者なりしが、仔細ありて、親子の中不和なりければ、源左衞門を賴んで、氏鄕へ奉公を望みしに、容顏美麗なる者にて、鄕成預つて、奥州へ連下り、當分の扶持方料とて、知行千

根勇利穴田井兩城を攻む

根勇利穴田井兩城沒落

石出だしけり。去年名主城にても、好首を討取りければ、殊に之を厚く愛せし者なり。此時、鄉成が甥石黑喜助も、一度に討死す。忠右衞門が士谷崎三十郎も先登とて、鑓疵を蒙りけり。關右兵衞佐は、搦手にありけるが、敵の落行く處を、一人も洩さず、討取りけり。又根勇利へは、田丸中務少輔に、五手與を差加へて、向けられければ、卽ち押寄せて攻落し、首數多く討取つて、見參に備へける。此時、門屋助右衞門が子生年十八にて、一番に乘入れ、首を取つて來りしかば、氏鄉、之を見て、又々劣るまじき者なりと感ぜらる。中務少輔の士田丸市兵衞、比類なき働して討死せり。斯くて此兩城を攻落し、いよ／＼勝に乘つて、勇み進みければ、一戶籠城の者共、其勢に恐れてやありけん、日暮に及んで、城に火を放ち、自燒してこそ引退きける。

九戶城沒落の事并氏鄉加增の事

翌日廿三日に、九戶が本城糠部の城へ押寄せらる。其日の先手は、蒲生左文鄉可、並に後備の衆なり。是は昨日、先手の衆根勇利・穴田井の合戰に粉骨を盡せし故に、

後備と入替へられたり。其外淺野彈正少弼長政・石田治部少輔三成等、押寄せらる。秀次卿は、堀尾帶刀を先手とし、諸軍の命を司つて、上目に陣取り給ふ。國衆には、南部大膳大夫・津輕越中守・松前志摩守を大將として、數萬の軍兵、九戸の城を取圍み、弓・鐵炮矢叫びの音、天地に響きて夥し。蒲生家の者共は、輪貫の旗を指し、同輪貫の立物なり。時に松前志摩守は、毒矢を射させん爲めに、夷人を少々召連れらる。彼等皆頭に半弓をはめ、矢をば箙に負ひたり。其形は人類なりしが、全身に毛生ひ、牛の如くなり。扨諸將會合して、軍評定ありしは、此城急に攻めば、一旦にも落すべけれども、諸勢多く損せば、無益なり。緩々之を攻めんとて、取圍んで陣を取り、小屋を懸けて遠攻めに、弓・鐵炮にて攻むる計りにし、さして軍はなかりけり。氏郷、陣中へ令を出せしは、馬を取放つ事・喧嘩・高聲・援掛等を制せらる。其法嚴密なるに、關東武士共、新參者にて、しかじかと其法を知らずやありけん、拔懸けして高名し、感賞に預らんとや思ひけん。二騎連れて、堀際まで進みけるを、軍奉行・横目共見て、氏郷へ告げければ、志は勇なれども、法を破る者なれば、不便ながら切腹させよと、

九戸城沒落

申付けらる。彼の兩人之を聞いて、津輕越中守小屋へ遁れけるを、押寄せて腹を切らせけり。其後本間丹波守と、關東武士と口論を仕出しければ、氏郷、所詮關東者は、無禮にして、國法をも用ひざればとて、關東武士をば、殘らず暇を出されけり。此本間丹波守は、本佐竹義宣に仕へて、隱なき勇士なりしが、後に蒲生左文を賴んで、扶助を受けしとかや。斯くて味方の軍兵共、稻麻竹葦の如く、圍み攻めしかば、縱ひ九戸鬼神にて、城には鐵綱を張りたりとも、拒ぐべしとは見えざりける。九月中旬までは、城を守りて怺へたりしが、次第に兵糧盡きて、矢種・玉藥も絕えければ、九戸勇力盡きて、降參を乞ひ、命を助けられれば、城を開いて渡さんと、申しければ、其請に從つて、九戸をば出され、其外の者共をば、本城を開いて、二の丸へ追入れ、四方より火を放ちて燒殺しけり。落行かんとする者をば、皆討取りける。九戸が妻も、漸々と逃出でしが、土をも踏まず、歩みも習はぬ者なれば、此彼に徘徊せしを、人々見付けて、金銀を探り取り、遂に首を刎ねて、骸は路徑に横はれり。子息も年十二三計りにて、未だ童形にして、美しき兒なりしが、此も生捕りにし、氏郷の手へ來りし

を、外池甚五左衛門、承つて磔せしむ。外池馬に乘りて、彼兒を人に擔負はせ、先きに立てゝ行きければ、見る人、是は女の房かと、謂ひ見る處に、町中にて外池從者に目くばせして、其下して歩ませよと、いひければ、下しけり。彼兒一、二足、三足行く處を、外池が郎等、後より太刀拔くよと見えしが、首は前にぞ落ちにける。其首を持たせて行く。跡にて下臈共、彼の死骸の衣類などを、剝取りて、溝の中へ踏込み、捨てし有樣、涙を流さずといふものなし。九戸が弟も、命を乞うて、城を出でけるを、二の丸迄出し、鐵炮にて打殺す。其外老若男女泣き悲しむ聲、天地に響きて、哀れなりし有樣なり。扨彼夷人を氏郷召して、酒を給はりければ、盃の上に箸を一膳載せて、酒を受け、其箸を以て立ち、色々の舞を舞ひ、髮を搔上げて飮みける。其後、暇を給はつてけり。此城既に打從へて、平均になりしかば、加勢の諸大將、皆上洛し給ふ。氏郷は逗留あつて、九戸・糠部の城の普請等、言付けて、成就しければ、南部大膳大夫へ、相渡されけり。此時、秀吉公は、聚樂の城を御出馬あつて、江州佐和山まで、御下向なりしが、九戸沒落の註進、聞き給ひて、歸洛し給ふ。今度も氏郷

の働、比類なき事なりと、感じ給ひ、兩度の勳賞に加增地として、田村・四本松・伊達・信夫・刈田・羽州長井郡上下、已上七郡を給ひ、御感の御書を下されけり。此度の加增地は、政宗領分の地なりし故、蒲生家と不和なり。是に依りて、氏鄕と政宗と相雙べて、置き給ふ。其年、政宗赦免あつて出仕あり。葛西・大崎を下されて、岩手澤へ移さる。今の仙臺是なり。氏鄕は、三戸へも立越え、一日逗留あつて、方々堅固に治め、又糠部へ歸られて後、今度拜領の地を、家中へ加增せられけり。扨領分を檢地せらるゝに、百萬石ありければ、其役を勤めらる。伊達は、我領内を氏鄕に給りければ、口惜しく思はれけん、一揆を起せよと勸められける。然るに政宗の家臣に、須田伯耆守といふ者、政宗に恨を含み、逆心して、氏鄕へ參り告げければ、彼一揆同心の者、皆露顯しけり。氏鄕、郡縣を穿鑿あつて、或は首を刎ね、或は磔に懸けられけり。同九月下旬に、氏鄕、糠部を立つて歸陣あり。去年敵に與みせざる者をば、呼出し知行を給はり、又三谷をば、蒲生源左衞門が與力にぞ附けられける。黑澤豐前守も、氏鄕へ禮申しけり。此時、武藏坊辨慶が太刀を進上せしに、彼太刀長さ三尺七

寸有りければ、誰か之を振らんとて、外池甚五左衞門を召して、此太刀を佩いて、振つて見よとありければ、外池承つて、自由に振りしかば、則ち外池に給りはける。豐前守をば、蒲生左文に預けらる。歸陣に、今度拜領の在々所々より、人夫を召連れ、衣川の下に著陣ある時、彼の人夫の中にある男、此川の鮭魚上るを見て、

昨日立ち今日きて見れば衣川裾の綻びさけ上る哉

と詠みけるを、氏郷聞き給ひて、感悦あつて、卽ち其人夫を赦して歸されけり。定に艶しき男なり。古今の序に、猛き武夫の心をも和ぐるは歌なりと、紀貫之が書置かれしも、尤もなりと、思ひ知られたり。又其頃、氏郷の領分安達原邊に、境論出來て、爭論に及びぬ。安達郡に河あり。河より前は、安達原とて、氏郷の領內なり。河より向ひは、黑塚とて、政宗の領分なり。然るに此黑塚を、氏郷の領內なりといひ、河より向ひの者は、政宗の領なりといひて、爭ひ止まず。氏郷聞召して、平兼盛の歌に、

陸奥の安達の原の黑塚に鬼籠れりと人や見るらん

とあれば、安達原に附きたる黒塚なりと、申されければ、遂に氏郷の方、勝になりたり。最も面白き沙汰なりとて、皆人感じけり。氏郷の領内の城々には、大臣等を居置かる。白河の城四萬八千石關右兵衛佐、田村三春の城五萬千石、田丸中務少輔、後には守山へ城を移さる。長沼の城一萬石蒲生主計助。津川・小川庄七千二百石比川半左衛門尉、南山の城六千三百石小倉孫作、鹽川の城六千石蒲生喜内、猪苗代の城一萬石玉井數馬助、四本松の城二萬五千石蒲生忠右衛門、二本松の城一萬八千石町野左近將監、杉目の城五萬石木村伊勢守、此城を福島と改めらる。益岡の城四萬石蒲生源左衛門、羽州下長井小國の城一萬石佐久間久右衛門、同上長井・中山の城一萬三千石蒲生左文なり。此知行の外、家臣共にも、皆千石・二千石宛行ひ、侍數多與力に附けらる。此外會津旗本・大名數多あり。淺香左馬助一萬石・蒲生千世壽六千三百石・眞田隱岐守六千石・曾根内匠六千石・蒲生將監六千石・佐久間源六五千石・門屋助右衛門五千五百石・寺村半左衛門五千五百石・森民部丞千石、侍以上百二十餘人あり。此の如き故に、藏入は纔に九萬石餘なり。爰に河瀨又兵衛といふ者あり。

本は尾州の者なりしが、無類なる勇者にて、軍の度毎に、首二つ・三つ取らずといふ事なければ、其名を首取河瀨と申しける。三度まで首供養をしけるとぞ。然れども、又兵衞、首を取る一種の男にて、無知・無理なる者なれば、知行五百石、與へて置かれけり。此又兵衞、之を不足して、或時、目安を上げて、某儀、戰陣每に數度の高名仕候處に、五百石下置かれ候。千石は下さるべき事と、訴へければ、氏鄕、聞き給ひて、彼が首を取ればこそ、五百石も與へけれ。さなくば何にか用ひんと宣ふ。兎角する中に、山椒の木に、生じたる茸を食して、死しけるとなり。是より領内の政道は、蒲生四郎兵衞鄕安に、仰付けられ、其加判として、町野左近將監繁仍・玉井數馬助貞を副へらる。此兩人は、日野より以來の奉行なり。其後、會津の家中より、成田下總守兄弟召出され、下野國烏山にて、二萬石下されける。

蒲生軍記卷之五　終

若松繁昌の事

會津の繁昌

さる程に、會津の繁昌日を逐つて益、美々しく城を築かれけり。七重の天主・月見の櫓・太鼓の門、其外殿閣金銀を鏤めたり。大臣・小臣の出仕は、日々夜々に市をなせり。寔に目出度かりし事どもなり。此時、日野より附來る諸士をば、一町に置かれて、其名を日野町といへり。古より奥州の金というて、領中には金山幾處もあり。

會津の名物

領分十九郡の内に、名所舊跡・靈佛靈社は數を知らず。先づ會津の鎭守には、諏訪大明神・八角の宮・石像の觀世音・新宮、又、寶相寺、殘夢醉月和尙とて、五百歳の齡を保ちし僧、住持せし寺なり。天寧寺には、溫湯あり、東には盤山、音に聞えし名山にて、會津山とは之なり。古歌にも入るとぞ。其讀人は知らず。里人のいひ傳へたるは、人

取石と雪などが、此處の名物なり。

　　會津山麓の野邊のかたはらに人取石のあるとこそきけ

　　會津山麓の雪の村消えてそりの繩手はなにと引くらん

羽黑山は大權現、彼の兼載の在所は、猪苗代郡、澤は芹の名所なり。南は左下の觀世音、南の山の玉椿、古歌に

　　陸奥のみなみの山の玉椿問ふ人あらば伊南とこたへよ

西には楊津の虚空藏、又、源義家奥州退治の頃、會津始めて手に入りしかば、承暦二年に寺を建立あり。八幡觀音を守佛として、崇敬せられし舊跡なり。北には飯豐山の權現、又、源翁和尚の開かれし亦現寺あり。鬼門には大寺藥師を祈願所と定めらる。斯かる目出度き御代なれば、誰をか留めん白河の、關の明神關山や、鶏峠・簀川瀨、瀧の不動も御座す。露と詠ぜし宮城野を、誰か名所と岩瀨の森、其四つ葛はありながら、置けば何くに埋木の、阿武隈川を打渉り、田村の大元明王なり。鬼籠れるは知らねども、安達が原の黑塚を、見ては心の淺積山、淺積の沼の花霞、其名計り

鎌生の榎

山縣義秋氏鄕の義に感ず

ぞ殘りける。又、八幡大菩薩は、武家を守護して立ち給ふ。影さへ見ゆると詠じけん、其山の井も此にあり。爰に淺積郡成田といふ所に、鎌生たる榎ありしかば、彼の地頭山田與兵衞方へ、之を一覽ありたき由、申遣されければ、山田彼木を伐つて進上す。氏鄕見給ふに、榎木の二股なる間より、鎌生へ出でたり。不思議の木なり。氏鄕呵つて曰く、我は小枝共に生じたりしとこそ思ひしに、斯る名木を伐るは不覺なりとぞ宣ひける。斯樣の勝境なれば、東人、會津を出羽・奧州の都なりといふも、實に理なり。同十一月、氏鄕は領地加增の御禮として、上洛ある。此時氏鄕の妹を南部信濃守利宣の室家に命ぜらる。婚禮最も嚴重なり。此年、秀吉公隱居成されて、聚樂城を御猶子三好中納言秀次卿へ讓らせ給ひ、官位昇進の爲に、同十二月廿八日、秀吉公・秀次卿竝に天下の諸大名、官位の次第を以て、車行を定めて參內ありけるに、氏鄕の次政宗、其次は山縣出羽守義秋なりけるを、氏鄕進出でて、山縣は源氏の支流にして、其上政宗母方の叔父なるを、政宗より後には然るべからずと、申上げられしかば、秀吉公尤もと思召して、政宗が上へ立てられけり。義秋此を聞いて、氏

若松繁昌の事

氏鄕從三位宰相に任ぜらる

鄕へ謝し申さる。今度御影にて、天下の面目を雪ぎ候。此厚恩何の世にか忘れん。某一世の間、會津に不慮の事あらば、御用に立ち申すべし。其證據には、人質を進らせんとて、予息駿河守を會津に置かれける。扨秀吉公御參内あつて、太政大臣に昇り給ひ、秀次卿は關白中納言に任ぜられけり。其外諸大名三十人、敍位・除目行はれける。氏鄕は從三位宰相に任ぜられて、會津の宰相とぞ申しける。然るに關白秀次公は、氏鄕に會はせ給ひたき由、仰せられけれども、彼の關白殿は、後まで天下を治むべき人に非ずと、察せられければ、氏鄕遂に參會なかりけり。斯くて宰相氏鄕は、明くる文祿元年壬辰春、會津へ下向せられけり。

高麗陣の事

從一位關白太政大臣豐臣秀吉公は、本朝悉く平均に服從せしかば、異國をも手に入るべしと思召し、文祿元年壬辰高麗國へ軍兵を渡さる。其先鋒には加藤主計頭淸正・小西攝津守等なり。横目には石田治部少輔三成・大谷刑部少輔吉繼・增田右衞門尉

長盛等、命を承つて各〻渡海す。秀吉公も、秀次公を都に殘し置かれ、先づ筑紫まで御下向ある。氏鄕は御後備にてありしが、大臣等をば殘され、手廻り計にて、同夏の頃上洛せられけり。氏鄕、其時中仙道の紀行を書かれけり。

陸奥より立侍りけるに、白河の關を越ゆるとて、

　陸奥もみやこも同じなどころの白河の關いまぞ越え行く

と詠みて、過ぎ行く程に、下野國に到りぬ。最も淸く流るゝ川の上に、柳のありけるを、如何にと尋ぬるに、是なん遊行上人に、道知るべせし柳といふを、實にや新古今に、道野邊に淸水流るゝ柳影と、詠侍りしを思ひ出して、

　今もまた流れはおなじ柳陰ゆきつれなれば道しるべせよ

と打詠じて行きける程に、那須野といふ所あり、餘りに人氣なく、物淋しかりつるまゝに、思ひ連ねて、

　世の中に我は何をか那須野の原なす事もなく年や經ぬべき

などいうて、昔の人を戀ひける人の、空しくなりし有樣、斯樣の事と語りけるを聞

いて、餘りに哀に思ひて、

是やこの佐野の舟橋渡るこそ古へ人のかたみをば見る

と詠みて、打渡りつゝ行くに、上野をも分過ぎて、信濃國に入りぬ。淺間の嶽に烟の立つを見て、我心に思ふ人の事を思ひ出して詠みける。

信濃なる淺間の嶽は何を思ふ我のみ胸を焦すと思へば

と、物思ひ侍るに、同じ國の木曾といふ處を行く程に、淋しげなる家一つありけるを、如何なる處ぞと問ひ侍れば、爰なん見返りの里といへば、跡に思ひ人なきにしもあらざれば、面白き里の名なりける物かなと思ひて、

限りなく遠くもこゝに木曾の路や雲井の跡を見返の里

猶ほ行きやらで、美濃の垂井といふ處に假寐して詠み侍りける。

假寐する宿の檐端の荒れ果てゝ露も垂井の明方のそら

と口占（くちずさ）みければ、早や夜も明行く程に、旅立ちつゝ行けば、近江國に到りぬ。爰は我生國なりければ、古郷最も懐しく思はれて、

思ひきや人の行方は定（さだめ）なし我が古郷を餘所に見んとは

と詠じて通りける程に、都に程なく著きにけり。

はる〲と思ひし我ぞ今日ははや心のまゝに都入して

さる程に太閤殿下、同夏の頃、肥前國名護屋に御下著ありけり。高麗への先將、合戰に勝利を得て、遼東李子を擒にし、日本へ送りければ、尼ヶ崎に召籠められけり。

秀頼誕生

其頃、太閤の北の政所、淺井備前守長政の息女淀殿の御腹に、若君出來させ給ふ由、飛脚到來しければ、秀吉公扈從・御馬廻計り召具せられ、夜を日に繼いで馳上らせ給ふ。是則ち秀頼公なり。其後秀吉公、又名護屋に御下向あつて、御越年有りければ、諸大名も亦皆之に從ふ。爰に會津の留守居蒲生四郎兵衛と蒲生左文と、私の遺恨を以て、弓矢を取らんとせり。

蒲生左文の素姓

此左文は、江北の住人、上坂伊賀守の子息上坂兵庫介が養子にて、氏郷從父壻なり。先年、淺井備前守に一味して、本領を失ひ、其後柴田修理亮に仕へしが、勝家滅亡の後、左文、氏郷を頼んで秀吉公へ奉公を望みしかども、氏郷彼が武勢を常々聞及ばれしかば、先づ家中に扶持せられけり。故（かるがゆゑ）に、左文述

蒲生四郎兵衞左文の確執

懐の奉公なれば、諸事我意に任せしに由つて、終に大身に成らざりけり。去年も米澤城に三萬八千石を相副へて居置かれ、仕置を賴み度きと宣へども、左文心中に仕置を惡んで、堅く辭せり。然らば誰をかすべきぞ。指圖せよと申されければ、左文承つて、蒲生四郎兵衞然るべしと答へけり。氏郷、我が思ふ處も此の如しとて、四郎兵衞に下されけり。郷成をば白石、郷可をば中山に居置かれ、境目は大事なれば、氏郷が勘當の士なりとも、善き武士を扶持せよと申されけり。左文と四郎兵衞と、近年不和なりけれ共、四郎兵衞筋目正しき者なればとて、指圖を申されけり。然れども、其後も終に和せざりき。米澤と中山とは近邊なれば、四郎兵衞が下の者仕落して、逃來る時に、左文此を抱へ置きけり。或時左文が者走行きけるを、士共に下知して、米澤領分へ押込み、搦取つてぞ歸されける。其後又、四郎兵衞が者走來るを、士共大勢出合ひ、此を捕へ返さんとて、同十月十六日に押寄せけるに、與力の士五騎、其外大勢擊れたり。是に依つて、事大になり、既に合戰に及ばんとす。郷可が與力布澤勝左衞門・伊南彌五郎、横田某家子には、上坂左馬助・松下半兵衞・若山三郎

兵衛・松田七兵衛以下・中山・宮内の兩城に楯籠りぬ。蒲生源左衛門も、四郎兵衛と不和なりければ、左文懇切なり。之に依つて、白石より郷成加勢に來れり。會津よりは、舍弟上坂源之丞も加勢として來りけり。然れども、四郎兵衛が方に、長谷川如水といふ者、分別を以て、合戰には及ばさりき。此時四郎兵衛も左文も、會津に居ければ、源左衛門・忠右衛門・喜内等が扱ひにて、無事になりしとなり。文祿二年癸巳正月五日、上皇崩御。正親町院也。同年、朝鮮征伐の諸將、毎度に利を得て、大方討從へたる由、聞えしかば、其年、秀吉公並に御供の大名、皆上洛し給ひける。氏郷は名護屋にて、下血を煩ひて、疾既に大切なり。太閤御供の諸醫、其外名醫を尋ねて、藥を用ひ給へども、更に驗しなかりしかば、泉州堺の醫宗叔が療治にて、驗氣を得て本復せられけり。氏郷は、此度朝鮮へ渡海なき事を無念に思はれけるとなり。

秀吉公御成の事

其頃、加賀中納言利家卿の次男羽柴孫四郎を、氏郷の聟に仰付けられ、美々しく婚

氏郷の大度

禮あり。氏郷は會津へ下向にて、翌年文祿三年甲午正月に、又上洛せらる。此の如くなれば、會津に在城の隙はなかりけり。同年秀吉公、伏見の城を御普請あつて、移らせ給ひけり。或る時氏郷卿、利家卿へ參られしに、本より緣者の間なれば、供の士共、兩方互に客の方座席の上へ上りけるが、此時は如何したりけん、氏郷の士共、座席へ入らず。然るに氏郷の扈從岡半七、例の如く番所の戶を開き、座席へ入らんとせしに、傍輩共一人も居ざりしかば、又戶を刺して出けるを、番の者共、小聲に笑ひけり。其時半七太刀の柄に手を掛け、汝等は何を笑ふぞと、高聲に罵りしを、氏郷聞付けられ、半七奴が例の高聲よと思はれ、座を立つて半七を呼ばれける。用事なけれども、當座喧嘩を留めんためなり。其頃、長岡越中守忠興より、蒲生家重代佐々木の鐙を所望せられしを、亘理八右衞門申しけるは、之は當家の重寶なれば、似たる鐙を遣され候へかしと、申しければ、

なきなぞと人には言ひて止めなまし心の問はゞ何と答へん

といふ古歌もあれば、我心に恥かし。是は天下に一足の鐙なれば、知る者はあるま

じけれども、一度忠興へ遣したりといひては、殘置きても何か重寶ならんやとて、遣されけり。忠興も、是は彼家の重代なりと聞かれて、返進らせん由、樣々申されしかども、氏郷受けず。氏郷逝去の後、秀行幼少の砌返されしとなり。さる程に、氏郷は御成を致さんとて、其用意を結構せらる。同十一日に、秀吉公御成あつて、御機嫌斜ならず。君臣喜悅を含んで、目出度かりし折柄なり。太閤よりの拜領物、氏郷の獻上物、夥しき事どもなり。其外諸大名よりの進物は、言葉には盡し難し。政宗は平生不和なりしか共、此時錫一千雙送られけり。

四人衆

其頃は會津の宰相・長岡越中守・堀左衞門督・長谷川藤五郎、此四人は其中親しければ、人皆之を四人衆とぞ申しける。

氏郷逝去の事

石田三成の讒言

太閤の近臣石田治部少輔三成は、昔の梶原平三景時にも勝りたる讒臣なりしが、或時潛に太閤へ申しけるは、當時御世長久に治まり、四海の內に旗を擧ぐべき者覺え候はず。さり乍ら、會津宰相は智勇も勝れ、好き武士共數多持ちたり。先年、九戸

氏郷毒害せらる

一亂の時、罷り下つて彼が武威を見るに、軍勢七日路續いて、其人數廻し・計略・法度の嚴整、目を驚かし候。此の如きの良將を親愛し給ふ事は、虎を養うて園に放つに似たりと申しければ、太閤殿下も内々少し疑がはしく思召す處に、斯かる讒言申上げける程に、此より氏郷を害せんとの評定取々なりとぞ。然れども忠功人に勝れたることなれば、如何とも仕様はなかりけり。さあらば、人知れずに毒害然るべしとて、密に毒を飼はれしとなり。其毒の中りたるにや、朝鮮征伐の時、名護屋にて下血を病まれけり。其以後、氣色常の如くならず、面色黄にして、頬の肉も脱けて、目の下浮腫（おもばれ）しかば、秋の頃、法眼正張を召して、藥を服用せられしかども、腫日々に増しければ、去年名護屋にて、宗叔が藥相應しけりとて、宗叔を召して、其藥を用ふれども、更に其驗なかりけり。同十二月朔日、太閤不便にや思召しけん、諸醫を集めて、脈を診せよと仰付けられければ、頓て竹田・半井・道三以下の名醫を召寄せて見せらるゝに、何れも難治の症とぞ申しける。明くる文祿四年正月迄、宗叔が藥を用ひられけるが、氣力次第に衰へしかば、道三が藥を服用ありけれ共、其驗なくし

氏郷逝去

同辭世

て、同二月七日、生年四十歳、京都に於て、朝の露と消え給へり。辭世に斯くばかり。

　限りあれば吹かねど花は散るものを心短き春の山風

盛りなりし年を一期として、世を去り給ふ事、寔に惜むべきかな。近習・外様・老若男女・貴賤、ともに泣き悲めど甲斐ぞなき。葬禮美々しく營み、紫野大德寺の和尚を請じて、一片の煙となし進らせけり。昌林院殿前參議從三位高君忠公大禪定門神祇と號しける。紫野に一寺を建立して、昌林院と號す。此旨使者を以て、會津へ告げ知らせければ、上下萬民悲歎限なし。爰に曾根内匠助が子曾根孫次郎は、此頃まで父の養育なれば、させる恩賞はなかりしかども、親の遺跡相違なく下し給はる事、誠に忝なしと、常々心肝に銘じて思ひければ、追腹を切らんとす。追腹の事、殿下より堅く御制禁なりしかば、家老共、孫次郎が刀・脇差を奪ひ取り、座敷に追ひ籠め、番を付けて置きたりけり。或る時一番の者油斷しければ、彼の脇差を拔いて、腹へ突立てけるを、番の者見付け、飛掛つて脇差を奪取てけり。孫次郎は、是程に突立てたり、是非共に免して切らせよと、懇望しけれども、番の者共、さあつては我等の罪過

如何とて、此由を家老へ申しければ、亦番人を差替へられ、久しく押籠め置き、種々諫言を加へしかば、思ひ留りにけり。時に惡口の若者共一兩輩、此を批評して、孫次郎は黒き振舞かな。切らずば始めよりこそあらめ、此程に突立てゝ留まるは、卑怯者かなといひければ、蒲生四郎兵衛此を聞いて、進出でゝ申されけるは、孫次郎は寔に内匠助が子程あつて、剛なる者にてあり、彼よりも御恩深く蒙りたる者多し。然るに孫次郎、斯く思入れしは奇特なり。其上彼が志、人に留められんと思ひて突立つべきか、御邊達も御恩賞なきにあらず。唯今突立て給へ。我留めんと申せしとなり。扨、右筆頭に滿田長右衛門といふ者あり。或る時掛硯を開き見て、申しけるは、三年御在世ならば、高麗へ國替たるべし。故は、朝鮮國を給り候樣にとの目安を作りて、硯箱に入置かれしとなり。太閤も氏鄕を疑ひ給ふ御心ありければ、言上せられたらんには、必定御許あるべきものなりとぞ申しける。

子孫繁昌の事

氏郷の子息鶴千代丸、生年十三歳なり。母は信長公の娘なり。幼少なりと雖も、秀吉公、氏郷の功を思召して、會津百萬石無二相違一被二成下一との御書を給はり、且源君の壻に仰付けられ、會津十三人の城持・五千與・六千與の士まで、銘々に御朱印を下され、隣國の大名へも御書遣されけり。鶴千代丸へ下さるゝ御書に云、

宰相逝去、不レ及二是非一候。別而被レ掛二御目一、定不便被二思食一候之間、會津分領、氏郷當二知行一之地、少茂無二相違一、其方仁被二仰付一訖。存二其旨一可レ抽二忠功一候。委細加賀中納言・民部卿法印・淺野彈正少輔、可レ申候也

二月九日　御朱印

羽柴鶴千代殿

城持への條目

次に城持への御條目に云、

急度被二仰出一候。會津宰相不慮相煩死去、不便被二思召一候。宰相、別而被レ掛二御目一候之條、雖レ爲二幼少一、跡職鶴千代仁被二仰付一候事。

一、會津之儀、丈夫仁鶴千代可レ被二仰置一與思召候條、爲レ其源君御息女於緣邊仁被二仰付一、

會津江來四日五月頃可遣條、存其旨、皆々別而入精、可致馳走事。

一、鶴千代事、御名代登思召、如右被仰付候條、置目等之事如定置、聊不可有相違候。若少茂不相屆儀於有之者、可為曲事事。

一、境目等之儀、自然從隣國出入雖有之、五々之儀者不及申、六四之理非候共、幼少之間者、鶴千代理運可被仰付候事。

一、自然下々、右之六四仁可被仰付登之儀於存知、宰相定置外之儀於申掛候事於有之者、可為曲事事。

一、臺所入之儀、氏鄉如定置可仕候。從宰相時猶以入念、算用之儀、明細仁仕、加賀中納言・民部卿法印・淺野彈正少弼於以可被聞召候條、此旨相守、下々仁至迄、克克申聞、可為其趣事。

一、城持共、其外年寄共、鶴千代仁對、疎意有間敷候旨、誓紙仕、可差上事。

右條々、利家・民部卿法印・淺野彈正少弼可申也。

二月九日　御朱印

隣國衆への御書

關右兵衞尉どのへ
田丸中務少輔どのへ
蒲生源左衞門どのへ
蒲生四郎兵衞どのへ
蒲生忠右衞門どのへ
町野左近助どのへ
比川平左衞門どのへ
蒲生左文どのへ
蒲生喜内どのへ
小倉作左衞門どのへ
木村伊勢守どのへ
蒲生主計助どのへ

此條目、右十二人へ一通宛下され、又五手與・六手與・七手與へも、一通宛下されけり。

又隣國衆への御書に云、

急度被仰出候。會津宰相不慮病死、不及是非候。彼跡職、息鶴千代雖爲幼少、氏郷仁別而被掛御目、不便仁被思召候條、不相替相續之儀被仰付候。然者隣國存其旨、可有入魂候。自今以後、公事等無之樣仁、前廉可相嗜候。自然申分於出來者、五々之儀者不及申、雖爲四六之理非、鶴千代理運仁可被仰付候。太閤御取立之鶴千代事仁候之條、若申事出來候者、雖爲五々之道理、其相手可被行曲

事候。如此跡職被仰付者、國持共之進退心持仁茂可成儀候之條、可守其趣事
肝要也。

二月九日　御朱印

越後中納言殿へ　景勝

常陸侍従殿へ　義宣

出羽侍従殿へ　義秋

大崎侍従殿へ　政宗

秀次の御朱印

此の如く御朱印・御書一通宛面々へ下されけり。又太閤より御念入れらるゝにつきて、秀次公も同じく御書を下さる、其狀に云、

宰相早世言語道斷、不便思召候。仍氏郷當知行之地、不可有相違之旨、從太閤御方被成御朱印訖。全可令領知候。彌向後可抽忠勤者也。

二月十日　秀次公　御朱印

羽柴鶴千代殿へ

秀次の御書

又家老の者共に下さるゝ御書に云、

幸相逝去尤不便思召候。仍氏郷當ニ知行ー之地、不ㇾ可ㇾ有ニ相違ー之旨、從ニ太閤御方ー對ニ鶴千代ー被ㇾ成ニ御朱印ー畢。爲ニ幼少ー之條、無ニ油斷ー可ㇾ勵ニ忠勤ー事、專要也。

二月十日　秀次公　御朱印

羽柴鶴千代　家中

蒲生喜内が事

氏郷七日に逝去せらるゝ處に、九日に秀吉公、御朱印成下さるゝ事、早速なる儀、古今に希なる事なり。其時淺野彈正少弼、御使として下向あり。蒲生喜内に加增して、一萬三千石とし、柳川城へ遣されけり。此喜内は京都の合戰に、粟田口・白川口にて、比類なき鑓を突いて、天下に名を得し者なり。其後、氏郷に仕へて、度々戰功ありしが、氏郷逝去の後、石田治部少輔彼が武勇を聞いて、此を招きけり。故に（かるがゆゑ）、三成叛亂の時、一方の大將を承つて、美濃國關ケ原にて、子息蒲生大膳亮と同時に討死せり。

蒲生鶴千代元服

去る程に鶴千代は、太閤御成をせられて、元服なり。則ち羽柴藤三郎秀隆と號す。其後に秀行と改めらる。而して後に、御祝言の禮事なりぬ。其年、秀次公

隱謀露顯して、七月十五日、高野山に於て自殺す。是より太閤大坂城を築かる。時に秀行を飛驒守に任ぜらる。慶長元年丙申に、秀行從四位下侍從に任ぜらる。其時諸大名、皆官位昇進ありければ、氏鄉卿も在世ならば、中納言に進ませ給ふべきものをと、會津の士共、相語つて淚を流せり。慶長三年戊戌の春、氏鄉の出頭人亘理八左衞門といふ者、蒲生四郎兵衞と不和なりしが、或時四郎兵衞、須賀太左衞門・大塚七右衞門等などを語らひて、亘理を討つてけり。之に依つて、蒲生源左衞門・同左文等、四郎兵衞を訴へけり。四郎兵衞が吾儘なる振舞を聞召して、加藤主計頭に預けられけり。又其頃秀行の母儀を、秀吉公御前へ召出されたきの由、仰ありしに、母公曾て御受なかりしかば、御立腹あつて、秀行が身上を果さんなど宣ひければ、年寄共母公へ申しけるは、御身上に替へ給ふべき事に非ず。只御出然るべしと諫めければ、汝等此の如く言上する上は力及ばず、吾れ所存ありとて、忽ち剃髮して、尼になり給ふ。寔に貞女の志を立て給ふ事、流石に信長公の御娘なりとぞ申しける。之に依つて、秀行を下野國宇都宮へ、十八萬石にして移されけり。是に於て、田丸中

務少輔・關長門守・佐久間備前守・同大膳亮・森彌市右衛門は、殿下へ召出されて、知行を給はりけり。其外の士は、多分牢人を致しける。宇都宮にて城を持つ者は、笠間の城二萬石、蒲生源左衛門。眞岡の城八千石、町野左近。河崎の城六千石、蒲生左文なり。左文、此年死去す。跡職舍弟上坂源之丞に給はりて、蒲生五郎兵衛になされけり。仕置は源左衛門・左近・數馬なり。然るに同年八月十八日、太閤殿下秀吉公薨じ給ふ、御年六十三。御若君秀賴公、七歳にて關白職を續いで、中將に任ず。爰に秀行妹壻能登國主前田孫四郎竝に田丸中書も、石田三成に一味せられて、身上果てにけり。蒲生四郎兵衛も三成に一味して、自殺しぬ。又、比川土佐守も三成に仕へしが、後會津へ召直されけり。秀行は源君の御壻なる故に、慶長六年の春、會津六十萬石を給はり、是より白河城二萬八千三百石、町野左近將監。守山城四萬五千石、蒲生源左衛門。長沼城一萬石、蒲生五郎兵衛。津川城二萬石、岡半兵衛。南山城九千石、蒲生彦大夫。是は忠右衛門子也。鹽川城八千五百石、蒲生主計助。猪苗代城七千五百石、關十兵衛。二本松東城八千石、梅原彌左衛門。同西城七千五百石、門屋助右衛門。四本松東城

一萬石、玉井數馬助。同西城七千五百石、外池信濃守なり。守山城をば、後に三春へ遷さる。其後、門屋助右衛門死去せしかば、跡職を孫但馬守に給はりしに、之も早世しぬ。梅原も死去、其子に跡職を給はり、二本松一萬石、本山豐前守を居置かる。之は加藤肥後守に仕へて、加藤清兵衛といひし。武勇の者なりとて秀行抱へられしとぞ。此時の仕置は、半兵衛・左近・數馬なり。半兵衛は無類の出頭にて、後には三萬三千石給はるなり。將軍家より、秀行へ御氏を給はつて松平と稱す。爰に蒲生源左衛門郷成と岡半兵衛重政と、近年不和にして、家中の士共、思ひ〱に兩家へ分れたり。然るに半兵衛は無雙の出頭なれば、源左衛門方次第に秀行の心に惡しく受けて、小倉作左衛門以下立退きたり。關十兵衛も其頃訴訟の事ありしに、事ならずして立退きぬ。之に依つて、源左衛門不快を懷いて、慶長十四年己酉に立退きたり。其外郷成が壻蒲生彥太夫以下、暇を給はつて去りぬ。其時秀行の次男鶴松丸、生年五歲の時、蒲生五郎兵衛郷治子なき故に、養君として預けらる。三春城四萬五千石、隔屋料とす。一萬五千石は藏入、一萬五千石は郷治、一萬五千石は士五十三

騎を相副へらる。長沼城一萬石は、玉井數馬助に給はる。猪苗代城一萬石をば、岡越後守に給はる。同八月廿二日、會津大地震にて、北の方の村里湖となれり。希有の事なり。同十七年夏、秀行病めり。日々に重り、醫療驗なくして、五月十四日逝去せらる。行年三十歳なり。寔に惜しむべきかな。須田伯耆守は、每々恩顧厚ければ、追腹切らんとしけるを、家老共御制禁の儀を以て、種々制止すれども、終に自殺せり。秀行の嫡男龜千代丸、生年已に十歳なりしかども、會津相違なく仰付けられ、兄弟ともに元服せさせ給ひて、龜千代丸は下野守忠鄕、鶴松丸は松平中務大輔忠知になされけり。同十八年忠鄕の姉君十二歳になり給ふを、將軍家より御養子になされて、加藤肥後守忠廣へ嫁せしめらる。婚禮美々しかりけり。右御兄弟三人は、源君御外孫なり。同十九年、岡半兵衞は氏鄕の御母公の御意に違うて、將軍家より御改易なり。外池信濃守等以下、半兵衞一味の者にて、暇を出だされて、浪人す。蒲生五郎兵衞を津川城へ移されて、蒲生源左衞門を召返され、三春城へ本領申付けらる。然るに鄕成腫物を病んで、路にて死す、長子源三郎鄕喜に三萬石、次男源兵

蒲生忠鄕死去

衛鄕舍に一萬五千石、鄕成本領四萬五千石を其子兄弟に分ちて給はりける。蒲生彦太夫・關十兵衛も歸參す。仕置は長門守對馬なり。其後忠鄕卿疱瘡を煩ひ給ひ、會津に於て逝去。寛永四年丁卯正月四日、廿五歳なり。

蒲生軍記卷之六　大尾

大正六年二月十三日印刷
大正六年二月十五日發行

國史叢書
朝鮮征伐記二
蒲生軍記全

定價金一圓

編者　黑川眞道
發行者　國史研究會
右代表者　今村勝一
東京市牛込區市ヶ谷柳町二十九番地
印刷者　楢山定吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷所　友文社
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所
東京市牛込區市ヶ谷柳町二十九番地
振替貯金口座東京二七〇二四番
國史研究會